
WAKARE

KOTOBUKI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

WAKARE

【Nコード】

N57060

【作者名】

KOTOBUKI

【あらすじ】

数奇な運命の糸に導かれた人たちの軌跡。

平等に降り注ぐ尊い人生に偶然の出会いはなかった。
すべての出会いは必然でひとつ・ひとつに大切な意味があった。

出会いと別れを繰り返し人は成長を続けている。

多種多様の人生・愛だからこそ、それは意義深く尊い。

心は絶え間なく揺らぎ天秤のように振れ続ける。

「悲しみに暮れた涙はいつか必ず大きな幸せの泉に変わる」

苦悩しながらも人生を真剣に生きる人たちの人間模様。

プロローグ

人はさまざまな形の愛と出会い、喜び、傷つき、苦しみ
失い、涙しても幾度も起き上がり人生の歩みを続ける。

人生は誰のものでもなく自身で作り上げていくオリジナル
ならば、誰もが希望に満ちた最高の人生を望むであらう。

他力だけで救われ逃れられる人生など決してない

自らの手で人生はもっと楽しく自在に変えてゆけるはず

／この地球に生を受け生かされている命

今日もひたすら生きようとしている命

あれもこれも・どれもこれも

地球上のすべての命は愛おしく大切なかけがえない尊い命／

傷心

別れの時、それははじめて形となり姿を見せた。

二人は改札口の人ごみを悲愴な面持ちで無言のまま幾度となく見送っていた。

腕と腕がかすかに触れ合うと仄かに忘れかけていた温もりが甦ってきた。

それでも瞳を合わせようとはしなかった。

別れの最終電車がホームに入ってきた。

バッグを持ち上げると背を向け離れていった。

サヨナラひとつなく改札の人ごみに姿を消した。

「愛の終わりがこんなにも冷酷だなんて・・・」

別れて日まだ浅い恋人にかける言葉も優しさの一欠けらさえもなく悲しかった。

手紙に書かれていた言葉が重くずっしりと押し掛かった。

／男と女の別れはそんなに甘くないからな／

好きだった大きな背中が小さく見えて胸が張り裂けそうだった。

「雅和、まさかずう・・・」

幼な子のようにしゃくり上げた声は別れを乗せた電車にかき消された。

その声は闇に紛れ空しく響いていた。

雅和が去ったあの日から歳月は歩みを忘れ足踏みをしたままだった。

過ぎし日々の画像がメリ・ゴーランドに乗って絶え間なく渦巻いていた。

涙がとめどなく溢れ出ていた。

この悲しみの泉はいつ枯れてくれるのだろうか。
自分を取り戻せるのだろうか。

出来るならば雅和と過ごし輝いていたあの頃に戻りたかった。

「愛の日々を無理やり追いやるのでなく
ドゥプリ思い出や未練に溺れてしまおう・・・」

投げやりや捨て鉢でなく素直にそう思える様になっていた。

それが今の自分にとって一番の癒しになり再生のきっかけになると信じたかった。

抜け殻と化した佐知は自分を見失い苦しんでいた。

心底溢れでる涙と傷心の溜息ばかりの日々が過ぎていった。

出会い

思えばあの日はそれはそれは暑い夏だった。

朝からの大量の蝉の声に汗ばむＴシャツの脇の下を見ながらうんざりしていた。

町は夏祭りの出店やお囃子・太鼓の音に吸い寄せられた人で溢れ返っていた。

旧友らが年に一度ごったがいた町で再会を喜ぶ夏の一夜だった。

上京した彼氏彼女らが帰ってくるカップル達には待ち焦がれた夏の日。

この日ばかりは相手にしてくれる人を探し出すのは至難の業だった。

ひとつの恋が終わったばかりの佐知に彼と呼べる相手はいなかった。

お誘いの声がかかり何年かぶりで夏祭りの夜の街へ足を運んでいった。

約束の店に出向くと薄暗い角の二画だけが思議アートのように浮き立って見えた。

7、8人、いやもっといるだろう

このまま帰ってしまおうと賑わう場に背を向けたその時だった。

「佐知遅いよお」

「こっち、こっち、早くおいでよ」

小中高と一緒にだった真砂子の透き通る声がした。

合唱部でソロを担い数々の賞に導いた声は健在で辺り一面の人を振り向かせる程だった。

「しまったぁ 見つかってしまった」

見知らぬ大勢の中にさらされるのは大の苦手、こんな時の自己紹介はなおのこと。

学生時代の赤面症と震え声が失笑をかった光景が浮かんでは消えた。

この思い出は胸の引き出しに封印されたままだった。

ここで又、あの引き出しを開くのは絶対いや
キャンディをころがす口先が小刻みに震えていた。

「やっとおどましね

みんなに紹介するから早く来て、早く」

腕を捕まれ引き摺られていった。

「さつき話した佐知のご到着です
みなさん宜しくね」

「はじめまして、遅れてすみません」

「佐知、ここに居るのはみんな彼の友人よ」

マネキンのような彼はいつものおかしいのか・つまらないのかよくわからない無意味な含み笑いを見せていた。

氷のような顔だちをした真砂子の彼氏。

この男だけはどうも苦手だった。

幾度会ってもこの男に馴れる事はむずかしい数式を解くようだった。

資産家の御曹司で頭脳明晰・色男、完璧なまでのこの男には手も足も出なかった。

いつも季節はずれの雪だるまが脳裏をよぎっていった。

佐知にはミステリーの謎解きのように？マークのサスペンス男だった。

その友人たちと聞けば益々帰りたい気持ちが大波となって打ち寄せた。

気がつけば友人の彼女らも合流し店内は手狭になっていた。

彼の膝に乗る真砂子の姿がやけに妖しく思わず目をそらし耳を熱くしていた。

「そろそろ出ようか」

彼のひと声で一行は次々席を離れていった。

「佐知もまだ大丈夫でしょ、一緒に行こう」

重く閉じた貝の口からは言葉ひとつも出てこなかった。

「さあきまりね、行こう行こう」

囚われの身の様に腕をつかまれて上半身だけが前に倒れこんだ。
必死で抵抗している両脚が佐知の心情をそのまま映し出していた。

二軒目は真砂子の彼の兄が経営するお店。

郊外に建つロッジ風の造りは1970年代のマカロニウエスタン
を彷彿させた。

木の香りと温もりが緊張をほぐし佐知を楽にしてくれた。

十数名の団体の中で知る人は真砂子と真砂子の彼・二人きりだっ
た。

いつものメンバーなのだろう、銘銘がプライベートトークを始め
ていた。

「今日も君たちはホテル？」

「まずいでしよう、彼女まだ高校生だろ」

「よしなさいよ、二人には余計なお世話よ

彼女はいつものジンジャールね、さあ飲んで飲んで」

隣の子はまだ高校生・確かに肌の具合といい話し方が弾けていた
危険を察知した子羊が如く知らず知らず逃げ場所を探していた。
そんな挙動不審の佐知に背後から声がかかった。

「ねえ君、ちつとも楽しそうじゃないね」

「.....」

溢れ出るサラサラの生唾を飲み込んで下を向いていた。

「帰りたいなら帰った方がいいよ
遠慮しないでいいからさ」

心が読まれた・・・この男はいったい誰？

「ありがとうございます お言葉に甘えてお先に失礼します」

大勢の盛り上がりにはさようならの声は揉み消されていた。

「ありがとうございました」

従業員に見送られひとりドアを開けた。

佐知だけに向けられたスタッフの元気な声が唯一救いだった。

外に出ると先ほどとは違って心地よい空気が胸の奥まで沁み
ていった。

「疲れた〜」

夜空を見上げ目を閉じていた。

背に気配を感じたその瞬間誰かの腕が佐知を包んでいた。
振り向くとさっき言葉を交わした男の姿があった。

「いめん、ふらふらして今にも倒れそうだったから」

「「ちら」そ「めん」なさい
目を閉じて空を見上げていたから」

「夜の空って気持ちいいからね」

「ええええ」

「送って行くよ」

「私は大丈夫ですからお店に戻ってください」

「いいんだ俺も一人だし」

俺も一人・・・その言葉に妙な親近感がわいた。

「じゃあ、少しだけ」

ぎこちない歩調は徐々に絶妙で軽快なリズムを奏でていた。
二人は出会ったばかりとは思えぬFavorオーラに覆われていた。

「俺、井川雅和まだ学生

真砂子の彼、龍一知ってるよね

あいつとは中学からの遊び仲間なんだ」

「私は皆井佐知です

病院の受付の仕事をしています」

「君は俺たちとはどこか違うよ

俺達みんな学生だからいつもあんな調子なんだ
東京でも飲んだくれて憎めないバカやってるよ」

「私にはみんな違う世界の人達みたいで」

「俺もそのひとりだった？」

「さっきまでは、でも今は大丈夫です」

「ありがとう、ほっとしたよ」

けっしていい男とはいえないが澄んだ瞳に好感を懷いた。

父に似た誠実そうな男だと思った。

昔どこかで会ったような懐かしさは感じたがタイプの男ではなかった。

平凡な毎日を過ごしていた佐知にピリ辛の刺激と興味をそそる男との出会いが齎された。

どれくらい歩き続けたのだろう。

男の口からでた言葉に度肝をぬかれ足をとめた。

「今夜、君とこのまま一緒にいたい」

込み上げた怒りを必死でこらえる佐知は拳をにぎっていた。

つい今しがた感じた思いは何だったの

この男のどこが誠実だっというの・・・

ガシャンと籬が外れた。

「馬鹿にしないでください

私のことそんなふうに見てたの」

「ちがうよ、ちがうんだ

君と歩いていたら、何故だかわからないけど気持ちが安らいでいた君といると俺は正直な気持ちで素顔のままでもいられるってそう思った

こんな気持ちはじめてなんだ 本当なんだ

君とこうしている事を単なる偶然だなんて思いたくなかった
だから、このままずっと一緒にいたかった
ごめん、怒らせたのなら本当にごめん
でも、もう少し、もう少しでいい
君といたいんだ、だめかな」

男の表情に曇りはなく正直な気持ちが伝わっていた。

「もう、顔を上げて」

「ありがとう」

あのバス停の椅子に座ってもう少しだけいいかな？」

「えエ、少しだけなら」

おろし立ての靴で擦れた皮膚がジクジク疼きだしていた。
痛みを隠して歩く佐知には救いの神だった。

男は椅子に腰をかけると両手を天に向けて大きく深呼吸していた。

「気持ちいいなあ」

東京でこんなふうに夜空を見ることがないのは何故なんだろうね
東京のネオンの下でいい加減な自分の姿が嫌というほど照らし出

されている

このままじゃだめだっつてわかってる

それでも酒を煽って誤魔化そうとする自分がいる

俺は自分を直視できずそれどころか必死で隠そうと強がってる

正直、東京の生活には馴染めないんだ

背伸びして粹がっつてみたっつて田舎者の俺は都会じゃ酸素不足の水
槽にいる金魚と同じ」

「テレビや雑誌で知る東京は危険と魅力が入り混じる不思議な巨大
都市だわ

私には人を飲み込んでしまいそうな別世界に見える

そこで生活しているあなたはそれだけですごいと思う」

「君は面白い事言うんだね

たしかに東京は楽しい事を探求するには飽くことのない欲望を満
たしてくれる場所かもしれない

でもそれだけじゃ生きていけないからね どこで生きていても煩
悩からは逃れられない

苦しみや悲しみと向きあう時、東京の生活はそれが2倍3倍にも
なっつて襲っつてくる」

生暖かい夜風に紛れどんよりした空気が吹きあげてきた。

この空気を変えたい佐知は無理やり声のキーを上げていた。

「それは家族と離れて一人で生活しているから・・・それだけのことでしょ」

「いやちがう、東京って処は悲しみや淋しさを増幅させてしまう不思議なエネルギーを発してるんだ」

「夜も昼もない沢山の人で賑わう東京が悲しみを大きくするなんて」

「気まずい沈黙の後、男は話しを続けた。

「君は賑やかな場所から一人になった時の空洞になった自分の心に出会った事ある？」

「楽しい時間のあとは少しセンチになるけど心までは」

「弱ければ弱いほど人は賑やかな場所に自分を置こうとするんだでも一人になる時間は必ずやってくる

それに耐えられずまた人のいる場所を求めてしまう

俺はいつもその繰り返しなんだ

このままでいいわけないのはわかってるよ

自分を変えなきゃ俺の生活は何も変わらないんだってね」

「わかっていても出来ない・・・その素直な気持ち好きだな
自分と葛藤して自己問答していくって大切な事よね
たまに一人になって静けさに身を投じてしまうのも一つの手かも
ね」

「俺 今そんな気分だよ
こっして夜空を見上げていや逆に夜空が俺を見下しているのかな
東京でお前は何をしているんだってね

本当は何を求めて東京にいるんだって問われてる気がする
合コンしたり女と寝たところでそれは意味のない行為なんだ
そんな事を繰り返したって何も満たされないのにさ」

佐知は思わず手で耳を塞ぎ頭を左右に振った。

「そんなこと聞きたくない
あなたが何して生きていこうが私には関係ない
でも欲望のおもむくまま行動する男には嫌悪さえ覚えるわ

酔って女を抱くのは本能だなんて卑怯な男は正当化する
そのとき心はそこにあるの、存在しているの
何かから逃れるための代用なら許せない私はそんな男は絶対許さ
ない」

「俺は君の言う許せない男の一人だな

心なんて考えもしなかったから」

「心が一つになって恋人達は初めてスタートラインに立てる男と女二人だけの物語がそこから始まっていくそれが愛じゃないのかなって思ってるの

夢見る夢子さんみたいでおかしい？そうよね、おかしいわね」

引きつる笑いを堪える男の目は佐知をしっかりと捕らえていた。

「女ってこんなに美しい生き物だったのか」

男には雷の電流が体中を走り行く衝撃と驚きだった。

淀んだ空気が澄んで流れくると男は生真面目な顔をみせた。

「考えてみると俺が心から抱きたい思ったのは今日・今夜・今・君だ」

「また怒らせたいの、本当に男の性がみえて吐きそうになるわ」

怒って見せたが不思議と嫌悪感は覚えなかった。

「なんでだよ

素直な気持ちだけを伝えただけ

俺の心の叫びを正直に伝えただけなのに」

「ブウブウッ

あなたの心の伝え方は不正解、失格です！

とんだ勘違いの大間違いですから、ざんねん・でした」

ふたりして爆笑していた。

二人ともおなかを抱えて思いつきり笑ったのは久しぶりだった。

長い散歩はここまでこの先の道一人にはまだ見えなかった。

「今日は無理を言っごめん ありがとう」

「こちらこそありがとう」

タクシーに乗り込んだ佐知は窓から顔をだし手を差し出した。
握手した手が離れるとタクシーは走り去っていった。

男の手に一粒のキャンディーが握られていた。

手が離れる間にそっと渡された小さな塊はミントのキャンディーだった。

飴玉を口に含むと今さっきまで一緒だった時間がたまらなく恋しくなっていた。

「まさか俺、あいつに惚れた・・・のか」

久しぶりの遅い帰宅となった佐知に両親はきついお灸を据えた。母が言った言葉が頭から離れなかった。

「あなたも、もう学生じゃないから、

プラトニックの交際ばかりじゃないでしょう

でも女は受身よ、自分を見失うような交際は賛成できないわ

多くの男性と係わると女の体には異常がでるの、女と男は違うんだからね

本当に愛する人特定な人と自分を大切に出来る交際をしてほしい
信じてるから大丈夫ね」

看護師だった母は生理になった頃から女の体について話し聞かせ
てくれた。

両親は佐知の遅い帰宅を心配し起きて待っていてくれた。

布団の中で佐知はつぶやいた。

「お父さんお母さん今日は心配かけてごめんなさい」

あれから佐知は墓参りや雑用やらに追われていた。

「そっいえばあの男ひとどうしているのかしら」

真砂子からの電話が入ったのはそれからすぐだった。

「私たち明日、東京に戻るの　又連絡するね

ああそれと・・・あの日佐知を送っていった男、雅和を覚えてる
あいつ私のアルバムから佐知の写真を持っていったんだよ
そう、あのピンボケの写真
それでもいいって言うんだから笑っちゃうよね」

受話器をおいた佐知はショックを隠し切れずにいた。

あの人も東京に戻ってしまったのね・・・
囁いた佐知に「なんだかとっても寂しいね」と心の声が返ってきた。

西日差す部屋で佐知はひとり本を読んでいた。

「カッン・カッン」

ガラス窓を突く音が繰り返し聞こえていた。

レースのカーテンの隙間から外を見るとそこに男の姿があった。

意味もなく懐かしさが湧き上がり居てもたっても居られなくなっ
た。

ダ・ダ・ダアーツと地響きをたて階段を下りていた。
気持ち焦って足が纏れスニーカーがうまく履けなかった。

「おかあさーん、コンビニに行つて来るねエ」

自宅が見えなくなった頃二人は手を繋いで歩いていた。

「真砂子が電話で教えてくれたわ　あなたが写真を持っていったっ
て」

「あいつ、おしゃべりだなア」

「あの日の私を覚えていてくれて嬉しかった　ありがとう」

この人となると素直になれる・ありがとうの言葉が素直に言えた・

互いの熱い手に力が入ると指と指をからめ強く握り合っていた。

「俺、君に出会えた夏の日に感謝している

これからは自分を大切にするよ、でないとなんと君を大切に出来ないよ

うな気がするんだ

君を守る強い男になってみせる」

恥ずかしそうに笑う男の瞳に頬を赤く染めた佐知が映っていた。

「ありがとう、うれしいわ」

男は佐知の体をひき寄せた。

厚い胸元に頬を埋め相手の心臓の音に呼吸を合わせていた。

このまま一緒にいたい

出会った日、男が言った言葉がいま佐知の心の声になっていた。

何かがいま始まるうとしていた。

二人は今スタートラインに立ったばかり・・・

擁きあう二人はスタートラインを踏み出そうとしていた。

ジェントルマン

佐知は家と仕事場の往復の生活に戻っていた。

同僚らの合コンなる飲み会の誘いは相変わらず断っていた。

これは雅和と知り合う前からずっと同じことだった。

雅和と出会ってから言い寄ってくる男が明らかに増えていた。

「何かへんなフェロモンでも出しているのかな」

呟いた自分の言葉におもわず紅潮した。

危ない危ないひき締めなければ隙があるから寄ってくるのに違くない。

このとき佐知は少女から女にかわる目覚めの時を迎えようとしていた。

「コツ・コツ・コツ」

聞きなれた靴音がして受付に手を伸ばしたのは自称ジャーナリストの柳木沢という男。

実際はコンサルトの肩書きを持ち名刺には柳木沢マネージメントと記されてあった。

新聞記者を辞め一念発起して司法書士の資格をとり会社を興したと聞いた。

勤務している病院長と親しい柳木沢は地元ではちょっとした有名

人だった。

病院長を訪ねてくると決まってメモ用紙を手渡してきた。
毎度お決りの自分の携帯番号と右上がりの癖のある字で書かれた
メッセージ

君が振り向いてくれるまで僕は諦めないよ

気色悪いとメモはいつもゴミ箱に千切り捨てていた。

土曜日の就業時間が終わりロッカー室を出た佐知のお腹がグウ・
グウ鳴っていた。

「もう一時過ぎてるう・・・お腹も鳴るわけだ」

小走りで院内を抜け従業員の専用口を出ると一台の車がドアの前
に横付けされていた。

「ご苦労様、一緒に食事でもどうだね」

窓から顔を出したのは柳木沢だった。

この男は妻とは別居中とか離婚したとか数々噂はあるが今はひとり
ホテル住まいをしていた。

女の出入りも多く派手な暮らしぶりに芳しくない噂も流れ聞こえて

きた。

お抱えの運転手のまたかといった顔がバックミラーに写っていた。

「今日は約束がありますから失礼します」

前かがみで車の横を走り抜けていた

「あんな男に捕まったら最後どうなるかわかりやしないんだからくわばら・くわばら・・・」

あまりの空腹におぼつかない足取でファーストフードに駆け込んだ。
でいた。

二階の席で持参の雑誌を読みながら注文の品を待っていた。

テーブルの横で立ち止った男の足先が見えた。

「こんなところで待ち合わせかい」

声の主は柳木沢だった。

「いえ・・・あの・・・」

しどろもどろの言葉など柳木沢にはお見通しだった。

「さあ、美味しい物を食べに行くぞ」

腕をつかまれ半ば強引に店をあとにした。

お抱え運転手の手には佐知の注文した品がしっかり握られていた。

辿りついた先は柳木沢の常宿のホテルだった。

支配人に手を振りご機嫌な柳木沢と数名の宿泊客と一緒にエレベーターに乗り込んだ。

招かれた部屋には身の回りの物がうず高く雑然と投げ出され放置されていた。

「うええエ、きたない」

思わずついて出そうになった言葉を噛み殺した。

一人やもめの荒れた惨状だった。

ジェントルマン気取りの柳木沢らしくないと可笑しくなった。

「クスッ」

吹出した佐知に柳木沢は豪快に笑い返した。

「あっはは、おかしいか

さあ、ソファアで食事を待つとしよう」

最上階の部屋からの眺めは始めてみる壮大な景色だった。

「わああ、すっごくおい」

自分が頂点に立った偉い人のような錯覚を覚えた。

時折男の強引さを見せる柳木沢が小心者にさえ思えてドキドキ胸を躍らせていた。

柳木沢はソファアに深く座りフーツと息を吐きだした。

「長く生きれば生きるほど世の中の厳しさは堪えるものだ

若い時はどんな高い壁も乗り越えてきた

血を吐くまで喰らいついて頑張った

歳月がすべてを喜びに変えてくれる・・・

そう思いただがむしやらに働いてきたんだよ

でもそれは僕の独り善がりで思い込みに過ぎなかったと気づかされた

老いて尚つらいとは遣る瀬無いものだな

陰りを帯びた横顔は病院で見せる印象とは全くの別人に見えた。病院で垣間見る威圧感のある偉ぶったこの男が苦手だった。

目の前の男はヤマトタケルや聖徳太子ではないと気持ちを落ち着かせていた。

「生きてるって証拠ですよ」

「そうか生きてる、だからつらいか
そう思えば少しは楽になるのか・な」

「気持ちを共有し分け合える人は必ずいます 家族とか
柳木沢さんが弱くなっているのはそういう人がいないから」

「君は僕の痛いところを的確に突いてくるんだな」

「申し訳ありません」

「いいんだ気にせんでいい、その通りだからな」

柳木沢という男の核心をどうしても探り見たくなくなっていた。

「誰よりも奥様や家族が一番の理解者で癒しになってくれる筈です
柳木沢さんはそんな家族をお持ちなのに寂しすぎます」

「確かに君の言うとおり寂しすぎるな」

怖さ知らずの拍車がかかった佐知の口を止めるのは不可能だった。

「これまでの生き方が炙り出されているとは思いませんか
天がその事を知らしめるため柳木沢さんを懲らしめようとしているのなら
これからどうすべきか、答えは己ずと生まれるのではないでしょうか」

柳木沢は威嚇するかのようソファーに埋もれた腰を正した。

「君は恐いな」

澄ました顔でずけずけ物を言い人を坩堝に陥れようとしている「

「そんなつもりは・・・」

すみません 本当に申し訳ございません」

立ち上がり頭を膝まで下げた佐知の消え入る声は震えていた。

「ガラツ・カラ・ガラツ」車輪の音が部屋の前で止まった。

レストランの厨房の匂いがワゴンに乗せられて運ばれてきた。

緞帳がおりた役者のように張り詰めていた気持ちが解けていった。

目だけでお腹一杯になりそうなランチの数々が並べられていた。

「さあ、食事にしよう」

お腹が空くと人はとげとげしくなる

話は食事の後で続けるとしよう」

さすがの柳木沢もお腹が空いていたのだろう。

真っ先に海老・イカ・・・魚介類が盛り沢山のペスカトーレに手を伸ばした。

佐知もつられてムール貝を口にパクリ。

「おいしーい」

「そうか それは結構なことだ」

ナプキンを口にあてながら栗鼠の様に頬張る佐知の顔を嬉しそうに眺めていた。

会話もなくひたすら食べることに集中していた。

珈琲の香りが部屋中を充たすと柳木沢のきつい香水が消され穏やかな気分になった。

「君は僕を嫌っているようだね」

突然的をついた問いかけに言葉を探していた。

「好いていないのは確かですが嫌ってはいません」

眉尻を下げ安堵した柳木沢の様子が伺えた。

「何が問題なんだろう、僕を好かないのは」

「その香水の匂いも私の好みじゃありませんし」

「じゃ君はどんな香りが好きなんだ」

「好きな人の香りが好きな匂いです」

柳木沢の口元が上弦三日月から下弦三日月の形に変わり不機嫌に見えた。

「それは難しいな、買ってこようにも探しようがない」

「柳木沢さんに好意を持たなければならぬ理由を教えてください」

「……」

「答えられないじゃないですか」

尖った佐知の苛立ちをかわすように柳木沢は大きく咳払いをしてみせた。

「いや理由はある」

「何なのですか」

「僕があるといっているんだからそれでいいんだ」

「柳木沢さんにそんな子供じみた言い方は似合いませんよ」

「僕は君に男の本音を曝け出して見せているんだ」

駄々っ子のような物言いに呆れ返りため息が零れでた。
病院で見せる毒々しい柳木沢が姿をみせた。

「ひざまづけとでも仰るのですか」

「いいやそうじゃない」

オブラートに包んで君を手に入れようなど姑息な真似はしたくない
だから目的を率直に話しているんだ」

「そのお年になってもまだ若い女性を食い者にしたいのですか」

「若い女性ではなく君だ」

「だから、なぜ私なのですか」

「君を極上な女にしてあげようと言っているんだ」

「私には大切な人がいます」

「ほう、それで君はその男に充たされているのか」

「はい」

「どんなふうに」

いつまでもやまぬ矢継ぎ早の質問に語尾を荒げむきになっていた。

「彼との蜜ごとまで聞く権利なんて誰にもないはずですよ」

柳木沢さんを好きになるなんて絶対にあり得ません、絶対に無理です」

言葉が急に途切れると空気音だけがキーンと耳の奥に入りこんできた。

さっきまでとは違って変わった嘘のような静寂さに鳥肌がたっていた。

居た堪れないこの部屋を一刻も早く抜け出したかった。

帰ろうと荷物を持ち席を立ったその時だった。

ソファーに目をやると柳木沢は胸に手をやり苦しい息づかいを見せた。

「柳木沢さんどうしました、大丈夫ですか

フロントに電話しますね、医者を呼んでもらいますからね
わかりますか柳木沢さん、しっかりしてください」

土気色の柳木沢を前に佐知は呆然と受話器を握りしめ半べそ顔で立ちすくんでいた。

「大丈夫・・・だ 上着のポケットに薬が」

柳木沢の指差す背広のポケットの薬を震える手で取り出した。

「これですか、一粒でいいですか」

返事も出来なくなった口に薬を押し込み口移しで少しずつ何度も水を含ませた。

柳木沢はゴックン喉仏を大きく動かし水を飲み込んだ。

へたへたと床に座り込んだ佐知の体はまるで無重力にプカプカ浮いているようだった。

柳木沢の顔がいつもの肌色に戻ると容態は安定して見えた。

「申し訳なかった

君がいてくれてよかったよ、ありがとう

今日は朝からどうしたことが無性に人恋しくてね

強引に君を連れて来たのはこのせいだったのかもしれないな」

手を握られはっと我に返った。

「よかった、安心しました」

「君の唇はいいね、実にいい」

「あれは医療行為です

他の人に変な事は言わないで下さいね 約束ですよ」

「冗談、冗談だよ 君は本当にお堅いね」

柳木沢はいつもの好かない男に戻っていた。

今日ばかりは好かない男の復活を心から喜んでいた。

やっと帰れると深く吸い込んだ息を静かに吐き出した。

「これで失礼します 今日のご馳走様でした
おいしい昼食をありがとうございました」

丁重にお礼を述べ頭を上げたときだった。

柳木沢の大きな胸に佐知は抱き寄せられていた。

「今日はありがとうこれは僕からのお礼だ」

見上げた唇に柳木沢の唇が綿菓子のようにソフトタッチして横切っ
っていった。

柳木沢は素早い動作で身を離すと何事もなかったようにドアを開
け手を差しだした。

「またいつでも御馳走しますよ 君は命の恩人だからね
もう君を困らせることは慎もう 今日はずまなかった」

握手をして部屋を出た帰り道、初めて覚えた感情に動揺していた。
柳木沢との長く感じた短いひとときを思い出していた。

「私は好かない柳木沢さんの手のひらで転がされていた
柳木沢さんは大人・大人の男」

心は正直

真砂子からの携帯が鳴っていた。

雅和の帰省を伝えるメールだった。

／雅和9日帰る電話してね／

雅和の携帯番号をこの日はじめて知った。

舞い上がって番号を何度も押し間違えていた。

見知らぬ人に頭を下げ続ける体は丸く小さくなっていた。

「もしもし」

「だれ」

「皆井佐知です」

「おお、久しぶり

真砂子からの伝言聞いてくれたんだね」

聞き覚えのある声にやっと胸を撫で下ろした。

嬉しさを隠せない声はビブラートのきいたソプラノになっていた。

「急に帰るって聞いて驚いたわ」

「ちょっとした野暮用で親に呼ばれたんだ」

「そうだったの　又会えるのね、嬉しい」

「俺も早く君と会いたい」

10月9日部屋のカレンダーに赤い花丸がついた。

当日、身支度にいつもの倍も時間をとられた佐知はギリギリセーフで仕事場に駆け込んでいた。

ロッカー室でめずらしく鏡を覗き口紅をさす佐知の姿を同僚たちは見逃さなかった。

「さっちゃん、もしかして彼氏できた？」

「たっぷり楽しんできてねえ」

「もぉー皆してからかわないで下さいよー
今日もお疲れ様でした」

顔を赤く染め佐知は仲間を労い仕事場を後にした。

帆布のショルダーバッグを下げた雅和が改札口で待っていた。

佐知は逸る気持ちを押さえようと冷静さを演じた。

「おかえりなさい 待った？ごめんなさいね」

「朝日が昇るまで待つ覚悟だったから平気さ」

差し出した手を強く握り返す雅和もまた動揺を隠すかのようだった。
た。

二人は手をつなぎ照れながら歩き出していた。

「疲れたでしょ どこかお店に入りましょう」

「今日は俺の家に直行」

「そんな突然、お土産も用意してないし」

「誰もいないから心配しなくていいよ」

「・・・」

佐知は硬直して動けなかった。

「大丈夫、君を襲ったりしないから俺を信じて」

雅和に手を引かれ古めかしいが趣のある建造物がある公園前でバスを待った。

バスに揺られること15分・・雅和がブザーを押す仕草をしてみた。

「次、降りるから」

指折り数えたバス停、降りたバス停は六つ目だった。歩き出すと目の前に緩やかな長い坂道があらわれた。

「もうすぐだから頑張って」

背中を押されフーフー言いながら坂を上りきった。

真新しい住宅が並ぶその一角にひと際目立つタイル張りの門構えがあった。

荘厳な洋館の家・それが雅和の家だった。

雅和はチノパンに手を入れゴソゴソと鍵を探していた。

「あつたあ・・・」

俺、自分で鍵あけて家に入ることあんまりないから
待たせてごめん さあ入って」

促されるまま玄関左側の部屋に入った。

そこはリビング趣味のよい15畳ほどの広がりのある空間があっ
た。

オレンジ色がかかった黄色のソファーに座ると窓際に並んだ写真が
目に飛び込んできた。

幼少期から現在までの雅和が額の中で飾らぬ素直な笑顔をみせ微
笑んでいた。

着替えた雅和が部屋に入ってきた。

「恥かしいな 母さんの趣味だから仕方ないんだ」

額の中で笑っている屈託のない雅和を見た佐知はその後ろに隠れ
ている母の愛を垣間見た気がした。

「ウーロン茶でいいよね、これしかなくて」

クリスタルカップに注がれた琥珀色のウーロン茶を佐知は喉を揺らし美味しそうに飲んでいた。

艶めかしく光る佐知の首筋から目を逸らし雅和も豪快に喉を鳴らしカラカラの喉を潤していた。

「いつまでいられるの」

「11日には戻らないと」

「そうなの」

「俺は数時間でも君といられるそれだけで嬉しいんだ。用件を早く片付けて君との時間を作るから待ってて」

「ありがとう」

「俺、君を大切にしたいから自分を変えようと努力してる君のために変わってみせるからずっと俺を見ててくれるよね」

「ええ」

佐知は悪戯っぽく小指を立ててみせた。

雅和はソファ―に座る佐知の腕をとり立ち上がると佐知の小指に自分の指を絡めた。

二人は指きりをしたまま見つめあった。

雅和の呼吸が間近かに聞こえていた。

唇が塞がれ力強い抱擁に体中の力が抜けていくのがわかった。

蕩けていく体の感覚を確かめるように二人は幾度も幾度も唇を重ねていた。

「俺、我慢できないよ」

「我慢できないのは、体、心？」

「俺は君だからほしいんだ 君がほしいんだ」

「このまま気持ちに流されてあなたに抱かれるのはいや
心から抱かれないと思えるまで大切にしたい・・ごめんなさい」

「あやまる事ないよ」

君を大切にしたいから待つよ、俺ずっと待つよ」

そして二人はまた唇を重ね合わせた。

雅和が乗せてくれたバスの中で夕暮れの流れ行く景色をボンヤリ見つめ揺られていた。

本当は抱かれてもいいと思った

洋服を着た私は裸同然だった

あの時の私・・・すべてを許していた

初めて知った抑えきれない感情と体の変化に戸惑う佐知だった。

数時間の出来事に佐知の胸は痛み出していた。

手の甲に流れ落ちた涙を乾いた唇に押し当て目を閉じていた。

雅和が東京に帰ると戸惑う感情と体は何もなかったかのように戻っていた。

あれから柳木沢は病院には顔を見せなくなっていた。

聞くところによれば仕事と身の回りの身辺整理やらで多忙なのだという。

「体は大丈夫かしら」

好かない柳木沢を心配していた。

「今日は土曜日、会いに行ってみよう」

好物のシフォンケーキをふたつ今日は柳木沢のために買った。

少し高台に建つレンガ造りの華奢なホテルに柳木沢は宿泊していた。

ホテルは生前の祖母に出会えたような懐かしさを感じさせた。

フロントは端から端まで団体の列で溢れ返っていた。

後尾で順番を待っていると肩ごしに手を感じた。

振り返ると白髪交じりの初老の男が一礼して笑顔を見せた。

佐知は首を傾げてキョトンとしてその男を見つめ返した。

「いつも後姿ばかりですからわからないでしょうね」

思い出そうと目を閉じた時だった。

薄い記憶の中に帽子を被った男の姿が見えた。

「あ、柳木沢さんの運転手さん、ですよね」

男は妙に畏まった顔を少し崩し微笑んだ

「柳木沢様は今日は御戻りになりませんよ」

どこに・・・口にし掛けた言葉を飲み込んでいた。

「あのお、宜しかったらどうぞ」

土産のケーキを胸の前に差し出した。

「これは受け取れません 柳木沢様へのお品でしょう」

「いいえ、受け取ってください」

車に乗せていただいたお礼ですからどうぞ、さあどうぞ」

佐知の押しの強さには、この男も勝てなかった。

「では、頂戴いたします」

肩を落とす佐知のもとに男が神妙な面持ちで戻ってきた。

「あのお・・・」

「お聞きしたいことがあるのですが宜しいでしょうか」

緊張しているのか手にしたケーキの箱が揺れていた。

「大変失礼かと思いますが・・・
柳木沢様との間に何かあったのでしたらお聞かせいただけませんか」

質問の意味を把握できず言葉に詰まっていた。

「いいえ、何も思い当たる事はありませんよ
柳木沢さんがどうかしたのですか」

逆に問われた男は口ごもりながらも柳木沢の近況を伝えた。

「柳木沢様はお変わりになりました
人一倍気むずかしく気性の激しいお方が私に声を荒げることもなく
それどころか申し訳ないなんて頭を下げられるのですよ」

長年仕えていますですが驚きましてね
どうかನさいましたかとお尋ねしたのですが返事は返ってきませんでした

あれからあなたのお話ばかりをされましてね
いえ、なに・・・たいした話じゃないので心配なさらなくてくださ
い」

柳木沢に何が起きているのだろう。

「いつ 戻りますか」

「すみません」

口止めされているであろう男は足早に來た道に戻っていった。

人は余程の事があつたとしてもそう簡単には変われないと思つて
いる

柳木沢ほどの男ならば直のことだろう

その柳木沢が変わつたと云うのならやはり何かあつたに違いない

佐知はますます会いたい気持ち募つていった。

仕事が終わると一目散にホテルへ足を運んでいた。

「もう10日目か、柳木沢は今日も帰つてこない・・・」

ソファーは疲れた体を癒してくれた。

「ホテルの椅子つてゆりかごみたい」

心地よい睡魔が襲いつとつとまどろんでいた。
どのくらいこうしていたのだろう。

首筋に硬い感触がして誰かの腕枕があった。
見上げると待ち人・柳木沢の姿がそこにあった。

「おお、目が覚めたか

どうした、こんなところでお休みとは」

「柳木沢さんどこに・・・今までどこに行っていたのですか」

柳木沢はソファアーを移動して佐知と距離をとった。

「思うように行かない　それが世の常だな

こんなところじゃ話も出来ないだろう　さあ部屋にいこう」

「いいえ、今日は帰ります　お顔を見て安心しましたから」

「外はもう暗い　車を用意させるから乗って帰りなさい」

佐知は向きを変え柳木沢の元に引き返していた。

「柳木沢さん土曜日、また伺ってもいいですか」

柳木沢は大きく頷いた。

「嗚呼、スケジュールに書き留めておこう
君との再会を忘れないようにしっかりとな」

ガラスごしに柳木沢の運転手の姿が見えた。
ホテルを出る佐知の姿を見つけると助手席のドアを開いて立っ
ていた。

「すみません」

運転手はシートベルトを締めながら後部座席に顔を向けた。

「いつやらはケーキをありがとうございました
妻とふたりで美味しく頂きました」

「お礼を言わなくていけないのは私の方ですよ
いつもお仕事を増やしてしまって、ごめんなさい」

「とんでもない、実はうれしんですよ
あなたは柳木沢様の奥様と似てらっしゃる
坊ちゃんではなくお嬢様がいたらきつとあなたのような方だったで
しょうね」

「わたしが、ですか」

私が柳木沢さんの奥さんと似ているなんて・・

柳木沢さんは私に奥さんを重ね見ていたのだろうか

柳木沢のかすかな匂いがした。

それは佐知の苦手な香水の香りだった。

「あれは大人の香り・大人の男の匂い

柳木沢さんは初めて出会った大人の男」

心は正直？

佐知は柳木沢と交流を続けていた。

柳木沢はスケジュールをやり繰りして時間をとってくれた。しかし、未だ柳木沢という男の本質は見えてこなかった。

ただあの日以来、佐知に女を求めるときはなくなっていた。

遣る瀬無い心情をしばし口にしながらいつも佐知に一蹴されていた。柳木沢にはそれも又癒して活力の源になっていた。

「君とここで会うのは今日が最後だ 僕はこのホテルを出る」

「住まいを見つけたのですか」

「いいや、戻るんだ」

「戻るって、御家族のもとに」

「ああそつだ」

「よかった 良かったですね」

椅子から立ち上がり柳木沢に駆け寄っていた。

「こんなに喜んでもらえるとは・・・
君のこんなハシヤギようは初めてだな」

言い終えると柳木沢は満面の笑みの佐知に背を向けた。

「だって柳木沢さんはもう一人じゃないんですよ
家族と一緒になら寂しくなくなるでしょ、それが嬉しいんです」

無邪気な言葉に振り向きざまの柳木沢が苦言した。

「人は誰かといれば寂しくはないだろう
しかし誰かといてもひとりぼっちなら、どうだろう」

雅和と出会った夏の日が甦った。
大人数の中に居たあの時の私は一人ぼっちだった。

「君は家族という楽しいか？」

「楽しいとか考えたことありません
一緒にいるのが当たり前で寂しいなんて思うこと一度もありません」

「君はそれだけで、もう十分幸せものだ
そんな家庭がある君がうらやましい限りだ」

「柳木沢さん大丈夫ですか
家族と一緒にの生活が始まるというのに喜んでいない・・・」

「やはり君にもそう見えるか
心は正直なものだから誤魔化せんな」

「・・・・・・・・」

一風変わった二人の交流だったがこれがホテルで交わす最後の会話となった。

二人の関係を読み解くのは人の心を計り知ると同じで哲学のようでもあった。

この関係が鍵となる予想外の出来事が一步一步緩やかな足取りで近づいていた。

病院の庭の木々の葉はすっかり落ちて季節は移行していた。

寒空の下で道具を巻きつけた庭師達が白い息を吐き雪囲いをしていた。

もう木々は冬支度・廻る季節は冬・寒くて暗い冬がもうそこまで来ていた。

「さち、まこちゃんから電話よ」

部屋から出ると冷たい空気が全身を覆った。

「さむう〜」

佐知はつま先立ちで階段を下りていった。

「佐知、久しぶり 冬休み帰るからよろしく
最近の雅和付き合い悪くってさ、全然遊んでいないんだ
遠距離の恋わずらいで寝込んでるんだろって皆で笑ってる」

店内から漏れ聞える脳天をつく奇声に受話器をずらしていた。
一方通行の電話は毎度の事でこの日も佐知は口を開くことなく切られた。

受話器を唾然と見つめていた。

「これが真砂子流の長く付き合える秘訣なのかもね」

いつもの身勝手な振る舞いにむっとしながらも笑いがおきた。

雅和から帰省の知らせが入ったのはその5日後だった。

「冬休みになればまた会える」

そう言い聞かせ宥め・励ましこの日を待っていた。

「雅和が帰ってくる」

会いたかった雅和が帰ってくる」

この夜、佐知は丸めた毛布を体に密着させ眠りについた。

佐知は洋服ダンスから取り出したあの服を出していた。

何時間、鏡と睨めっこしていたのだろう。

何度も何度も階下から母の声が聞こえていた。

次第にその声が大きくなり母はとうとう角を出した。

「いいかげんに早くお風呂に入ってしまいなさい」

何度いわせるの 片付かないから早く入りなさい」

パジャマを抱えしびしびお風呂場に入った。

脱衣所の洗濯機の前には鬼の形相をした母が立っていた。

「この雰囲気はまずいぞ」
母のご機嫌ななめを何とかせねばと頭を捻った。

「振りかぶり佐知投手の投げた服は
洗濯機の前に立った貞子バッターの背中に」

驚き振り返った母に佐知は投手を真似てタオルを宙に投げて見せた。

上手にタオルを掴み取った母に大きな声をかけた。

「貞子母さん、ナイスキャッチ」

佐知は側にあつた洗濯かごを被り片手を高く挙げていた。
かこの隙間から体を揺すり微かに笑う母の顔が見えた。

「子供みたいな真似して、可笑しいわねえ」

母の顔から眉間の皺が消えいつもの菩薩顔に戻っていた。

「ゆっくり入りなさい」

「うん」

予想以上の展開に「お笑いの素質有りかも」とニンマリした。

湯船に浸かりながら雅和を思い出していた。

お風呂と同じあったかい雅和の胸。

指でお湯に字を書いた。

あしたあえる
はやくあいたいよ

誰にも見えないその文字は佐知の逸る思いだった。

「皆井さん、皆井さん」

ボーツとしていた頭上に声が飛んできた。

「あ、っ はい」

「いいかげんにして、もう何度目かしら」

診察券がたまっていますよ 山のようにね

今日の皆井さんおかしいですよ 具合でも悪いのかしら」

「ハイ あ、いいえ 大丈夫です」

「大丈夫ならしっかりしましょうよ」

受付のハイミス部長にお目玉を喰らった。

「雅和ボケだ・これはまずい」と気持ちを切り替え反省していた。しかし時計ばかりが気になり仕事に身が入らなかった。

仕事後の更衣室は唯一ほっとする同僚達との憩いの場だった。しかし今日ばかりはお喋りの輪を逃げるようにスルーしていた。

「おつかれさまでした」

駅まで猛ダユシュして走り急いでいた。

時計の針は6時を過ぎて5時30分着の電車はとうに着いていた。

人ごみをかき分け頭を左右に傾けながら探していた。

岩のような荷物に座り腕組みする雅和を見つけゼイゼイ息を切らし駆けていた。

「遅れてごめんなさい」

「仕事なんだからしょうがないよ」

息を整え改めて二人は向き合っていた。

「雅和、お帰りなさい」

「ただいま、さち」

「疲れたでしょ」

「ああ、でも君の顔みたらもうひと頑張り出来そうだ」

「ナニをひと頑張りするつもりなの」

「まあ、すぐ人の揚げ足取るんだから」

高笑いし二人はじゃれながら北風の町を歩き出した。

「ねえ、お願いがあるの」

「なに」

「今日から名前で呼び合しましょうよ」

「あ、そうだね 佐知・・・でいいかな」

「ええ、私は雅和、マーちゃん
なんて呼んだらいいのかしら」

「マーちゃんだけは勘弁してくれ
親に呼ばれてるみたいで落ち着かないよ」

「マーちゃんって呼ばれてるんだ
私もマーちゃんにしようかな」

「それだけは頼むから止めてくれ」

「わかった それじゃ雅和・・・これでいい？」

「ああ・・・さてと、これからどこに行く」

「疲れているみたいだから、とりあえずこの辺のお店に入りましよう」

二人は信号待ちで偶然みつけたお店に入った。

「いらっしやいませー」

独特のイントネーションに迎えられ店内に入った。

凍えた体を撫で捲くる店内の暖かい気流に包まれると自然と顔が綻んだ。

寒さで固くなった筋肉が解れて二人はほっこりした気持ちになった。

雅和は膨らんだ荷物を置くとグツタリ座り込んだ。

「ずいぶん荷物が多いのね」

海外からの長期旅行者みたい」

「今回は特別なんだ」

「じぶんでいられるのね」

「うん、家でいろいろあって少し長い滞在になるかもしれない」

この件には触れなくなさそうですぐに話題を変えた。

「それより、なにか計画立てようぜ」

「そうね、もうすぐクリスマスだからクリスマスパーティーなんて
どう」

「いいね、クリスマスパーティーか」

「男の人と二人だけのクリスマスなんてはじめてよ」

「俺は久しぶりだなあ」

マズッタとばかり雅和は上目遣いで佐知の顔を窺がった。

「そうよね、初めてじゃないわよね」

「そうじゃなくてっさ前にも言っただろ

心なんて考えなかったって・・

俺にはたいそうな意味のないクリスマスだったって事だよ」

「じゃあ、私と同じ?」

「考えようによってはそうだな」

「なんだかルンルンしてきた」

「もう俺たちは子供じゃないんだぜ

サンタがプレゼント持ってくる訳じゃない」

「サンタは雅和、プレゼントは雅和

雅和が雅和もってやって来る」
リンリンリン・リンリンリン
ってね」

「まだまだ子供だな、佐知は」

他愛のない会話をして二人の一日目は閉じられた。

「ただいま」

マフラーをはずしながら佐知が茶の間を開けた。

「おかえり、残業ご苦労様」

「佐知、外は寒かったろう」

母さん早くご飯の支度をして上げなさい」

笑顔の家族が遅くなった佐知を迎えてくれた。

母の支度してくれた湯気のたった夕食。

あつたかい湯気が顔を撫でたとき後ろめたい気持ちでいっぱいになった。

残業と行って過ごした雅和との時間を思い出し少し膨らんだお腹を押さえながら

母の料理をきれいに平らげていた。

茶の間に戻り父の隣のこたつに足を入れた。

炬燵の中の家族の足と足とが触れ合ってくすぐったかった。

「あつたかいねえ、やっぱり家がいちばんだね」

「佐知は調子がいいんだから」

茶の間の入り口でみかんを抱えた母が含み笑いで立っていた。
昨夜のお風呂の件で母に投げつけた言葉を思い出しシマッタと思
った。

「うるさいなあ お母さんはうるさ過ぎだよ、もうこんな家いやだ」
って言ったような

逃げ出したくなって父の背に隠れるように体を丸くしていた

「何か良い事でもあったのかしら、さっちゃん」
母の心の声を無視していつもなら目もくれない番組を父と見続け
ていた。

会話なんてなくても全然平気。

あゝ
こうして一緒にいるだけで温かくなれるわが家はやっぱりいいな

柳木沢の言った言葉が甦った「それだけで君は十分幸せもの・・・」

自分の部屋に戻るとベッドに体を投げ出した。

雅和の匂いがどこかに残っているような気がして脱いだセーターを顔の上に乗せてみた。

二人の匂いが溶け合いミステリアスな香りを醸し出していた。

その香りは未知の匂いだった

今宵そのセーターを抱き佐知は心地よい眠りについた。

契り

クリスマス商戦も佳境に入り町中がクリスマス色に染まっていた。

佐知は×印で埋め尽くされたカレンダーの前に立っていた。

23日の数字に思い切りバツテンをつけた。

すぐ隣の24日の数字には二重の花丸が見えた。

「明日だ、とうとう花丸の日が・・・やったあ〜」

待ちわびた二人きりのクリスマスパーティー。

カレンダーの前で両手を挙げジャンプしていた。

一方の雅和も格別なクリスマスにしたいとプランを練っていた。

24日の朝は人生で一番の早起きの日となった。

「まだ3時半・・・」「まだ4時・・・」「まだ5時・・・」

「ああアア・・・」

何度も目が覚めたまらずベッドを飛び出していた。

壁にかけた勝負服が飛び起きた反動でヒラヒラ踊ってみせた。

繁華街の町はいつも以上の輝きをまして賑わっていた。

光のイルミネーションが季節を変え明るく優しい気持ちにさせた。

行き交う人、ひと、ひと・・・

佐知の目はカップルばかりに注がれていた。

「雅和に早く会いたい」

待ち合わせのホテルの前で雅和を待っていた。

突然サンタクロースが遣ってきて

おどけた仕草で袋からメッセージを出した。

「わたし・・・に？」

サンタは封を切るジェスチャーをして見せた。

「中を見てほしいの？」

両手で丸を作って頷くサンタはコミカルなステップを踏みながら去っていった。

このサンタが真砂子の彼・龍一とは誰もが予測できないサプライズだった。

凍えて強張った指先を温めながらメッセージカードを開けた。

「1102号室にて君を待つ 待ち人雅和より」

カードを握り締め雅和の待つ部屋へ駆け出していた。

エレベーターを出ると案内ボードの矢印 を頼りに1102室に進んでいった。

部屋の1102を確認すると高なる心臓の音に息が苦しくなった。鼻からいっぱいの空気を吸い静かに吐き出していた。

勇気を出して部屋をノックすると雅和が顔を見せた。

手を引かれ部屋に入って行くとそこには飾りのない青々したツリーがあった。

「佐知と俺のクリスマスツリー・君に送るクリスマスプレゼント
今年はライトだけだけど毎年少しずつツリーをいっぴいにしよう」

「素敵なプレゼントをありがとう」

「さあ、ライトをつけよう」

ツリーにオレンジの光たちが輝き二人の物語が始まった。
クリスマスディナーを堪能した二人は部屋でツリーを見ていた。

二人のクリスマスの扉が開こうとしていた。

雅和は佐知が手にしたワイングラスをテーブルに静かに置いた。
両手をつかまれ椅子から腰が浮いたとたん雅和の腕に包まれていた。

「さち、さち」 「まさ・かず」

佐知は雅和にだけ許した心を信じ硬直した体の力を解いた。
雅和は自分の体を強く佐知に密着させた。

「さち、会いたかったよ さち、さち・・・」

雅和は佐知の名を繰り返して何度も呼び続けた。
佐知もまた雅和の背に指を立て何度も頷きながら応えていた。

二人は会えなかった心の空間を埋める様に心と体を重ねた。

佐知の体は熱く潤い続けていた。
雅和も何度も起き上がってはリングに立ち続ける凛々しい姿を見せた。

私・・・男の人を求めている
雅和をほしがっている・・・

雅和の肌に指を這わせる佐知がいた。

困った照れ笑いをみせた雅和は一層佐知を抱き続けた。

このまま地の果てまで落ちてしまってもいい・・・

芯まで受け入れる佐知の肌はブロッサムピンクに染まっていた。

二人の体にすべてを溶かしてしまうほどの熱い物が波となって押し寄せていた。

「心が入るとすごいんだって俺、初めてわかったよ
君が愛おしくて涙が出そうだった」

「私も涙があふれたわ
愛する人に抱かれるってこういうことなのね」

ふたり静かな眠りについた。

夏の一夜の出会いが濃密な一夜と化し深い契りを結んでいた。

クリスマス以来幾度もデートを楽しんでいたがある日を境にピタリ途絶えていた。

つまらない・・・佐知は会えない日々、口を尖らせ爪を弾く毎日を送っていた。

あの日、雅和の携帯には何度もメールが入っていた。
そして雅和は佐知をひとり残し帰っていった。

「ごめん、悪いけど今日はこれで帰るよ
今度たっぷり埋め合わせするから許してほんとにごめん」

雅和の微笑む目から笑みは消えていた。

何か途轍もないことが起きたんだ・・・
あの日を思い出すと電話をする気にはなれなかった。

今日もまた手にした携帯を置いていた。

「ハァー・フゥー」気分を紛らそうと吐く息が余計部屋の空気を重くしていた。

佐知はひとり冬の町へ出た。久しぶりの夕刻の町だった。
顔を突き刺す氷のような風は元気をなくした心と体には堪えた。

気がつくくとクリスマスを過ぎたホテルに足が向かっていた。

喫茶ラウンジに入り手を擦りながら読みかけの本が入ったバッグに手を伸ばした。

そのときだった。

「あっははは」

覚えのある豪快な笑い声に思わず辺りを見渡した。

「あ、柳木沢さん」

数人の男たちと談笑している柳木沢がそこにいた。

柳木沢さん少し痩せたみたい

仕事の打ち合わせかしら

柳木沢が元気を齎したのか青白かった顔にみるみる赤みが差した。

後ろ髪引かれる柳木沢から視線を外し読みかけの本に目を移した。作品の登場人物に感情移入しながら本に没頭していた。

同じ空気を共有していた柳木沢の事など完全に忘れていた。

「皆井くん、皆井君じゃないのか」

コーヒークップを手に立っている柳木沢に瞬きもせず釘付けになった。

柳木沢のカップを指で弾くチーン・・・その音で我に返った。

「柳木沢さん」

柳木沢が挙げた右手を出口に振って見せた。
出口で待っていた同行の男達は柳木沢を残し帰っていった。

「少し、いいかな」

「はい、一人ですからどうぞ」

柳木沢さんは、このホテルによくいらっしやるのですか」

「ああ、僕にとってここは曰くありのホテルだからね」

「そうですね お体は大丈夫ですか、少しお痩せになりました?」

「君は勘も鋭いらしいね 君には隠し事は通用せんようだな」

「何か隠しているのですか」

「あついいいや、何も無い君の勘ぐりすぎだ」

「ならいいのです」

でもあれからどんな生活をなさっているのかと心配で」

「僕を心配していた？君が・・・それは嬉しいね」

「わたし真面目にお話しているのですよ」

柳木沢さん、あの時嬉しい顔を一度もなさらなかった
だから、ご家族とどうしているのだろうと」

「君は何でも知りたがるんだな」

忠告しておく、人の事に立ち入り過ぎるのは止めることだ」

柳木沢は一人ぼっちになった

間違いなくまた一人になったと直感した

「柳木沢さんにお会いするにはどうすればいいでしょうか」

「君が又、僕と会ってくれらというのか？」

しかし僕は、君に幾度も携帯の番号を伝えていた筈だがな」

「申し訳ありません」

捨ててしまいました 本当にすみません」

「じゃあ、もう捨てないことだな」

柳木沢は番号の書かれたメモ用紙を佐知の手に握らせた。

30分程の短い会話だったが柳木沢はぼっかり空いた心の溝を埋めてくれた。

家に戻ると腑抜けのようにベッドに腰をかけていた。

お尻の固い感触に手を伸ばす出掛けに探していた携帯が出てきた。

着信履歴に残った雅和の名前に小躍りしていた。

柳木沢に湧き上がった嬉しさは消え携帯番号さえどうでもよくなっていた。

「もしもし、雅和」

「佐知、この前はごめん」

「あやまらないで 会える?」

「うん、うん、明日はどつ?」

「会いたい ものすごく会いたい」

恋焦がれた雅和を待っていた。
約束の時間まで2杯のコーヒーは余裕で飲めそうだった。

息切つて雅和がテーブルに着いたのは間が持てなくなった頃だった。

佐知の側に跪いて顔の前で両手を合わせ頭を下げた。

「この前は、本当に悪かった」

「ううん、いいの気にしないで

ねえ雅和、私をしっかり繋ぎとめておいて」

「佐知どうしたんだ、急に」

「会えなくなつてからずっと雅和のことばかり考えてた

このまま会えないのかなって思ったら寂しくて悲しく泣けてきたわ
雅和が恋しくて、恋しくて堪らなかった、一人ぼっちはいやもう
一人にしないで」

「ごめん、佐知ごめんよ」

頭を深く下げうな垂れた雅和の姿が痛々しかった。

「ごめんごめんなさい わたし雅和を困らせてるよね」

感情の高波に飲まれ溺れているもうひとりの私が雅和を困らせていた。

自分を見失うような付き合いは賛成できないと言った母の言葉が過ぎっていた。

新たに生まれ出た女が見え隠れし顔を出していた。

「携帯鳴ってるわ 遠慮しないでいいのよ」

幾度も携帯が鳴って佐知は会話に集中できなかった。

「ありがとう じゃ、ちょっとごめん」

口元を緩ませ携帯を持つと急いで席を立つて行った。

今日もきつと私を置いて帰っていく、あの時と同じ思いはいや残されたつらさが痛みとなって襲っていた。

伝票を持つと戻って来る雅和のもとへ走り駆け寄った。

「今日はこれで帰りましょう
雅和、なんだか大変そうだから」

「ありがとう、佐知
落ち着くまで暫く会えないと思うけど大丈夫」

「うん大丈夫」

「落ち着いたら、その時がきたら全部話すから待っていて」

「雅和ありがとう、会えてうれしかったわ
無理して会いに来てくれたんでしょ
わかってたの・・・なのに我がままいってごめんね」

雅和はうるうる瞳の佐知が愛おしかった。
首筋を両手で包むとおでこに優しくキスして帰っていった。

一人何かを背負う雅和の後姿を佐知はいつまでも見送っていた。
雅和からの連絡は途絶えたまま月日だけが流れていた。

佐知と柳木沢は携帯で互いの近況等を伝え合うようになっていた。

約束の日、キーを手にエレベーターから出てくる柳木沢を見ていた。

このホテルに泊まっているのかしら、家庭に戻った柳木沢が何故・化粧室の鏡の前でコンパクトを閉じ頭をかしげた。

「お待たせしてすみません」

「いや、ぼくも着たばかりだ」

「柳木沢さん、常宿をこのホテルに変えました」

柳木沢は飲みかけたコーヒーカップを震える手で置いた。

「あ、ん・いや」

君はどうしてそんなに勘が働くのかねえ」

「キーを手にした柳木沢さんを偶然お見かけしたので」

「そうか・・・」

「どうして、お一人でここに」

「家庭は仕事のようにほうまくいかないものだね」

佐知のコーヒーが運ばれてくるとミルクを並々注ぎ入れてくれた。

「昔から僕は仕事人間でね」

仕事オンリーの仕事馬鹿で何よりも仕事を優先させてきた
当然、家族は置き去りにしてしまったよ

両親が病気の時も妻が倒れた時も僕は酒を呑んでいた
勿論、仕事からみだ

それが原因なのだろうか一緒に住めるようになったというのに
顔を合わせれば僕を責めつつける昔のままの家族がそこにいた
耐えられなかった、いや耐えたんだよ十二分すぎるほど」

「おつらいですね」

柳木沢さんが自分の父だったらご家族の気持ち分らないでも・
でも責める気持ちなんて絶対ないと思います
きつと無意識に出てしまった言葉なんですよ」

「その無意識というのが問題なんだよ」

許すと言いながら結局は許していないその証だろう」

「これは家族再生への一歩なんですよ
積年の封印されてきた想いが一緒になったからこそ吐き出せているのですから」

「確かに彼女にはつらい想いをさせてきたよ
しかし、それ以上のものを与えてきた
何十年も昔の事を言われ続けるのは堪ったもんじゃない」

「つらい想いをそれをきちんと奥様やご家族に償えたのですか
昔の事なんて簡単に片付けようとするから」

「謝罪はじゅうぶんに済んでいると思っていた
だから一緒になった、家に戻ったんだ
だというのに住み始めた途端、口を開けばこうだった・ああだっ
た・・・」

「女は誰かに話を聞いて欲しいんです
聞いてもらうだけでいいんですよ
奥様の話を愚痴でも何でも耳を傾けて聞いてあげてください
すべてを吐き出せたら奥様はきつとすっきりなさる筈です」

「家庭は君の言う安らぎや癒しの場所どころか僕を苛立たせる場所だ
その上、妻のご機嫌をとれと君は言う
この僕に指図し命令つもりなのか？君は見あげた女だな」

柳木沢は露骨に嫌な顔をして見せた。

「怒らせたのなら許してください

でも柳木沢さんの今の物言いは許せません

その見下したような言い方が関係を悪くしているのではないですか
一度くらい柳木沢さんがご家族に合わせてもいいと思います
本当のご家族の気持ちがきつと見える筈です」

このとき一枚のメモがテーブルに届けられた。

「電話が入ったようだ　ちょっと失礼するよ」

カップの珈琲は手付かずのまますっかり冷めていた。

「申し訳ない

仕事が入ったので失礼するが君は此処に残りなさい」

「いいえ、私も一緒に失礼します」

「頼んだコーヒーが来るからそれを飲んで帰りなさい」

近寄りがたい空気を醸し柳木沢はコートを羽織り仕事場に向かっていった。

「・・・柳木沢さんを怒らせてしまった」

一言多かった口を手で覆い自己嫌悪の津波にドツプリ浸かっていった。

昔の柳木沢・さつきまで一緒だった柳木沢
やはりどちらも好かない男だった

テーブルにケーキとレモンティーが運ばれてきた。
佐知の大好きなシフォンケーキだった。
心遣いのケーキを口いっぱい含むと自然と顔が綻んでいた。

雅和は其のころ父と母の関係に心を痛めていた。

「いったい何が気に入らないんだ
君に一生責められる様なトンでもない事を僕がしたのか
頭を下げて一生謝れとでも言いたいのか」

「あなたを責めるなんてそんなつもりは決してありません
昔の話になるといつも不機嫌な顔をして神経を尖らせ声を荒げる」

「考えても見る 今更昔の話など何になるんだ
どうしろと言うんだ 言ってみる
言いたい事があるのならはつきり言ってみる」

「悲しみも苦しきも一人耐えてきました
その想いをあなたにわかって欲しかったの
そしてあなたにも共有して貰いたかった
幸せも涙も分け合える夫婦になりたいと願っていました」

「僕は血を吐く思いで仕事をして君たちを養ってきた
そのお蔭で君たちの今日があるんだ
十分な物を与え続けられたのも僕の仕事のお蔭だろう
なのに何をそれ以上僕に期待すると言うんだ」

「私は贅沢を望んでいるんじゃないの 誤解しないで下さい
あなたを必要とする時あなたはいつも傍に居てはくれませんでした
長い年月を通してあなたが私と居てくれたのは数える程でしたよね
あなたの心がいまだよくわからない あなたが見えなくて悲しく
なる」

「何をバカなことを云っているんだ 君はおかしいんじゃないのか
長いこと僕を見てきた君が何を今更見えない等とほざくんだろう
な」

「なら、あなたは私を見てくれたのですか
あなたに私が見えていたのですか
ならば教えて下さい　あなたに見える私を仰ってください」

「うるさい黙れ、もう黙ってくれないか
朝からグダグダと気分が悪くなる
養われている女はおとなしく従うものだ
ぼくが右といたら右、左といたら左だ
それが妻の役目というものだろう」

「あなたは何一つ変わっていないのですね」

「うるさい、黙るんだ
君はもう口を開くんじゃない」

「また私から逃げるのですか
私と向き合って下さる優しさもないのですか
私はあなたに愛されてはいないのですね」

「うるさいと言っているのがわからないのか」

「どうしてあなたは私から目を背け逃げよつとするのですか」

ビシャッ・・・

男女の争うような声に起こされた雅和は目を擦りながら階段を下りた。

ドアの前で入るタイミングを幾度も逃していたが母の涙声に眠気が一辺に飛んでいった。

「殴つて、それであなたは気が済むのですか
でも私は・・・又・・・あなたという人が見えなくなつた」

雅和は勢いにまかせ乱暴にリビングのドアを開けた。
仁王立ちの父と睨み合いがンを飛ばしていた。

「母さんに手をあげたのか
親父に母さんの何がわかるんだ
何も分からない奴が偉そうなこと云つてんじゃねえ
家庭も守れない男に家族の何が分かるっていうんだ
お前なんか、おまえなんか戻つてこなきゃよかつたんだ」

トーストの香ばしい匂いがたち込めたりビングに雅和の怒号が飛んだ。

今にも飛び掛っていきそうな勢いの雅和に母は身を挺して前に立ち塞がった。

「マーちゃんもう止めて、もうよしましょ」

父は自分で挽いたコーヒー豆を感情を剥き出しに床に叩きつけた。
そしてそれっきり二度と家には戻らなかつた。

愛はかげろふ

節分寒波も過ぎて少しずつ寒さも緩み始めていた。

朝晩はまだまだ寒さが厳しかったが日中の日差しに春の到来を感じていた。

佐知は仕事に没頭し雅和の連絡を待ち続けていた。

その日は山のように積まれたカルテの整理に追われていた。

「すみません」

「はい、少々お待ちになってくださいね」

顔を上げるとそこに雅和の姿があった。

「雅和どうしたの、いつ戻ってきたの」

「佐知の顔が見たくて駅から真っ直ぐここに来たんだ」

「今日は残業なの、遅くなるけどいい？」

「無理しなくていいよ」

顔を見ただけでいいんだから
佐知の時間のある時、ゆっくり会おう」

「ええ、ごめんね」

「じゃあ、また連絡する」

肩を落とし帰っていく雅和の後姿は静止したモノクロ写真のようだった。

それきり音沙汰のなかった雅和から突然の電話がはいった。

「すべてが決着したから会おう
詳しい事はその時に話すよ」

雅和のか細い声が喉に突き刺さった小骨のように引っかかっていた。

お気に入りの水色のスプリングコートで約束の場所へと急いでいた。

「さち〜」

道を挟んだ歩道に大きく手を振る雅和がいた

だれかに似ている

確かこんな風に歩いてくる人どこかで見たような・・・

雅和は行きかう車を避けながら佐知のいる歩道に駆けてきた。

「この前は仕事の邪魔して悪かったね」

「いいの、会いたかったからうれしかったわ」

「おれも会いたかった」

目と目を交わすだけで気持ちは通じ合えた。
もう二人に会話など必要なかった。

ホテルの一室で灼熱の肌を重ね合わせた。
久しぶりの触れあいに充たされた二人だった。

「ねえ雅和、会えなかったわけを話して
何があったのか聞かせてくれる」

「ああそうだね」

実は俺の両親ずっと別居しててさ
去年の終わり頃、突然母さんが親父に帰って来て貰おうと言い出したんだ

俺は反対というか気乗りしなかった・・・
上手くいかないことは分っていたからね

でも母さんがあんまりしつこく言うから俺、仕方なく親父に伝え
たよ

いつもなら固辞する親父がどういう心境の変化なのかすんなりOKしたんだ

「それで一件落着、上手くいったのね」

「いや、出て行った」

「出ていったって誰が」

「おれが親父を追い出したんだ
あいつ出ていったんだ」

「あいつなんて言い方おかしいわ お父さんでしょ」

「いいんだよ、あいつで

あいつは母さんを殴ったんだ
口で勝てず、分が悪くなるとすぐ手を出す
あいつはいつもそうなんだ」

「ひどいわ 女に手をあげるなんて最低ね」

「そう思うだろう」

「どうして愛する人をぶつたり出来るのかしら」

「あいつは母さんの事なんかどうでもいいんだよ
母さんの目の色 好きな色 好きな曲 ほくろ 癖
何十年も夫婦なのにあいつは母さんの事なについて知らないんだ

悲しくなるだろう・母さんはそれが悲しいんだ
親父の言う愛じゃない愛がほしいんだ
母さんはその愛をずっと待ってるんだ」

母親を支え守ってきた雅和だからこそ怒りと憎しみをぶつけ許せないのだと胸が痛んだ。

「大学もあと少しで卒業だし母さんには俺がついてる
だからあいつはいらない もういらないんだ」

「お父さんと家族でもう一度話せないの
もう一度うまく出来ないの」

「もう終わったんだよ

気に入らないと手を出すような男と話し合う価値なんてない
親父の言う権力やお金、それが何だっけ言うんだ
人として駄目な奴はただのクズ人間だ
親父は人間失格なんだ」

「もうやめましょう

お父さんをそんな風に言うの」

「ごめん親父の話になると俺いつもこうなんだ
母さんにも佐知と同じこと言われたよ」

「ご両親、本当にこのままでいいの」

「母さんはあんな親父でも夫婦でいたいんだよ
俺が母さんを助けるから別れてしまえって言っても絶対首を縦に
はしない

母さんの親父に対する気持ちは俺とは違っただけ分かったんだ
親父をまだ愛しているんだってね
あんな親父でも今も気持ちは変わっていない

愛しているんだ

ひどい目に何度もあつてるのに何で未だ愛せるのか俺には分からないよ

人って夫婦って複雑すぎるよ」

「そうね、大人の世界はまだ私達には分からないわね

まして夫婦の事は二人以外には到底理解できないのかもしれない
雅和、もうそつとしてあげましょう

いずれ結果は必ず出るわ

始まりの後には終わりがあるようにね

でもどんな終わりでもそれを決めるのは雅和じゃないわ
そうでしょ」

「佐知のいうとおりかもな

母さんの人生は母さんのものだ

母さんは俺の母さんだけど人生は俺のものじゃない

俺もう・・・何も言わないよ」

無言になった雅和を見つめ佇む佐知の目は潤んでいた。

翌日吹っ切れたような茶目つけを見せ雅和は電車を待っていた。

「佐知、いろいろサンキュー又、会おうな」

「うん、楽しかったわ またね」

佐知はこの時まで柳木沢をすっかり忘れていた。
雅和が去ると胸にまたぽっかり空洞が出来た。

引き出しの奥底から柳木沢のメモを引っ張り出していた。
吸い寄せられるように好かない柳木沢の携帯番号を押した。

「もしもし、 皆井です」

「オオ久しぶりだな 元気にしていたか」

「はい お忙しいと思いますがお時間は取れますか」

「ああ、君のための時間ならたっぷり取れるぞ」

紙の刷れるような音がして少し間があいた。

「土曜日、君はいつも土曜日指定だったな
次の土曜なら・・・それでいいね
ホテルの部屋に着なさい、待ってるから」

「ありがとうございます それでは土曜日に伺います」

土曜の午後、ホテルに向かう佐知の姿があった。

手にしているのは以前、柳木沢のために買い求め渡せなかったスマートフォンキー。

佐知は眩しいガラス張りの高層のホテルを見上げた。

そこは雅和とクリスマスマスを過ごしたホテルだった。

そして今、柳木沢の常宿となっているホテルを前に不思議な縁を感じていた。

フロントが告げた部屋番号はあまりに奇妙なえにしで鳥肌がたった。

1102号室

雅和と過ごした同じ部屋の前である時とは違う心拍の高鳴りに襲われていた。

ドアの向こうには魔物が住んでいるような気がした。

控えめにノックしたドアが開いた。

顔を見せた柳木沢の扱っていた頬は少し膨らみ体調も良さげだった。

「お顔の色いいですね 安心しました」

「君だけだな、僕のこと心配してくれるのは」

「又そんなこと・・いけませんよ

一番心配しているのはご家族ですから」

「いいや、もう僕に家族はいないんだ」

「え、どういう意味でおっしゃっているのですか」

「共に生活し気持ちを共有していく過程で形をなしていく
それを家族というのならば僕にその家族は存在しない」

「おっしゃってる意味が」

「家族を捨てた、いや棄てられたんだよ家族にね
いまは君だけが僕をわかってくれる唯一の存在なんだ
だから・・君と会うのがたまらなく嬉しいんだらう」

「柳木沢さんはそれで本当にそれでいいのですか」

「僕は一人でしか生きらない男なんだ
向き合ってくれるのは仕事上の人間だけだ
まア上辺だけだがね
自分の事は僕自身がよくわかっている
僕は決して裸の王様だとは思っていない」

「わかっていらっしやるのなら、なぜ」

「自分を否定する事は築いてきたものの全部が偽りだった事になる
そう思っただけで喪失感に身体が震えてくる」

「なぜ、ご自分を否定なさろうとするのですか
自分でなく柳木沢さんの醜悪を否定なさればいいじゃないですか
柳木沢さんはもっと楽に生きられてもいいと思います」

「君は僕に心身脱落の教えを説いているのか」

「いえそんなつもりは・・・
私は周りからおばあちゃん臭い変わった人ねってよく言われます
両親は働いていましたから祖父母が親以上の愛情で育ててくれま
した

私の口から出る言葉は今はいない祖父母の教え、そう思っていま
す」

「君は多くの善人に守られ大切に育てられてきたようだな」

佐知はその後も幾度も柳木沢と会った。

柳木沢と佐知の会話はいつも禅問答のようだった。

二人は前世でもこんな会話をしたような血の通った親近感を感じはじめていた。

二人の在るときの会話はこのようなものだった。

<柳木沢>

僕の人生、先はもう長くはない

このまま自分という人間が完成されぬまま

朽ちていくのかと思うと堪らないね

<佐知>

人は死ぬまで未完でいいと思います

完成品はそこで終わりでしょ

でも未完ならば何度でも好きなように変えて行けますよ

そしてまた在るときは

<柳木沢>

君の言うように楽に生きて行けたらどんなにいいだろうな
しかしそれがなかなかむずかしいんだ

<佐知>

人生は自分が決める・心が決める

そんな言葉と出合った一時期わたし真剣に自分と向きあつたんです
そしたらどうでもいいことに囚われていた自分に気づいて少しだけ
けど楽になれました

そしてまた

<柳木沢>

家族というものは扱いにくいものだな

僕の言うことなんかだれも聞こうとはしない
聞いてはくれないよ

<佐知>

昔、わがままだった私に祖母が言いました

相手に何かを望むのならあなたも相手の望みをちゃんと聞かなくてはだめだって

「君は、年下の師匠だな

君は僕に多くの知らない事、興味のなかった事を気づかせ

そして何より感動をくれた君は年下の大切な友人だ ありがとう
皆井くん」

柳木沢は佐知との度重なる親睦をきっかけに自分の過ちを受け入れるようになっていた。

桜の開花予想も聞こえ廻り来る季節は春、ジャケットを小脇に抱え道行く人が増えていた。

この日、柳木沢は自宅に戻っていた。

妻と話をするため、いや頭を下げにきていた。

どんな結末になろうと自分の心に決着をつけようとしていた。
自分の過ちに頭を下げ詫びる覚悟だった。

「美紗子、すまなかった 申し訳ない」

深く頭を垂れ言葉を続けた。

「やっと僕は過ちに気づき自身を責め後悔もした

今日はそれを君に伝えたくてきた

そして僕の正直な心を君にわかって欲しいと思った」

美紗子は感慨深いものが込み上げていた。

「私に頭を下げて下さるなんてもうそれだけで胸が一杯、もう十分です」

「美紗子今日は許しを請うただけにきたんじゃない

僕はどんなことがあるかと君にしたすべての限りを償わなければ
と思っっている

でなければ僕は悔いを残し人生の幕を閉じることになる
だがそれは僕が望むことではない

だから美紗子、償わせてほしいんだ
お願いだもう一度僕にチャンスをくれないか」

美紗子の硬直した肩が解れていった。

「あなた、本当にお変わりになったのね」

「嗚呼・・・これまでの醜悪のすべてを受け入れた時見えないものが
見えてきたんだよ

君の人生を軽んじ縛りつけ蔑ろにしてきた

そして自分の事ばかりを押し付け君の声に耳を貸すこともなく夫
として失格だった」

「もう何もおっしゃらないで下さい

私はあなたの妻です これからもずっと変わらず
いつかきつと必ずわかってくれると信じ待ちました

私たちはこの世で選ばれ出会い深い契りを交わし夫婦になった・
そうでしょ

私達は神に導かれ夫婦になれたのですもの死ぬまで夫婦ですよね」

「本当にすまなかった

僕は一人で人生を突っ走ってきた

君という大切なパートナーを置き去りにして走り続けていた」

「あなたは差し伸べた私の手を繋ぎ忘れ一人で走り出した
私たち夫婦なのに可笑しいわね
気がつけば二人とも一人ぼっちだったなんて哀しすぎますね」

「ああ、そのようだ
君も僕も・・・ひとり・・・だったね」

それつきり、二人は言葉にならなかった。
口を真一文字にした柳木沢の目からキラリ光るものが零れていた。

雅和が父と母の夫婦関係の修復を知ったのは桜が満開に花咲く頃
だった。

単位も無事修得した雅和は故郷行きの電車で揺られていた。

佐知はこれと違って変わりばえしない日々を淡々と送っていた。
ご無沙汰だった柳木沢から久しぶりのメールが入ってきた。

ノホテル住まいに終止符を打ち妻と二人再出発を始めた
君のおかげだ ありがとう
家の電話番号を知らせておこう
またお会いしよう 次回は自慢の妻も同伴でノ

何者かにとりつかれたように配慮もお構い無しで電話をかけていた。

「もしもし・・・」

あのう、柳木沢さんはいらっしやいますでしょうか」

「失礼ですがどちら様でしょう」

「あつ申し訳ございません」

私、皆井佐知というものです」

「あら皆井さんって、主人が話してくれた可愛い年下の皆井さんかしら」

「あ、はい」

「お待ちになってすぐに呼んできますから」

柳木沢の妻の柔かい声が耳から離れなかった。

たった一言、三言のやりとりから円満な夫婦関係が読んで取れた。

「あなた、可愛いガールフレンドから電話ですよ」

居間の子機を握り照れ笑いの柳木沢は足早に部屋を出ていった。

電話の向うの柳木沢はいつも以上に饒舌だった。

佐知は柳木沢と家族の新たな旅立ちにエールを送っていた。携帯を切ると緊張が安堵に変わり全身の力が抜けていった。

100m走を全力で駆け抜けた後のように大の字で天井を仰いでいた。

「母さん、親父に女から電話だって」

「やあね、そんなんじゃないわよ

お父様が通っている病院にお勤めしてるお嬢さんですよ」

「物好きな女もいるんだな」

「失礼よそんな言い方、彼女はお父様の恩人なんですからね

此処でうまく生活が出来ているのは彼女のおかげなんですって彼女との出会いで俺は変わった、そう云って笑っていたわ」

「へえ、それでどんな人 名前は聞いた？」

「ええ、確か、みないさんて言ったかしら」

「母さん、もう一度言って」

「確か・・・みない さちさん」

「・・・・・・・・」

「ご機嫌な柳木沢が戻ってきた。

「雅和、もう部屋に行くのか」

「う・うん ああ・・・」

雅和は自分の部屋で見つめた自分の拳を力いっぱい壁にぶつけた。何度も何度もぶつけた壁が赤く染まっていた。

痛かった涙が出るほど痛かった

雅和の心の痛みだった

嘘だろう嘘に決まってるよな なにかの間違いだよ
絶対に間違いに決まってる

愛はかげろっ？

久しぶりのデートだというのにさっきから雅和の顔ばかり窺がっていた。

いつと違う雅和の般若のような表情に寒気と震えが止まらなかった。

何を話してもああ・うんしか言わない雅和にとっとう痺れを切らしていた。

「今日はご機嫌が悪いのかな

また日を改めて別の日にしましょうか」

言葉を遮り佐知を店から連れ出した。

無言のまま腕をつかまれながら歩いていた。

辿り着いたのはクリスマスを過ごしたホテルだった。

1102号室の椅子に寡黙な二人は向き合い座っていた。

ただならぬ空気の部屋にやはりここには魔物が住んでいると武者震いした。

口火を切ったのは雅和だった。

「君なのか、さちという名の女は
親父の密会相手の女は君なのか」

「急に何を言い出すの
雅和のお父さんとは面識もないのよ」

「じゃあ、柳木沢という男とは面識があるだろう」

「私が知ってる柳木沢さんと雅和が知っている人が同じなら」

「君の知っている柳木沢は俺の親父だ」

「・・・だって雅和の苗字は井川でしょ」

「ああ、親父は母さんの家に入った婿なんだ
親父は外では旧姓の柳木沢で通している
これで分かったろ

柳木沢は俺の親父で君が密会していた男なんだ」

「まって、密会だなんて
私と柳木沢さんは雅和が思っているようなお付き合いじゃないわ、
信じて」

「君と親父はホテルで会ってたんだぞ
何でもない相手とホテルで会うなんてどう考えても普通じゃないよ

誰だっっておかしいと思うよ」

「何と言われても私は雅和を裏切るような事はしていない
それだけは信じて

柳木沢さんとは精神の繋がり・・同志と云うのか・・・
上手く伝えられなくてごめんなさい

でも雅和の思っているような事は絶対ないわ、それだけは信じて」

「精神の繋がりを持ってこられたらもっときついよ

精神の繋がりというのならそれは簡単には切れないって事だから
ね」

「何を言っているの、全く理解出来ないわ

雅和は・・お父さんに嫉妬しているんだわ」

「そんなんじゃない

俺の知らないところで君は親父と会った

それが・・そんな君が許せないんだ

俺が東京に戻った後も君は親父と会っていたそれも頻繁に・・

親父の手帳を偶然目にして知ってしまったんだ

皆井佐知、スケジュール表の土曜日は君の名前で埋まっていた
信じられなくて体が震えた」

「ごめんなさい誤ります、でもこれだけは聞いて、

柳木沢さんはあなたのお父さんは病院長の知り合いで病院の患者

さんの一人だった

まさか雅和のお父さんだなんて本当に知らなかったのよ」

「知っていたら君は親父と付き合いを止めていたとでも言うつもりか」

「雅和は誤解しているのよ

私の中の雅和と柳木沢さんは違うの

出会った頃、柳木沢さんは苦しんでいた

家庭の事や自分の人生を顧みて悩んでいたの

そんな柳木沢さんを・寂しそうな柳木沢さんを放って置けなかった

会ってお話するそれだけでお元気になれる柳木沢さんの姿が嬉しかった

本当にそれだけ・それだけなの信じて」

「この部屋で俺は佐知と初めてのクリスマスを過ごした

同じこの部屋に親父が滞在しそこに君は躊躇もせず足を運んでいたそれを俺にどう理解しろって言うんだ」

「ホテルで会ったのは本当に軽率だったわ、ごめんなさい」

「君は知らないよね、この部屋の番号が僕の誕生日だって事

11月02日で1102号室

俺は迷わずこの部屋を予約したんだ

君とのクリスマスを忘れずにいたかったから
なのに君は同じこの部屋で親父とも会っていた
この事実をそうだったのかなんて受け止められるわけないだろう
君は俺がそんなお人よしだと思ったのか」

「ごめんなさい、本当にごめんなさい

疚しい事は何一つないのに誤るのは不本意だけど

雅和の気持ちがわかるから痛いほど伝わったから謝ります

私の軽薄な行動で大切なクリスマスを台無しにしてしまった

何も知らず気付かないでごめんなさい 本当にごめんなさい」

雅和の気持ちに佐知のそれよりも数倍も濃くて深いと知った。
あふれる涙を止められなかった。

「泣いてごまかすのは女の特権だって言うからな
俺はその手で何度も痛い目にあってきたんだ」

もう限界だった・・・

佐知が冷静さを保ち続けたのはここまでだった。

「もうやめて、信じて貰おうなんてもう思わないからもういい
もう何も言わないで、私を許さないって事がよく分かったから
これ以上憎しみをぶつけないで、雅和を嫌いになりたくない
ずっと・・・好きなままでいたい」

「いい加減にしてくれ
さつきから自分勝手なことばかり・・・
俺はこれでも堪えているんだ 泣きたいのは俺の方なんだ」

肩掛けバッグを掴むとドアを蹴り部屋を飛び出していった。
ドアが閉まる音だけが無常に響きわたった。

佐知は身を起こし雅和の座っていた椅子に手を翳していた。
仄かに残った雅和の温もりにまた涙が溢れ落ちた。

大好きな匂いが怒りの残り香となり部屋中を漂い佐知をいっそう
責め立てた。

愛しい香りは切ない香りに匂いを変えた。
いつまでも漂う残り香が悲しみを深くしていた。

雅和の携帯は繋がらなくなっていた。

「お掛けになった携帯電話は現在つかわれて・・・」

アナウンスだけが無常に流れ続けた。

「もうだめ、今は何も伝わりそうにない」

生彩をなくし放心の日々を送る佐知はこの日躊躇もせず雅和の名
前を削除した。

就床した耳元でかすかな携帯の音がしていた。
ずっと鳴ることを忘れていた携帯の音だった。

跳ね起きて掴んだ携帯に真砂子の名前が見えた。

「こんなときに間が悪すぎるよ……」

拒否する指を宥めながらボタンを押した。

「佐知、寝てた」

テンションの高い透き通る声は今の佐知には不釣り合いだった。

「どうしたの、こんな遅くに」

「ごめん、ちょっと気になることがあって」

「なあに」

「さち、雅和と喧嘩でもした」

「どうして……雅和が何か言ってた」

「うっん、別に何も

最近、佐知の話題になると知らないの一点張りで

それに急に遊び出すなんて変でしょ

それが前よりも断然ヤバイツテ感じ」

「そう・・・でも大丈夫、何もないから」

「じゃいいけど何かあったら相談に乗るから言ってよね」

「心配してくれてありがとう、おやすみ真砂子」

雅和は心のないまま女を抱く生活に戻っていた。

佐知が嫌う許せない男の一人になっていた。

「頑張つて変わってみせる・佐知のためにかわってみせる」

雅和の心を私だけのものと信じ疑いもしなかったのは幻想だった。男と女の関係に絶大なる保証など何一つないことを知り落胆していた。

未だ覚めやらぬ体の火照りだけを残し去って行った雅和を憎くさえ思い始めていた。

すべては自分のせいと責める時もう一人がそれを制止していた。

「佐知は悪いことをしたの・それは本当に悪いことなの」

雅和が許せないのはホテルの同じ部屋で父・柳木沢と会っていた事。

それが雅和を傷つけた原因だったとすればその罪は受けよう。

しかし柳木沢と出会ったことがそんなに責められる罪に値するのだろうか。

神の悪戯としか思えない偶然の出来事に翻弄されていた。

毎夜ベッドの上で堂々巡りを繰り返し眠れぬ夜が続いていた。

連日の残業と心労がたたったのか

佐知は何年かぶりの高熱をだし床についていた。

高熱はすぐに引いたが微熱が残り簡単に病状は好転してくれなかった。

「知恵熱にしてはとうが立ちすぎてるけどなあ」

家族の笑いの種になっていた。

佐知は長引く熱で長い欠勤となり不甲斐なさを痛感していた。

何も考えず病状に身を任たのが功を奏したのか愁色はすっかり消え失せていた。

体と心がすつきりすると頭も冴え渡り雷雨の後の晴天のように爽快な気分に戻っていた。

仕事に復帰し体調も万全になると幼少の頃のように自宅の本を片っ端から読みあさっていた。

幼少の頃の一番の友達の本だった。

嫌なことがあっても本を読むとその時だけはすべてを忘れ許せていた。

成長した今もその記憶を体が覚えていた。

何ヶ月ぶりかで手にした祖父の古書の一説に目が留まった。

／急ぐなかれ、ただその乱れたる呼吸を整えよ

天の時におのずから動くを解するの機あるべし／

今は余計なことは考えず目の前のことだけにしっかり取りくもつ
そして動くべき時自然と動ける様にその時を待とう
その時はきつと来るはず

亡き祖父に背中を押されたような気がして嬉しくなった。

あれから柳木沢からの連絡はずっと途絶えていた。

「もう、会えないんだ・・・」泣く泣く気持ちを断ち切っていた。

雅和を失い心が萎えた時、いつも浮かぶは柳木沢の姿だった。

どんなに会いたくても今はそれも叶わぬ願いであった。

あれから人の残業まで一気に引き受け自分を無にして働いていた。

柳木沢は静岡に事務所を構えたとかで病院に顔を見せることは二度となかった。

仕事から戻るとひたすら空腹を満たし家族のそばでいつものように休息を取った。

疲れ果てた体は眠りを求め佐知を自然にベッドに導いてくれた。

そんな日常を淡々と繰り返し／動くを解するの機／を待っていた。

雅和はネオン街のスナックで仲間の輪から一人外れ座っていた。

「雅和はやく、早くこっちに来いよ」

「なにを言っても無駄よ、今は放っておくのが一番なの」

仲間を連れ出した張本人が一人片隅で酒を煽り毎度見知らぬ女と姿を消す。

そんな雅和に、とうとう真砂子の堪忍袋が切れた。

雅和の隣にはファッション雑誌から抜け出したような飛び切りの女が立っていた。

「雅和ちよつと待って、その人、雅和の何なの
知り合いだったら皆に紹介してよ」

ねえ彼女、この男とここではじめて会ったのならやめたほうがいいよ

いつもこんなこと繰り返している最低男だからさ
悪いけど、今日は一人で帰ってくれない」

女は髪をかき上げながら真砂子と雅和をひと睨みして出て行った。
雅和は苦虫を潰した顔を見せ無言で真砂子を睨みつけた。

「・・・・・・・・」

「言いたい事あるなら言いなさいよ」

何があったかは聞かないけどさ、最近の雅和おかしいよ」

「うるさい、お前は女の癖に生意気なんだ」

何にでも出しゃばってきて、ほんと、うざいんだよ」

雅和の両手が真砂子の肩に重く押し掛かった。

真砂子はそのまま押されて壁に挟まれ動けなくなっていた。

「離して、痛いじゃないのよ」

雅和の手は緩めるどころか力が入り真砂子を苦しめてきた。

「謝れ、二度と俺に偉そうな口叩くな」

怖くなつた真砂子は甲高い悲鳴にも似た声を上げていた。

「やめてえ、女に暴力をふるつもりなの

早くその手を離してよ、離しなさいってばあー」

仲間達はただならぬ真砂子の声に血相を変え飛んできた。

必死で抑えていた龍一の拳が雅和の頬を殴り飛ばした。

「雅和、帰れ、今日はもう家に帰ってくれ

一人になつてよく考えるんだな、今のお前には孤独が必要だ
暫らく俺達の前に顔を出さないでくれ

何を苦しんでいるかわからないけど答えが見つかったら会おうぜ
俺たち待つてるからな、雅和」

あれから二週間、龍一たち仲間と会えない雅和はひとり悶々と過
ごしていた。

そんな時、柳木沢が突然に雅和のマンションに顔を見せた。

一室で父と子が顔を突き合わせ会話がないのは実に息が詰まるも
のだった。

柳木沢は雅和を上京のたびにお世話になる割烹すし屋に連れ出し
た。

割腹のいい客慣れした笑顔の女将に通されて二人は個室に入った。

「少し痩せたようだが食事はとっているのか」

「ああ、大丈夫　ちゃんと食べてるから」

「母さんが心配してるぞ

電話がプツツリ途絶えて繋がらないって

病気や事故にあつてたらとそればかりを気にしてな

それで様子を見てきてくれと尻を叩かれて来たんだよ

母さんの命令だから今日は我慢して付き合ってくれ、頼むよ雅和」

雅和は迷惑そうな顔をしながらも素直にコクンと頷いていた。

「考えてみると僕もお前の年の頃はいろんな事があつたな」

コップにビールを注ぐ柳木沢の目は穏やかで嬉しそうだった。

「まあ、どんなことが起きても自分を救うのは自分でしかない
しかし時に、その答えを導き手助けしてくれる苦労人が必要な時
もある」

「苦労人、なにそれ」

「苦勞人のことか？」

手助けをしてくれる人を総称して私が名づけたんだ
悲しみ・苦しみ・痛みを体感し尊い涙をたくさん流した人
そんな人こそが真から人を支え救ってくれるんだよ」

「今時、そんなしような人間が居るとは思えないよ
もし居たとしても探し出すには骨が折れそうだな」

「いや、いる」

神は救いを見出す出会いを必ず与えて下さる
雅和、少し長くなるが話を聞いてくれるか」

チンプンカンプンな話に雅和の顔は渋柿を喰らったようになっていた。

「僕は家を出てから病院に通うようになった」

安定剤を飲みながら仕事は何とかこなしていた
人間というものは弱いものだいや、本来人間は強いものらしいが
あの頃の僕は弱さを隠すために意味もない虚勢を張り続けてきた
弱さゆえ、むやみに吠えては人を威圧して生きてきたんだ

病気になったのはそのつけが廻ったせいだろう
自分の軌跡に自身安危になって眠れなくなっていた

そんな時・・・一人の女性と出会った

その女性は僕よりもずつと年若い娘でそう、お前と同じ年代だった
僕はすぐに好感を持ったが彼女は好いてはくれなかった

いや完全に嫌われていたな まあ、無理もなからう

自分勝手に家庭を顧みない出鱈目な生活をしていたのだからな
しかし彼女はそんな僕を一人にはしておけないと気遣ってくれた
彼女が繰り返し口にして言った言葉がある

／家族こそが一番の癒しで家庭こそが安らぎの場／

熱く語る彼女を理想的な家庭に育てられた幸せな娘と疑いもしな
かった

後に彼女の生い立ちを知り僕は愕然としたよ

彼女は両親を早くに亡くし孤児院で育てられ今の家族に引き取ら
れた

どんなにか辛い思いをしてきたことだろう

誰より沢山の涙を流し小さい体で堪えてきたんだらうな

だから彼女は大人の心情をすばやく読んでとり気遣うすべを持っ
ていたんだと納得したよ

「その人がおやじの苦労人なのか」

「ああそうだ、彼女のおかげで自分と人生を取り戻せたんだ」

「親父の言う苦労人って、皆井佐知って名前じゃないのか」

「どうしてお前が彼女の名前を」

「彼女は・・・彼女は俺の恋人だった、もう別れたけど」

「別れた、なぜ・・・彼女ほどの女性が又現れるとは思えないが」

「ああ、俺もそう思うよ」

「なら、なぜ」

お前のせいだ、お前の・・・
喉から出そうになった言葉を飲み込んでいた。

「俺の話はもういいだろ」

今日は親父の話を聞いてるんだからさ」

「雅とお前も所詮、僕と同じだな」

「一緒にするなよ」

「お前は彼女をしっかり見たことがあるのか」

理解しようと努力したのか、その結果の別れならもう何も言つまい」

「俺は親父とは違う、違うんだ」

「ああ、その通りだ

お前は母さんの一番の理解者で僕に代わり母さんを守ってくれた

雅和、お前はそういう男だ 僕とは違う

怒らせて悪かったな、許してくれ」

雅和は頭を下げた父の手にお猪口を握らせ酒をついだ。

柳木沢は注がれた酒をゴクリと喉を鳴らし飲み乾した。

男二人が一人の女に思いを巡らす夜となった。

二人は大切な男（ひと）

雅和との出会いから一年が経とうとしていた。

夏祭りが近づくとせつかく膨らみかけた心が又萎みそうになった。父の話は祭り一色になり茶の間への足が遠のいていた。

雅和と柳木沢の間で自分の存在が炙り出された事など知らず部屋に籠り本を読む日々だった。

就職の内定をもらった雅和は父母のいる静岡に向っていた。父・柳木沢の助手ならぬ社会勉強のつもりだった。

二人の間には歩み寄りも生まれ傍目には仲のよい父子に見えた。

その日は朝からやけに蒸す異常な暑さだった。

雅和は事務所兼自宅のソファーにもたれ渴たるそうにしていた。

「ドスン」

一階の事務所付近からの鈍い音が二階に昇ってきた。何事かと気だるい身体を起こし階下に降りていった。

倒れている父を見つけた雅和は思わず狂乱の声を上げていた。

「親父、どうしたんだ

大丈夫か返事しろよ、おやじ返事してくれよ

誰か早くきてくれ、誰も居ないのか
母さん、母さん早く救急車呼んでくれ」

口から血を流した柳木沢は蠟人形のように横たわっていた。
反応のない蒼白な父の傍らで手を握り救急車を待った。

雅和は病院の椅子に座り緊急手術になった父を待ち続けていた。

看護婦に促され手術室の前の椅子に移動するとまもなくして手術
室のランプが消えた。

出てきた柳木沢の体には幾重に管が繋がれて予断ならぬ病状を察
することが出来た。

執刀医が厳しい顔で現れた。

「後ほど私の処に来てください」

母子は前を見据えどんな結果も受け入れようとしていた。

うす鼠色に変色したシューズを履いた看護婦がやってきた。

「患者さんが戻るにはまだ時間がかかりますがこのままお待ちにな
りますか」

「はい、そうさせてください」

「戻られても今日はお話は出来ませんよ」

「それでも、一目顔をみて帰りたいのです」

「わかりました ではもう暫らくお待ちになって下さい」

時計の長針が2度回転しても柳木沢は戻らなかった。
雅和は医師との会話を思い出していた。

「出血は止めましたのでご安心ください
ただ付近に幾つかの腫瘍がみられました
これは、だいぶ以前からのものと思われ
ます
ご主人はどこかの病院に通われていた
のではないですか」

「はい、安定剤をもらって飲んでいたと聞いた事があります」

「ではその時に病気の事も分かっておられたのかもしれないね」

「それは、どういふことでしょうか」

「ご主人は延命は不要だと仰いました」

「おやじは命の宣告をされていた？」

「きっとそうでしょう」

出なければ病院にも行かずあんな体でいられる筈がありません」

ベッドの横の丸椅子に座り雅和は思いに耽っていた。

病院通いをしていた親父はすでに余命を告げられていた
だから親父は母からの復縁をあんなにすんなりと承諾したのか

一人でこんなに大きな荷物を背負い、誰にも言わず苦しんでいた
のか

家庭に戻り家族と過ごしていても尚ひとり孤独に耐えていたのか
手を合わせ天を仰ぎ見る母の頬に涙の糸がくつきり浮かんでいた。
母の側に歩み寄りその手を包むように強く握り締めた。

母子は戻って来た柳木沢に顔を寄せ生命の呼吸を確認していた。
胸元の上下する脹らみに安堵し病院を後にした。

自宅に戻った母は血で染まっていた事務所の床を拭いていた。
気がつけば1時間以上拭き続けていた。

小刻みに揺れている後ろ姿から泣いている様子が伝わってきた。
放心状態の母の腕を掴み上げしっかり抱きかかえた。

「マーちゃん」

「母さん、もうきれいになってるよ」

「ここにあつた血をふき取ったら

生きていた証・・・命までを消してしまったような気がして

あの人の命に限りがあるなんて・・・

私を置いてまた行ってしまふなんてつらすぎるわ」

「もういい 何も言わないでいいよ母さん

親父は生きている ずっとこれからも大丈夫だ」

「うつうつ」

母は堪えていた涙を止めようとせずつ父の名を呼び泣き続けた。

母さんは誰よりも親父を愛していたんだな・・・

母を抱きしめる雅和も溢れ出る涙を隠そうとしなかった。

雅和は勝手のわからぬ事務所に毎日顔を出していた。

古くからのスタッフに細やかな気遣いを見せ労っていた。

母に看護の疲れが見て取れると自分から付き添いを申し出た。

「母さん、行ってくるよ お昼また電話するからね」

「ありがとうマーちゃん、お父様をお願いしますね」

病室の父の体調は相変わらずでつらそうだった。

「親父、つらくないか」

「ああ、大丈夫・・・だ」

「ならいい 何かあったら言ってくれよ」

「なあ雅和・・・」

皆井くんの事だがやはり僕は言わずにいられないんだ

彼女との事をもう一度、考えてくれないか

もう一度、彼女と向き合いわかってやれないか

母さんとうまくいかなかったのは理解してあげられなかったからだ
でもやり直せる、僕と母さんのように愛は戻る

お前と彼女ならきつとやり直せる、愛を取り戻せる筈だ」

「俺と佐知は別れたんだ

もう終わったことなんだ

親父は今、人の心配してる時じゃないだろ

早く元気になって母さんを安心させてくれよ」

「ああそうだな

でも僕は、いや父さんの命はもう長くはない

母さんの事はお前がいるから大丈夫だ、頼んだぞ

雅和、お前が父さんの子でよかったよ

僕の息子に生まれてくれて・・・本当にありがとう」

「何、弱気なこと言ってんだ そんなことじゃ病気に勝てないんだぞ
母さんの代わりなんていないんだ 親父でなけりゃだめなんだ
母さんの気持ちは親父が一番分かってるだろう」

「嗚呼、よく分かっている

でも雅和、父さんは病気に負けた 勝てなかった」

柳木沢は堰を切ったように男泣きしその嗚咽はいつまでも止まな
かった。

初めて見せた父の人間らしい姿に驚愕し震えた。

大粒の涙を腕で拭くと雅和は歯噛みをして病室を飛び出していた。

「親子なのに何一つまじな言葉もかけてやれなかった・・・」

自分が情けなくて悔しかった。

屋上のコンクリートに膝を抱えしゃがみ頭をうな垂れていた。

佐知に会いたい雅和は素直にそう思った。

「さあ・ちいい・・・」

救いを求め佐知の名を叫び続けていた。

祭りの賑わいも消え町には静寂が返ってきた。

秋分を過ぎると寝苦しさからも開放され久々の心地よい眠りを体感していた。

佐知は職場の仲間に誘われ久しぶりのカラオケで盛り上がっていた。

余韻覚めやらぬまま帰宅すると綺麗に置まれた洗濯物の上に手紙が置いてあった。

名前だけ印字された白い封書は誰かの手で自宅のポストに投函されたのだろう。

おそろおそろのペーパーナイフで封をきった。

手紙を開くと柳木沢が差出人であることがすぐにわかった。

右上がりの文字、この特徴は間違いなく柳木沢の筆跡だった。

／皆井くん

これが感謝をこめて君に送る

僕からの最初で最後の手紙になるだろう

君が現れて僕は人生を取り戻せた
一度死んで生まれ変わったそんな心境だった

妻との再出発の日々は長く連れ添った夫婦に匹敵するほど愛に満ち
幸せなものだった

君のお陰でもう何も思い残すことなく人生の幕を降ろせそうだ

ただ君と雅和が恋仲だった事そして別れた事を聞かされた時は驚いたよ

しかしそれも人生・自分の結末さえ予測出来ないのが人生だから
お互いを必要とするならばきつと会える、僕と妻のように

君には誰よりも幸せになってほしい、いやならなくてはいけない
君の人生はまだまだ長く果てしなく続く
だが人生は否応無しに過ぎ去りていくものだから
だから自分の人生を大切に愛してあげなさい

これからも苦しみ・悲しみあらゆる困難が天から降り落ちてくる
だろう

しかしその後、倍になって必ず幸せが降り注ぐ事を忘れてはいけ
ないよ

僕は天から君を見守り続けるとしよう

君がこの手紙を手にするときすでに僕は天に召されているのだから
ね

僕は人生に負けたんじゃない、病に勝てなかったそれだけ・何れ
にせよ負けは負けだな

皆井くん、さようならは言わない・またいつかどこかで 柳木沢ノ

手紙を顔に押し当て涙を隠し声を押し殺し泣いた。

豪快に笑う柳木沢我儘で傲慢なそれでいて脆い柳木沢がもういない。

もう一度会いたいと願っていた柳木沢がこの世から姿を消した。

「もう二度と会えない

本当に会えなくなってしまうた」

食い縛っても食い縛っても声が流れ出た。

「うづうづう」

堪える涙が鼻の奥底に入り込んでズキーンと痛みだした。

魂までも泣き叫び、佐知を悲しみの泉に突き落としていた。

人は大切な物の大きさを知るとき慈しみの澄んだ涙が全身から溢れ出る事を知った。

柳木沢のそれは祖父母の時と似て同じだった。

たった一通の手紙だけを残し逝った突然の別れ。

「見守ってくれるというのならば生きて生き続けて応援して欲しかった

柳木沢さんのバカア・・・」

最後の最後まで好かない男のまま柳木沢はこの世に別れを告げ旅立っていった。

柳木沢が突然姿を消しこの世からも旅立ってから数ヶ月が過ぎた。押入れに体をつっ込んで秋冬物の衣装ケースを引っ張り出していった。

厚手のトレーナーが手放せなくなった頃また一通の手紙が投函された。

「さちい、また手紙が入ってたぞ」

いつもの父とは思えない滑舌のいい声が聞こえた。父は階下でピエロのようにおどけた仕草で封書をヒラヒラさせていた。

丁度通りかかった母が佐知を見上げ茶化してみせた。

「あらら、またまたラブレターかしら」

「母さん、ストーカーかも知れんぞ
佐知、中を見ておかしいと思ったら父さんに見せるんだぞ」

「お父さんは佐知の事になるとほんと、大袈裟なんだから」

母は父が握り締めた手紙を5段目の階段に置いた。

何か言い足りなそうな父は母に腕を引かれ茶の間に入っていった。

部屋はしまいかけの夏服が散乱し足の踏み場もなかった。

散らばった洋服を掻き分けベッドに腰を下ろした。

名前だけの白い封書を翳していた。

おそるおそる名前だけの白い封書、手紙を開けた。

／佐知へ

佐知、君は怒っているだろうな、きつと怒ってるよね

俺は親父の最後を伝えようと君に手紙を書いている

親父の手紙は届いているだろうか 事務所の金庫から出てきた手紙なんだ

親父が愛した母さん、俺、仕事関係者そして君へ親父からの最後の言葉

読んでもらえたかな

病床の親父は俺の知る親父とは別人だった

人前でも涙する弱い男になっていた

何もしてやれなかった不甲斐無さに俺は今も苦しんでいる

親父の事を理解していたのは君だって事が分かったよ

君の話しをするとき親父は唯一絶望から開放され穏やかな顔を見

せた

皆井君との思い出は僕のお守りだ
そういつて力を振り絞って笑顔を作ってみせた

君の名を口にするその時だけは病気と戦い生きようと明るく頑張
っていた

／父さんはどんな苦しみの中にも負けないよ 命尽きるまで
生き続ける

神に授かった命は一秒たりとも粗末には出来ないからな
この地球に生を受け生かされている命だ 今日もひたすら生きよ
うとしている命だ

地球上のすべての命はどれもみんな愛おしく大切なかけが
えのない尊い命なんだ／

これが父が残した最後の言葉だった それっきり会話はできなく
なった

俺は君が言うように親父に嫉妬していた 親父じゃなく一人の男
に嫉妬していたんだ

今は親父を憎む理由なんて何一つなくなった

君は親父を支え勇気づけてくれた ありがとう、本当にありがとう
救いを求めていた親父に悲しいけれど家族は気づいてやれなかった
俺と母さんに代わって君が親父を救ってくれた

本当にありがとうそして本当にすまなかった

君が許してくれるのなら連絡して欲しいずっと待ってる

井川雅和／

雅和からの待ちわびた声・便りだった。

「ふーっ」と息を吐きつつ伏せに横たわった。

なぜだか柳木沢の事ばかりが鮮明に思い出された。

雅和の存在した記憶が薄れていくことが悲しかった。

嫉妬した一人の男は父に姿を変え雅和のもとから去っていった。
懐かしい柳木沢は一人の男になって佐知のもとに舞戻ってきた。

二人は大切な男（ひと）？

手紙を受け取って二週間たっても動けなかった。

会いたいと切に思う気持ちが自然に湧き出るのを待っていた。

「このときを待っていたのにどうしたんだろう

私ちつとも喜んでいない」

自分の気持ちを確かめるべく雅和に会おうと決めた。

恋焦がれ会いたくて会っていたあの頃とは嘘のように冷静だった。

待ち合わせた場所は柳木沢の最後の常宿だったホテルの喫茶ラウンジだった。

雅和との思い出の場所なのに柳沢の事ばかりが浮かんできた。

二人はお見合いのように黙り込んだまま座っていた。

「迷惑だったかな 俺許してもらえないよね、ごめん」

「その話は止めましょう お父様ご愁傷様でした」

「佐知には良くしてもらって父に代わり礼を言うよ 本当にありがとう」

「私の方こそ柳木沢さんに元気をもらって頑張れたのよ
柳木沢さんとお会いすると雅和といるような気持ちになれた
いま思うと雅和と柳木沢さんはそっくりだわ」

「俺と親父が・・俺そんなにひどい男かな」

「そうじゃないわ、歩き方や仕草がやっぱり親子だなんて
だから柳木沢さんと会うのが嬉しかったのね」

「親父と俺は佐知という一人の女に出会い惹かれた・・思いは違っ
たけれど」

「運命のいたずらね
私が柳木沢さんと出会っていなければ喧嘩別れをしないですんだ
のかしら」

「君が親父と出会ってくれたことを今は心から感謝している」

「ありがとう、そう言ってもらえると嬉しいわ」

「俺は君のことわかってやれなかった わかるうとせず君から逃げた」

感情が先走りしてつらい事から目を背けてしまふ最低男だ
俺は自分勝手に卑怯な男なんだ」

「人は誰だつて嫌なことから逃げたくなるわ
一度逃げると同じ事から逃げ続けるその繰り返しになってしまう
祖父からいつも言われたわ
しっかりと向き合つて解決しないとその原因の根っこからは開放さ
れないって」

「親父の限りある命を知り俺は親父という男を素直に受け入れられた
今まで親父にした悪態を詫びた、言葉にならず心で詫び続けた
小さくなつていく親父をみるのがしんどくなると屋上に出て君の
名を叫んだよ
会いたい気持ちが直球になって俺の胸に飛び込んできた
俺は気づいた 君を思うたび全身に力が漲ることを
親父の気持ちがあわかったこれなんだって」

「同じって？」

「あ、いやなんでもない 佐知、また会ってくれるよね」

「.....」

「今返事が出来ないなら君からの電話を待つよ」

いま伝えなければ・・・佐知は胸に痞えている感情をぶつけようとしていた。

「私はあなたの父・柳木沢さんと会っていた
あなたは邪推して私を責めた
話を聞こうとせず信じようともせず怒りだけをぶつけ去った

そして昔の生活に戻り私の許せない男の一人になった
私にはそれがどうしてもひっかかって

だから素直に雅和からの連絡を喜べなかった
正直自分の気持ちの整理がつかないの
ずっとこの日を待っていたのにおかしいわね
会いたいと願っていたのが嘘みたいで自分でもどうしていいのかわからないの」

二人の前に高い壁が立ち塞がっていた。
これ以上話は無理だと佐知はひとり席を立った。

「ごめんなさい、今日はこれで失礼します」

外は墨絵のように夕暮れていた。
灰色の濃淡に染まった景色を一人眺め佇んでいた。

雅和は来る日も来る日も思いを募らせ身を焦がしていた。

「この手にもう一度、佐知を抱きしめたい」

俺は弱い男だ・・親父と一緒になんだ

「お前も僕と同じだ」父の言葉がグサリ胸に突き刺さっていた。

雅和は仲間と龍一の部屋に集まっていた。

「龍一、俺、自分が嫌いになりそうだよ」

「自分を好きだなんて言ってる奴あんまり聞いたことないけどな」

「俺は愛する人を傷つけてしまったんだ

自分の事しか考えられない俺は相手を傷つけた

傷つけていたことに気づかず、愛する人を苦しめていた」

気落ちする雅和に真砂子が口を挟んだ。

「雅和がそれに気づいたって事はすごい成長だよ

その気持ちを伝えなくちゃだめ きつと伝わるから」

「わかってもらえるかな」

「うん、大丈夫

人は自分の非が解れば心から謝罪が出来るって言うじゃない
だから今の雅和にはそれが出来る 絶対出来るよ」

「真砂子ありがとう」

たまには嬉しいこと言ってくれるんだな」

「真砂子のいうことはなんでも大筋間違っていないよ
俺が選りすぐって真砂子を選んだ理由がわかるだろう」

龍一は自慢げに言い放った。

真砂子は龍一の腕の中、慢心の笑みを作っていた。

「お前らはいつも仲がいいよな 俺、羨ましいよ」

「俺と真砂子は隠し事をしないで信じあってる
たまにトンでもない大喧嘩もするけど他人同士がわりあうにはそ
れも必要なんだ」

「喧嘩もしないで長く付き合ってる恋人いると思う」

いたならそれは偽りの恋人同士ね

真剣に思っていたらいい顔ばかりでいられないよ

相手を思うからこそ言いたくない事も言っし

それでお互い傷つくことだってある 当然喧嘩にもなる

でもお互いが成長できない交際なんて意味がないでしょ」

「なあ雅和、どうでもいいなら人は口をつぐむよ

そのほうがめんどくさくないし楽だからな

でもそんな付き合いならしない方がいい、そう思わないか

耳の痛いことを言い合えるから俺達は仲間でいられるんだ

お前は誰かがいつも守ってくれると思っている

だから甘えてすぐ逃げようとする

雅和逃げないで真正面からぶつかってこいよ

「佐知きつと待ってるよ

本気でぶつかってくる雅和をきつと待ってる」

「雅和、碎け散って来い」

仲間に背中を押された雅和はメールを打った。

佐知の携帯には煩いほどのメールが再三入っていた。

／佐知、君に会いたい どんなに遅くなっても構わない

俺は君を待ち続ける ずっと待っているよ 雅和／

読み返しては溜息ばかりをついていた。

魔物が住むあの部屋に足を踏み入れるのは正直気乗りしなかった。

「どうしてあの部屋が待ち合わせの場所なの」

佐知は鉛に繋がれた足をひきずる思いでホテルに辿り着いていた。

あれから30分もロビーの椅子に座り込んでだままだった。

1102号室に向かう足は止まっていた。

「このまま帰ろうかな」気持ちが揺れだした佐知の前に雅和が立っていた。

「やっぱり、ここに居たんだね」

逃げ場を失い観念したように歩き出した。

何気に目にした雅和の背中はいつも以上に大きく見えた。

背中を押され部屋に入ると飛び込んできたのは見覚えのあるツリ
ィ。

懐かしくも心痛むツリーがそこにあった。

一年前の雅和と過ごしたクリスマスが甦った。

「このツリーの前で俺は佐知を守り続けると誓った

今もその気持ちに偽りはない変わってはいない」

「……………」

「佐知、君は俺を裏切ってはいなかった
俺の勝手な思い込みで君を責め、そのうえ俺は君を裏切った
後悔している、本当にすまないと思っっている許してくれ」

「……………」

「親父がこの部屋に泊まったのも偶然なんかじゃなかった
この部屋は親父にとって、俺と同じ大切な思い出の場所だったんだ」

「大切な思い出の場所？」

「この部屋番号は俺と母さん二人の誕生日でもあるんだ
1102号室・昔この部屋で親父は俺と母さんを祝い宿泊して
いた

親父と母さんは俺が幼少の時に別居したから俺、記憶にないんだ
でも此処は親父が母さんと俺と家族3人で泊まった思い出の部屋
なんだ」

「そうだったの　それで曰く有りのホテルって仰っていたのね」

「この部屋で親父が何を思いひとり過ごしていたのか
そればかり気になってそれで此処に来たんだ」

「柳木沢さんは雅和を、家族を愛していたわ
その愛は雅和が言ったように家族とは少し違っていたのかもし
れない」

人に甘えることを良しとしない柳木沢さんは寂しい人だった
いつ何時も鎧をまとい外そうとせず自分の本心を誰にも見せまい
とした

自分の心さえ読めない柳木沢さんは人を愛するすべを知らなかった
それでも柳木沢さんは自分の愛し方で家族を愛し旅立っていったわ
それを雅和にもわかってほしいの」

「俺にはわからない親父を君は知っているんだな」

「・・・・・・・・」

そのとき佐知の何かが呼び覚まされた。

「人の気持ちはわかろうとしなければ何も見えないわ

その人を思う気持ちが強ければ表情ひとつ仕草ひとつで異変に気づく

その言葉一つ一つが本物が偽者かさえ分ってしまうものよ
でも雅和に俺のこと分かるって聞かれたら言葉に詰まる自分がいて

「昔の俺のことはわかってた？」

「えエ、勿論、何でもわかったわ」

その瞬間、体は力ずくで抱かれ唇を塞がれていた

「離して、その手を離して」

「いや、だめだ

この手を放したら君は二度と俺の前に姿を見せなくなる
このまま俺から去っていくのがわかるんだ」

「そんなことないわ だから離して約束するからお願い」

手が離れ佐知の体は床に崩れおちていた。

「悪かった、佐知ごめん」

背を向けた佐知の後姿を雅和は荒い息づかいで抱きしめてきた。その吐息は優しくそして時に強く刺すように首筋を舐めていった。

愛しさが沸々と湧き上がる佐知の体はみるみる熱くなっていた。

「雅和、十分伝わったわ

もう一度この場所から始めましょう」

「佐知、いいのか、この俺で本当に・・・

許してくれるんだね　ありがとう佐知」

今またクリスマスの再来が訪れようとしていた。

抱かれながら未だ柳木沢の姿を追い求めている佐知がいた。

そんな気持ちを追い払うように一層体を振り雅和を求め続けた。

「佐知、愛している　もう離さないよ」

「離さないで、しっかり抱きしめて離さないで」

狂おしい雅和に応えてはいたが心にかかった靄は晴れなかった。

偽りのない雅和の気持ちは痛いほど伝わっていた。

なのに私は・・・

心に翻弄され戸惑いながらも欲情の扉を開け夜の闇に身を焦がしていた。

佐知は自らの身を呪縛の渦に投じて苦しんでいた。

雅和を求め愛し合っているさなかも柳木沢が姿を見せた。

次第に色濃く姿を現す柳木沢を追い払ってしまいたかった。

二人の男に佐知の心は乱れ振り子のように揺れ動いていた。

別れの足音

佐知は雅和を異常なほど求め続け困惑させていた。

「何かあったのか 佐知、最近変だぞ」

「変でもいい・・・雅和とこのまま地獄に落ちてもいい
雅和が欲しいの、いつも・いつもほしいの」

重なりあう体粗い息遣いと雅和の動きに合わせた呻き声が続いても続いていた。

「もう限界だよ」

「いや、嫌よ もっときつく抱いて」

「佐知、俺をしつかりみるんだ」

俺はお前だけだ お前がいるから頑張れるんだ

体だけじゃなく心が通っていけば強い絆でいられる

佐知とはずっとそんな仲でいたいんだ」

「雅和は体は入らないって言うの ほかで満たされるから心だけでいいの」

「そうじゃない心と体は一つなんだ それを教えてくれたのは君じゃないか

だから離れていても触れられなくても俺は君だけを見ていられるんだ」

「そうよね、私の方がどうかしているのね

昔のあなたがしたように体の温もりだけを求めているんだもの
自分が自分でなくなつて壊れていくようで怖いわ

あのまま別れていたらこんなに苦しむ事なかったのかしら」

「なぜ・・今ここでそんな事を云うんだ」

「わからない、わからないわ

だけど雅和を思う時私の体は獣と化し疼き始めるの

どうしようもなく欲しがる体を自分で充たした夜も会つたわ

こんな自分が本当に・・ほんとうに嫌で嫌でたまらないの」

「佐知、君の心に嘘はないのか

俺を必要としているのではなくそう思いたいだけなんじゃないのか
なんだか悲しくなるよ

俺は腕の中で解けていく佐知が本当に愛おしいんだ

同時に傍で見つめているだけでいいと欲望を抑える自分がある

愛しているから大切にしたい俺はそんな感情を初めて知つたんだ」

「私も雅和がそばに居てくれるだけでそれだけで充たされたわ
でも会えない時間にやまさがなかつたかと聞かれたらすぐに答
えられない自分がある」

「会えなければ代償となる男に抱かれるのか
昔の俺が女を抱くように君もそんな男に抱かれるって事なのか」

「.....」

「答えるよ、なぜ答えない はっきり否定しろよ」

「誰でもいいなんて思っていないわ、心がなければ」

「心を許した男が出来たってことか」

「そうじゃない、そうなるのが怖いのもいつも包まれていな
いと不安なの

雅和が傍にいないと私はひとり蹲って何も見えない世界でもがき
苦しんでいる

あなたを思うと狂おしくなるなんてやっぱり私は変、おかしいん
だわ」

「俺といると佐知は佐知でいらなくなるのか

俺は出会った時の佐知が好きなんだ・好きだったんだ
俺の愛した佐知はどこに行ったんだ、しっかりしてくれよ」

「今の私は愛せない？」

愛してくれないって言うのならそれでもいいわ

こんな思いがずっと続くのならもう会わないほうがいい」

「佐知はそんな簡単に俺との関係を片付けられるのか

やっとな、やり直そうとしたばかりじゃないか

信じられないよ君が・俺は・君を愛した俺はピエロだったのか
君のため自分を変えようとしていた俺は何だったんだ

黙っていないで何か言ってくれよ」

佐知はそつとベッドから離れ背を向けた。

しなやかな指でワンピースのファスナーを静かに引き上げた。

佐知の後ろ手だけを見つめる雅和の口から溜め息が漏れた。

悲しみにも似たその溜め息はファスナーの音と重なり消されていた。

「ダンマリのままこの部屋を出て行くのか

本当にそれでいいのか佐知 俺と同じ、逃げるつもりなのか」

「ごめんなさい」

「ごめん、それだけか

俺がどんな思いで会えない日々を過ごしたか 知ってて君は・それでも君は逃げるのか

やっと君をこの手にしたというのに君を擁いた喜びを棄てるという言葉のか

両手の握り拳をベッドに叩き付け怒りを顕にしていた。

「ごめんなさい 今日私どうかしてる、本当にごめんなさい」

肩で息する雅和から目を逸らしドアに手をかけた。

唇を強く噛みしめ飛び出した魔物が住むホテルを仰ぎみ呟いた。

「あの部屋には魔物がいる 私を嘲笑う魔物が住んでいた」

佐知の中に住み続ける柳木沢をきっぱり追い払おうとしていた。そんなとき雅和から手紙が届いた。

/ 佐知へ

今夜もお前を思いながらこの身を充たしている

こんな遣る瀬無い気持ち佐知には分らないだろうな

俺の愛は今の佐知に届きそうもないから

人ごみに紛れて女を抱いて佐知を忘れてしまおうと何度も思ったよでもやっぱり出来ない、裏切りたくないんだ二度と佐知を失いたくないんだ

佐知と出会って強くなったって言われるよ

でも俺はお前を求めどうしようもない寂しさに襲われている

佐知が言っていた気持ちと一緒に

決しておかしいことじゃない、愛しているってことなんだ

俺達が出会い語り合ったあの日に戻ろう、二人であの日に帰ろう

雅和より／

嘘のない気持ちが嬉しかった。

「わかってる雅和に嘘はないってだから雅和を愛し心を許したでも、もう少し時間がほしい やつと自分を取り戻せそうなの雅和が愛してくれた自分に向きあえたばかりだから私を信じてもう少し待っていて」

雅和を真剣に思う偽りのない声無き届かぬ思いを送っていた。

それから愛が詰まった手紙が山ほど届いていた。

それでも心は雅和だけのものと胸を張って言えるまで返事は書けなかった。

この行動が自分の足を引っ張る事になるうとは思いもしなかった。

真剣な愛が伝わっていたがため慎重にならざる得ない心情など雅和は知る由もなかった

／佐知様

この手紙が最後の手紙です
別れを告げる決別の手紙です

俺は君からの返事を待ち続け手紙を書き続けた
きつと伝わると信じ疑いもしなかった

返事が来る事に賭けていたが残念ながら返事はNOだったようだね

俺は就職を断り親父の仕事に携わっていこうと決めた

近日中に静岡に発つよ　そこで新しい人生を始めるつもりだ

楽しかったよ、ありがとう

最後くらい笑って別れられたらいいけど男と女の別れはそんなに
甘くないからな

君に感謝こそすれ恨んだり憎んだりしていないから心配しなくて
いい

佐知のおかげで成長できたと感謝してる

井川雅和／

「うそ、嘘よ　別れ、決別ってなんのこと

会いたい気持ちを追いかけて自分と向き合っていた

雅和が愛してくれたあの頃の私を取り戻そうと頑張っていた
笑って会える日を抱きしめてくれる日を楽しみにしていた

ずっとこれからも同じ道を二人で歩けると思っていたのに「

止まらぬ思いが渦巻いていた。

悪戯好きの神様が舞い降りてきてほぐし始めた纏れた糸をまたきつく絡めて行った。

別れの足音？

真砂子の携帯は話中で繋がらなかった。それでも電話を掛けつつ
けていた。

学生時代の年代物の目覚まし時計はすでに一時間の経過を告げて
いた。

佐知は働き蟻のように部屋を徘徊していた。

麻痺した指先を撫でながらもう諦めようと意気消沈していた矢先
だった。

「真砂子、佐知だけと雅和が静岡に発つ日聞してる」

「私は聞いてないけど龍一なら知っているかもね」

「ねえ、わかったら教えて」

「どうして、直接雅和に聞けば早いじゃない」

「だめ、雅和から別れの手紙が来たの」

「そんなはずないよ 嘘でしょ」

私達の前で佐知の信用を取り戻したいって真剣だったんだよ
気持ちぶつけて来いってみんなにはつばかけられて喜んでいたの
に」

「私がいけなかったの

雅和から沢山の手紙を貰っていたのに返事一つ返さなかった
雅和の気持ちは十分伝わっていたし涙が出るくらい嬉しかった

だからこそあやふやな気持ちじゃだめだって思ったの

雅和が愛した昔の自分を取り戻そうとしていたわ
会いたい思いを殺して死ぬほどつらかった

真砂子本当よ、雅和のためにわたし頑張ってたのよ」

「気持ちは分るけど雅和には刻だったんじゃないのかな
気持ちが伝わっていたならそれを伝えなかったのは佐知の誤算だね
思いは伝えなきゃ、相手にはわからないんだよ
待ち続けた雅和がかわいそうだよ

どうして自分の気持ちに逆らうような事をしたの
雅和を思っていたなら心のまま正直に返答すべきだったんじゃない
素直なありのままの気持ちを言えばよかったんじゃない
もう少し自分と向き合って雅和に喜んでもらえる答えを出したい
から待ってとか

別れてから自分の気持ちはこうだった、それが雅和のためだった
なんて通用しない

酷だけど苦しんで決着をつけた雅和にはもう何も伝わらないよ

罵って泣きわめいて醜い姿を見せても話すべきだったね

それで二人の関係が終わったとしても今よりはずっとましだった筈

気持ちを伝えないまま別れを宣告された佐知は負けだんだ

キャッチボールがどちらか欠けたらそこで終わるのと同じ

佐知は受けたボールを置いて背を向けたんだからさ

雅和を・・・自分を責めちゃだめだからね」

真砂子からの手厳しい忠告だった。

私は甘えていた 雅和なら私の気持ちをわかってくれる

こんなに思ってくれる雅和ならきつと待っていてくれると甘えていた

真砂子の言うようにすべてを無くしてから喚き吠えるのはただの負け犬

雅和の気持ちが嬉しかったのならすぐに返事をすべきだった

祖父母が口をすっぱくして教えてくれた人としての義を忘れていた。

雅和の気持ちを弄んだのかと責められたとしても反論は出来ない

ここでどんな弁解をしても雅和を苦しめるだけ

雅和の新たな出航にもう波かぜは立てたくない

意欲に満ちた雅和のままスタートをきって欲しい

このまま別れを呑もう・・・
つらく悲しかろうとそれが雅和への饑、雅和に贈る最後の愛

最後の愛それがWA・KA・RE・・・それはあまりにも悲しすぎた。

しかしそんな現実を気丈にも受け入れようとする佐知だった。

これまでの感謝をつたえるために手紙を書いていた。

潰れそうな胸の痛みで文字は震え歪んでいた。

歪な文字なんか体裁なんかどうでもよかった。

伝わらなかった正直な気持ちと愛をペン先に込め懸命に綴る姿が痛々しかった。

仕事が終わると一目散で駆け出しバスに乗っていた。

落ち着かない様子で過ぎ行くバス停の数を指を折って確かめていた。

6つ目のバス停で降りた。

懐かしい坂が見えてくると手紙を握りしめ走り出していた。

「えっ・・・どうして」

大きな門に売却の看板と大きな昇りが立てかけられていた。
その場に座り込んだ佐知は腰を上げようとしなかった。

電話の向こうの真砂子に何度も頭を下げ雅和の出発の日を聞いていた。
かけ続ける電話は傷のついたレコード盤に針を置くようなものだった。

「聞いてない・知らない」

悲しいかなそればかりの繰り返し。

真砂子は知っているはず　お願い力を貸して昔のように助けて
もはや胸に手を組み祈るしかすべはなかった。

「日曜の最終電車だから　佐知、聞いている」

龍一に固く止められていた雅和の出発時刻を真砂子は知らせてくれた。

雅和が行ってしまふ　日曜が最後もう二度と会えない

最終電車の数本前から駅で雅和の姿を探していた。

雅和がやってきたのは最終にはまだ早い時間だった。

佐知を見つけるとばつが悪そうに方向を変えようと足先を変えた。

「雅和、待って」

走り寄り両手で手紙を差し出した佐知の声は震えていた。

「これ読んで、これが最後の我がままだからお願い」

「・・・・・・・・」

雅和は口を開かなかつたが佐知の側を離れようとはしなかった。それは佐知への愛の名残りにも思えた。

二人は口を閉ざしたまま肩を並べ数本の電車を只管やり過ごして
いた。

せつない最終電車のアナウンスが流れ聞こえていた。
聞きたくない・思わず耳を覆い首を左右に振った。

「ゴオオオー」

唸るような音を立てて最終電車が入ってきた。

空洞になった胸の奥にジンジン響き溢れでそんな涙をぐっと押し
堪えた。

雅和の旅立ちに涙は見せられない 見せちゃいけない・・・
涙を堪えるのが精いっぱい笑顔にはなれそうもなかった。

目の前の雅和に抱きつき泣いて許しを請うて愛を取り戻したかった。

だめだめ、もう遅い 遅すぎたのよ もう終わったこと・・・

二人が育てた愛は脆く崩れ落ち消えようとしていた。
波打ち際に作られた砂の城のような愛の結末が悲しかった。

泣いちゃだめ我慢して・・・いま此処で泣いてはだめ
思い出が甦り号泣しそうな自分を叱咤していた。

「雅和ありがとう 今まで本当にありがとう
忘れない、雅和のことずっと忘れないから」

「・・・・・・・・」

雅和はうな垂れ無言で人ごみに消えていった。

未練を引き摺る佐知はその場を立ち去れずにいた。
走り去る電車の音を聞きながら顔をクシャクシャにしていた。

最終の出た構内は人も疎らになっていた。

そんな時に鳴った着信はオーケストラのように鳴り渡った。

「佐知ごめん、龍一にばれちゃって大変だったんだ
それで雅和、最終には乗らないで前ので行ってくつて
だからもう雅和は・・佐知ごめんね」

「うっん、今さよならできた

真砂子のおかげよ、ありがとう

雅和は最後まで何も言ってくれなかったけど
でも会えてよかった 本当に・・本当に・・」

「佐知、泣いてるの、さち、さち」

涙をすすりあげ言葉にならず電話を切った。

別れの足音？

春・別れと旅立ちの交差する春まだ浅い日。

雅和は佐知に別れを告げ新しい出発をきつた。

別れを告げられた佐知ははまだ足踏みのまま出発できずにいた。
桜が咲き花びらが散っても歩みを止めたままだった。
仕事と家庭の往復でさえ億劫になっていた。

「誰にも会いたくない」

雅和の思い出に癒されていたと部屋に閉じ籠っていた。
来る日も来る日も雅和に涙する繰り返しだった。

力なく柳木沢の手紙を読み返していた。

／幸せにならなくてはならない

これからも悲しみ苦しみが降り落ちてくるだろう

その後には幸せが必ず降り注ぐ事を忘れてはいけない

僕は天から見守り続けよう／

七色の宝箱に仕舞い込まれていた手紙を抱きしめていた。

「柳木沢さん力を貸して　どうか私を導き助けて」

好かない柳木沢に縋るように祈りつづけていた。

そんな時ご無沙汰の真砂子から電話がかかってきた。

雅和が新たな事務所を設立したことを知った。

「雅和が司法書士の資格取ったんだって、すごいよね
お父さんの仕事を骨を埋める覚悟で頑張ってるよ」

目が眩む一筋の光明が全身を覆い体の中まで入りこんできた。
暗黒に閉ざされていた心は逃げ場を探そうと必死でもがき始めた。

雅和は自分の道を迷いもなく突き進んでいた。

「雅和は以前にも益して輝きを放ち希望に満ちた人生を歩んでいる」
体中がポカポカして酒宴の最中如く開放された心地良さに酔っていた。
いた。

頬を伝う涙はこれまでとは違う温かな涙に変わっていた。
雅和の人生を心から祝福し涙していた。

重い足かせの鎖が切れる音がして数日たったある日
佐知はひとり数ヶ月ぶりのショッピングを楽しんでいた。

お気に入りのショップに入り顔なじみのスタッフを探していた。
店内はガラリとイメージが変わりジュニア世代の客も増えていた。
ロング丈Tシャツ、オフホワイトのパンツを抱えていた。

スタッフのゆうちゃんが佐知を見つけ駆け寄ってきた。

「随分、音沙汰無しで心配してたのよ」

「ごめんなさいね、いろいろ忙しくて」

「佐知さんと思って取り置きしてた服があるの　着てみない？」

「ゆうちゃんが選んでくれる服は評判いいから着てみようかな
でも今日は試着だけでもいい？」

「ぜんぜん平気よ、着てみて絶対気に入るから」

お薦めのワンピース1着も手にして支払いを済ませた。

日も暮れ始めた喧騒の町に疲れた顔を見せ帰宅する佐知の姿があった。
父に頼まれた湿布薬を買ったために立ち寄ったドラッグストア。

佐知はレッドの口紅を手の平に乗せ見つめていた。

カチツ・カチツ・刻々と時の音だけが流れていった。

さっきまでの気だるい脱力感がみるみる体から抜け行くのがわかった。

赤い色の持つ力に魅せられた佐知はその場を去りがたくなっていた。

「ズツ・ズ・ズツ」・「ヨイショ」

自宅に戻ると埃をかぶった全身大の鏡を引つ張り出していた。

ゆうちゃんお勧めのワンピースに着替え鏡の前に立った。

青白い顔にお気に入りのオレンジ色のルージュをひいてみた。

これだけで気分は段違いに変化し輝いていた頃の面影が垣間見られた。

佐知の眠っていた精魂が芽吹いた瞬間だった。

休日の澄み切った午後だった。

銀杏並木は秋色に染まった葉っぱの絨毯で敷き詰められていた。色づいた黄色やオレンジ色の葉っぱを掻き分け歩いていた

ベンチに座り日差しを遮る頭上の大木を見あげたため息をついた。未だ未練を引きずっている自分の心に向き合っていた。

ノ今年もまたクリスマスがやってくる

忘れられない愛の日々が甦るクリスマスがもうすぐやってくる

つらい・哀しい・虚しい・切ない・やるせない

失った愛の悲しみの限りを・痛みを嫌というほど十分味わった

この苦しみから解放されて早く自分の道を歩かなければ

このままじゃいけないって・わかっている

毎日を精一杯生きなきゃ、生きてあげなきゃだめ
今日・今・この瞬間は二度と戻らない大切な時間
また明日がくることを当たり前前に思っちゃだめ

柳木沢さんは「命」を大切に逝ききつた

雅和も人生をしっかり見据え

夢の実現のため自分の足で道を刻んでる

希望があるから人は明日に向かって生きている

今日という日の繋がり、明日に夢を託し生きてゆける

私はいつまで無意味な日々を送るのだろう

自分の道をいつになつたら歩き出せるのだろうか

その夜、佐知は夢を見た。

会いたくても会えなかつた柳木沢の夢を見ていた。

「柳木沢さん会いに来てくれたのね」

／皆井くん、どうした

いつまでそうして自分を甘やかし続けるつもりなんだ

君らしくないじゃないか

殻に閉じこもり自らの人生を台無しにしている

他力だけで救われ逃れられる人生などありはしないんだよ

人生は自分が決める あれは嘘だったのか

君の人生はこれからも長く果てしなく続く
出会い・別れ、そのどれもがまさしく人生だ
すべてを受け入れそれを糧にして新たに進むんだ
一歩踏み出せば必ずまた次の一歩につながる

勇気を出して一歩を さあ、踏み出すんだ

僕が見ている・さあ歩くんだ・前に進むんだノ

幸せな気持ちのいい目覚めだった。

佐知は鏡に映る自分に驚いていた。

グレーの曇りがなくなりピーチオレンジの晴れやかな顔に見えた。

雅和と出会い胸躍らせたあの日と同じ・輝いていた頃と同じだった。
た。

鏡の向こうに思わず綺麗と呟いていた。

茶の間に顔を見せると家族も佐知の変貌に気づき声をかけた。

「おはよう

あら、今日の佐知はずいぶん顔つやがよくてきれいね」

「佐知の笑顔は天下一品だな

久しぶりに見る父さんの好きな、いい笑顔だ」

「もう、父さんも母さんも上手なんだから

もうすぐボーナスも入ることだしねえ」

「ははっ、ばれたか」

「やだなあ、もお」

久しぶりの笑い声が茶の間に訪れ心が軽やかに晴れていった。
其のとき懐かしい柳木沢の声が聞こえた。

「そんな家庭がある君が羨ましい それだけで君は十分幸せ者だ」

佐知は雅和と出会った頃のような輝きを再び放っていた。

気持ちのいい朝だった。カーテンの隙間から天の川のような朝日が差し込んでいた。

その柔らかな光の川が不思議な力となって体中に入ってきた。

始まりには終わりがある 終わりの後には始まりがある

雅和との絆がきれた私は終わりの後の始まりを生きなければなら
ない

自分の足で新たな始まりを歩んでいかなければならない

雅和はその始まりをとくに歩いている

知らない誰かを隣に歩き始めているだろう

今日この日、私は新たな一步を踏み出す

これまでの雅和との足跡は綺麗さっぱり消し去ろう

新たな出会い魂との出会いがあるのならはその時こそ揺るがない
真の絆を育てたい

「新たな出会いがあるのならは許されるものならば私はもう一度・
」

天空の柳木沢に叶わぬ最後の我儘と感謝の気持ちを贈っていた。

秋深まる澄みきった大空を見上げ大きく息を吸い込んでいた。
思い出が胸奥の過去のアルバムにきれいに押し込まれていった。

涙の泉はやつと溢れ出るのを止めてくれた。

乾いた頬にはいくつもの涙の筋がくつきりと浮かび上がっていた。

悲しみの涙はもう終わり、今日でおしまいにしよう

喜びの涙を沢山流せるよう自分の道をしっかりと歩んでいこう

柳木沢が遺した手紙の一節を思い返していた。

／幸せになつてほしい いや、ならなくてはいけないよ
自分の人生を大切に愛してあげなさい／

コンパクトを開けレッドのルージユを引いた。

11月2日・・・この日

始まりの一步・人生の新たな一步が始まるうとしていた

コンパクトを閉じた佐知の顔は体解した人のように凜と見えた。
自らの力で大人の階段をひとつ又ひとつ・・確実に駆け昇ろうと
していた。

雅和との心揺さぶる切なくも忘れがたい恋愛模様

その張り裂けそうな痛みと涙の一つ一つが佐知を大人へと導いて
くれた。

縁（えにし）

そして月日は流れ・・・

信じられない思わぬ展開が佐知と雅和の下に降りかかろうとしていた。

まさしく柳沢木が云った天の導きのように。

きっかけは古びた手提げ金庫だった。

事務所には柳木沢が長年使っていた机が今も大切に置かれていた。

その机の奥底からファイルに覆われ埋もれていた金庫が出てきた。

金庫の中には数冊の文庫本ほどの手帳が入っていた。

どこかセピア色に染まった手帳は柳木沢の日記だった。

若かりし頃の忘れられない思い出がぎっしり詰まっていた。

どのページにも由里子という1人の女性の名が記されてあった。

由里子とは大学の講義で顔を合わす機会も多かった。

柳木沢は自宅住まいのお気楽な学生だった。

一方の由里子はアパート暮らしで苦学生といった言葉がぴったり
の健気な女子学生だった。

不自由なく育った柳木沢には地味で楚々とした由里子の存在は新
鮮だった。

着飾ることもない由里子だったが化粧つけのないその顔立ちはや
く見ると際立って美しかった。

由里子に想いを寄せる男子学生が五萬といて学部一の人気だった。

柳木沢には人の気持ちなどお構い無しの強引さがあった。

由里子を手中にしナイフの様な視線を一挙受けていた。

柳木沢は男冥利とばかりしてやったりと悦に入っていた。

純情無垢な由里子に逆らうだけの度量はなかった。

とは言えうまく納まったのだから由里子もまんざらでもなかったのだろう。

由里子は学費と生活費を稼ぐために夜遅くまで掛持ちで家庭教師のアルバイトをしていた。

一時も離れずにいたい柳木沢が由里子を独り占め出来るのは同じ講義の時だけだった。

由里子に柳木沢だけのため費やす時間など皆無に近かった。

周りの恋人同士のように二人でゆっくり語らう時間が欲しいと肩を落とす柳木沢だった。

6月某日

／由里子は多忙で体は大丈夫なのか心配でたまらない

そつえば今日の由里子顔色もよくなかったな

連日のバイトで疲れているんだろう

比べて僕はこんな怠惰で呑気な生活でいいのか

いいわけないよな、情けない

何をすべきかを考え行動に移さねばと思ってはいるが

いま動けないのは弱い自分と戦っている真つ只中だから

いやこれも所詮口実だな／

日記に綴られた父の胸の内は雅和の大学時代を彷彿させるものでもあった。

「あの親父にも悩める青春時代があったんだ」
感慨深く時間も忘れ見入っていた。

柳木沢はほどなくして書店のバイトを見つけていた。
稼いだお金は由里子のために使おうと決めて張り切っていた。

8月某日

／怒った顔をはじめて見せ泣ぐんだ由里子
感情の起伏をみせない穏かな由里子の豹変に言葉を失い動揺した

柳木沢君は私を哀れんでいるの

私はあなたと対等なお付き合いをしていたつもりよ
あなたのお金をもろ手を挙げて受け取るとでも思っただの

良かれとした事が顔を歪め怒らせる結果となった

女つて者は硝子細工のように繊細で難しい物なのか
僕は一体どうすれば由里子に喜んで貰えたのだろう
考えても考えてもその答えは見いだせない・見つかりそうもない／

「おやじも女の扱いには苦勞したんだな」

雅和は父の動揺した姿を垣間見て苦笑していた。

日記には卒業後の由里子との関係まで詳細に書かれていた。塾の講師となった由里子は父・柳木沢との愛を育んでいた。

卒業から一年が過ぎようとしていた頃、由里子の父が突然の心臓発作で他界。

帰郷した由里子はそのまま帰ってこなかった。

友人達が手分けして家財を処分し私物を郷里に送っていた。気がつけばアパートは蛻の殻だった。

「久しぶりに家に帰ってくるね」

「ゆりちゃんずっと働き詰めだったからなのんびり家族に甘えて体を休めて来いよ」

「ありがとう・じゃ柳木沢くん、行ってきます」

柳木沢には何ら変わった素振りも見せず郷里に帰った由里子。いつもと何一つ変わらない由里子の笑顔を思いだしていた。

柳木沢に問いたただされ友人達は皆一同に口を閉ざしていた。

あまりの殺気立った柳木沢の懇願に気の毒そうに重い口を開き話しを始めた。

「柳木沢くんには知らせないでと口止めされて黙ってたけど」

由里子本人でなく友人から聞かされた父親の死。

さまざまな家庭の事情に拳をつくり立ちすくんでいた。

初めて知った実態に悔しくて情けなくて体が震えた。

崩れ落ちるような目眩を感じずにはいられない柳木沢だった。

友人一同は顔を伏せその場を逃げるよう去っていった。

由里子には高校生の妹と中学に通う弟がいた。

大黒柱を亡くした堺家は母と由里子二人が働いても切り詰めて生活するのがやっと

そんな貧窮した経済状況になっていた。

悲しみの最中も諸々の返済に頭を悩ます母の姿があった。

不安気な妹と弟を置き去りには出来なかった。

通帳を握りしめアパートの解約手続きと支払いを済ませた。

僅かな蓄えのすべてを現金に換えた。

家に戻った由里子はなけなしの現金を袋ごと母に渡した。

母は手を合わせ受け取った袋を祭壇に置いた。

その横顔には涙が流れていた。

葬儀の時も涙を見せなかった母が初めて流す涙だった。

「お父さん、あなたは悲しみの涙は嫌いでしたね

めそめそ泣くんじやないって怒っているんでしょ
私の涙、これは悲しみの涙じゃありませんよ
由里子の気持ちがうれしくて・・・うれし泣きです
あなたがいつも言ってた由里子は俺の自慢の子
その通り、由里子は私達の自慢の子ですよ お父さん」

由里子は母の背にそっと手を置いた。

傍らの妹と弟も安堵の笑顔をはじめて見せた。

母と子は微笑む遺影の父を優しく見続けていた。

由里子はそれきり柳木沢の元に戻らなかった。

心を痛めていた柳木沢だったが何も出来ずにいた。

由里子に言われた言葉がいまもトラウマになっていた。

「あなたのお金をもろ手を挙げて受け取るとでも思ったの
哀れんでいるの、私はあなたと対等のつもりよ」

学生時代の二の舞になるのだけは避けたいと思っていた。

10月某日

／夫婦なら僕の稼ぎを由里子は躊躇なく受け取っただろう
結婚すれば由里子一家を助け守ってやれる 僕が守ってやれる
伝えた所で手厳しい言葉を浴びせられるのはわかっている

「柳木沢くん、だからあなたは甘いって言われるのよ」

由里子に幾度も言われた言葉は間違っていないだけにキツかったな
キャンパスで由里子と過ごした日々を思いナーバスになっている

由里子を想い眠れなかった夜・今夜もあの時と同じ眠れそうに
ないよノ

地元の新聞社に就職したての柳木沢に由里子一家を養えるだけの
力はなかった。

由里子と夫婦など夢の話・妄想でしかなかった。

二人は手紙と電話を利用して辛うじて絆を繋いでいた。

「互いに頑張ろう 僕で力になれることは何でもする
遠慮しないで甘えてくれよ 由里子の力になりたいんだ」

「ありがとう、柳木沢くん」

どんな時であろうと甘えない女・それが由里子。

由里子を支え力になりたいと思う時怒った顔で涙ぐむ由里子が姿
を見せた。

饒舌な口は重くなり気持ちを伝えられない柳木沢だった。

由里子は妹弟の学費、家のローン、生きるがためだけに黙々働き
続けていた。

一向に光の見えない現状にクタクタの体を摩る毎日だった。

「柳木沢君の声が聞きたい その声に癒されたい」

悲鳴を上げた由里子の体はそれさえもさせてはくれなかった。愛の言葉に酔いしれる心の余裕もなく次第に電話は遠のいていった。

柳木沢は希望が叶い報道部に配置されていた。

これまでのいい加減さをこれでもかと痛いほど知らされていた。

仕事の重責に精神的にも追い込まれる日々だった。

男社会の寒風は想像を遥かに超え日に日に目は窪み落ちていた。

「負けてたまるものか」

柳木沢は寝る間も惜しみ休日返上で精を出し働き続けた。

由里子に思いを馳せていた男とは打って変り別人になっていた。

気遣う余裕を無くした二人の關係に微妙な亀裂が生じ始めていた。無常にも気がつけばいつかしら二人は疎遠になっていった。

季節は移り就職活動の内定がちらほら聞こえ始めた頃だった。

柳木沢は罵倒される事も減り仕事を任されるようになっていた。耳を疑うような噂が入ってきたのはそんな時だった。

夕暮れの居酒屋に大学時代の旧友と酒を酌み交わす柳木沢がいた。

「ゆりちゃん、結婚したって聞いたんだけど本当か？」

「仙台に帰ってから臨時の先生になったって聞いたけど」

「そうそう、先生で思い出した、相手も同じ教職の男らしいよ」

「そういえば柳木沢、ゆりちゃんとはあれからも付き合っていたよな」

「俺達はお前ら二人は結婚するとばかり思ってた」

「人の恋路はどうでもいいじゃないか　なあ、柳木沢」

「……」

勝手な憶測で盛り上がる友人らを横目に浴びるほど飲んで酔えない柳木沢だった。

取材の途中で柳木沢が向った先は懐かしい大学の校舎。
今も大学院に残っている由里子の友人の一人怜子を訪ねていた。
どうしても由里子の真相を知りたかった。

「面会人って柳木沢君だったの？久しぶりね」

「忙しいのに手を止めさせて悪いね

実はその、あの・いや・・・」

「どうしたの柳木沢君、変よ

もしかして由里子のことか？此処に来たんじゃない？」

「あ、うん」

「柳木沢君、もう由里子の事は心配要らないわ
今、彼女はものすごく幸せだから」

「そうか、それならよかったよ
もし連絡あったら僕も祝福していたって伝えてくれ」

「OK、分った　ちゃんと伝えておくから心配しないで」

「時間とって悪かったな、じゃまたな」

会社に戻る柳木沢の足取りは重かった。
公園のブランコに座りながらどんよりした雨雲を見上げていた。

6月某日

／由里子が・由里子が結婚していた
すまない、守ってやれなかった

僕は自分のことで精一杯で君を気遣ってやれなかった
何時だって君は一人で苦しみを抱え込んでいた
僕には何一つ打ちあけず話してもくれなかった
結局、心を許すほど愛してはいなかったってことだね

由里子はわかっていたんだ

僕の本質を見透かしていたんだ

口だけのお調子者で行動が伴わない男
これが由里子の目に映っていた僕の姿

僕が守ってやる、大口叩いてこの有様だ

泣くに泣けないこの結末だ

他の男に奪われたこの無念を忘れはしない

由里子を忘れるなんて出来ない

君の幻を胸に焼き付け僕は生きて行く

一生忘れず生きていく・愛する女は一人

この地球上に由里子・君一人でいい／

父・柳木沢の思いはかつての恋人佐知への想いと重なっていた。

「親父は由里子という女性を心底愛し生涯忘れなかった。
だから母さん、いやどんな女性が現れても愛せなかったんだ」

父が嘘をつき偽ってまで母と向き合えるほど器用な男でない事を知っていた。

「母さんの直向でまつすくな愛は重たすぎた だから逃げた。後ろめたくて・つらくて・たまらず家を飛び出した」

大人げない無責任男と言えばそれまでだが不器用な父の男道を垣間見た気がした。

雅和は父の男心をわかつと賢明だった。

由里子の結婚の痛手は数年の年月とともに薄れていた。そんな柳木沢に人生の転期が訪れた。

上の兄二人はすでに妻子があり家庭を持っていた。

長男夫婦と同じ屋根に住む柳木沢に父親は業を煮やしていた。

「三男坊のお前は次男と同じだ

遅かれ早かれいずれ家を出なきゃならん

自分の家を構え独り立ちしてはどうだ」

両親が勧める結婚話には耳に蝟が出来る程うんざりしていた。

これまでも両手で数え切れぬ程のお見合いをしてきた。

しかし結婚する気など毛頭なく寸分の期待さえ持てなかった。

受ける見合い話は親の顔を立て煩い口を黙らせるための手段に過

ぎなかつた。

見合い後はお決まりの断りの電話を入れる繰り返しだった。

顔を合わせる事もなく話の段階で断った見合い話があった。

それは三男の柳木沢に食い付いてきた旧家からの申し入れだった。

是が日にでも婿にとの再三の申し入れに一度は承諾したものの。

婿の言葉を聞くだけで体中がむずむず反応し発疹していた。

鯖ずしを口にして猛烈なアレルギーを起こした時と同じだった。

「これじゃ、無理だな」

体中を掻き篦りながら柳木沢は初めて両親に頭を下げていた。

何の因果か、又その見合い話が舞い込んできた。

「はつきり蹴りをつけないとまずいな 又ぶり返されても困るし」

見合いの場も決まり順調に事は進んでいた。

身内は今回はどんな口実で断ろうか

断りの電話を誰がするのかで頭を抱えていた。

こんな見合いなら受けない方がいいように思うのだが。

一人身の柳木沢にいらぬ誤解を持たれぬ為の体裁に過ぎなかった。

柳木沢は由里子以外の女に心が揺らぐことはなかった。

今回も無駄だと誰もが諦めていた見合い話だった。

「年貢の納め時かな・・・結婚するかあ」

帰宅した柳木沢の口から出た言葉に家族誰もが慌てふためいた。腰を抜かした母の横で父は口にしたお茶を噴出した。

「ブツ・ブワツァ」

しっかり者の兄嫁千代子も拭いていたお皿を落し叩き割った。

「ガツ・チャ〜ン」

断りの電話を入れる役目を任されていたのは千代子だった。

すみませんと頭を下げにんまり居間の柳木沢を盗み見ていた。

これが父・柳木沢と母・美紗子の出会い。

見合い写真とは違って目の前で見る美紗子はどこか由里子に似た面影を漂わしていた。

すんなり承諾した見合いに大層な意味はなく美紗子が由里子にどこか似ていた

悲しいかな、只それだけの理由に過ぎなかった。

一方の美紗子は写真の柳木沢をいたく気に入っていた。会うことなく断られた後も諦めきれずにいた。

両親はひどく落胆の色を見せる美紗子が不憫だった。そんな娘のため再度の見合いを申し入れたのだった。

蝶よ花よと育てた一人娘の縁談はこうして相整った。両親と親類縁者は喜びの宴を開き盛り上がりつつあった。祝杯の中、美佐子は柳木沢との愛ある家庭を夢見ていた。

そんな美紗子と心あらずの柳木沢の結婚は上手くいく筈もなかった。

二人は雅和を授かるとほどなくして別居となった。

ある日、柳木沢のもとに一通の手紙が届いた。

／卒業生同窓会のご案内

拝啓、盛夏の候、皆様いかがお過ごしでしょうか？

下記のとおり同窓会を開催することになりました。

当時の近藤学長のご出席も予定されています。

懐かしい顔を合わせ楽しいひとときを過ごしましょう。

万障お繰り合わせの上、ぜひご参集ください。

なお、ご出欠を同封のはがきでご返事ください。敬具／

由里子は迷わず出席を決め懐かしい青春の1コマに帰るべく電車に揺られていた。

車窓の景色に懐かしい思い出がフラッシュバックしていた。

柳木沢もこの日をどれ程待っていたことか。

それぞれ家庭を持った二人に再会の時が訪れた。

この再会には二人だけが共有しうる誰にもいえない秘密が隠され

ていた。

7月某日

ノ由里子との待ちわびた再会

僕は沸きあがる思い、迸る激情を止められなかった

決して憎しみ嫌いで別れた二人でないのだから無理もない

由里子との再会はそんな僕の気持ちを一瞬にして消し去った

僕は困惑している

自分を正当化せずにいられないほど動揺している

いつどんな風に帰宅したのかさえ覚えていない

君のあの言葉は一生口外せず墓場に持ってゆくよノ

喜ばしい由里子との再会どころか懐かしい同窓会の詳細すらもなかった。

何故、綴られることなく終わっているのか

父に予想だにしなかった事態が起きた事だけは察しがついた。

日記帳はここでペンが途絶えそれから先は白紙になったままだった。

「親父に、二人に何があったんだろう」

パラパラ白紙のページを捲っていた。

すると父が存命中に書き足したと見られるまだ真新しい筆跡のページがあった。

／由里子は言った 確かに僕の子供と言った
結婚を望まず一人で子供を生み育てようとしたのか／

飛び込んできた文面に目を見開き驚きの声をあげた。

「嘘だろう、親父の子ってことは俺の兄弟
腹違いの兄弟が存在するってことか・・・」

雅和はバクバクし鼓動に手をやり続きを読んでいた。

／由里子は言った 僕の子供と

結婚を望まず一人で子供を生み育てようとしたのか

友人達の呼ぶ声に憑き物が取れたかように君はピタリと口を噤んだ
たった数分の会話・・・追い継ぎ真相を聞こうとする僕に君は言った

「もう二度と会う事もないと思う だから柳沢君今の事は全部忘れて」

背を向け賑わう会場に戻っていく君に心は張り裂けそうだった

由里子、僕は間もなく君のいる天に召されようとしている
もし天で君と会えたら真相を聞きたい 真実を聞かせて欲しい
由里子、僕は自分に迫りくる死を怖がってはいない

いま僕は安らかに死を受け入れようと其の時を待っている
僕の人生はこの時の為、君と又一緒になれるこの日のためだけに
あつた

そう思いながら僕は自分の死と向き合っている
由里子、君に会えるまた愛しい君に会えるんだノ

雅和は父の真相を確かめずにはいられなくなっていた。

てつちゃんは事務所スタッフの一人で父と学生時代を共に過ごした親友だった。

父が司法書士をとつたのは司法書士のとつちゃんに後押しされたことだったらしい。

父同様に由里子をゆりちゃんと呼んで親しかったのがてつちゃんだった。

雅和はこの手塚のおつちゃんに由里子の調査を頼んでいた。

「てつちゃん、なにか分つた？」

「ああ、雅和も知つての通りゆりちゃんは柳木沢の学生時代の恋人だ
三重県出身で大学卒業後も三重には帰らず柳木沢と愛を育んでいたよ

思えばあの時、二人の愛は最高潮に達していた
あのまま付き合っていたら二人は結婚していただろうな

父親が亡くなった知らせを聞いたゆりちゃんは実家に帰つたんだ
小学校の教師になってそこで知り合つた先生とゆりちゃんは結婚した

その後ゆりちゃんに子供が出来たことを風の便りで聞かされた

あの時の柳木沢は肩を落としてそれはもう見ていられなかったよ

友人達に幸せそうな親子写真が貼られた年賀状が来たそうだと

でもその幸せは続かなかった・・ゆりちゃんは子供を残し突然旅立った

神も仏もないって、こう言う時に使うんだろうな

「由里子さんなんで・・急に亡くなったんだ」

「旦那さんと一緒に帰宅途中の交通事故だった

信号無視の車に衝突されたんだ

二人とも即死だったそうだと

「それで、子供はどうなったの」

「当時の年齢は定かでないが女の子が一人残された

ゆりちゃんの母親はとうに亡くなっていた

御主人の方にも引き取り手はなくその女の子は施設に入れられた
現在は養子先で幸せに暮らしているよ」

「てっちゃん、その子の名前は調べてくれた？」

「ああ名前は・・・さち　ゆりちゃんは堺由里子だから堺さち
いや、結婚して石坂になったんだから石坂さちだな」

「でも養子に出されたってことは姓は変わってるよね
今は石坂じゃない筈だよ」

「そうそう、今は皆井姓だから皆井さちだ」

雅和が愛した女性皆井佐知、その人の名前だった。

まさか彼女が親父の子供・・・雅和は目の前が真っ白になった。

「てっちゃん、親父はすべてを知っていたのかな？」

「柳木沢は別れたゆりちゃんの話は話したがらなかったんだ
だから俺にもわからない」

「さてよ、そう言えば、只一度きりだったが聞いてきたことがあつ
たな」

お前のようにゆりちゃんの子供の事をしきりに気にしていたよ」

「親父は別れてから由里子さんとは一度も会わなかったの」

「いや、柳木沢が京都市出張の時に一度だけ会った」

お前の親父がゆりちゃんを呼び出したんだ
別れた二人は由里ちゃんの住む三重で再会した
この時の事は余ほど嬉しかったんだろうな
柳木沢自らが話してくれたよ」

「・・・再会したのか」

「二人は別れたといっても愛し合った男と女だ
男女の関係は一つ間違えば理性を失わせる
人生の歯車さえ狂わせてしまう事だって有り得るからな

雅和、お前は覚えてないだろうな

昔、柳木沢が美紗子さんを泣かせたときに言った言葉

「パパはママを好きじゃないの
どうしてパパはやさしくないの

涙をいっぱい溜めたお前は小さい体で柳木沢に問うていたよ

柳木沢が家を出る原因の一つはゆりちゃんの非命だった
そしてお前の言葉が柳木沢の背を押した

手塚、僕は由里子を亡くしてから夜毎咽び泣き悲しみに暮れている
僕は何も知らぬ美紗子と雅和の笑顔に答えてやれそうにない
苦しい、苦しくてたまらないよ 僕は結婚すべきではなかったんだ
柳木沢はそう言って家を出た、悩んだ末の別居だった」

「てっちゃん、色々ご足労かけて悪かったね
今月の給料に色つけておくよ」

「そんな事はしなくていい 今はどこも大変なご時勢なんだ
雅和は早く一人前になる事だ 仕事で柳木沢を父を超えるんだ
現実には厳しいが、みんなで頑張っていこうな」

「てっちゃん、ありがとう」

「これからもご指導、宜しくお願いします」

「これからもビビシいくからな、覚悟しとけ」

てっちゃんが帰宅した後も事務所にひとり残っていた。

「親父、おやじは死んで尚どうして俺を苦しめるんだ
今になってなぜ又佐知を思い出させる
なぜ・・・俺を地獄に突き落とす」

雅和は壁に掛けられた父・柳木沢の写真を睨みつけていた。

縁（えにし）？

雅和は仕事を終わると恋人・美香のマンションに向っていた。キーケースを取り出すといつものように合鍵で部屋に入った。

今日も珈琲の香りが外まで漂っていた。

珈琲の香りは美香のお帰りなさいだった。

雅和が訪ねてくる日は決まってキリマンジャロを用意した。強い酸味とキレのある苦味そして濃厚なコクのキリマンジャロ。中でも特にk i b o産のキリマンジャロがお気に入りだ。雅和だった。

美香はと言えばジャマイカ産のブルーマウンテン。ブルーマウンテンの卓越した香りと調和のとれた味わいが好きだった。

互いに好みは違うが珈琲には独自のこだわりを持っていた。

美香と雅和の出会いには珈琲ショップ。

厳選されたコーヒー豆を自家焙煎し量り売りしてくれるお店だった。

幾度もの偶然が重なり珈琲談議に花が咲き親しくなった。

「マー君、なにかあった」

「美香さんはすべてお見通しなんだな」

「そうよ、私は魔法使いなの
だからマー君のことは何でもわかるのよ」

4つ年上の美香は頼りになる存在、新・恋人だった。

何かあるごと顔を歪め眉根に曇りを見せやって来る雅和。
今日も一物を抱えやって来たことなどお見通しだった。

雅和はアンティーク調の卓袱台の前に腰を下ろし美香のいるキッ
チンに体を捻じった。

「美香さん、もし、もしもの話だけど聞いてくれる
もし自分に腹違いの兄弟がいるとしたら驚くよね」

「.....」

美香はサイホオンに神経を研ぎ澄ませていた。
微妙な加減でのの字を書くように細くゆっくりとお湯を注ぎ入れ
ていた。

「美香さん、聞いてる」

「あつ、ごめん、ごめんね、聞こえてるよ」
「それでいたの？その兄弟が」

「いるかもってそれだけのこと　まだ確かめた訳じゃないから」

ペアカップを手にした美香は雅和と向き合った。

「根拠も確証もない話じゃどうにもならないわ
兄妹がいたとして・・・それが事実なら受け入れるしかないでしょ」

「冷静だな、美香さんは」

「きつと妾の子だからシビアで冷めているのよ
性格、歪んでいるのかしら」

「ごめん　また思い出させてしまったみたいだね」

「平気よ、私は子供じゃないんだからもう昔のことは吹っ切れてる
コーヒー飲みましょう、冷めてしまっわ」

世間のあざ笑う視線をかわし卑屈にならず生きてきた男勝りの美

香がそこにいた。

珈琲を美味しそうに口に含む美香は幸せそうだった。

姉のような頼れる存在でもある美香。

美香がすべてをそぎ落とし女の素を見せる姿はたまらなく愛おしかった。

輝かんばかりの妖艶さを漂わし雅和を魅了した。

「涙してきたこの人を俺は幸せにしたい・二人で幸せになりたい」

静かな寝息を立てている美香の顔を見つめ雅和は又ギュッと抱きしめていた。

今夜は美香の柔肌に癒されていたかった。

「ううん、いたあゝい

まだ起きてるの・・・もう寝ましょ」

「いめん、起こしていめん、おやすみ」

美香の寝顔に頬を寄せ眠りについた。

「おはよう、昨日あれから眠むれた？」

「あっ昨日はいめんね、起こしちゃって」

「いいの、誰だって悩み事を持っていると寝付かれないものよ
生きていれば一筋縄ではいかないことだって起こるけど解決法は
簡単よ

白黒つけたらすつきりするわ、真実を確かめればいいのよ」

「美香さんは今日も朝から絶好調だな」

「降りかかる問題や苦しみには意味があると思うの
人生に無意味なことは一つも起こらないと確信している
苦のトンネルを抜ければ必ず楽になれる
思いがけない幸せの駅に辿り着けるかもしれない
自分の足と頭を使って疑問を解き明かしてみたらどう？
事実は小説より奇なりっていうでしょ
想像もしなかった事がわかったりするかもしれないわ」

「俺、真実を知りたいんだ」

「それじゃ、確かめるしかないわね」

「そうだな・・・やってみるか」

「これで決まりね　でも熱くなると歯止めが利かなくなるから心配
だわ

仕事にはくれぐれも支障をきたさないようにしてね

「さあ今日も一生懸命生きてますよ」

美香はモーニングカップを持ち上げ乾杯してみせた。

雅和は美香の後押しもあり父の過去を探るべく動きだした。

出生・佐知

その頃佐知は幼少を過ごした孤児院が取り壊されることを両親から聞かされた。

「一度、顔を出してこようかな」

佐知の言葉に両親は大賛成していた。

「佐知、行ってきなさい」

あそこは佐知の人生で忘れてはいけない大切な場所だ
もう一つの故郷でもあるのだからね」

父の言葉に頷く母は目頭に溜まった涙を隠すように抑えていた。
思えば夫婦で電車で揺られ幾度も足を運んだ孤児院だった。

屈託のないとびきりの笑顔を見せ狭い園内を一人元気に走り回っていた佐知。

そんな姿を人目で気に入ったのは母・貞子だった。

子供のいない夫婦と義父母との静寂な生活を照らす灯り・希望それが佐知だった。

貞子は引き取りに行った情景を思い出し胸を詰まらせていた。
虚ろなまなざしの顔から笑顔は消え失せていた。
今にも泣き出しそうな顔から不安な心情が読んで取れた。

「園長先生、私またどこかに行かなくちゃいけないの」

幼くして一人ぼっちになった佐知

どんなにか孤独に耐えてきたであろう不憫さが湧き上がっていた。貞子は実の親が願った幸せをこの手で叶えたいと心から思った。

「何があるうとも私が命をかけて絶対幸せにしてみせます」

何度も天上界の佐知の両親に誓っていた。

あの日の思いは薄れることなく今も変わらなかった。

「佐知は私たちに出会って幸せだったのかしら」

貞子は心に問いながら佐知との歳月を噛み締めていた。

翌朝、母は孤児院に持たせるクッキーを大量に焼いていた。

家中に香ばしいバターと甘いバニラエッセンスの匂いが漂っていた。

まるでケーキ屋さんの厨房のようだった。

両親に見送られ幼少の記憶をさかのぼる様に孤児院に向った。

偶然にも記憶のない実父母の眠る同じ地へと。

そんなことは露知らず大きな土産袋を提げた佐知の心は早いであ

た。

佐知は隣接する他県のとある町に降りたっていた。

おぼろげに残る記憶は見事なまでに追いやられていた。

田園が残る景色に建つ近代的な駅舎は全く異質なものに感じられ

た。

父がくれた手書きの地図を相棒に歩き出した。
昔の懐かしい光景はどこにもなかった。

地図を見せて乗り込んだバスに揺られること30分乗客は佐知ひとりだけだった。

目的地のひとつ手前のバス停に差掛かろうとしていた時だった。
脂ぎった顔を光らせた運転手の大きな声が聞こえた。

「お客さん、歩いて行くなら此处で降りた方が近いよ」

佐知は素直に従いバスを降りた。

「ご親切ありがとうございました」

ひたすら歩く道のりは遙か遠く近いよと言った運転手の親切が恨めしかった。

延々と続く砂利道に膝小僧が笑い出し足を止めていた。
沿道の木陰に座り膝頭をさすりながら昔を思いだした。

大好きだった両親が突然姿を消し一人ぼっちになった私
訳もわからず役所のお姉さんに手を引かれたあの日の記憶
涙ぐみ何度も足を止めたこの道

見知らぬ町を見知らぬ人に連れられて歩く私が姿を見せた。
駄々を捏ね私は泣き叫んで父と母を捜し求めた。

付き添うお姉さんは優しく宥めすかしてくれた。
足を止め泣きじゃくると私を膝に乗せてくれた。
その度ドロップやお煎餅を取り出し食べさせてくれた。

食べ終わると機嫌が良くなる事をお姉さんは百も承知していた。
仕事とはいえ親と離れ離れになった子供の世話は大変だったろう。

休憩を取っては水筒の水で喉を潤し又歩くその繰り返し。
気遣ってくれるお姉さんに笑顔一つ言葉一つも返さなかった。
母にも似た手の温もりと優しさは逆に悲しみを一層膨らませた。

「優しいこのお姉さんもいなくなる　ずっと傍には居てはくれない
人」

佐知は心を許すまいと頑なまでに拒絶した。

しかしそれは悲しみを最小限に止めるためだったのかもしれない。
悲しみを最小限に抑える手段を生まれながらに持っていたのだら
う。

肉親の居ない一人ぼっち、血の繋がりのない孤独。

孤児院の生活に普通の子供と同様の家族愛を求めるのは酷だった。
それを求めれば苦しみ悲しみを齎すだけだった。

喜ばしい思い出ばかりではないが此処で出会った人達は絶大な力
を持っていた。

心の負を喜びに変えてくれたと言っても過言ではなかった。

園長先生、ちい先生、食堂のお母ちゃん先生、懐かしい顔がくっ

きり浮かんだ。

絶大な力に圧されたように疲れも何処に飛んでいた。

砂利道を過ぎると前方に白い屋根が目に見え飛び込んできた。

「あつた 思い出のままの建物があつた

此処だけはあの時のまま何一つ変わって居ない」

佐知は懐かしさに呼吸が荒くなって泣きそうになっていた。

涙で曇る瞳に人影らしき姿がぼんやり浮かびあがった。

「さつちやくん さつちやくん」

涙の滴が落ちた。顔を上げた先には懸命に手を振るちい先生の姿があつた。

ちい先生の周りは次から次と懐かしい顔で溢れ始めた。

先生方の頭には白いものが混じり長い月日が偲ばれた。

淋しくなると部屋を抜け出しては忍び込んでいた園長室に通された。
まさしく懐かしい古里だった。

一番に会いたかった園長先生を佐知は神妙な面持ちで待っていた。

「お待たせしてごめんなさいね

さつちゃんに来てくれるなんて夢のようだわ

みんな楽しみにしていたのよ」

笑顔の園長先生だけは当時のまま変わっていないかった。
昔にタイムスリップしたようだった。

佐知は昔の泣き虫さっちゃんになっていた。
見せない涙・弱さを園長先生だけに見せる甘えん棒さっちゃんに
戻っていた。

「園長・・・先生」

「さっちゃん、どうしたの」

「園長先生、ごめんなさい
昔を思い出して又懐かしい顔に会えてうれしくて
約束破って、泣いてごめんなさい」

「悲しみのつらい涙はもう流さない・・・
此処を出る時の約束をまだ覚えていたのね
いいのよ泣いても、うれし涙なら今日は存分に流しなさい
園長先生は朝から楽しみにあなたを待っていた
成長したさっちゃんに会えてとっても嬉しいわ」

「園長先生、ありがとう」

あっ、これ母が朝作って持たせてくれたクッキーなんです」

「まあ、ありがとう」

貞子母さんのお心遣い有難く戴きますね

「両親にはまめに写真とお手紙を戴いていたのよ

だからさっちゃん成長が手に取る様に分つて嬉しかった

さっちゃんの成長を皆で喜んでいた事がまるで昨日のよう」

「両親が手紙を、そうだったんですか」

「さっちゃん、ちょっと待っててね」

園長先生は笑顔を残し部屋を出て行った。

お土産のクッキーと紅茶を持って入って来たのはちい先生だった。

「御持たせですけど、さあ、どうぞ」

さっちゃん何だかすっかり大人になって、もうさっちゃんではなく

佐知さんって呼ばなくちゃいけないわね」

「ちい先生、私、此処ではいつまでもさっちゃんでもいいです

だから昔のままさっちゃんと呼んで欲しいんです

昔のよつにさっちゃんって呼んでください」

「さっちゃん」

ちい先生は腰を下ろして佐知を抱きしめてくれた。

この温もりは紛れもなくちい先生・先生の腕、こんなに細かったんだ

華奢な体で大きな愛を注いでくれたちい先生に溢れでる感謝でいっぱいになった。

「ちい先生、お世話になりました 本当にありがとうございました
ちい先生に育てていただいたことを私は決して忘れません

此処は大切な場所、私の故郷です
そしてお世話して下さいました先生方、ちい先生は大切な人

此処が閉鎖され無くなってしまふのはとても寂しいです
でも、記憶は心に残る想いはいつまでも消えませんよね

形ない物に価値を見いだせるようになったら一人前と先生は教えてくれました
よその子と同じ事をしたいとか同じ物が欲しいと駄々をこねると先生は言いました

皆と同じそれはそんなに重要なことなのか、本当に必要なのか
必要ならば納得のいくような説明をするべきだいつも真剣に向き合ってくれました

突き止め考えてみると本当に必要なものはほんのわずかでした
ほとんどの物は自分の優越感に過ぎないのだと分かりました

物で心は満たされない哀しみは埋められないんだと知りました
此処に戻ってきて目に見えない形のない物の大切さを改めて認識
しました

人の心・愛・慈しみどれも形のないものです
そしてそれらは偽りのない本物でなければ伝わらない決して響か
ない

嘘のない想いを持って人と接しなければ与えることも受け取るこ
とも出来ない

私はここで過ごせた日々を感謝しここでの教えをこれからも忘れ
ません」

「さっちゃん、本当に立派に成長したのね
先生うれしくて・・・ごめんなさい」

嗚咽にも似た声をハンカチで覆いちい先生は肩を震わせ部屋を飛
び出していった。

出生・佐知？

緊張が解けた佐知はクッキーに手を伸ばし口に入れた。

母の手作り菓子の中でもこのクッキーは3本指に入る絶品だった。

「おいしい、やっぱり、お母さんのクッキーは世界一だ」

空になったカップと菓子皿を几帳面にテーブルの端に寄せていた。

ドアが開き箱を手にした園長先生が戻ってきた。

千代紙がモザイク状に貼られた箱がテーブルに置かれた。

「これは本当のお母さんが大切に持っていた遺品なの
成長したあなたにいつか渡して欲しいと貞子さんから預かってい
たの」

221

「本当のお母さんの・・・中を見てもいいですか」

「勿論よ、ゆっくり御覧なさい」

園長先生はホールで片付けをしていますからね」

「はい」

箱を目の高さを持ち上げてまじまじ見ていた。

落ち着いた色調と和紙特有の手触りは気持ちいを和ませた。

色の褪せた群青色のリボンを外しそつと箱を開けた。

写真とメッセージカードが箱から溢れんばかりだった。

「赤ちゃんの写真、これが私」

一枚・又一枚、これといった感情も湧かずただ眺めていた。

箱の底が近づくと一冊の小さなアルバムがでてきた。

写真の一つ一つにコメントがびっしり書かれてあった。

「これが・・・お母さんの字」

丸みを帯びた流れるような筆使いに温かみを感じた。

顔の半分を占める大口を開けて笑う赤ちゃんの写真には

「天使の笑み・愛しい我が子」題名がつけられていた。

／さっちゃん、あなたは幸せを運ぶ天使・大事な宝物です
私達のもとに生まれてきてくれてありがとう

あなたはお父さんとお母さんの大切な宝・神がお与え下さった天使
使です

嘘のない誠実な人に育ってほしいと願っています
あなたのお父さんのようにね

お母さんとお父さんは大恋愛で結婚したの
私たちの愛の結晶がさっちゃん、あなたです

お父さんとお母さんは毎日幸せです
幸せの涙を流す喜びを教えてくださいのはあなたです
さっちゃん、これから家族でいっぱい幸せになりましょうね／

「私は愛されていた 母は私の誕生をこんなに喜んでくれた」

佐知の鼓動は激しく波打っていた。

アルバムの最後に微笑む男女の写真が貼られていた。

「これが私の・・・本当の両親」

哀しい事に懐かしい何一つの感情も覚えなかった。

「心に何かがか確かに何か押し寄せているのに」

高く積み重ねた写真を戻そうと空箱を持ち上げた時だった。

スウツ・スウ・・・紙のすれる音が聞こえた。

目を凝らし箱を覗くと端が不自然に膨らんでいた。
ジャンプ台のように傾けてみると膨らみが動きを見せた。

確かめると底は二重になっていた。

固い台紙を剥し捲ると一通の封筒が現れた。

しつかり糊付けされ厳重にテープまで貼られていた。

封を開けた現れた便箋は色鉛筆で水色に塗られ七色の虹が架けられてあった。

／柳木沢和人様

柳木沢君を忘れ消し去るためここに想いのすべてを封印します

あなたと会えなくなつて私はずっと後悔の日々を送っていました
未練を引きずり何度も会いに行こうとしました
でも出来ませんでした

何のため気持ちを押し殺してきたのか今更ながら悔やまれます
少しでも気持ちを伝えていれば甘えていればと・・・

若かつた私は嫉妬していたのかもしれませんが
恵まれたすぎた境遇のあなたがまぶしかった
いつだって曇りのない満面の笑みを浮かべ陽気なあなたが

そんなあなたに私の苦労など分りはしなないとずっと思っていた
柳木沢君の隣に笑顔になれないもう一人の卑屈な私がいまいた
だから弱音を吐いたり見せることができなかつた

二度と会えないと諦めていたあなたとの再会は夢のようでした
柳木沢君から電話を貰うなんて思っても居ませんでした

あの日の私はあなたを困らせ、どうかしていました

閉じ込めていた想いは止められませんでした

理性を失うとはこういう事なのでしょね

本当にあの時の私はおかしくなっていた

いいえ、私はそれを望んでいたのかもしれない

子供を身籠った事を知りそれを確信したのです

私は子供を一人で生み育てていこうと決心していました

宿った小さな命が愛おしくてたまらなかつたのです

まるであなたが宿っているようにさえ思えました

柳木沢君と一緒に過ごした幸せが帰ってきたのです

でも、この世に生まれた我が子は間もなく天に召されました

神は私とあなたの子供の成長をお許しになりました

神が下した決定は残酷でした

しかし愛する人の分身・命を育む時間を与えて下さいました

身重の10ヶ月に及ぶ幸せな時間は神からの贈り物でした

幸せな時間が悲しみの私を生きる喜びへと導いてくれたのです

わずかな命を逝ききった我が子は父と一緒に眠っています

子供の名前はあなたから一字頂いて付けました

「和由」和人の和でかず、由里子の由でよし

失ったものは大きすぎました

私はこれまで以上に力強く生きて行きます

二度と大切な愛を手放さぬよう正直に生きてゆきます

黙ってあなたの子供を産んだ事をお許してください

もうこの世に居ない和由は心底愛し合った柳木沢くんと私の愛の
賜物でした

由里子ノ

「柳木沢、実母が愛した男の名
かつて愛した人の父親と同じ苗字だなんて」

書き記された柳木沢という男の影がいつまでも頭から離れなかつた。

同時に兄がいた事を知り驚きを隠せなかつた。

「私に兄が・・・和由という兄さんがいた」

トン・ト・トン

園長先生がドアの隙間から顔を覗かせた。
手紙を慌てて箱に押し込む佐知の顔は蒼白で血の気が失せて見え
た。

「さっちゃん、大丈夫」

「園長先生、両親は私の誕生をとて喜んでいました
私は愛されてこの世に誕生した事を知りました
本当の両親の心に出会えて嬉しい、嬉しかった

でも、悲しいけれど私の心には響いてきませんでした
もっと途轍もない感情に押しつぶされるのかなと思ってたのに
驚くほど冷静な自分がいて・・・狐につままれたみたいで」

「さっちゃんにとって両親は今のお父さんとお母さんですもの
そう簡単に本当のご両親の心を受け入れられないでしょうね

でもさっちゃんは愛されて誕生した事を知ったわ

愛されていた事がわかって嬉しかったと言った

園長先生はそれが一番だと思う、今はそれでいいんじゃないかしら
少しずつ理解できる、必ず心に響く日が来るから」

「いつか今遠くに感じる両親を身近に感じられるのでしょうか」

「さっちゃん、結果を急がないで

人生の歩みの中でいつか体に自然と入ってくる、それを信じまし
よう」

「はい」

「さあ、遅くなったけど昼食の支度がしてあるのよ

みんな待ってるから食堂に行きましょう」

10帖程の食堂で園長先生と並んで長テーブルに座った。

子供達の姿はなく大人だけの静寂な食堂はどこかうらがなしかつ
た。

賑やかな声が飛び交い笑い声に溢れていた昔の食堂が懐かしかつ

た。

食事担当のお母ちゃん先生が見つからず辺りを探していた。

「お母ちゃん先生は、もうお辞めになったのですか」

「・・・」

先生らの顔が曇り沈黙が流れると一瞬にして空気が変わった。

「斉藤先生は・・・去年お亡くなりになったのよ」

園長先生の言葉に佐知は肩を落とした。

「どこか、お体が悪かったですか」

「ええ、持病の腎臓が悪化してね」

入院したと聞いてからあつという間の事だったの

まさかこんなに早く旅立つとは思ってもいなかった

お見舞いもお別れも出来なかったのよ」

「・・・」

「さっちゃん、顔を上げてごらんさ
お母ちゃん先生は此処でみんなを見守ってくれたのよ」

ちい先生の指す指先を追った。

「あつ、お母ちゃん先生」

頬ずりしてくれた肉まんほっぺのお母ちゃん先生が微笑んでいた。額の中のふっくらした頬のお母ちゃん先生は佐知との再会を喜んでいるようだった。

「お母ちゃん先生今までありがとうございました
安らかに眠りください お疲れ様でした」

手を合わせ続ける佐知の姿に一同も頭を下げ黙祷していた。

大きな鉄なべが運ばれてくると食堂はしょうゆの香ばしい匂いに包まれた。

「この匂いはお母ちゃん先生の芋っこ煮？」

ちい先生がなべの蓋を開けると白い湯気が勢いよく立ち昇った。

「さっちゃんが好きだった芋煮よ

お母ちゃん先生と同じ味にはならないけれど、懐かしいでしょ」

山形生まれのお母ちゃん先生は郷土料理を沢山作ってくれた。

中でも一番だったのがこの芋煮。

夏の熱風が治まり涼しい秋風に変わる頃山形は芋煮会で盛り上がり
ると聞いた。

初秋の川原は芋煮の鍋を囲む家族や仲間で賑わうのよと懐かしそ
うに話してくれた。

「川原で食べる芋煮はね ほっぺが落ちるくらい美味しいんだよ」

「さちもたべてみたいなあ」

「じゃあ、今日は芋煮にしようか」

「お母ちゃん先生、作ってくれるの?」

「さっちゃんのご要望にお答えしましょう」

その代わりお手伝いしてもらえるところしいんだけどなあ」

「やったあ〜 さち、お母ちゃん先生のお手伝いする」

お母ちゃん先生の側で一緒に作った芋煮を思い出した。

里芋・こんにゃく・牛肉・ねぎ・ごぼう、冷蔵庫にあったきのこ
平茸も・・・

出来上がったしょうゆ味の芋煮の味は今も忘れられなかった。

「芋っこ煮」とメニュー板に書いていたお母ちゃん先生を思い出した。

何気に食堂のメニュー板に目を移してみた。

「本日の献立 芋っこ煮」

あった・昔のまま芋っこ煮と書いてあった。

佐知は嬉しかった。

姿は見えなくてもお母ちゃん先生の愛情に触れたような気がした。
胸が張り裂けんばかりに嬉しかった。

この思いが何故、両親に湧き起こらなかつたのだろうか・・・
血を分けた父母よりもお母ちゃん先生への思いのほうが勝っていた。

芋っこ煮で甦ったお母ちゃん先生の愛情・肉親に沸かなかつた感情
合い重なる複雑な思いが甘くて苦い涙となって零れ落ちた。

「懐かしくて美味しくくて涙が出ちゃう　涙が止まらなくなっちゃった」

心の深層を押し隠そうと飛び切りの笑顔ではしゃいで見せた。

暗くなるまで先生方と別れを惜しみ佐知は思い出の孤児院を後にした。

「ただいま」

「お帰り佐知、疲れただろうとお疲れさん」

「うん、疲れたあ　今日はもうこのまま部屋で休むね」

両親は詳細を根掘り葉掘り聞こうとはしなかった。

佐知は部屋に入るなり疲れ果てた体をベットに投げ出していた。食欲もわかず今日は早めの就寝と決めこんでいたのだが目が冴えて眠れずドアを開けた。

廊下にはおむすびと梨・紙パックのウーロン茶が置いてあった。階段を下りていくと両親の声が微かに漏れ聞こえてきた。

「母さん帰ってきた時の佐知はどこかおかしかったな、何かあった

のかも」

「又はじまった、父さんは心配性ですね
あなたの思っている以上に佐知は大人ですよ 今日疲れている
だけです」

あなたの地図を頼りに一人で出かけたんですからね
張り詰めていた気持ちがほぐれて疲れが出たんですよ
一晩ぐっすり眠れば大丈夫、明日になれば元気な笑顔が見れます
よ、お父さん」

「ならいいのだが、母さんそつと部屋の様子を見に行ってみたらど
うだ」

「今日はそつととしてあげましょう
佐知が自分から話してくれるのを待ちましょうよ
父さんが言うように何かあったに違いないけれど・ね、お父さん」

立ち聞きしていた佐知は足音を忍ばせて部屋に引き返した。
おむすびを口に運びながら今日の出来事をコマ送りのようにバツ
クさせていた。

実母が愛した柳木沢という男の存在が強烈に残っていた。
その柳木沢という男が見ず知らずの他人とは思えなかった。
魂がその男ひとに会いたいと泣き叫んでいるかのようにだった。

今は亡き柳木沢への慕情が溢れ出し眠れぬ一夜となっていた。

新旧恋人

恋人の美香は食品メーカーの営業職に就いていた。

新人研修のあと同期の男性陣のほとんどが東京本社に残った。

私が支店に追いやられたのは女だから・

今も美香の心に尾を引き残る忘れられない出来事だった。

部長から全員に本社の営業研修参加への打診があった。

案の定、誰一人手を上げようとしなかった。

「私に行かせてください」

「美香が一人手を上げた。」

「さすが営業の女神様だな」

あとの2名は私のほうで決めるからそれでいいね」

いつか本社に戻って仕事をしたい

本社に行けるなら研修でもなんだったって受け入れる

同期の仕事ぶりも見聞きしたい

誰もが行きたがらない研修だったが美香は期待に胸を膨らませていた

トップの成績を維持する紅一点の美香を崇める社員も少なくなか

った。

男と渡り合う強さと女ゆえんの柔軟さあつての為せる業であつた。

強さは生い立ち・環境の賜物と不幸も強運にかえてしまつ力を持つていた。

先輩の嫉み・嫌がらせは美香を仕事に駆り立てる一因に過ぎなかつた。

どんな時も丁重に驕らず淡々と仕事をこなす美香。
そんな姿に目の仇とする先輩一派の不穏な空気は薄れていた。

個人能力を競う世界に嫉み・そねみはつきものだつた。
学生時代の陰湿・執拗な虐め同様に会社の出来事は言うに及ばぬものだつた。

「苦々しい歯がゆい経験があつたからこそ私はいま人生を謳歌している」

過去に感謝することはあつても恨み言ひとつ口にすることはなかつた。

崇高な精神を持ちどこか浮世離れたオーラを放つ美香。

営業の女神と崇める軟弱な若手社員の気持ち分らないでもなかつた。

今回の東京出向は一週間の日程が組まれた営業研修だつた。

静岡支店からは3名の研修参加。

他2名が誰かは蓋を開けるまで分らなかつた。

先輩と同行した東京出張の息が詰まる細る思いを必死に追い払つ

ていた。

貼り出された研修社員名を顔を隠した指の隙間から見ていた。

若手ホープの原田・美香の親衛隊の一人で腰巾着のような伊藤後輩の二人の名前を見つけほっと胸を撫で下ろしていた。

本社に向う美香は研修初日から音を上げそうになった。

先輩との出張の移動は車だったが今回初めての電車移動に戸惑っていた。

朝の通勤電車は想像を遙かに超えるものだった。

追い討ちをかける様に初日からトンでもない出来事に遭遇した。

「痛い！だれ、誰なの やめて下さい

私のお尻をつかんだのは誰！」

お尻を鷲掴みされた美香は思わず怒りの声をあげた。

素知らぬ乗客とは対照的に同僚二人は目を白黒して首を横に振り続けた。

この通勤に慣れるのは到底無理と眉間を曇らせていた。

平然とこの日常を送っている都会の人ってすごいなあ

尊敬の念で乗客の顔を見渡していた。

緩やかに流れる地方都市で頑張ってきた自分が半人前に思えた。ため息を溢しながら電車で揺られる美香の精彩は失せていた。

研修も残すところ一日となった。

昼食の幕の内弁当が配られ緊張の糸がほぐれた瞬間だった。

バタツ・・

床に崩れた美香に男性一同が手を差し伸べようと駆け寄ってきた。

「美香さん、美香さん、み・か・さ・ん」

薄れゆく記憶、名を呼ぶ声も遠のいて聞こえなくなっていった。

美香の姿を見た男性達はたじろぎ後ずさりを始めた。

スカートがめくり上がり艶かしい太ももがあらわに出現していた。

半開きの口と白目をむきだした顔はそれは無残で例えようもない有様だった。

伊藤はとっさに自分の上着で体を覆い両手を広げ仁王立ちしていた。

「大丈夫ですから席についてください」

皆さんはお昼にしてください 戻ってください」

大声で野次馬達の好奇心な目を必死に追い払う原田だった。

美香の意識が戻ったのは病院に運ばれた翌日だった。

美香の傍には本社営業部長の山村が神妙な面持ちで座っていた。

うう・うう・うう。佐知は小さな呻きを発して目を覚ました。

「木内君、わかるか」

「ええ　ここは病院？」

「よかった、これで一安心だ

君は研修の途中で倒れ一昼夜眠り続けていたんだ

念のために検査入院の手続きをとったからゆっくり体を休めなさい
命に係わる事ではなさそうだが上からの指示だからしょうがない
な」

239

「ありがとうございます

研修途中なのに申し訳ございません」

「いや、気にしなくていい

君は優秀なトップセールスウーマンだ

研修は予定ど通りに皆と一緒に終了だ」

「ありがとうございます」

「今回の件で君が女性だつて事を証明できたな
良かったんじゃないのか

女の君がトップに登りつめたといつても男社会の現実は厳しいも
のだ

体を壊してまで男と張り合おうなんて思わないことだな
また倒れられでもしたら大ごとだからね

静岡の支店長には連絡済みだから心配しないでいい
支店長言つてたぞ これからは少し手加減してやらないとなつてね

女は回りに可愛がられ気遣つて貰うぐらいが丁度いいんだ
会社は君に男と同じ器量を課してはいないはずだ あんまり無茶
するな

この山村という男は女を見下している。

男には勝てないのがわかつただらうと勝ち誇っている。
怒りが込み上げていた。

私こんな男を役職に就ける会社のために頑張ってきたの
仕事漬けの日々が虚しく思え固く閉じた唇を噛みしめていた。

何かを察したかのように山村は腰を上げた。

「じゃ、僕は会社に戻つて君の報告をしなければ
悪いが、これで失礼するよ

何か必要なものがあれば届けさせるよ」

「ありがとうございます」

山村は枕元にそつとテレカを置いて帰っていった。

ぎゅつと握り締めていた汗ばんだ拳をそつと開いてみた。

手のひらには爪あとが刻まれそれは赤黒く鮮明に浮かび上がった。怒りの感情が下降線を辿ると爪あとの痣もいつしか消えていた。

真新しい制服姿の看護婦が袋を持って病室にやってきたのは日暮れどきだった。

「木内さん、寝てらしたので・すみません

同僚だとおっしゃる方が置いていかれたものです私すっかり忘れて本当にすみません」

「ありがとうございます 気にしないで」

出てきたのは原田からの図書カードと伊藤からの親指をくわえたお猿の縫ぐるみ

そしてお見舞いのメッセージカードだった。

こういうとき人柄って正直にでるのね

ありがとう原田君、伊藤ちゃん

「モンキー伊藤、ちょっとこい」「モンキー又お前か、何やってんだ」

仕事は今一だが愛嬌のある憎めない伊藤を思い出し自然と笑みが零れた。

伊藤に似たお猿の頭を撫でながら二人の心遣いに胸を熱くしていた。

一方、旧恋人の佐知もまた院長に同行し上京していた。

学会を終えると院長は弟・敏伸が院長を務める病院へとタクシーを飛ばしていた。

佐知は付き添いとしていつも同行を余儀なくされた。

「一人で大丈夫だ 付き添いは要らん」

院長の言葉に院長婦人は頑として譲らなかった。

息子二人を持つ院長婦人は佐知をお気に召したようで目にかけて可愛がっていた。

「佐知さん、お父さんを宜しくね」

院長婦人の言葉に戸惑っていた。

どうしていつも院長でなくお父さんを宜しくなんだろう

ホテルに着くと毎度ながら院長婦人からの伝言が届いていた。首を長くして電話を待っている婦人の姿が浮かんだ。

院長が出張先のホテルで倒れ大騒ぎになってから婦人は神経質になっっていた。

焼きもち焼き？なのかな

婦人の院長に執着する異常なまでの言動は時に殺気を放ち怖くさえ思えた。

婦人は院長の体調に問題がないとわかれば上機嫌で電話を切った。妻に頭の上からぬ院長から想像していた夫婦像とは別の貞淑な婦人の顔があつた。

「佐知さん、お疲れ様でした」

明日はお父さんも敏伸さんの執刀に立ち会うとか言ってたけど」

「はい、そう聞いています」

「明日の朝、お父さんにトマトジュースを差し上げて頂戴ね
オペの日はトマトジュースしか摂らないの
宜しく願いますね」

「はい分かりました お休みなさい」

明日は敏伸が執刀するカテーテル治療に加わる事になっていた。
院長の弟はいち早くカテーテル治療を導入した脳神経外科医だつた。

患者は80代の男性

首の片側の血管が非常に細く殆どと言ってもいいほど血が通っていない。

放置すれば脳梗塞がいつ起きてもおかしくない病症だった。

治療は足の付け根から管状の治療器具を入れ首の血管を拡げるものだった。

高齢者にはリスクも高いため家族の意思も考慮した上での手術だった。

「先生、父にはもっと長生きして欲しいと思っています

いつまでも元気でいて欲しい、これが家族みんなの願いなんです」

息子の言葉に黙り込んでいた患者が朴訥と口を開いた。

「先生、私はね、もう十分生きてたじゃないかと言いつつ聞かせました
だからもうこのまま天命に従おうと思ったんです

でも家族から弱気にならず長生きしてくれと泣かれましたね
人はこの歳になっても、いやいくつになろうとも生に執着するものです

死にたくはないんですよ　だから先生宜しくお願いします」

「こちらこそよろしくお願いします

横田さんそしてご家族に副うよう全力を尽くさせて頂きます」

こうして脳梗塞カテーテル手術は施されることになった。

手術を見届けた院長が手術室から出てきた。

疲れが色濃く見て取れる院長は空元気的笑顔を見せた。

「早く戻ろう、三日も病院を空けると患者のことが心配でたまらん
明日は通常通り朝から患者を診るつもりだ
皆井君、すまないが今日中帰れる様に頼むよ」

「はい、わかりました」

では私から奥様にもお伝えしておきます」

「そうしてくれるとありがたい」

院長は患者を第一に考える温かみのある赤ひげ先生そのものだった。

携帯電話を握り締め院外に出ようと急いでいた。

扉が開いたエレベーターに乗り込もうとした瞬間だった。

ドンと鈍い音と共に尻餅をついた女性が目に飛び込んできた。

降りようとしていた入院患者を佐知は突き飛ばしていた。

「申し訳ございません」

大丈夫ですか、お怪我はありませんか」

「これくらい全然平気、大丈夫」

「ごめんなさい、本当にすみません
私の不注意で本当にごめんなさい」

「大丈夫、大丈夫！だからそんなに謝らないで」

「本当に、どこも何ともないですか」

「ええ、ほら・ねっ」

歯切れの良い口調と素早い身のこなしで起き上がった女性に安堵していた。

「急いでいたとはいえ本当に申し訳ございません」

「やだなあ、また謝る、もう気にしないで」

急いでいるならほら早く乗っていかないと、さあ早く」

「ええ、ありがとうございます それでは失礼します」

その場を離れ歩き出した女性の背中越しに大きな声をかけた。

「本当にすみませんでした」

女性患者は笑みを浮かべ肩越しに手を振り去っていった。

この女性患者が雅和の恋人美香でその美香に頭を下げたのが佐知だった

新旧恋人の突然の出会いは二人にとっては単なるハプニングに過ぎなかった。

しかしこの出会いは否が応でも再会せざるえない運命の糸で結ばれた瞬間だった。

美香が倒れたことをメールで知った雅和は病院へと急いでいた。てっちゃんから半ば強引に許可をもらっての上京だった。

「美香さん」

「嘘でしょ・・・どうしたの」

「美香さんが心配で会いに来たよ」

仕事にかまけっぱなしじゃ会いたくても会えないからね」

「びっくりした」

「驚かせてごめん、体はどう、大丈夫なのか」

「ええ、ほらもう、ピンピンしてる

でも・・勝手知らない場所の入院は心細くてたまらなかった」

「やっぱり俺来てよかったよ

美香さんの悲しそうな顔が毎晩夢に出てきて心配してたんだ」

「私の事が分るようになったんだあ」

「また馬鹿にしてるだろ」

「トンでもない、馬鹿になんかするもんですか
来てくれてものすごく感謝しているわ」

「美香さんの退院に合わせて一緒に帰るつもりで来たんだ」

「うれしいけど・・仕事は平気なの」

「てっちゃんから仕事をもらってきたんだ

今からアポの会社に行つて来る 夜また顔を出すよ」

「ちょっと待って マー君の目じり下がりはっなしよ
仕事モードに切り替えてがんばって」

「しっかり仕事してくるよ」

頬をたたき男意気を見せ仕事に向っていった雅和が頼もしく嬉しかった。

午後の検温に来たナースに退院の日程を尋ねていた。

「まだ退院は無理でしょうか」

「木内さんの入院は5日間となっておりますね
先生に聞いておきますがご希望はありますか？」

「あさって頃は・・・聞いていただけますか」

「わかりました 先生に確認してお知らせしますね」

「宜しく願います」

こ一時間もしないうちに美香の希望通り退院の許可は下りた。しかし条件付だった。

念のため必ず地元の病院で脳の精密検査を受けること

倒れて運ばれてきたことも忘れ美香は聞き流していた。

後に人生を大きく揺るがすことになるうとはこのときは思いもしなかった。

雅和はそつなく仕事をこなし新たな仕事も取り付けていた。私情で上京した東京で手柄なく帰ることだけは避けたかった。てっちゃんの喜ぶ顔が浮かんで胸を撫で下ろしていた。

退院の朝、美香は昨晚詰め込んだ荷物をゴソゴソあさっていた。とうとうバッグを逆さに荷物をベッドに並べ始めた。

「何か探しもの？」

「あああ、どうしよう」

「そんなに大切なもの？」

「ごめんね、ほんとにごめん」

「何がごめんなんだか、わからないよ」

「マー君から貰ったペンダントを失くしてしまっただけだよ。大事なお守りだから持ってきたのに見当たらないのよ」

「探しものってペンダントのこと・・・か
俺の安月給で買ったあのペンダントなら気にしないでいいよ
今度はちゃんとしたものを買ってあげるからさ」

「あのペンダントは大切なお気に入りだったのに」

「なくなつた物はしょうがないだろ
退院祝いに新しいの買おうよ。だからもうあきらめなよ」

「そうね、あきらめるしかないわね
あつそれよりお見舞いに来てくれたお礼をしなくちゃね
帰ったらマー君へのスペシャルサービスしちゃうかな」

「.....」

「やだなあ何恥かしかつてるの。まだまだ子供なんだ」

「いじわるな美香さんなんか放って俺一人で帰ろうかな」

「だめ・置いていかないで 迎えに来てくれたんでしょ」

「だったらまずは荷物をバッグに戻してからだね
さあ早く支度して一緒に帰ろう」

二人は手を取り帰路に着いた。
外で夕食を済ませた二人は美香のマンションに落ち着いていた。
ベッドに入った雅和は美香の体を気遣っていた。

「・・・どうしたの、いつもと違う
今日は・・・私がほしくないの」

「今日はいいんだ 美香さんは病みあがりなんだから
こうして美香さんの側で眠れるだけで・・・それだけでいい」

「そんなのいや
病院の生活は寂しくてマー君の温もりがとても恋しかった
こうして二人の時間が戻ったのよ、二人になれたの
だから・・・お願い」

その言葉が引きがねになって雅和の熱い思いが満ち溢れてきた。

「俺、本当に美香さんを心配してた
無事に帰ってきてくれて俺、うれしいよ」

「その気持ちをそのまま私にぶつけて」

二人は激しく重なり合っていた。

動物精気がムクムクと顔をだし情念の炎となって燃え盛った。

二人は悶え振るえ狂おしいまでの感情に見舞われていた。

色香漂う美香のやけに白いうなじが艶めかしかった。

雅和の上に乗る美香の首筋にキラツと光る汗の滴はトパースの原
石のようだった。

背中の窪みさえ彫刻の女像のようでまぶしかった。

しなやかな上半身を小刻みに振動させる美香は美しかった。

美香の大人の色香に身も心も溶けていた。

この夜二人はいつまでも体を離そうとしなかった。

朝日が昇る窓べに朝を告げる鳥たちのさえずりに聞こえていた。
久しぶりに二人で迎えた朝は爽快な目覚めだった。

新旧恋人？

仕事帰りの佐知はジャケットを受け取ろうとクリーニング店に立ち寄っていた。

価格競争で生き残りを賭けるクリーニング店が軒を連ねる商店街。そんな中で職人技の手作業にこだわり頑張っているこのお店。確かに値段は格段に高く佐知には正直痛い出費。

それでも長年お世話になったこのお店を変える事は出来なかった。

「さっちゃん、これポケットに入っていたよ」

仕上がったジャケットと一緒に白い封を手渡された。袋を覗くと銀色のペンダントが見えた。

「あっ・あの時のペンダント」

上京した時に病院のエレベーターで拾ったペンダントだった。慌しく急かされるように院長と帰路に着いて忘れていた。

「そっだ・あの時、胸ポケットに押し込んだペンダントだ」

自宅に戻った佐知は部屋でペンダントを見つめていた。

ユラユラ揺れるペンダントを驚しながらあることに気がついた。

これはロケットペンダント

この中に写真が入っていたら手がかりがわかるかも

ペンダントに爪を立て中を開けてみた。

思いもかけぬ展開に血が失せてゆくようだった。

丸く切り取られた人物写真があった。

それはそれは小さな写真で判別不能かと思われた。

しかし佐知にはすぐにわかった。

「なぜ・・・ここに雅和の写真が」

頭が真っ白になって佐知はペンダントを床に落した。

慌てて拾い上げたペンダントから写真が飛び出していた。

その写真を大事そうに持ち上げたそのときまた衝撃が走った。

雅和の後ろに女性の写真が重なり合うように貼られてあった。

「この女性は確か病院で会ったあの人

エレベーターでぶつかったあの人だわ」

写真を戻しロケットを閉じる指先の震えが止まらなかった。

愛おしい遠い日々を思いながら現実に向き合っていた。

「雅和には新しい恋人がいる

やはり誰かを隣に歩き出していた

その恋人が病院で出会ったあの人なら・・・

とても感じのいいあの女性なら二人はお似合いのカップル」

涙の泉はとうに枯れ果て涙が零れ落ちることはなかった。

恋する乙女のように胸躍らせ雅和との思い出を懐かしんでいた。
息苦しさにも似た荒い息遣いを見せ雅和を偲んでいた。

「会いたい 雅和に会いたい
未練など断ち切り忘れたはずなのに」

雅和への想いが洪水のように溢れ出していた。

このペンダントは再会を齎す神様からの贈り物
勝手な解釈で閉じ込めた思いを開け放そうとしていた。

／真砂子、お久しぶり
教えて欲しいことがあるの

雅和の会社の名前、真砂子なら覚えてるよね
時間のある時で構わないからメールください 佐知／

メールは送ったものの、なしのつぶてだった。
毎度の待てども来ない返答に諦めの色を濃くしていた。

そんな真砂子からのメールが届いたのは10日目だった。

／はぐい 佐知、元気してる
会社名は井川パートナーズだよ／

真砂子らしい詮索なしのメールが嬉しかった。

104で雅和の電話番号を手中にしていた。
しかし一向に進展はなく佐知は長い葛藤の日々を送っていた。

「今更、何してるんだろう私」

「何を言ってるの」

雅和とまた話せるのよ

「このチャンス逃すつもり」

「雅和にはもう恋人がいるのよ」

今更・電話なんてやっぱり出来ない」

「ペンダントを持ち主に返す本来の目的はどうなったの
そのために雅和の電話番号を調べたんでしょ」

表裏一体の心の声を聞きながら電話番号を見つめ続けた。

「落し物を持ち主に返すため そう・ただそれだ」

佐知は冷静さを取り戻していた。

「過去には戻れない」

過去の思い出に続きなどありはしない

壊れた愛を繕うなんて決して出来ないんだ

それでも私は雅和との繋がりをこのきっかけを逃したくない
せめて声だけでいい・雅和の声が聞きたい」

激昂にも似た抑えられない感情に流されるまま電話番号を押した。

「私 皆井と申します

井川雅和さんはいらっしやいますか」

「たった今事務所を出られたんですけど
あつ、ちよつと待ってください」

パタパタ走る音、カラカラ窓を開ける音が聞こえた。

「雅和さ〜ん お電話が入ってます
かけ直してもらいましょうか」

「戻るからいいよ、待っててもらって」

微かに聞こえたソフトでそれでいて野太い低音が心に響いた。

「今戻ってきますからそのままお待ちください」

待ち受けのメロディーが流れた。

雅和が好きだった曲・聞き入ろうとした時
早押し曲あてクイズのようにメロディーはピタツと止んだ。
思い出に浸ることさえ許さず拒絶するかのようだった。

「もしもし、お待たせしました」

「・・・あの・・・お仕事中、突然の電話で申し訳ありません
皆井です 皆井佐知です」

「さち・・・君か、ほんと突然だね」

「ええ・

実は落とし物のペンダントの中にあなたの写真が入ってたの
それで落とし主の手がかりがわかればと思って」

「ペンダントって、銀色の？」

「ええ、銀色のロケットペンダントです」

「それなら間違いなく美香さんのだ」

「美香さん？一緒に入っていた写真の人ですか」

「ああ・・・」

「その人と私、東京の病院で会っているんです」

「君が美香さんと」

「私の不注意でその人、美香さんを突き飛ばしてしまっ

「彼女は柔な女じゃないから平気って笑ってただろう」

「ええ笑いながらそんなに謝らないでって逆に私を気遣ってくれま
した

彼女・なにかいってましたか」

「いや、彼女からは何も聞いてないよ
でも大抵のことはわかるんだ、彼女のことはね
やっぱり笑ってたか、彼女らしいや」

美香という女性の話になった途端、雅和は弾んだ声を見せた。

雅和は彼女を愛している

彼女は雅和の大切な人なんだ

「大抵のことはわかるんだ」そう言いきった雅和の言葉が心に刺さ
った。

雅和のことは何だっかわかった
雅和を愛していたあの時は私だっ

「ペンダントの送付先を教えてくださいませんか
雅和の会社でいいのかしら」

「ああ悪いね、そうしてもらえると助かるよ
必死に探していたペンダントだから彼女きつと喜ぶよ
じゃ、住所を言うから控えてくれるかな
住所は静岡県静岡市—————」

「この住所に送りますね
ペンダントは雅和から彼女に渡してください」

「君の手を煩わせることになって申し訳ない
宜しく頼む じゃ、電話きるよ」

雅和の声が遠のいて電話が切られようとしたそのとき
「まって、電話をきらないで」

佐知は慌てて雅和のサヨナラの言葉を封じていた。

「まって、最後ににひとつだけ答えて欲しいの

雅和は私の手紙・最後の手紙を読んでくれたのか
それだけを聞かせて」

「あの日、電車の中で読んで捨てた」

「そう、読んでくれたのね、ありがとう」

じゃ、美香さんのペンダント近日中に送ります

彼女にあの時はごめんなさいって伝えておいて下さい

彼女・美香さんってとても感じのいい人ね

素敵な彼女で雅和とお似合いだわ」

「・・・ありがとう」

ペンダント着払いでいいから宜しく頼みます」

「わかりました 失礼します」

期待とは裏腹に空しさだけが残る後味の悪い結末だった。

愛が消滅した今、かつて愛した雅和はただの男ひと

雅和にとって佐知も又ただの女ひとになっていた

仕事に向う車中、雅和のハンドルを握り締める手がやけに汗ばんでいた。

「手紙読んでくれた」佐知の言葉があたまから離れなかった。

俺は嘘をついた
手紙を捨てた、なぜそんな言わなくてもいい嘘を
まだ手紙は処分出来ずにいるのに

雅和は約束していた美香のマンションではなく急遽自宅に戻った。
自室のクロゼットに眠ったままの帆布のバッグを取り出していた。
ホテルでプラットホームで・・・
この帆布のバッグは別れの見届け人だった。

雅和は二度と手にすることなくクロゼットに押し込んでいた。
中から取り出したのは佐知からの手紙だった。
再び読もうか読むまいか迷いながら封を開け手紙を開いていた。

雅和は佐知の手紙を読み起こしていた。

「雅和へ

出会った夏の日を覚えてますか

あの夜、あなたと見上げた星空はとてもきれいだっ

夢のような出会いに胸を時めかせていた私

あの日恋の女神が降りてきて私はあなたに恋をした

雅和には消してしまいたい過去になっちゃったのかな
でも私は忘れない

あの楽しかった夏の日と二人を照らしてくれた星空そしてあなたを

雅和の真剣な思いは痛いほど伝わっていた
なのに私は答えなかった

何も言わなくてもこの愛は伝わっている

雅和ならわかってくれると思いがついていたのね

あなたは偽りのない大きな愛でいつも包んでくれた
その愛のあまりの重さに私は震えていた
その愛に押しつぶされそうな自分が恐かった

「俺は出会った頃の佐知が好きだったんだ
出会った頃の佐知が好きだった」

あなたが言った言葉よ覚えてる？
好きだった・その過去形が悲しかった
突き放されたようでも悲しかった
心を切り裂かれるように痛かった
愛する雅和から言われた愛の過去形はつらすぎた

あなたの愛は嘘のない真実の愛だった
私は愛されていた自分に戻りたいと必死だった

あなただけを見つめそして自分と向き合い苦しみ続けていた
同じ道をこれからも一緒に、ずっと二人で歩いていく
そう信じて疑わない私に突然届いた手紙
その別れの手紙は深い闇の奥底に私を突き落とした

終わったからではもう何も伝わらないよ
真砂子に言われた言葉はその通りでした

でも・・・それでも私は伝えたいの
雅和に伝えずにいけないの

雅和の愛は私から離れ消えた

愛が終わった今だから声を大にしてあなたに伝えたい
私の愛に偽りはなかったと

今となつては遅いけれど私も負けなくらい雅和を愛した・愛していたわ

それだけは信じて忘れないでいて

ふたり歩いた道のりを振り返るとき気がつけばあなたへの感謝の
気持ちばかり

憎しみや恨み言のひとつくらいあつてもいいのに楽しい日々、大
切に愛された記憶ばかり

私は本当に愛されていたと涙が零れました

生まれて初めて私は心振るわせる大粒の涙を流しています
これは人を愛する慈しみの涙・あなたがくれた愛への感謝の涙

雅和、幸せな時間をありがとう

あなたと過ごした日々を私は忘れない

今も残る雅和の残像にきっぱりお別れします

涙で言えなかったさようならをいま笑顔でここに記します

雅和、さようなら

俺は駅で佐知から手紙を受け取った

今更こんなものと破り捨ててしまおうと思った

そして無言で背を向け佐知の前から去った

電車の中で俺は封を切った

未練なんだろうな

愛しぬいた女からの最後の手紙を俺は読んだ

捨てることなど出来なかったこの手紙は今も俺の手の届くところに眠ったまま残っている

読んだ・それだけでよかったものを口から出た言葉は読んで捨てただった

俺は確かに動揺した

佐知・その名前にその懐かしい響きに動揺したそれを隠そうと俺はあんな嘘をついたのか

雅和はぶり返し燻る感情を無理やり押さえ込もうとしていた。

佐知の実母は親父の恋人だった

その恋人は子供を、親父の子を生んでいた

佐知がその子供なら俺とあいつは義兄妹になる

俺はその真相をまだ確かめていない

もう一度佐知と会って話をするべきか

しかしあいつが何も知らず幸せでいるのなら

聞かせる話ではないだろう

こんなに苦しいのはなぜなんだ　なぜこんなに切ない

過去を穿り回し佐知と繋がりを持つのは止めた方がいいのかもしれない

俺には美香さんという大切な女性がいる

やっぱりまだどこかで俺は・・・

いやそんなことはない・絶対ない

俺は親父の過去を、真相を知りたいだけなんだ

お前は何を動揺している

あいつを振り返るのはやめる・もうやめるんだ

天の導きによって繋がった二人は今また形を変えた愛へと導かれようとしていた。

雅和の心は二人の女の狭間で揺れ動いていた。

ドアの外で母の声がした。

「洗濯物持ってきたの、入るわよ」

雅和は慌てて仕事用のカバンに手紙を押し込んだ。

「夕食は要らないって言ったから何も用意してないのよ
冷凍しておいたビーフシチューと

フランスパンがあったからガーリックトーストにして、
ロメインレタスも残ってたわね

それをシーザーサラダに・・・それでいい？
すぐ支度できるからさあ、一緒に下に行きましょう」

「悪いね、母さん」

母に促され雅和はそのままリビングに向った。

佐知の存在を明かすことになる手紙を無造作にカバンに入れた雅和。

元通り帆布のバッグに戻し眠らせて置けばよかった手紙。

眠りから覚めた手紙はこれから雅和に何を語りかけてくるのだろ
う。

新たな波風が雅和に風向きを変えて吹いてきた。

程なくして佐知からの書留が会社に届いた。

雅和はペンダントを取り出すと封を逆さにしていた。

ペンダント以外のものは何もなかった。

雅和は一抹の寂しさを感じた。

何を期待してたんだ・・・

俺って奴はどうしようもない男だ

都合よく明日は美香との約束日だった。

その日は机に置いたペンダントの袋を見ながら高揚していた。

心を見透かされるのを恐れてっちゃんの姿を何度も目で追い伺っ
ていた。

手塚には幼少から知る雅和の心うちなど読めていたが仕事に支障
がない範囲と目をつぶっていた。

美香の部屋に入るなり雅和は大きな声で呼んでいた。

「美香さん、美香さん」

「そんな大きな声ださなくたって聞こえてるわ」

額を流れる汗が光っていた。

「そんなに汗かいてどうしたの」

「エレベーター待つてられなくて階段を走ってきたんだ」

「待つて、タオル持つてくるから」

「いいよ このくらいの汗、大丈夫」

「そんなに慌てなければならぬ事が起きたの
もしかして兄弟のことがわかった・とか」

「そうじゃないんだ、それよりこれ見て」

手にしたのは昨日丹精こめ磨いたペンダントだった。

「このペンダント失くしたペンダントと同じね
探して買ってきてくれたの？」

雅和はロケットペンダントを開け写真を取り出して見せた。
張り合わせられた雅和と美香の顔写真を翳した。

「これ私のペンダント、探していたペンダント
どうしてマー君がこれを、どこにあったの？」

「・・・・・・・・」

「どうしたの急に黙り込んで　ねえ、どこにあったの？」

「俺の知り合いが拾って届けてくれたんだ
写真が入ってたから連絡くれて」

「そんな偶然があるなんて不思議ね
私・・・どこで落としたのかしら」

「病院・美香さんが入院してたあの病院」

「やっぱり病院だったのね」

エレベーターで女の人とぶつかって・・・

そのときまでは首にしていたような気がするんだけど」

「エレベーターで彼女と出会ったのか」

「今、彼女って、これを拾った知り合いつて女の人なの」

「・・・・・・・・」

「それを拾ってくれたのは、学生時代の友人なんだ」

突然の電話で何かと思っいたらペンダント・・・驚いたよ」

「拾った人が友人なんて奇妙なめぐり合わせね」

「ああ・・・美香さんが彼女と出会っなんて、」

ほんと不思議な縁としかいえないな」

「ああ思い出したわ」

育ちのよさそうな愛らしい子・・・そんな感じでしょ、彼女」

「うーん そうかな、よくわからないよ」

「私とはタイプが違うから印象に残ったのね
わたし彼女のこと嫌いじゃないわ」

すでに何かを察したようにも聞こえる美香の言葉だった。

「そういえば、彼女も同じようなことを言ってたな
美香さんは感じのいい素敵な人だって
お似合いのカップルだって言われたよ」

「彼女と私、案外気があったりしてね」

「やめてくれよ、
二人にタッグを組まれたら・・・まあ有得ないことだな
もうこの話は終わりだ
美香さん今から出かけようよ、何か食べに行こう」

「久しぶりに中華料理が食べたいな」

「ペンダントが戻って懐もあつたかいし
フカヒレでも上海蟹でも何でもごちそうするよ」

「今日はずいぶん太っ腹なのね
それではお言葉に甘えていっぱいご馳走になって
今夜もハッスルしちゃいますか」

「そうしてまた俺の反応を楽しむつもりだろうけど
もうその手にはもう乗らないんだ」

「ほお、ずいぶん成長しましたねえ」

「もういい加減、子ども扱いはやめてくれよ
マー君・マー君と呼ぶのも・・・やめてほしいんだ
今日から雅和って名前を読んでくれ
美香さんに甘えて守られるのは卒業したいんだ
マー君なんて・・・母さんじゃないんだからさ
頼りないだろうけど一人の男として俺をみてくれ、頼む」

「・・・わかったわ 今日は何だか別人みたいね」

「俺は何も変わってない ただ・・・
将来を見据え自分と真剣に向き合おうしているのかな」

「何だかしんみりしちゃったわね」

今夜は高級中華料理で退院のお祝いしてもらおうかな
たっぷりご馳走になっちゃいますけど大丈夫かしら？」

「ああ任せとけ

金に糸目をつけずドーンとご馳走してやるよ」

「今日は一段と男っぷりがいいわね」

「惚れ直した？」

「もう十分惚れてますけど・・・はい、惚れ直しました」

笑いが止まらない美香はペンダントを首につけようとしていた。
ペンダントヘッドをそつと持ち上げて笑顔を見せた。
それは雅和の背を押し元気にしてくれるいつもの笑顔だった。

雅和が心をこめて磨いたペンダントが美香の首に戻った。

決して高価な品ではないが宝石にも負けない光を放っていた。

目も眩むような笑みを浮かべる美香もまたペンダントと共に輝いていた。

新旧恋人？

マンションに泊まった雅和は仕事に向う支度をしていた。
美香はハンカチにアイロンをかけていた。

「先週忘れていったハンカチにアイロンかけましたからね
忘れないで持って行って」

「サンキュー」

あつ美香さん、又忘れそうだからバッグに入れてくれる」

「わかった 仕事のカバンでいいのね」

雅和は洗面台の鏡の前でドライヤーをかけていた。

カバンを開けた美香は淡い桜色した封筒を見つけた。
仕事用のカバンに似つかない封筒に釘付けになっていた。

洗面所の雅和を気にかけてながら封をそつと手にとって見た。
差出人が知りたいと裏返してみると名前があった。

皆井佐知・・・女性の名前

封筒から微かに香水の香りがした。

フルーティーな香りとほのかな石鹸の匂いがしていた。

この香水は雅和から佐知への贈り物だった。
愛らしいの意味がついたこの香水を雅和は迷わず選んだ。
出会った佐知の印象ぴったりの香水だった。

美香の顔は青ざめていた。

仕事関係の人が香水をかけたたりするかしら
なんでもない人が自分の匂いをつけたりはしない

この香水の匂いはプチサンボン
きつと若い女の子、雅和と同年代の子だわ
皆井佐知って雅和の何なのかしら

「美香さーん」

雅和に名前を呼ばれた美香はビクツと体を硬直させた。

「はーい どうしたの」

「歯磨きが無くなりそうなんだ」

「新しいの買ってるから右上の扉を開けて出してくれる」

「了解」

いつもと変わらぬ会話だったが心はここに在らずだった。皆井佐知、その名前に心は波打っていた。

事務所に着いた雅和はカバンを開けて青ざめた。アイロンをかけられたハンカチが封筒と並んで入っていた。

「美香さんに気づかれたらどうか

そんな素振、美香さんからは見受けられなかった
いやまで、美香さんは大人の女だ

手紙を見たとしても彼女なら何も言わないだろう
知らない振りをしてくれた？」

雅和は仕事どころでなくなっていた。

「雅和さん東商さんからお電話です

雅和さん、雅和さん」

事務の泉さんが何度も雅和を呼んでいた。

「雅和、朝からポーツとしてるんじゃない」

手塚のおっちゃん、てっちゃんの怒声がとんだ。
雅和の電話が終わるのを見計らい手塚がやってきた。

「雅和、今日のお前は仕事なんて上の空って感じだな
上に立つものがそんなんじゃないしがつかない
仕事に集中できないなら仕事場から消えろ
おまえがいると事務所の空気が悪くなる

俺達は取引先に喜んでもらおうと強いてはお前のため頑張ってる
んだ

俺の言いたいことわかるよな」

「てっちゃん、すまない
気を入れ直すからこのまま仕事させてくれ」

「よしわかった
気持ちを变えてがんばろうな」

手塚は親父のような存在になっていた。

皆が帰った事務所で雅和は美香に話すタイミングを探していた。
美香はいくら恋人であろうと前触れもなく来訪されることを嫌っ
た。

「親しき仲にも礼儀あり

そういう一線はどんな関係にも必要なのよ」

突然訪ねた雅和を突き放しドアを開けてはくれなかった。それ以来、約束以外に美香を訪ねることはなくなっていた。

今日はどんなに煙たがらようとドアを開けさせる決意だった。

ピンポーン・ピンポーン 何の応答もなかった。

・・・モニターで俺だとわかってるはずだ

合鍵を取り出しオートロックのドアを解除してマンション内に入った。

美香の部屋の前で雅和は立ちすくんだ。

合鍵で強引に部屋に入ることはやはり戸惑いがあった。

ドン、ドン・・・拳を上げドアを叩いた。

「美香さんおれ、雅和だよ 開けてくれないか

いるんだろ、俺は帰されることを承知でここに来た

話がある 美香さんに話さなければならぬことがあるんだ」

扉の向こうの必死な呼びかけに美香は息を殺していた。

返答のない静寂に雅和はあきらめ足先を変えようとした。

ガチャ、ガシャ・・・ドア

開く音に雅和は一目散に走りよった。

「美香さん、ごめん」

黙り込んだ美香が白いナイトガウンを羽織り立っていた。

「入って・・・」

美香は雅和を部屋に入れた。

雅和はお決まりの場所に座り神妙な面持ちで美香を見つめていた。珈琲を入れようと立ち上がるうとする美香を制した。

「何もしないでいいよ　ここに座って

今日は話をしに来ただけ・・・聞いて欲しいんだ」

「話って今日じゃないといけないの

明日は約束の日なのに明日じゃ・・・だめってこと」

「いついづことは早く話しておかないとだめなんだ」

「わかったわ」

「ありがとう美香さん

実はペンダントを届けてくれた友人のことなんだけど

・・・その人、皆井佐知っていうんだ」

その名前に美香は一瞬たじろぎを見せた。

顔色を変えた美香の姿に雅和は確信した。

やはり美香さんは手紙を・・・佐知の名前を見たのか

「私が病院であつた人それが皆井佐知さんなのね」

「・・・」

「それで、その人がどうかしたの」

「友人なんて嘘をついてごめん」

彼女は・・・皆井佐知は俺の恋人だった

余計な心配かけたくなくて俺は嘘をついた」

「そうだったの」

それを言うために此処に来てくれたの」

「ああ・・・」

「正直に話してくれてありがとう
・・・前に言ったけど私、彼女のこと好きよ
雅和と一緒によ、嫌いになんかなれないわ」

「何だか棘のある言い方に聞こえるのは気のせいかな」

「私だって女よ・・・」

どこかにそんな気持ちがあるかもしれないわね
でも彼女とは終わったんでしょ」

「ああ、もう遠い昔の話し」

「だったら私に気を使うことないんじゃない」

色恋は当人の気持ちの問題だから

彼女のこと私には関係のないことよ、そうでしょ」

「俺のこだわり過ぎかな」

「過去なんて振り向いてないで前だけをしっかりと見て
でない夢の実現は遠いものになってしまうわよ」

「なんだかすつきりしたよ」

これでぐっすり眠れそうだ」

「ずっと悩んでいたの、それも眠れないほど
それは私を思ってた？それとも佐知さんのことを」

「……………」

「人との繋がりや一度結んだ縁って終わったからそれでお終いじゃないと思うの」

どこかでまた巡り会うようになって目には見えない何かで繋がっているような気がする

それつきりになるのは気持ちが一番通行だからよ

大切な縁で結ばれたのならまた出会えるんじゃないかしら

雅和と佐知さん二人はそうじゃないのかなって思ってる

雅和は佐知さんを恨んでる？そうじゃないでしょ

佐知さんとの愛は幸せな思い出ばかりだったんじゃない

二人がまた出会えたなんてすごいと思わない

終わった愛は忘れてもいいけど新たな出会いを握りつぶさないで
変なこだわりは捨てて佐知さんとの縁をつなげて欲しいの
偶然の出会いなんかこの世にはないのよ だから大切にしたい」

「美香さんは自分が何を言っているか、わかっているのか
佐知と付き合えて言ってるのと同じだよ」

「そうじゃないわ

彼女は雅和にとつて必要な人だつてこと

彼女にも雅和は必要な人だから出会えたのよ
何か意味があるつてことを私は言いたいの」

「わからないよ、俺にわかるように話してくれ」

「今日はもう遅いわ、明日にしましょ

今日は嬉しかった　ありがとう雅和」

「.....」

「そんな顔してないで.....

早く帰らないと・・・ねっ、もう遅いわ

今日はぐっすり眠るんでしょ、おやすみなさい」

「おやすみ、美香さん」

暗闇に身を置き星ひとつない空を見上げ雅和は溜め息を吐いた。

其のころ佐知はペンダントの持ち主、美香を忘れられずにいた。女の嫉妬どころか旧友のような親しみと懐かしみを感じていた。

美香さんは私と同じ匂いがする、どこか似ている

笑顔に隠された自分と同じ影を見て取っていた。

互いを引き寄せようとする見えない力に動かされ始めていた。

美香は体の変調に気づいていた。

生理がこない・・・不順ではあったけれど今回はいつもとは違う

母と同じ父親の記載のない子供を身ごもった美香は病院に行くのを躊躇っていた。

「私は母とは違う 雅和は妊娠を喜んでくれる

籍だつてきちんと入れてくれるわ・・・」

雅和の子を産んでいいのだろうか和美香は悩んでいた。

父の幻影

お腹に手を当て美香は亡き母の一生を思い返していた。同時に記憶のない父に会いたい気持ちに揺れ動かされていた。

美香の父・佐々木悟朗は食糧庁のトップを務めた人。

昔の食糧庁は農林水産省の外局で国民の主要食糧の管理・
飲食品の生産・流通・消費の調整などを行っていた。

美香が食品業界に飛び込んだのは父恋しさあってのことだった。

「この業界なら父を知らぬものはいないだろう

どんな人で、どんな仕事をしていたのか

父の全体像が見えるかもしれない」

妻ある人を愛した母は自分の立場を百も承知していた。

その人の子供を生むということは人道的にもルール違反だった。

「愛人の私が子供を生もうとするのは罪深いこと

ならば自己責任でこの子を産もう

相手の家族に決して悟られぬよう一人で迷惑かけずに産む」

そんな母の固い意志に父は負けた。

認知だけでもという父の言葉も聞き入れようとしなかった。

「この子は私の子供です　この子に父親はいないのです」

「君の気持ちはわかる

しかし僕の子供でもあるこの子に父として何かしてあげたい
そう思うのは人として当たり前のことじゃないのか
逃げ続けなければならぬような幕引きはしたくない」

愛する子供に触れることも成長すらも見れない父の気持ちは痛い
ほどわかっていた。

本妻との間に子供がいない父の気持ちは十分伝わっていた。

美香がもの心が付く頃、母は父との関わりを一切絶った。
間もなくして母娘が一生見ることもないような大金が振り込まれ
た。

子供の力になりたいという父に唯一その方法があるとしたらお金
以外

何もないと母は割り切っていた。

「このお金は愛の清算ではなく美香の幸せを願う誠意のお金
繋がりと絆を切ってしまいたくないが為の精一杯の気持ち
あの人はそういう人、最後の最後までそういう人」

その夜、母は私を腕に抱き一晩中噎び泣いたと聞いた。

父は悲しい孤独の人だった。

本妻との間に子供は出来ず夫婦だけの生活。

本妻さんは結婚後も自由奔放な生活はそのまま父は夕食はおろか明かりの消えた家に帰ることもしばしばだった。

「昨日もお出かけだったようだね

前もって知らせてくれたら外で食事を済ませたのに僕は料理が出来ない、それは君もわかってるだろう」

「だって、悟朗さん食事を家でとる事ほとんどないじゃない作っても食べてもらえないことが多くて私いつも一人だったそんな私に夕食は作らないでいいって言ったのは悟朗さんよ」

「確かにそう言った

でも昨日は僕が早く帰ることを君に伝えたはずだ何か用意して出かけてくれても良かったんじゃないか」

「そうね、ごめんなさい

そうだわ、お手伝いさん頼みましょう

部屋はいくらでもあるわ、住み込みのお手伝いにきてもらいます
「よしよし」

「そういうことじゃないだろ 君の話はいつも飛躍すぎる
それに他人が家にいるなんて僕はごめんだね」

「だったら私がない時ぐらいはご自分で食べて頂戴ね
あつ、そうそう今日私、ヨーガの日なの
夕食は外ですませて来てね、お願いします」

「女性が毎晩遅くまで出歩くのは感心しないな」

「悟朗さんの言い方、お父様みたいでおかしいわ
私シャワーを浴びてくるから鍵を忘れないで出かけてよ
じゃ、気をつけて行ってらしてね」

父は夫婦で食卓を囲むことはほとんどなかったという。
会合パーティーの多い父は家庭の味に餓えていた。
筑前煮・肉じゃが・きんぴら・アジの干物・がんもの甘辛煮
故郷のおふくろの味を思い出し唾を飲み込んでいた。

ひとりの休日はビジネス雑誌を持ちレトロなジャズ喫茶に行くの
が日課だった。

三杯目の珈琲を飲み干して店を出るといつもあたりは霞んでいた。
自分をさらに自虐的にさせるそんな夕刻は忍びなかった。

そんな時入ったスーパーマーケットで父は母と出会った。
生活観溢れるその場所が後の父と母の運命を変えた。

「すみませ〜ん、ひじき追加させていただきます」

大きなトレーを抱えて現れたのは母だった。

地方出身の母は東京の大学を出て都市銀行に勤めていた。

印刷会社を営む実家は事業不振で余儀なく廃業した。

不幸の連鎖は続き兄までもを不治の病で喪った。

母は昼夜働き両親のために10万円を送り続けていた。

お金持で品ある紳士がうろろ徘徊している姿は滑稽だったわ

母はいつも懐かしそうに目を細め語ってくれた。

惣菜を並べ終えた母は場違いにも見える父の存在に興味を抱いた。

幾度も商品を見渡ししては溜め息をつく父に母が声をかけた。

「何かお探ですか 私でよければお手伝いしますよ」

「ここにある惣菜がどれもこれも美味しそうだね

どれにしようか迷っているんですよ」

「ありがとうございます ゆっくり選んで行ってください」

礼をしてその場から離れようとしたとき

「あっ君、ちょっといいかな」

「はい、なんでしょうが」

「この中でお奨めの品はどれかな」

「この惣菜は全部お奨めですよ

売れすぎてこうして何度も補充してるんです

お客様のお好みで安心してご購入求めください」

「それじゃ、ここの列を全部いただいでいこう」

「お客さん、大家族なんですね」

「僕ひとりで食べるんだが、やはり多いか」

「お一人ならもったいないですよ

あまっ捨て捨てるようなら買わないで下さい

捨てるなんて作った人に失礼ですから」

「そうだな、君の言うとおりだ」

「私もひとりなんです

お嫌じゃなければ一緒に食べませんか

そんな沢山必要ないわ

これと・それとあつこれ美味しいんですよ

私もう帰れるんです、バイト終了なんです

だからこれを買ったら外で待っていてくださいね」

買い物袋を後ろ手にした父が恥ずかしそうに人待ち顔で立っていた。

「お待たせしました

私の家ここから近いんです さあ、どうぞ」

「待ってくれ、僕は君のこと何も知らないし僕は妻帯者だし、君にしたって僕は今日はじめてあつた人だ
そんな人を簡単に家に招くのは止めた方がいい」

「人を招待するの貴方が初めてですよ

私これでも結構おくてなんですから」

「初対面の見ず知らずの人の家で食事を頂くというのは」

「いいじゃないですか、そんなこと

一人で食べる食事は美味しくないですよ

どんなにおいしいものを目の前に出されても一人じゃ寂しい
質素なものでもだれかと一緒なら美味しいわ

貴方となら美味しく食べられる、だから誘ったの」

「なんとなくだが・・・わかる

そうだな、僕も君となら楽しく食事が出来そうだ」

「なら、行きましょう」

紅潮させたあの人の困り顔を今も覚えてるわ

そう言っ て頬を桜色に染めた母の顔を美香は思い出した。

「はじめてお使いさせられた子供みたいだったわ、あの人

あの人とどこか影を持つあの人と話がしたかった

あの人にわたしは一目ぼれしたの」

はにかんだ母の笑みを思いかえしていた。

アパートには卓袱台、木箱の上の古びたテレビ

唯一の彩りは小花模様のクリーム色のカーテンだけだった。

独身女性にしては慎ましすぎる暮らしぶりだったが家庭の温かさが此処にはあった。

「お待ちどうさま

お惣菜と私が作った味噌汁、漬物これで全部

ごはんはいっぱいあるから遠慮しないでね さ、食べましょう」

肉じゃが・さばの竜田揚げ・蓮のきんぴら・

豆腐と油揚げの味噌汁、キャベツとキュウリの漬物

湯気のたった温かい食事に父は何度も顔を崩したという。

「おいしいなあ、この味噌汁、美味しいね

こんなに美味しい味噌汁は久しぶりだ」

「感激してくれるの嬉しいけど味噌汁、家で飲まないの」

「外で味噌汁を飲むことはあっても家で飲むことはないな」

「あなたの奥さんあまり料理をしない人みたいね

お金持ちはお付き合いも多くて忙しいって聞くから

奥さんも料理なんて作る時間がないのね」

「僕は仕事でいつも帰りが遅いんだよ

夕食は大概外で済ましてしまうからね」

「それでも朝は自宅で食べるんですよ

なのに味噌汁飲まないなんて変ね」

「朝は珈琲だけ 基本、僕は朝は食べないんだ」

「貴方の奥さん、楽でいいわね うらやましいなあ
私は未だ独身で朝から晩まで掛け持ちで働いている
神様は平等っていうけど疑ってしまいたくなるわ」

「そんなに働くには何か理由があるんだろうな」

「事情があつて実家に仕送りしてるんです
私、両親と兄には良くしてもらったから
兄は大学を中退して働きました
俺は出来が良くないし勉強がきらいだ
でもお前は俺と違う、努力家で一生懸命だ
そういう者が大学に残つて学ぶべきなんだつて
大学だけは何があつても卒業しろと言ってくれました」

「妹思いのいい兄さんだ 君の大切な支えだね」

「ええ・・・」

楽しい出会いの夕べはあつという間だった。

この日を境に母は平穏な日々に終わりを告げた。
道ならぬ恋に落ちた父と母は秘密の園を手に入れていた。

妻には仕事に熱中するためのマンションを借りただけ伝えていた。

自分のことで忙しい妻は案の定、何の反応も見せなかったが電話を引くことだけを強硬に指示してきた。

逢う回数が増した父と母の仲はいつそう深まっていた。

「スーパーのバイトは辞めた方がいいな」

「そうね、私も通うにはちょっと遠いし、遅い帰り道は恐いから辞めようと思っていたの」

「今日からこの僕が君の雇い主になろう
銀行が終わってからの時間は僕のために使ってくれないか？」

「出来ればそうしたい・・・でもいいの
本当なら嬉しいわ」

「なら、成立だな」

父はバイトに値する額の援助を約束した。
妻帯者を愛するが為の不倫世間一般に言う愛人となった母。

「この人がいてくれるなら独身で人生を終えてもいい

人に何を言われようと蔑まれようと私は愛を手放したくない
この愛を貫き生きてゆきたい」

愛されても愛を感じたことなど一度もなかった母にとって
命を捧げる覚悟のこの愛こそが至高の愛になっていた。

そんな時、母の愛に影をさす一本の電話が入った。
郷里の友人からの悲しい知らせだった。

「早苗ちゃん、驚かないで聞いて
早苗ちゃんの両親亡くなっただんだよ」

「・・・・・・・・」

「聞こえてるよね、早苗ちゃん早く帰ってきて」

「どうして、二人ともあんなに元気だったのに」

「・・・・・・・・」

「何か知ってるのなら教えて」

「おじさんがおばさんを道ずれにして」

「お父さんが、お母さんを」

「遺書はなかったから何もわからないらしいの

専称寺の勝随和尚が前日に早苗ちゃんのお父さんと会ってるの
おじさんの様子がおかしかったらしいの
それで翌朝家を訪ねて行って見つけたそうなの」

「……」

「専称寺におじさんとおばさん、安置されてる
勝随和尚がずっと付き添ってくれてるの
早苗ちゃん、早く帰ってきて
駅に着いたら電話して、車で迎えに行くから」

涙もなく体を震わせる母は父に電話をかけた。

「朝からごめんなさい 今、大丈夫ですか」

「どっした、何かあったんだね」

「両親が亡くなりました 自殺でした」

「……」

「今から両親の元に帰ります」

「そうか、つらいだろう」

帰ったらそのとき話を聞こう」

「はい」

「気を落とさず気をつけて行って来なさい

僕がついていることを忘れるな、愛してる」

悲しみ行きの電車に乗る凍てく心は父の言葉で溶かされていた。
天涯孤独になった母に残ったものは道ならぬ愛だった。

郷里で勝随和尚と二人きりで両親を茶毘に付した。

印刷会社の廃業以来、親類縁者との付き合いは途絶えていた。
資金繰りの相談で訪ねた先々で受けた親族の仕打ちに祖父は怒りを顕にした。

「親類縁者とは今後いつさいの繋がりを絶つ
俺の葬式には誰も呼ぶんじゃないぞ
来ても追いつ返すんだ」

祖父は自未得度先度他という言葉そのままの人だった。
銀行の貸し渋りに頭を抱えた親戚が泣きついてくると黙ってお金を差し出したという。

「あなたは人が良すぎですよ
人のお世話もほどほどにして下さい」

「俺は自分の出来ることを精一杯やっている、ただそれだけだ
それが人のためになっているのなら喜ばしい限りじゃないか」

祖父は状況を俊敏に判断し頼まれたことは親身になり成し遂げる
頼れる人だった。

祖父は親族もまた同じように助けると疑わなかった。
しかし事が自分に降りかかった時手の平を返すように門前払いの
扱いを受けた。

「私達の借金を誰かに助けてもらおうなんて間違ってますよ
二人で頑張つて少しずつでも返していきましょう」

「この家・この家だけは何としてでも残したかったな」

「あなたは頑張ってくれたじゃないですか
もつあきらめましょ」

「借金だって生きているうちに完済させるのは到底無理だ
何もかも無くしたあげく早苗に借金が及ぶことを考えると」

「私達の保険があるじゃないですか
早苗受け取りの私達の死亡保険で何とかありますよ
そんなことでめげるような子じゃありませんよあの子は」

「借金の目途はたつても俺達が死んだら一人ぼっちだ
あいつ一人取り残されるんだぞ」

「だからどんなにつらくてもあなたも私も死ねない
生きなければいけないの
早苗が結婚して孫の顔を見るまでは元気でいてあげなければ
天国の誠一も守ってくれていますよ
頑張りましょう、あなた」

「誠一か　せめて誠一が生きていてくれたらなあ」

「過ぎたことを言うのは止めて下さい
誠一はもう戻ってこないんですから」

「母親の情は父親より濃いというが・・・お前はつよいんだな」

「あの時、私は一生分の涙を流しました
今どんなに誠一を偲んでも涙の一滴も零れてこない
私の涙はあの時に使い果たしてしまったの
腹を痛めた子供を亡くした女の気持ち、あなたにはわからないわ」

「・・・」

「いつまでも泣けることが誠一の供養になりますか
そんな私達の姿を早苗だって喜びはしませんよ
一から出直しましょう」

「この歳でお前と二人再出発か」

「年齢なんて関係ないですよ
いくつになっても出発は出来るんです
あなたこれからも宜しくお願いしますね」

「・・・」

家業を継ぐと言ってくれた息子を病で亡くし代々続いた印刷会社をつぶし

頼みの綱の親族にも背をむけられた祖父が哀れだった。

家を手放したところから祖父に異変が起きた。

祖父は浴びる様に酒を呑むようになった。

仕事も休みがちになり負担は祖母の肩に重く押し掛かっていた。喧嘩ひとつなかった祖父母の夫婦間に極寒の嵐が吹き荒れた。

「いい加減、過去に執着するのはやめて

嫌でもまだまだ生きて行かなければならないんです

借金を返し終えなければ死ねないんです

つらいのはあなただけですか、私だって同じなんですよ

お酒に逃げるのもう止めてください」

「うるさい、女のお前に俺の気持ちがわかってたまるか

俺の気持ちなんか誰にもわかりやしない」

祖母と母の収入では追いつかない借金生活。

返済は滞り催促状が散らばった部屋で祖父は酔いつぶれていた。

家庭内別居同然の祖父母に会話は無く祖父の拠り所はなくなっていた。

そんな祖父が選んだ人生の幕引きが無理心中だった。

お金は多い少ないに係わらず人を狂わせる

お金は人格さえも変えてしまう恐いもの
お金は使うもの・しかし祖父は使えないお金・借金に翻弄され豹
変した

祖母を手にかけて自らの命までも絶った

それはあまりにも悲しい結末だった。

父の幻影？

遺骨を待つて専称寺に戻った母は変わり果てた両親の遺骨のあまりの軽さに涙したという。

「早苗ちゃん、むこうでお茶にしよう」

勝随和尚が座布団を差し出して言った。

「お父さんの亨さんも・ここに座ったお茶を飲み話をして帰ったお父さんの後ろ姿が最後になった」

このとき人生の方向変換を余儀なくされる母の運命は巡りはじめた。

祖父の苦悩は借金と人間関係そして母の不倫
死者の最後の言葉が明かされようとしていた。

「私達夫婦は早苗の仕送りで何とか生き延びてこられました
早苗には足を向けて眠れないと感謝しているんです
私は子供の脛をかじって生きてる情けない親なんですよ」

「亨さん、成人した子供を一人の人として見てあげたらどうだ
親子のしがらみや垣根はとつてもいいんじゃないか
早苗ちゃんは亨さんあなたが親だから助けているわけじゃない
あなたがた夫婦を人として尊敬し感謝しているからだ」

あの子は心のおもむくまま当たり前のことをしているだけだ
そんな所が享さん、あんたと良く似ている」

「そうなんでしょうかねえ」

お恥ずかしい話ですが、実は娘は不倫をしてるんですよ
妻ある男性と・・まさか我が子が・・・本当に驚きました
心臓が止まるんじゃないかと思うほど驚きました」

そんな娘に育てたつもりはなかった祖父は悲愴の色で胸のうちを
語っていた。

不倫を知るきっかけとなったのは鞆だった。

祖父母は母の誕生日にバッグを送ろうとしていた。

実家に戻った母が手にした傷だらけのバッグ

それを見た祖母が計画した誕生日のプレゼントだった。

お洒落の一つもしないで仕送りなどなければ新しい鞆も買えただ
ろう

祖母は母が不憫でならなかった。

少しずつ貯めたお金を持って祖父母はデパートに出かけていた。

「あなた、これを持って早苗に会ってきて下さい」

この中に旅費が入ってます 早苗もきつと喜びますよ」

ひと月分の食費に相当する大きな出費だった。

「いいのか」

「ええ、お願いします」

上京した祖父は何度か訪れたアパートの前で帰りを待っていた。足もとのタバコの吸殻が山になるうとしていた。

「やっと帰ってきたか」

声に目を移し慌てて物陰に身を隠した。娘のとなりには連れれの男性がいた。

「やだ悟朗さんの袋からねぎが飛び出してるわ」

「やっぱり、大きな袋にしてもらえばよかったな」

会わずに今日は帰ろう・・・

あいつにもやっと彼氏が出来たのか

ごろうさん・か よかったな・早苗

このプレゼントは近くのコンビニで送ってやろう

アパートを去ろうとしていた祖父は一人の女性と目が合った。

トレンチコートの襟を立てつばの帽子を深く被ったその女性に見覚えがあった。

「あつ、このアパートを行ったり来たりしていた女性だ」

その人はアパート前にある公衆電話で話しをしていた。

「あつ悟朗さん、祥子です 今日もお帰り遅いのかしら
えっ私、私は今日は予定がないの
そうよ、だからお家にいるのよ 家から電話してるのよ
わかったわ・・・先に休んでます」

口を一文字に結んだその女性はアパートを見上げていた。

とつさに駆け寄り声をかけた。

「すみません 随分長い時間このアパートで誰かを待っていたよう
ですね

なのに会わずに帰ってしまうのですか 何か事情があまりのよう
ですが」

「・・・・・・・・」

「突然の不躰で申し訳ありません
私にはあなたがさつき帰ってきた男女を待っていた
そんなふうに見えたものですか」

「私は・・・あの二人を・・・つけて来たわけじゃないわ
どなたか存じませんけどあなた本当に失礼だわ」

血の気が失せた女性は体を捻じめるようにして過ぎて行った。

「こんな馬鹿げた真似はしたくなかったがこれで証明できた
一緒に帰ってきた男は家庭を持つ身だ
よりによって妻ある男性と・・・なぜだ
まさか仕送りのため、お金のためなのか
いや断じて早苗はそんな娘ではない」

祖父には母を手塩をかけて大切に育てたという自負があった。

「俺も母さんも精一杯の愛情を注いできたというのに
なぜなんだ お前はなぜ他人の幸せを壊すような愛に走った
他人どころか自分の幸せすら潰しかねない愛に・・・
先の見えない愛なのに、お前の目には何が見えるんだ
その先に幸せを求めているのなら早苗、早く目を覚ますんだ
誰かを不幸にして手に入れた愛は人を幸せにはしてくれない
その人が流した涙の分だけお前の幸せは減っていくんだぞ
早苗、俺のせいなのか すべて俺の・・・」

死の原因は間違いなく借金だが母の不倫もその一因だった。
母の不倫は誰よりも人を重んじ慈愛に満ちた祖父を苦しめていた。

「美香のおじいちゃんを死に追いやったのはお母さんのの」

あの時の悲しみを背負ったような丸まった母の背を思い出ししていた。

母から聞かされた勝随和尚の話しを今も覚えていた。

「大切なものを奪い去られ悲しみに暮れようと起るすべてを受け入れなさい

大切なものを人から奪うことなど誰にも出来ないんだよ

過去は死と同じだ 人は現在をいまを生きている
これからも命ある限り生き続けなければならぬ

君の行動は父親の目からすれば愚かに見えたかもしれない
しかし君は自分の意思で直感で正しいとその道を選んだ
その結果がどうだったかは言わずしてわかるね

私が言いたいのは一つだけだ
自分のマインドを常にきれいにしてこれからを生き続けなさい
それが御両親にとって一番の供養になるのだから」

母は自分の愚かさに気づき懺悔の涙にくれたと話してくれた。

「あの時、わかったの

真実の目が涙で洗われ曇って見えなかったものが見えたのよ」

不倫の関係をきっぱり精算しよう それが一番の供養

母は自分にそう強く言い聞かたという。

東京に戻る母を友人の珠美さんが駅まで送ってくれた。

「専称寺に寄ってから帰るって言ってたでしょ、

だから此処で早苗ちゃんを待ってたの

駅まで送っていくから乗って」

「お店は？大丈夫なの雄哉君に叱られない」

「雄哉がね、見送って来いって

だから、さあ乗って」

「ありがとう」

駅に着くと次の列車の時刻までの時間はたっぷりあった。

「早苗ちゃん、サンドイッチ作ってきたんだ

まだ時間あるよね、ここで一緒に食べよう、はい食べて」

「うっ・・・」

「早苗ちゃん大丈夫」

「うん、ごめんね 少し気分がすぐれなくて」

「きつと疲れがでたんだね 無理しないでお茶だけでも飲んで」

「ありがとう 最近ずっとこの辺りがムカムカしてるの
味噌汁の蓋を開けただけでウツてね」

「それって私が妊娠した時のつわりみたいね」

「つわりってこんな感じなの」

「そうよ 胃に違和感を感じて吐きそうになったりするの
そのくせ無性に何かを食べたくなってるね

私はラーメンだったわ

朝から晩までラーメンばかり食べてたな

気がつけば私はそのラーメン屋の常連になってた

毎度くって声かけられて

いつものだよねって座っただけでラーメンが出てきたわ」

「珠美のつわりの話、笑えるね」

「笑顔が戻ってよかったあ
早苗ちゃんには心労だと思っけど無理しちゃだめだよ
一度病院で見てもらったほうがいいよ」

「いろんな事が有り過ぎたからバランスを崩しているのかもね」

「困った時はお互い様だから遠慮は無しだよ
何かあったらいつでも電話して、約束よ」

「うん、珠美ありがとう」

珠美さんは母のクラスメイトだった。

お互いに群れて行動するのを嫌う一匹狼的存在だった。

体育のダンスの授業をさかいに仲良くなったらしい。

二人一組の創作ダンスの課題で次々とペアが決まっていった。

そんな中で最後に残ったのが母と珠美さんだった。

それからの二人は一匹狼どころか一卵性双生児のように親しくな
った。

珠美さんは高校時代からのBFと結婚しその両親と酒屋を切り盛
りしていた。

若女将として酒屋の店番、住み込み従業員、家族の賄い・・・

何役もこなす負けん気の強い頑張りやさんだった。人扱いも上手で愛嬌のある珠美さんは酒屋の看板娘だった。

「雄哉の両親にも誰からも可愛がられ何もかも手中にした珠美が羨ましかった」

母は嫉妬心を抑えられなかったと正直に話してくれた。

後に珠美さんは子宮全摘手術を受けたことを母に打ち明けた。

「私はもう子供が産めない体なの

弟か妹を作ってあげられないのが・一番つらい私・ずっと一人っ子で寂しかったから」

母には生涯忘れられない珠美さんの言葉があった。

「いつも優しく支えてくれる人のために自分が幸せであることそれこそが皆への恩返し感謝に繋がると思ってる自分が幸せなら周りの人みんなもきつと幸せ、同じきもちそう信じたい」

母の脳裏に理想とする結婚・家庭が鮮明に映し出されていた。しかし現実には理想とはかけ離れた遠いものだった。

「これがつわりで妊娠したのなら4週め 妊娠2ヶ月」

妊娠・おなかの子供・母は覚悟を決めていた。

「肉親を亡くした私に残されたものは、このお腹の子供」

いつか一緒になれる日まで二人で頑張ろう
父との約束は母にとって効力のない誓約書になっていた。

「これからはこのお腹の子と二人で生きて行こう
父が心を痛めたこの不倫にけじめをつけよう」

そんな決意の一方で未練の女心がムクムクと頭をもたげた。
それを追い去るかのように勝随和尚の言葉が聞こえた。

自分のマインドを常にきれいにして生き続けなさい
それが両親への一番の供養になる

「お父さん、悟朗さんとは終わりにする
でも子供だけは産んでもいいでしょ

この子の命を消したくない
今のお父さんにならわかるよね
私、生まれ変わって頑張る・頑張って見せるから」

車窓の流れ行く青雲を見上げ母は誓っていた。

帰宅すると留守番電話の履歴が点滅していた。

「お帰り、大変だったね 僕は急な出張で日本を発つ
悲しみの君を抱きしめてあげられなくてすまない
君のために買った土産を持って真っ先に会いに行くから待ってて
くれ」

未練を残す母の思いは複雑だった。

肉親を亡くした悲しみは一夜で癒されるはずもなく
孤独感に襲われ母はかける相手のいない電話に幾度も手を伸ばし
ていた。

夜更けに誰かに電話をかけることなど一度もなかった母。

父との楽しいひと時を過ごした後、母はいつも一人だった。
魔法が解けてゆくように母はいつも一人の世界に引き戻された。

父を独り占め出来るのは二人で過ごす時間だけだった。

「自宅に帰ったらあの人は奥さんのもの
今頃、奥さんと何をしているのだろう
夫婦なら一緒にいるのは当たり前なのに」

すべて承知の上で愛した筈なのに不安で眠れぬ夜が幾度も襲って
きたという。

父が独身なら母はこんなに悩むことはなかっただろう。
愛する人と朝まで眠りにつきたい日もあったという母の女心気持
ちが痛かった。

女の幸せを求めようにも母の抱く願いのすべては叶わぬ夢だった。
母がぼつり言った言葉が胸に響いた。

「不倫とはそういうもの・・・満たされない愛ゆえ燃えさかるのよ
でもその愛は幸せをくれない・・・誰ひとりも幸せになれないの」
父には守らなければならぬ家庭があり奥さんがいた。

愛人の母は父を煩わせ重荷になることを嫌った。

愛の欲望のいかなる感情も制してきた。

我慢してきた愛に気づいた母は電話に手をかけた。

父の幻影？

「珠美、いま大丈夫」

「みんな寝ちゃって一人でテレビ見てたんだ
早苗ちゃん少しは落ち着いた」

「うん、あれから病院に行ってきたの
鬱じゃないけどそれに近い症状って言われて驚いたわ
それで体の調子がおかしかったのね」

「おじさんとおばさん・・・突然だったからね
体つらいんだったら家においてよ こっちに帰ってきたら？」

「ありがとう
でも今は動けない・・・動く気力が出ないの」

「本当に一人で大丈夫なの」

「体はどこも悪くないって医者のお墨付きだから大丈夫
ただ・・・悲しみがどんどん増してる
お母さんにしてあげたかった事いっぱいあったの
いろんな所に連れて行って美味しい物いっぱい食べてもらいたか

った

お父さんとだって・・・もっというんな話をしたかった
いっぱい話をしてお父さんの話を聞いてあげればよかった

そしたら、両親の不仲に気づき何とか出来たかもしれない
父の死を思いとどまらせられたかもって後悔ばかり
こんな別れは・・・つらい・つらすぎるよね

「思いつめちゃだめだよ
自分を責めるのは体によくないんだから」

「わかってる だけど出来なかった事はかり浮かんでくるの
珠美の言うように自分を責めるのはよくないってわかってる
過去は死と同じ・・・これは勝随和尚の言葉なの
どんなに責めようと出来なかった事を悔やんでも過去はもう戻せ
ない
だったら、これからの私に何が出来るかを考えようって思ったの
あからずつと独りで考えてた」

「・・・」

「聞こえてる」

「うん」

「珠美、これから私が話すことよく聞いてね」

「うん」

「お父さんが死を選んだのは私が原因
私のせいでもあったの」

「早苗ちゃんの？」

「私・・・不倫をしていたの
それを知って、それでお父さんは死を選んだ
借金で相当まいつっていたのにさらに私の不倫
死の引きがけを引かせたのはきつと私」

「・・・」

「驚いたでしょ」

「しっ、ん、ん」

「誰かに話してそれで罪が許されるとは思っていない
だけど黙っているのがつらくて誰かに話してしまいたかった
たった一人、珠美にだけは隠さず話そうと思った」

「罪がどんなものなのか私には分からないけど
話して楽になれるんだったら何でも聞くよ」

心の病は溜め込まないで吐き出したら良くなるから聞いてあげる」

「私・・・いま父に対する二つの感情に戸惑ってるの
一つは私が不倫をしたという父に対する罪悪感
そして母に手にかけて私をひとり残し逝った父への怒り
この存在する感情をどう受け入れていったらいいのか分からない」

「救ってやれるような言葉が見つからない　ごめん
でも現実を受け入れれない限り苦しみはなくならないと思うんだ
疑念の心があったら又そこから新たな苦しみや悲しみが生まれる
もう過ぎたことを考えるのはやめにしない？終わりにしよう
冷たい言い方だけれどそれが楽に生きられる方法だと思うから」

「両親の死を受け入れられずいっぱい泣いて悩んで苦しんだ
人生って儚いんだなってしみじみ思った
家族との平穏な日々の積み重ねが幸せに繋がっていた
そして・・・その幸せが永遠でないことを知った
今、孤独が一番つらい　でも私負けない　頑張るからね」

「孤独の世界に逃げちゃだめだからね

内にこもつたらもつとつらくなるだけだから

つらい時は他人の力を借りていいんだからね

おじさんおばさんがいなくても早苗ちゃんには帰る古里がある

私がいることを忘れないで

雄哉だつて雄哉の両親も皆んな心配してる」

「珠美ありがとう うれしくて泣きそう」

「泣いてもいいよ

いっぱい涙を流したらまた元気になれる

気がすむまで泣いたらゆっくり眠ってね

一人じゃないよ、私がついているずっと一緒だよ」

母は大切な人が残っていたことを知った。

不倫の愛に溺れていたことが絵空事に思えたという。

手に届くところにあつた大切なものを見つけた母は変容した。

「君には僕がいる」父の言葉はすでに空を舞う薄っぺらい紙切れだった。

珠美さんの言葉が居座り続けた母の深い嘆きを解き放した。

繰り返し母が言った言葉を思い出した。

「虚偽のない人の愛に触れると人は元気と勇気がみなぎるのよ

美香、出会った人との縁は大切にしなさいね」

心に曇り持つ不実の愛に母は別れを告げようしていた。

／いま成田に着いた

いまからそつちにむかう／

別れを切り出さなくてはならない母は喜べなかった。

父は母の心変わりを見抜けなかった。

「私・・・妊娠しているの」

「・・・本当なのか」

「ええ、あなたの赤ちゃんよ」

「.....」

「困惑してる?」

「あついや、そうじゃない

子供が出来ないのは自分のせいだと思っていた
だから面食らっている

子供か僕の遺伝子を残せるのか
夢のようであげたいほどだよ

嬉しくてたまらない、本当に嬉しいよ
早苗、ありがとう 元気な子供を産んでほしい
こんな言葉しか言えなくてすまない」

「ありがとう 気持ちを聞けてよかった
これで・・・きっぱりお別れできる」

「別れる 子供が出来たのになぜ」

「ごめんなさい、もう決めたの
子供は私が一人で育ててゆきます」

「子供・命を育てて行くのは君が思ってる以上に一大事なんだぞ
君一人が簡単に決められることじゃないだろう？
お腹の子は君と僕の子供なんだ
一人で君はどうやって育ててゆくつもりなんだ」

「わからない今は何も・・・でもこれだけははっきり言える
私たちの関係を終わった
だから悟朗さんは家庭に帰って奥さんのところに戻ってください」

「むこうで何があったんだ
何があった？何か言われたのか」

「色んなこと沢山ありすぎて思い出したくないわ
聞かないでお願い、私に思い出させないで
私もう、何も思い出したくないの」

「早苗、落ち着こう
今君の思考は上手く巡っていない
両親の死に混乱して少しおかしくなってるんだよ」

「おかしくなっている？そうじゃないわ
おかしかったのは今までの私で今の私じゃない」

「なにを言ってるんだ」

「私は許されない愛に走った
その愛に私は自分どころか周りのことも見えなくなっていた
でも大切なものを亡くして色んな事を考えさせられたわ

父のこと・母のこと私を支えてくれた人達のこと
そして気づいたの
人を苦しめ裏切るような生き方をしているのならそれは間違った
道だって

だから別れる選択をした」

「教えてくれ、君に見えたものを」

「それは・・・」

あなたの大切な人は私じゃないってこと
大切にしなければならぬのは築いてきた家庭
そしてその家庭であなたを待つ奥さんだったのよ」

「しかし・・・状況が変われば大切なものだって変わる」

「奥さんを妻にしようと思ったのはあなた自身でしょ
奥さんの人生まるごと引受けた責任は重いわ

男の人って大変だなって思ってる
女にだけ産みの苦しきがあるのは不公平だとは思わないわ

世間の荒波を掻い潜る男の一生分の涙は産みの苦しみに匹敵する
と思ってる

男の人生ってそれくらい重いからこそ道をそれたり寄り道したくなるんだわ

誰にだって過ちの一つ二つはあるわ
道をそれたら直す・寄り道したら遅くなっても帰ればいいのよ

軌道修正して又歩きだせば過ちは正されるでしょ
そしたら誰かを不幸にすることもないし人生を踏み間違えずにす

むわ

それぞれの納まる場所に戻らなきゃだめなのよ」

「・・・・・・・・」

「私のこと本当に愛していた
神に誓って何の曇りもなく愛していたと言える？」

「・・・・・・・・」

「お母さんと過ごした幼少の話をあなたは話してくれた
私が若かりし母と似ているって嬉しそうに言ってくれた

一緒にいると母を思い出し懐かしい故郷を思い出させてくれる
俗世のいやな事も忘れ癒される、だから早苗といるのが楽しい
そういつてくれた言葉を私は何気に聞き流してきた
それどころか愛されていると思いつ込んで喜んでいたわ

「だけどそれって愛なの、あなたが私を愛する愛って何」

「愛には色々な形があるのだから何の不思議もないだろ
早苗を思う気持ちに嘘はない
愛している それだけではだめなのか
僕になにが足りなくて・君は何を求めているんだ」

「私は悟朗さんに何かを重ね見たことなど一度もない
あなたしか見えなかった

あなたが欲しくて求め、あなただけを愛してきた
あつた時から思いはずっと同じ変わらなかった

出会った日、私は初対面のあなたを家に誘っていた
前にも言っただけで男の人を招くなんて初めてだったのよ
自分でも驚きだったわ

出会った瞬間から私は愛していた
でも・・・あなたは違ってたんだわ

僕は妻帯者だ・あの時の言葉の意味がわかったの
あなたには私とこんな関係になる感情などなかったのよ

強引な誘いに断りきれず一途な思いに負けて付き合ってくれた
あなたにとってはただそれだけの事だった、間違ってる？
黙ってないで何でもいいから言葉を頂戴」

「君が僕を怒らせて別れ話に持ち込もうとしているように思えてな
らない

今の君を説得出来るだけの自信も言葉もない

でも聞いてくれ

僕は浮ついた気持ちで付き合っただことなどない

妻ある男の責任は取る覚悟で君と関係を持ち将来を考え関係を続
けてきた

簡単ではないがいつか一緒になろうと誓ったじゃないか
忘れたわけじゃないだろう」

「私だって何もかも承知のうえだったわ
奥さんのある人を愛したんだから何も望まないで
あなたを愛しぬくって覚悟を決めていた

だけど何も望まないなんて出来っこないのよ

愛したら愛した分だけ欲しくなる あれも・これもって
妻の座まで欲しくなって奥さんが恨めしくなっていた

感情がエスカレートして憎しみに変わっていた

家庭ある人を愛してその奥さんを恨むなんて罰あたりだわ

私があなたの奥さんに抱いてもいい感情があるとしたら

それは謝罪とお詫び以外に何も無い

そんな当たり前のことでも忘れるほど私は嫌な女になっていた

そんな醜い自分が恐くなったわ 自分が大嫌いになった

自分を愛せないなら人を愛することも無理なの

誰かを大切には思えないし幸せにも出来ない

これ以上醜い心を持ち続けたら鬼・私は人じゃないわ」

「君に罪があるのなら僕も同罪だ

一緒に償って生きてゆく、その選択さえもないのか」

「裏切り続けた私達と一緒にになりたいからといって
奥さんから奪っていいものなんか何も無い

奪いとつた家庭と愛を手にしてそれが幸せと言えるのかしら

人を裏切って悲しませ苦しめるのはもういや

父は私の不倫に苦悩して死んでいったわ

また人を死に追いやるようなことはもうしたくない

あなたの奥さんが同じ事をしたらと思うと体が震える恐いの
あなたとこうしていることも正直つらい」

「お父さんの死が不倫のせいだとしたら僕にも責任がある
君だけが苦しむことはない 僕も一緒にその苦しみを受ける」

「もう止めて、して欲しいことは一つだけ
奥さんの所に戻って何もなかったように夫婦を続けることよ
ここに置き忘れたあなたのお母さんと故郷の思い出を連れ帰って
今日は帰って・・・ お願い」

「最後に聞かせて欲しい
もう僕とはこれっきりにしたいんだな
君の気持ちは本当に変わらないんだね」

「ええ変わらないわ」

「わかった 君の気持ちを優先するよ」

「ありがとうございます」

引越し先が見つかるまで、ここにいてもいいですか
急いで見つけて出て行きますからお願いします」

「引越しの件は待つてくれないか」

せめて子供が生まれて落ち着くまで此処で暮らして欲しい
君が働けるようになるまで僕が君の面倒を見たい見させてくれ
僕の子供をこの手に抱きたいんだ

一緒に育てられないのなら我が子と過ごす時間がほしい
君の要求を僕はのんだ 今度は君が僕の気持ちを汲んでくれ
頼むこの通りだ」

子供の誕生を待ち焦がれる父の気持ちは痛いほどわかっていた。
しかし何か一つを許してしまうと決意が鈍るような気がして躊躇
ったという。

「わかりました でも男女の関係は今日で終わりにします
悟朗さんが子供の父親でいられるのは私達がここで暮す期間だけ
にして下さい

奥さんにはこれまでのように知られないようにして下さい

女は男の浮気には敏感だからもう気づいているかもしれない
でも子供の事だけは絶対に奥さんに知られてはだめ
証拠を突きつけられても何があっても・しらを切ってください
子供の出来ない奥さんには愛人より子供の存在の方がつらいはず
だもの」

「誰も泣かずに上手くいく方法なんかないのかもしれないな」

「私達は泣いてもそれは自業自得
でも奥さんを泣かせてはいけないわ
せめてもの償いで奥さんを守ってあげなければ・
嘘をつくことになってもこの嘘なら神は許してくれるわ」

母の決意はゆるぎなかった。

父はそんな母の申し入れを受入れざるなかった。

愛を精算させた二人は本妻を守ることですうじて繋がっていた。

父は仕事でどんなに帰りが遅くなるうと美香の顔を見にきた。

ある日、美香の発した言葉に母は慌てた。

「パッパ・・ば・ばー」

母はすでに新居を見つけていた。

「悟朗さん、美香と明日ここを出て行きます
今まで本当にありがとうございました」

「そうか 今日でおわりか
とうとう美香ともお別れか」

2歳の誕生日が目前に迫った6月のとある日父との関りを絶った。
父はいつまでも美香を抱きしめ泣き咽んでいたという

その後、母は小さな幼児向けの英語教室を開き生計を立てた。

美香の側にはいつも母がいた。
寂しい思いした記憶はひとつもなかった。

しかし無邪気な生徒も時に大人顔負けの質問を浴びせた。

「美香ちゃんにはパパがいないって本当
お父さん死んじゃったの 先生、離婚したの」

明らかに大人の会話を聞いている質問だった。

「先生にそんなこと言っちゃだめでしょ すみません」

「気にしないで下さい

この年齢の子供は何でも知りたがって疑問をストレートに投げかけてくるものです

こんな時、皆さん大人は逃げないで向き合ってください

今から先生が美香のお父さんのお話をしますから聞いてね

先生はね、結婚の約束してた美香のお父さんとさよならしたのだから美香にはお父さんがいないのよ

その時先生のお腹には赤ちゃんがいたの、それが美香

ねえ皆、命は大切なものよね

小さな虫さんにも大きな木や葉っぱにも命がある

先生は命あるものすべてを殺したり粗末に出来ない

皆もそうでしょ、だから先生は美香を産んだの

美香にはお父さんがいないけどこれからよろしくね」

人生に隠さなければならぬ過去などない

私達母娘に暗い過去はない

なぜなら過去は死そのものだから

美香と私は今を生きている

未来だけを見つめひたすら生きていく

胸を張って生きてその姿を子供に見せ続けることが親の私の責任

そう言い切って抱き締めてくれた母の優しい笑顔を思い出した。

子供に問われたことなど口を濁し繕えばよかったのかもしれない

けど

それは自分の歩いてきた人生を否定するのと同じなの
あの時正直に話せてよかった すっきりしたあの爽快感今も覚え
ているわ

話し終えた母の自信に満ち凜と輝く姿が忘れられなかった。

子供を身ごもった今たった一人の肉親・父の存在は恋しいものだ
った。

「母には過去でも私と父は・・繋がっている
母の愛した父は今も健在なのだろうか

父に会いたい・父の腕に抱かれた昔のように抱きしめてもらいたい
父の温もり・・愛に触れてみたい」

童心にかえった美香は涙顔を両手で覆い肩を大きく揺らしていた。

たぐり寄せれば

雅和と佐知の関係は美香をも巻き込んで展開していた。

「親父の忘れられない人それが佐知の実母

そして二人の間には子供まで・・

よほどの因果があるんだろうな別れた佐知と俺は」

別れた佐知さんとの新たな出会いには意味がある

美香が言った言葉を思い出していた。

雅和は佐知との縁を断ち切るか引き寄せてみるべきか悩んでいた。

美香さんに話してみるか

雅和の最後の抛りどころはいつも美香だった。

連絡をしようとしていた矢先の訪問に美香は驚いていた。

「雅和の突然の訪問は何かあるから恐いわ

また・・なにかあるの？」

「今日は親父と佐知のことを聞いてもらいたくて来た」

眼光鋭く光る目に美香は一瞬たじろぐほどだった。

いつもなら突っ帰すところだがあの夜のように部屋に入れた。

「そんな目で見つめないで恐いわ」

「あつごめん

俺、そんな怖い目してた」

「ええしてたわ

ちよつと待つてて珈琲入れてくるから」

立ち昇る珈琲の香りは雅和の乱れた鼓動を鎮めてくれた。
珍しいことに珈琲に口も付けず雅和は話を始めた。

「美香さんに聞いて欲しいのは親父の過去なんだ

親父には由里子さんという恋人がいた

その恋人は親父の子供を産んだ

ここから先が重要だからよく聞いて…

親父の恋人は佐知の母親だったんだ

佐知は両親を幼い頃に事故で亡くし施設に入り現在は養子先で暮らしている

彼女が親父の子だという証拠は何もないけど親父の子なら俺達は義兄妹だ

親父と佐知の母親が愛し合い子供がいたことは間違いない事実なんだ

今となつては真実を語る人はみんなあの世・別世界だからどうしようもないけどね」

「佐知さんは自分の出生をどこまで知っているのかしら」

「親父から聞いた限りでは養女のことは彼女もわかっている
親父と佐知は親交があつたんだ

俺の親父とも知らないで佐知は親父と会っていた

俺はそんなこと全く知らなかつた

それを知つた俺は・・二人に嫉妬した

それが原因でひと悶着あつて佐知と別れた

思えば俺と佐知のまわりには色んな因縁が渦巻いていたんだ」

「佐知さんが雅和のお父さんの子供なら二人の愛は禁断の愛ね
とつても複雑で切ない悲恋物語の小説が書けそうだわ」

「俺は真剣に話をしているんだから茶化さないでくれよ」

「そうね、ごめんなさい

今回だけはクイズみたいにはい・わかりましたって訳にはいかな
いわね

真実の答えは簡単にでるものかしら

真実は深くて鉋山を掘り当てるようなものだわ

沢山のアンテナを張らないと答えはでないと思うの

佐知さんがアンテナの一つだとしたら会うべきじゃない」

「一度会って話すべきかもな」

「そうね、それがいいわ

やっぱり佐知さんとの縁には意味があったでしょ
会って話したら答えみつかるかもしれないわ」

「佐知の実母と親父との関係をどう切り出すかが問題だな
実母の過去を知らされた佐知は驚くだろう

俺と同じようにきつと悩み苦しむ

そして俺は余計なことをしたと後悔するんだろうな
幸せならこのままそっとしておく方がいいと思ったり
佐知の気持ちを考えると俺は決心がぐらつくんだ」

「子供には親を知る権利があるわ

佐知さんだつて実の両親のこと知りたいと思っ
ているはずよ
養父母に遠慮があつて聞けないかもしれないわ

でも知りたくないはずがないわ

たとえ親が悪人であつても知りたいと思つ
のが血を分けた肉親の
情でしょ

佐知さんが何も知らないのなら知るべきだわ

それで苦しんだとしてもその後の人生は意義深
くなると思つわ

「美香さん、やけに熱くなつてない？」

佐知さんの気持ちはきつと私と同じ、私にはわかる
美香は父親を思い出し自分の思いも一緒に吐き出していた。

「雅和はお父さんの過去を自分の手でこじ開けたのよ
過去と割り切ってそのまま封印できたものを雅和が穿り返した
だったら途中で放り投げるのは卑怯だわ
このままでいいの、それで心は晴れるの
最後まで見届けてまた静かに眠らせてあげましょうよ」

「.....」

「会ってこの話をするもしないも疎の時に決めればいいの
まずは会うことから始めないとね
繋がった佐知さんの糸をたぐり寄せればきつとそこから何かが始
まるわ」

「俺、来月友人の結婚式で向こうに行くんだ
ほら前に話した龍一と真砂子、あの二人が結婚するんだ
きつと佐知も真砂子の友人で列席するはずだからその時」

「佐知さんに会ったらペンダントのお礼を言ってね
大切なペンダントを届けてくれて喜んでいたって」

雅和の耳に美香の声は届いていなかった。

「どんな言葉をかければいいんだろ
元氣っていうのも・・・なんか違うしな」

雅和は佐知との再会に思いを馳せていた。

そんな雅和を見つめる美香の目は悲しみ色に染まっていた。

わたしは佐知さんの影に脅えている・・・

突然湧き上がった不安に美香の心は千々に掻き乱れていた。

気持ちを沈めようとペアカップを持ち美香はキッチンに姿を消した。

雅和の問題が落ち着くまで妊娠を切り出すのは無理だと思った。

佐知さんとの再会を強引に薦めたのは私なのに・・・

美香は落ち着かない様子で郷里に向かった雅和の帰りを待っていた。

そのころ雅和は龍一と真砂子の結婚式会場にいた。

会場にはサラ・ブライトマンの美しい歌声が流れていた。

招待客を優雅にお迎えする細やかな演出が見事になされていた。

芸能人の結婚式と見間違っような雰囲気と規模に圧倒されていた。

龍一の家は代々、莫大な山林や土地を所有する資産家だ。

不動産、レストラン、リゾート施設を展開する伊納グループのト

ツプが龍一の父。

伊納グループと付き合いのある富裕層の迎賓客が続々と会場入りしていた。

入り口で気後れしている雅和に友人の声がかかった。

「おい井川、こっち早く来いよ」

懐かしい面々に雅和は安堵し会場に入ってしまった。

一足先に会場入りをしていた佐知は高校の友人達とテーブルにつき談笑していた。

時々周りを見渡しながら誰かを探していた。

「どこにいるのかしら このどこかにきつといるはず」

誰かが雅和を呼ぶ声もこの広さでは虫の声に過ぎず佐知の耳には届かなかった。

拍手に包まれ幸せいっぱいの新郎新婦が入場した。

想像を超える真砂子の花嫁姿に佐知は胸を熱くしていた。

龍一と真砂子の長い春を知る佐知の喜びはひとしおだった。

真砂子はスポットを浴びる女優さながらにまぶしく輝いていた。

龍一の端正な顔がいつに増して引き締まって見えた。

層層たる来賓者を前に余裕さえ見せ堂々たる立ち姿はまさしく伊納グループ総統の御曹司。

真砂子の実家はうなぎ・ふぐ料理を各地に展開している老舗割烹店。

龍一の父と真砂子の父は大学の先輩と後輩の仲。

二人に障害は何ひとつなく両家に祝福された理想的な結婚だった。

伊納グループの跡取り龍一と真砂子は本当にお似合いだった。

好きな人と結婚し幸せを独り占めしている真砂子が羨ましく思えた。

「真砂子はこのまま幸せのまま一生を終えるんだろうな

ううん、そんなわけない

人生はそんな安易でなまっちょろいものじゃないわ

真砂子だってちゃんとわかってる 人生そんな甘いもんじゃない
って」

御伽噺に出てくるお姫様のような真砂子を見ていると不幸とは無縁に思えてならなかった。

お色直しに席を立った真砂子の控え室に佐知の姿があった。

控え室は無駄に広く奥の応接室では親族らが寛いでいた。

かつらを外した真砂子は歌舞伎の石橋の赤獅子のように頭を振った。

「苦しかった〜 死にそう・・・
佐知、この帯を緩めてくれない」

「私には無理よ

それにかつらを持っていった人が言っていたでしょ
衣装の人が来るまでそのまま待っていてくださいねって」

「ふうふう〜 仕方がない、待つしかないか」

佐知はホテルのパンフレットで真砂子の体を扇いでいた。

「佐知、雅和と話はできた？」

「ううん、話どころか何処にいるのかも分らないわ」

「そうか、あそこじゃ探せないかもね

でも大丈夫 二次会で話すチャンスはいくらでもあるわ」

「私、二次会は遠慮しようかと思ってるの」

「だめ・だめだからね

つめたいなあ佐知は・・・親友の結婚式なのよ」

「……………」

「雅和のことは抜きにして私のために顔を出して、お願い」

「うん、わかった」

ドレスに着替えた真砂子を見届け佐知は部屋を出た。

パウダールームの出口の段差で佐知は足を挫いていた。

7・5センチのヒールで躓いた足首のダメージは思いのほか大きかった。

引きずるように数歩進んだ足に激痛が走った。

「いたっ、これじゃ二次会は無理かも」

あまりの痛さにその場で靴を脱いで捻った足首を擦っていた。

ピンヒールの靴を片手に壁にもたれるようにして痛みを堪えていた。

会場を抜け出した雅和はてっちゃんからのメールに目を通していった。

ノクレームの件はクリアした 日帰りは不要・ゆっくりして来いノ 雅和が会場に戻ろうとした時プルシャンブルーのドレスの女性に

息を呑んだ。

その人の名を雅和は思わず叫んでいた。

「佐知 佐知だろう」

雅和の姿を見た佐知は驚きと動揺を隠せなかった。

早く返事しなさいよ なんでもいいから返答して
そうしたいけど出来ない 声が出ないの
そんな顔しないで早く笑って 笑顔を見せるのよ早く
出来ない それも出来ない・

そんな佐知のそばに雅和が駆け寄ってきた。

「こんなところで靴なんか手にしてどうしたんだ」

「そこで躓いて」

「大丈夫か 相変わらずだな
今も変わらずそそっかしいんだな」

覚えていてくれた 私の性格をまだ忘れずに
こみ上げた嬉しさを隠し佐知は床に置いた靴に足を入れた。

「うっ・いたあ」

「痛むのか？そんなヒールの靴じゃ歩けないだろ
無理するな ほら俺の肩に捕まって」

「……………」

「遠慮するなよ 歩けないんだろ
此処にずっといるつもりか
早く戻らないとお色直しの真砂子がきちちゃござ」

「じゃ・・・お願いします」

そんな二人の様子を真砂子は目にしていた。

「あの二人いまもお似合いね」

雅和に体を支えられ席に戻った佐知の胸は高鳴っていた。

バラードの曲と一緒に会場のライトが少しずつおちていった。
驚くような効果音がしてセンサーで各テーブルのキャンドルに火
が灯っていった。

一番の盛り上がりを見せるキャンドルサービスの演出に大きな拍手が湧き上がった。

YOU RAISE ME UP の曲が心に染みだ。

豪華な際立つ炎の美しさを見つめながら佐知は思い出した。

雅和と過ごした夜のクリスマスツリーのライトと重なっていた。

会場に明かりが戻ると佐知は雅和の姿を追った。

賑やかな盛上がりを見せるテーブル席に雅和の姿が見えた。

二度と見られないかと思っていた大好きな笑顔があった。

グラスを持ち上げ乾杯する雅和の顔は久しぶりに見る笑顔だった。

「ここに来てよかった」

二次会は残念だけでもうこれで十分だわ」

エンドレスラヴが流れ聞こえた。

披露宴も佳境に入り落ち着いた大人の雰囲気の中での花束贈呈。

そのとき佐知は背中に人影を感じ振り返るとそこにいたのは雅和だった。

中腰の雅和は佐知にメモを握らせ無言で立ち去った。

出口で見送りを受ける披露宴の酔い覚めやらぬ客人は長い列をなしていた。

さすがにこの人の多さでは外に出るのも一苦労だった。

雅和は仲間らとまだテーブルで話し込んでいた。

二次会の断りは電話で伝えようと佐知は真砂子と短い言葉を交わし別れた。

佐知は渡されたメモが気になって仕方なかった。

メモをバッグから取り出し化粧室に飛び込んでいた。

家に帰ってから読もうと思っていたメモを開いていた。

「何が書かれてるのだろう」

期待と不安にメモを持つ手が震えていた。

佐知は閉じた瞼を静かに開き懐かしい豪胆な文字を目で追っていた。

／足は大丈夫か・その足じゃきつと二次会は無理だろうな
俺は日帰りでごっちに来たから二次会には出ないで帰るよ

もし佐知がこのまま家に帰るつもりなら会って少し話さないか？
式場に来る途中、懐かしいアーケード街をまわってきたんだ

昔よく待ち合わせした喫茶店がまだ残ってたよ

『SIGNPOST』佐知も覚えているだろう あのお店で会おう／

佐知はホテル近くの靴屋に入った。

ロウヒールの靴に履き替えた佐知は足の痛みも忘れ喫茶店へ急いでいた。

目を凝らさなければ見落としそうな小さなお店

『SIGNPOST』は昔のままの佇まいを見せていた。

「いらっしやいませ

あら随分のご無沙汰だったわね 元気になさってた」

「私のこと覚えているのですか」

「いつも微笑ましく眺めていたのよ

自分の若かりし甘酸っぱい思い出が甦ってキューンとしたわ

あっごめんなさい

こんなところで立ち話も変ね こちらにどうぞ」

メニューに手をかけた佐知にママが尋ねた。

「今日はおひとり？」

「ここで人と会う約束をしているんです」

「そう、だったら注文はその人が来てからでいいわよ」

「すみません」

佐知はメモを何度も読み返していた。

「どうぞ これでも飲んで時間をつぶして」

「ありがとうございます」

昆布茶を置いたママは昔と変わらぬ笑顔を見せカウンターに戻っていった。

黒髪のショートボブも其のままにエキゾチックな南国の匂いを今も漂わせていた。

常連と思わしき男性らとの会話が聞こえてきた。

「あの頃の日本経済は右肩上がりだったよ」

「まじめに働いていれば給料は上がりそこそこ昇給も出来た」

「あの頃はインフレで物価も上がって母はやり繰りに苦労してたわ
たしか10円か20円のキャラメルが10円も高くなって
私も驚いた記憶があるもの」

「一番はなんといってもオイルショックの時だろ」

「あの時は狂乱物価の言葉が飛び交っていたな」

「今は物価は下がっても給料も一緒に下がってる
終身雇用制度も崩壊している今のほうが
俺達の頃より厳しいのかもな」

話の内容からするとママは母と同世代のように思えた。
しかしママは明らかに母より10歳は若く見えた。

「いらっしやいませ お久しぶりですね
彼女なら向こうでお待ちになってますよ」

ママの指差す佐知を見ながら雅和は照れ笑いを見せた。

「だいぶ待ったんだろう
なかなか抜け出せなくて・・・ごめん」

「みんな久しぶりだもの話は尽きないわ
ママがね、私たちのこと覚えていたのよ
この昆布茶もママからの差し入れなの」

「そういえば「お久しぶり」って声かけられた

お店の人はいろんな人を相手にするわけだからそれを考えるとすごいね

「ご無沙汰だった俺と佐知を忘れていてくれたなんて

あのママがいる限りこの店は永遠だな」

「ねえ何か頼みましょう

雅和が来てからと思って注文してないの」

「あっごめん じゃ俺は」

「ストロング珈琲でしょ」

「覚えてたのか 佐知はレモンティーとホットケーキだったね」

「ええ随分昔の事なのにお互いの注文をまだ覚えてる おかしいわね」

銀のトレイを持ったママがホットケーキを差し出して言った。

「何年かぶりに来てくれた二人に感謝をこめて

今日は特別にイチゴをそして珈琲は飲み放題よ

ゆっくりしていいってね」

「ママはいつも生クリームの上に果物をのせてくれた
キウイ・メロン・びわ・パイナップル・巨峰・その時々
の果物がのつていたわ

メニユーの写真には果物がなかったからサービスなんだって嬉しかった」

「喜んでもらえることは私にとって一番のご褒美よ
珈琲のお代わりは遠慮しないで声をかけて頂戴ね」

「ありがとうございます」

呼吸を合わせたかのように二人して頭を下げていた。
それはごく自然で二人にはもう垣根はなかった。

「実は俺、龍一の結婚式のあと佐知に会おうと思ってたんだ
聞いてもらいたいことがあってそれでここに来てもらった
驚かせることになるかもしれないけど聞いて欲しい」

「.....」

「まず親父のことから
まわりくどい話は嫌いだからはっきり言う」

佐知が知ってる柳木沢・俺の親父は君の実母と恋人同士だった
そして、」

「まって私の・・・実母の恋人が柳木沢さん？
雅和のお父さんって本当なの」

佐知は雅和の言葉を遮断し声をあげた。

実母の手紙に書かれていた『柳木沢和人』は雅和の父・柳木沢だ
った。

「俺の親父が君のお母さんの恋人だ
そして君のお母さんは妊娠して」

「分ってる、母は子供を産んだ」

「君は何もかも知っているのか だったら俺に教えてくれ
親父と君の実母・由里子さんの事を全部話してくれないか」

佐知は手紙の柳木沢が他人に思えなかった訳がやっと分った。

母が愛した柳木沢和人その人は佐知が出会った柳木沢と一本の線
で繋がった。

柳木沢さんは私に母の面影を見たのかもしれない

だから君と会つのが嬉しいと言つた

体を流れる母の血が私と柳木沢さんを引き会わせてくれた

雅和との出会いも、こうしてまた雅和と会えたのもすべて運命

佐知は母が語れなかった真実を炙り出すかのような出会いの数々を思い出していた。

たぐり寄せれば？

俯いたままの佐知の横顔を雅和は静かに見つめていた。
佐知の頬に一粒の光るものがはつきり見えた。

やはり佐知に話すべきではなかったと雅和は後悔していた。
二人は言葉を失い長い沈黙のまま向かい合っていた。

「俺は余計なことしたようだ・・・すまない」

「いいの 私が実母の事を知ったのは最近なの
施設が取り壊される事を聞いて施設に行った疎の時」

「そこで子供の存在も知ったのか」

「ええそうよ」

母が残した遺品の中に手紙があったの
手紙は箱の底を二重にして隠してあった
誰にも知られたくない手紙だったのね

私はその手紙の宛名をみて驚いたわ
母と私は同じ苗字の人と出会っていたんだもの

こんな偶然があるんだって不思議に思ってた・・・今日まで

いま雅和のお父さんと母が恋人だった・それを聞いてわかったわたし手紙の柳木沢という人に親近感を持ち他人と思えなかったその人の影が雅和のお父さんと重なって見えていた

柳木沢和人様と書いてあったその人が雅和のお父さんだとわかって嬉しいの

母が愛した人が雅和のお父さんなら私が惹かれたのも不思議じゃないわ

だから柳木沢さんは母に似た私と会ってくれた」

「聞きにくい話だけど気を悪くしないで聞いて欲しい

子供が出来た君のお母さんは親父との関係をどうしようと思っていたのかな

君は親父の子供なのか？教えてくれ」

「私は死んだ両親の子供よ」

「だったら教えてくれ

親父と君の母親の間に出来た子供のこと」

「母の手紙に書いてあったわ

雅和のお父さんが出張の時、母は電話で呼び出され再会した

柳木沢さんへの溢れる思いが綴ってあったわ

あの時二人は関係を持った　そして母に子供が出来た

母は一人で育てる覚悟だったから柳木沢さんには何も告げなかつ

たの

子供は男の子だった 和人の和、由里子の由で『和由』」

「和由、親父の一字が入ってるんだな 俺と同じだ」

「和由兄さんは母の実家の墓に祭られているの」

「・・・・・・・・」

「母とあなたのお父さんの子供はすでに亡くなって

わずかな命でこの世を去った和由という人はもう存在しないの
でも和由兄さんは雅和と私を繋ぐ大切な人だと思ってる」

「・・・・・・・・」

「雅和がもし母を憎んでいるのなら母を許して

私は女だから母の気持ちができるの・・・ごめんなさい」

「許すとか許さないとかそういう事じゃないよ

俺は親父の子供が佐知なのか・それが知りたかった

正直俺は親父の子が佐知でないとわかってほっとしてるんだ」

「私も兄妹でなくてよかった
もし兄妹なら思い出がめちゃめちゃになっていたわ」

「俺一人っ子だから腹違いでも和由兄さんと会ってみたかったな」

「だめ・そんなこと絶対だめよ」

和由兄さんには悪いけど兄さんが存在してたら母は父と結婚しな
かったわ

私は生まれなかったし・・雅和にも会えなかったのよ
それでも雅和は死んだ兄さんと会いたいと思うの」

「そんな真顔で聞かれても・・」

俺は思ったことを口にしたただけだからさ」

「今更そんなこと聞く私の方がどうかしてるわね」

「佐知、俺は君と会ってよかったと思ってる」

君にこの話をすべきか気が重くてずっと悩んでいた

そんな時美香さんが言ったんだ

佐知には親を知る権利がある・それで苦しむことになっても
佐知の人生は意義深いものになるって背中を押してくれた」

「美香さんがそんなことを・・」

実母のことを知ったとき確かに私は落ち込んだ

真実を知って苦しんだわ

でもこれが美香さんの言う歩みに繋がるならしっかり受け止めるつもり」

「苦しみや悲しみが人生に付きまとうのはなぜなんだろう」

「何かを気づかせる為じゃないかしら そんな気がする

苦しみから解き放されようとすればいやでもその苦しみと向き合うことになる

それは結局、自分を知ること繋がる・・・」

「人は巡って結び結ばれて生きてるんだな

人生って生きていれば不思議な出会いが一杯あって面白いもんだな」

「あつ電車の時間は大丈夫」

「そうだな、そろそろ出ようか」

ママがドアの外まで見送ってくれた。

「お店の名前は道標・道しるべ・の意味なのよ

岐路に立ったときや困った時はここを思い出してね

私の生きているうちにまた顔を見せに来て頂戴、約束よ」

柔らかな手の温もりと心遣いに佐知は胸を熱くしていた。
二人の愛を見続けてきたママは二人に手を振り続けていた。

「あの二人の絆は本物・・・」

二人の愛はそんじょそこらの愛とは違う
試練の愛を二人はこれから歩んでいくことになる」

ママには佐知と雅和の未来が見えていた。

「私、今日はバスで帰ります　だからここで」

「そうか、じゃ・・・」

また会おうと言いかけた雅和は言葉を詰まらせた。
また会う？真相が解きたいま何のためまた会う必要がある

「久しぶりの再会で雅和と話せて夢みたいだったわ
もう会えないと思っていたから嬉しかった」

「佐知、今日は本当にありがとう」

「「ちらこそ じゃお元気で」

「ああじゃ・・・」

じゃ・・・に続くまた会おうの言葉をまた飲み込んでいた。

背を向け歩き出した二人の思いは同じだった。

佐知はあえて時間のかかるバスで帰宅することを選んだ。

雅和と一緒に時間が延びればそれだけ別れもつらくなると思った。

ペンダントの件以来くすぶり続ける雅和への未練を消すことは出来なかった。

「雅和のそばにずっといたかった 離れたくなかった

一晩だけでも寄り添っていたかった

そんなことありえないわ・・・わかっているだから苦しいの」

知らず知らず涙が流れ落ちていた。

拭いても拭いても止まらぬ涙が頬を伝っていた。

「もう涙は涸れたはずなのに」

新たな涙の泉が佐知の体に溢れ出していた。

駅に向う雅和は足を止めていた。

「俺、やっぱりこのままじゃ帰れない・・・」

来た道を走り出していた。

停留所でバスを待つ佐知は目頭に溜まった雫を押さえていた。人もまばらな車中は余計悲しみを誘った。

前の客のあまりの酒臭さに耐え切れず佐知は席を立った。座席を移動しようとした体の向きを変えたときだった。

後部窓にバスを追いかける黒い人影らしきものが見えた。

全力で走る苦しげな顔が対向車のライトで一瞬映し出された。

「まさか・・・」

佐知は運転手に必死で頭を下げていた。

「止めてください

今すぐ降ろしてください お願いします」

「お客さん、それは無理だよ 次まで我慢してください」

そっけない運転手に佐知は身を乗り出して詰め寄った。

「どうしても降りたいんです」

「気持ちわるいんです 苦しいんです」

涙で腫らした目は熱っぱさを漂わし寂しげな顔は病人の様だった。

「大丈夫ですか 顔色わるいし苦しそうですね」

信号がうまいこと赤に変わると運転手はドアを開けてくれた。

「お大事に・・・足元に気をつけて降りてくださいよ」

ドアが閉まり走り出すバスに佐知は深く頭をさげた。

すぐさま黄昏の道を雅和を求め走り出していた。

互いを求める二人はひたすら走り続けていた。

消え行くバスに雅和の心は萎えたがあきらめたくなかった。

速度が落ちたのかバスは再び姿を見せた。

急に視界に入ったバスが気になった。

「俺に気づいて佐知はバスを降りたんだ きっとそうに違いない」

雅和は最後の力をふり絞り走り続けた。

「雅和はもうひき返したのかも知れない」

暗がりの道を走る佐知の心は揺れた。

「なら、どんなに走っても雅和には会えない」

それでも痛む足を堪えて走り続けていた。

募る思いが佐知の足を動かし止めようとはしなかった。

互いの目に姿が見えた。どちらからともなく叫んでいた。

「さちー」 「まさかず」

佐知は駆けてきた雅和に昔のように抱きついていった。

「ハア・ハア・・・」

走り続けた二人の荒い息遣いだけがしばらく続いていた。
体を離し見上げた佐知を雅和は見つめた。

「俺・・・このままじゃ帰れないよ」

佐知に言い忘れた言葉を伝えたくて追いかけてきたんだ」

「……………」

「俺、佐知とこうしてまた会えた縁を大切にしたいんだ
だから・・・また会おう」

ペンダントで復活した雅和への思いがみるみる溢れ出していた。

「雅和・・・ありがとう　また会いましょうね」

「ああ、また会おうな」

見つめ合う二人の手は絡まり歩き出していた。

もう二人に言葉は必要なかった。あの頃と同じだった。
二人の背後には危ない匂いが立ち込めていた。

二人はホテルの一室にいた。

「駅に向う道すがら君のことばかり考えていた
俺の気持ちは昔に戻っていた」

「バスを待つ私も雅和のこと…
もっと一緒にいたい・離れたくないって」

二人は体をベッドに投じていた。

絡めあった手を解こうとせず二人は天井を仰ぎ見ていた。
体に伝わる温もりに互いがそれぞれに昔の思いを馳せていた。

自分を見失うほど雅和を愛した日々が懐かしかった。

電車を待つ腕と腕が触れるたび泣き出しそうになった別れの日。
プラットホームで人目もはばからずしゃくりあげて泣いた私
泣いて縋ってでも愛を取り戻したかった…しかし時すでに遅し
目も合わさず無言の雅和はすでに佐知への愛を葬っていた。
優しさの一欠けらもなく去って行ったその背中では小さかった。

今ベッドに雅和と横たわっていることが夢のようだった。
しかし二人は狂おしく求め合った以前のような激情に駆られな
かった。

こうして寄り添っていていられれば、私は何もいら
ない何かを望んだり欲張ったりしたら何もかも消えてしま
いそう
私はこれ以上何も望まない 望んじやいけない

燃え盛る佐知の体はまっすぐな心に鎮められ鎮火していた。

きつく絡めあった二人の手は汗ばんでいた。

一瞬離れそうになった手を雅和はギュッと掴みなおした。

「この手はもう離さない」

あの時、俺がこの手を離さなければ・・・俺と佐知は

手を伸ばさなくても触れ合える距離にいる佐知。

雅和は今すぐにでも抱きしめたかった。

この腕の中で溶けてゆく佐知を見たいと思う雅和だった。

愛おしさは今も同じなのに昔とは何かが違うと感じていた。

がむしゃらでむさぼるような愛は姿を消していた。

触れ伝わる肌の温もりが安らぎと幸せを運んでいた。

体を重ね合うこともなく時だけが刻々と流れていった。

悟り澄ましたような二人はただ静かに寄り添っていた。

「雅和、変なこと聞いてもいい」

「変なこと・・・」

「軽蔑しないで聞いてね」

私この部屋で雅和と二人になって昔と同じ気持ちになった

雅和に抱きしめて欲しい・雅和がほしいって・・・

昔のように抱いてって叫びたくなった

でもそんな衝動がもう一つの気持ちに宥められていたの

ずっと願っていた夢のような再会、近くにいられる幸せ
それだけでもう十分だと思えた

昔、雅和に抱かれた時と同じ・私はもう充たされていた
気がつけば火照った体はいつの間にか静まっていたわ
雅和は私を欲しいと・抱きたいと思った」

「・・・・・・・・」

「美香さんのこと考えてた」

「美香さんは関係ない

俺はいま佐知のことだけ見ている

今夜の俺は佐知に心を奪われ別れ難くなった

俺は男だから求める欲求は佐知以上だった

だけど俺も同じ・佐知が話してくれた気持ちがる

手を絡め俺は佐知と枕を並べていた

もうそれだけで俺は満足だった

この手に抱きしめられなくても肌を合わせられなくても俺も充た
された

うまく表現できないけど昔より？がりは確かなものに変化している
愛とかそんな感情とは別の・人の根源に溯るといっか・
「ごめん、上手く説明できそうにない」

「雅和の言いたいこと分るわ 感じていることは二人とも一緒
男と女を超えた何か新たな感情が生まれているのかしら」

「俺と佐知 俺達は男女の愛を超越した」

「今夜私たちを引き合わせてくれたのは和由兄さん・きっとそう
私たちが引きずっている気持ちを確認させるため」

「心は昔のままじゃないって気づかせてくれた？
俺と佐知は昔には戻れないって教えてくれた」

「だから雅和を欲しがった私の体に心がセーブをかけた
再燃した思いに体は疼いても心には伝わらなかった
昔のような愛には戻れない もう…」

佐知は握った雅和の手を解き背を向けた。

雅和は静かに体を抱き寄せていた。

伏し目がちの佐知の顎を指先でそつと持ち上げ唇を重ねた。

懐かしい唇の感触、ほんの数秒のキス真正銘の最後のキス

「昔のような愛はいらないよ 俺と佐知にはもう必要ない
今夜、俺達の愛は本当の意味で終わった
そしてその愛は一生切れない絆に変わったんだ」

見えない兄・和由が繋いだ新たな縁に結ばれた雅和と佐知。
一筋縄ではいかないその縁には男と女の機微が隠されていた。

佐知・雅和・妊娠した美香・この奇妙な関係にあらたな火種が燻り始めた。

じじろ趣くまま

結婚式から戻った雅和は後ろめたい気持ちで拭いきれずにいた。佐知と一夜を過ごした事実が重く押し掛かっていた。

ホテルで会っていた親父と佐知に怒りを爆発させた記憶が甦った。抑えられぬ怒りとやり切れぬ感情に心痛めた遠い昔を思い出していた。

あの夜の一部始終を包み隠さず話せば美香はわかってくれるだろう。

しかしあの一夜だけはどんなことがあっても隠し通したい雅和だった。

上手くいっている関係に自ら水をさし波紋を投げることは避けたかった。

この選択が正しいか否かは二の次で美香との絆を守ろうと必死だった。

美香の心に影を落しかねないあの一夜を雅和は封印しようとしていた。

帰りを待つ美香の苦しいつわりは治まり体調も戻っていた。

今夜こそ話そう 雅和の子供ができたことを

雅和からの帰宅メールを見つめながら美香は決心していた。

マンションに向う雅和の足取りは重たかった。

秘密を隠し持った雅和はドアの前で深呼吸を繰り返していた。

「美香さん、ただいま」

「おかえりなさい」

「はい、おみやげ 引き出物に入っていたんだ」

「まあ綺麗なペアグラスね」

今夜はこのグラスで乾杯しましょうね

ねえ、結婚式はどうだった？」

「懐かしい顔ぶれがそろって最高に盛り上がったよ」

酔い潰れて電車に乗り損ねてしまったのは不覚だったけど」

「親友のお祝いだったんだもの仕方ないわ」

「少しくらい破目を外してもいいんじゃない」

「不覚だったよ、帰れなくなるなんて」

「お酒、強くないのに無理して飲んだんでしょ」

「そのとおりです 面目ない」

「それで肝心の佐知さんとは会えた？」

「ああ、会って話をしてきた

美香さんに背中押されたから勇気を出して話すことが出来たよ
すべてが分ったよ」

「佐知さんと雅和は兄妹ではなかった

佐知さんはお父さんの子供じゃなかったんでしょ」

「美香さんは超能力者みたいだな」

「雅和は嘘がつけない人よ すぐわかるわ

佐知さんと兄妹だったら眉間にしわを寄せていたはずよ」

「確かに俺は馬鹿がつくほどの正直者だからね

なにもかもすべてが筒抜けか 怖いな」

佐知との一夜だけは知られてはいけない

そのことばかりが頭を巡り雅和の顔色が曇りだした。

「雅和、雅和つたら、聞こえてる」

雅和の顔面に美香は手を振って見せた。

「あつごめん、ぼんやりしてた？
まだ酔いが残っているのかな」

「ごめんなさい 疲れているのに私が色々質問したからだわ
話は又今度にして食事にしましょう」

「気を使わせてすまない」

「気にしないで
引き出物のグラスでさっそくワインを頂きましょう」

「この匂い、もしかして今夜はすき焼き？」

「当たり前、今夜は雅和の大好物ばかりよ
持ってくるから待ってて」

「今日は俺がやるから美香さんは座ってて」

雅和の手ですき焼きと赤ワインがテーブルに用意された。口に含んだ雅和のワインは今日はなぜか無味無臭に思えた。

佐知の話題に話しが及ぶと正直つらかった。

勘のいい美香に気持ちを見透かされそうではハラハラしていた。限界に達しそうな時「話は今度・・・」美香の言葉に救われた。

愛する人に隠し事をするのは並大抵でないことを悟った。

やはり言うべきだ 何も疚しいことがないのだから
時機を見て話そう 嘘は突き通せない

佐知との一件を話せば互いに傷つく

隠し通せたとして・・・いずれ大きな傷を残すことになる

今宵は美香の柔肌に包まれて心の闇を葬り去りたかった。

男と女には決して交わることの出来ない心のヒダがある

そのヒダをどのように折りたたんでゆくかによって関係も変わる
愛し合う男と女の行き先を左右するヒダが立ち塞がっていた。

ホテルの一件を忘れようとしていた時メールが届いた。

雅和はそのメールを食入るように見ていた。

／お元気ですか

私、あれから色々考えました。一番は美香さんのこと

美香さんには何も話してませんよね 絶対、美香さんに話しては

ダメ

約束して、あの夜のことは胸にしまいこんで誰にも話さないって

あの夜、私はしてはいけない期待をしていた

男女の感情がまだ残っていたと一瞬だったけど甘い夢を見た
だけど私たちはもう男と女じゃないって気づかされた

共通の和由という兄弟の存在が私たちの関係を全く違う形に変えた

雅和、これから井川君って言わせてね

雅和って呼んでいいのは美香さんだけだから

私たちあの夜、兄妹になったって思えない、思っただけなの

あの日の出来事は私と井川君、二人の問題なの

だから美香さんに話す必要なんて何も無いわ

お願いだから美香さんに余計な心配をかけないで

愛する人に何でも正直に話されたら嬉しいけど男女の事は別物よ

結局、黙っていてくれたほうが良かったって必ず思うわ

正直に話したところでいい結果にはならないってことを言いたいの

秘密を嘘をついても隠し通すのも一つの愛の形

背負う苦しみは美香さんへの愛だと割り切って絶対に話さないで

これは誰のためでもない、美香さんのためなの

このメール、読み終えたらすぐに削除して下さい 佐知ノ

削除ボタンを押した雅和は思った。

愛する人にすべてを話すことが決して正しいことでない？

ならば佐知を昔の恋人なんて話す必要もなかった

友達で通すべきだったというのか

いや佐知が恋人だったことを話せたから今に繋がっている
雅和の頭の中は収集がつかなくなっていた。

美香と会う約束の前日に届いた佐知からのメール
揺らぐ雅和の心は少しずつ確かなものへと近づけていた。

二人の問題を話す必要はない
それは誰のためでもない、美香さんのため

メールに書かれた文字のすべてが答えに思えた。

翌日、雅和は佐知との再会を美香に話し聞かせていた。

「佐知と会って俺たちは他人だとわかったんだ
そして、和由という子供の存在を知った
親父の子供は確かに存在していた
過去形なのは・・もうこの世にはいないから
その子供は生まれてすぐに亡くなっていた」

「その子供は佐知さんとは父親違いの兄で
雅和にとっても母親違いの兄
どちらにも和由という兄がいたというわけね
それで佐知さんの様子はどうだったの」

「佐知は実母の手紙で子供の存在を知っていたんだ
でもその子供の父親が誰かまでは知らなかったようだ
でもあいつ笑顔で言ったんだ
母親が愛した人が俺の親父で良かったって」

「そう・・・よかったって言ったの佐知さん」

「佐知は親父のことが大好きだったんだ
よほど気が合ったんだろうな
俺が嫉妬するほど二人は仲が良かった」

「佐知さんが由里子さんの子供とは知らないで
恋人の面影を残す佐知さんにお父さんの心は揺れたのね
お父さんには佐知さんが由里子さんに見えたのよ
由里子さんが引き合わせたとは思えないわね」

「佐知と出会って不思議なことがいっぱい起きた
これも美香さんが言う縁・・・」

「大事なものはその縁をこれからどうするかよ」

「佐知とは・・・また会おうって約束してきた」

「喜んだでしょう、佐知さん」

「昔には戻れないけど嬉しいって言ってくれた」

「とりあえず丸く納まってよかったわ」

無理して笑顔をつくる美香の心に雨雲が立ち込めていた。

雅和と佐知、二人は血の繋がりのない赤の他人
愛の復活がゼロではなくなった今・・・二人の接近はまずい
一抹の不安が襲いかかっていた。

再会を頑強に薦めた美香はこの場に及んでうろたえていた。
過敏なまで佐知に神経を研ぎ澄ましているようだった。

縁を切らないでと言った私が揺らいでいる
佐知の名前が出るたび耳を塞いでしまいたい衝動に駆られていた。

美香は二人が過ごした地を訪ねてみたくなっていた。

「来月わたし出張で愛知県に行くの
雅和が昔住んでいたところって愛知のどこだっけ」

「名古屋からならすぐだけど」

「佐知さんの勤務する病院も近くなの？
いまもそこで仕事してるかしら」

「まだ受付の仕事をしてるはずだけど」

「病院の名前を覚えてる？」

「そんなこと聞いてどうするんだ」

「私、東京出張のとき入院したでしょ」

あの時は本当に心細くて泣きたくなくなった
またあんなことがあったらって不安になって
でも雅和の知人がいる病院を聞いておけば安心でしょ」

「確か、西條クリニックだったと思うけど」

「久々の出張だから万全を期して行きたいの
これで安心して行けるわ、ありがとう
東京で退院する時、同じような症状がまた起きたなら
その時は大学病院でしっかり検査を受けるようにって言われたの
そのことを思い出したから余計不安になったんだわ」

「そんな大事なことなぜ今まで言わなかったんだ
大丈夫なのか、どこもなんともないのか」

「今は全然平気、大丈夫」

「くれぐれも無理しないでくれよ
体は一つしかないんだ

大切な美香さんのスベアはないんだから」

雅和の言葉に最近のすぐれない体調を思い返していた。
妊娠が判明してから悪阻を始めとした体の異変に気づいていた。

立ちくらみ、頭痛、吐き気、頻繁に起きるめまい
すべては妊娠に伴う症状だろうと気に留めることもなかった。

不安に襲われた美香は妊娠を告げることを忘れていた。
神の悪戯がまた振り降ちて二人を苦しめようとしていた。

順風だった雅和と美香の人生が大きく揺さぶられようとしていた。

出張に出かけた美香の日程表には水々金まで愛知県直帰
出社報告月曜と書かれていた。

出張を終えた美香はすぐさま名古屋に移動していた。
コンビニでおにぎりを買って予約していたホテルに入った。
コンビニ袋をテーブルに置くと美香はベッドに倒れこんでいた。

「体の感覚がおかしい 自分の体じゃないみたい
ここ数日、食欲も湧かない
妊娠のせいだけじゃない、体に何か起きているのかも」

何度も眠りから覚めた美香はベッドを離れ窓べに佇んだ。

「佐知さんに会えるかな」

夜明け前の暗闇に浮かび上がる明かりをぼんやり見つめていた。

昨夜から体調に一抹の不安はあったが佐知が勤務する病院に向かった。

診察時間には30分もあるのというのにすでに賑わう待合室
美香は隅のイスに隠れるように座り受付を見つめ続けた。

食い入るように見つめる先にお目当ての佐知の姿はなかった。
診察が始まると人は益々溢れんばかりに膨れ上がった。

立ったまま診察を待つ人の多さに美香は席を立たざる得なかった。

体格のいい男の子の大きな声が聞こえた。

「さっちゃん、はい僕の診察券」

「ゆうくん、喉はもう大丈夫みたいね」

「うん、もう痛くないよ」

受付で男の子と会話しているのは間違いなく佐知だった。

入院先のエレベーターでぶつかったあの人だ、間違いのない私、やっぱりあの人のこと嫌いじゃないわ
佐知を見つめる美香の顔に笑顔がこぼれた。

頃合を見計らってまた出直そうと独楽鼠のように動き回る佐知を尻目に病院を出た。

時間を持て余しながら見知らぬ町並みを彷徨っていた。

どれくらい歩いたのだろう 遠方に神殿のような建造物が見えた。
××観音と書かれた寺院は日本三大観音の一つだった。
信仰深いわけではないが何故か手を合わせたい気持ちになった。
不調の体と気弱になった心が救いを求めている。

お参りを済ませた美香は参道に通じる商店街に迷い込んでいた。
そこは一度行った東京の浅草寺の雰囲気と似ていた。

ふと見上げたアーケードの屋根に足を止め見入っていた。
通りが変わると天井も様式ががらりと変わって訪れる人を楽しくさせた。

美香は前方から歩いてくる女性に釘付けになっていた。
ナイフを突き立てられたような衝撃で足を止めた。

大きな袋を抱え颯爽と闊歩するその女性は雅和の話した人と重なっていた。

立ち止まった雑貨店で買い物客を装いながらその人が過ぎるのを待った。

美香は自分の直感を信じ探偵のように後をつけた。

十字路を二つ越してすぐのところまで姿が忽然と消えた。

付近を見渡したが見失った姿を探す術もなく途方にくれていた。

カラカラ・音のするほうに目をやると看板が揺れていた。

あの人はやっぱり雅和が話していた「SIGNPOST」のママ
想像だけの人が現実の人と一致し美香は驚愕した。

雅和が佐知さんと愛を育んだであろうお店

恋人だった二人が時間を共有したお店

そして再び二人が語り合ったお店

ここがSIGNPOST

美香は意を決してドアを開けた。

店内はステンドグラスのランプが方々に配され昭和の時代を思わせた。

椅子も母が愛用していた年代ものと似ていて懐かしかった。

辺りを見渡す美香にママが声をかけた。

「いらっしやいませ

はじめての方はみんなあなたと同じなのよ、呆然と立ちすくむの
このお店にはじめての人はこないから誰かの紹介かしら」

「はい、お店まだ開店前でした？」

「この時間はいつも閑古鳥・・・こんな状態なの

常連さんはもう少し後にやってくるのよ

あっ、ごめんなさい 座って

誰もいないからカウンターでいいかしら

「はい」

「このお店分かりにくいし入りづらいでしょ？」

でも長いことやってるから常連さんだけで十分成り立ってるの

あなたは久しぶりの新客よ、なんだかさつきから落ちつかない様

子ね

遠慮しないでね、いやなら出て行ってもいいのよ

「大丈夫です 私このお店好きですから」

「そんな気遣いしないでリラックスして ご注文は？」

「じゃ、コーヒーをお願いします」

カウンターの壁一面の写真に気がついた美香はママに尋ねた。

「ママの後ろに張られた写真はみんなお客さんですか」

「ああこれね、そうよ　すごい枚数でしょ
でも好きになれない客はカメラには収めないわ
見境なく誰でもとってわけじゃないのよ
ここ張られるのは私に選ばれた人たち」

「.....」

「ちょっと偏屈なママだって思ってるでしょ」

「いいえ、そんなこと」

「じゅっくりしてね」

会話が途切れるとママは黙々と果物や野菜を切る作業をしていた。
手帳を捲る美香に仕込みを終えたママが声をかけた。

「さっき誰かにこのお店を聞いたって言ったけど

その人はあなたの彼、そうですね」

「……………」

「私のこと気味悪がっているよね」

「いいえ、そんなこと……」

「私ね、これでも知る人ぞ知る霊能者、占い師なのよ
常連さんしか知らない秘密だけだね」

「霊能者？すごいですね」

「怖がらないで聞いてね」

私ね好きになった客だと見えてしまうの
いやでも色んなことが分かかってしまう
だからあなたのことも見えた 見えてしまったの」

美香は身震いしてママの顔を凝視していた。

「じつは面白くない？」

「あなたの彼はあなたを真剣に思ってくれてるわね
だから心配無用よ いらぬ心配で神経使うのはおやめなさい
あなたが心配しなければならぬのは・・・
ごめんなさい はつきり言わせてもらうわね
あなたは自分の体を大切にしないとだめ
命がひとつの命・小さな命が見える
あなた、もしかして妊娠してるんじゃない」

「はい でも、どうしてそんなことを」

「自分でも恐ろしくなるくらい不思議な力なの
でもこの力が人の役にたったりすることもあるのよ」

「人を救えるなら、それはすてきな力ですね」

「そう言ってもらえて嬉しいわ
初めての客に胡散臭い店の変なママなんて思われるのいやだもの」

「そんなこと思っていないですよ」

「やっと笑顔を見せたわね」

ねえもうひとつだけいいかしら
言いくいんだけど・・・あなた病院に行きなさい早急に
何も聞かず病院で一度しっかり体を診て貰いなさい
特に上半身・・・首より上が気になるわ」

「・・・・・・・・」

「もうあなたを透視するの終わりにしましよ
気を悪くしたらごめんなさいね」

「いいえ、ありがとございました」

美香はママに自分の体のことをもっと聞きたかった。

私の体は・・・病気に蝕まれているのですか
喉元に出掛かった言葉をコップの水と一緒に飲み干していた。

「ママ～ おはよう」

常連らしき客が団体で入ってきた。

「ママ、これボノールのママから渡されてきた
SIGNPOSTに行くんだったら届けてって」

「あっ、またロールケーキ取りに行くの忘れてたア」

「ロールケーキ一本の配達ってありえるってポヌールのママお冠だつたわよ」

「ママのうっかりは昔からだけどこんなにひどくなかったって溜め息ついてたわ」

「いやゝな予感がしてきたわ

今日もランチはごちそうしてよねって・来るって事？」

「あり得るわね、彼女なら」

「今頃彼女、大きな体揺らしてクシャミしてるんじゃない

SIGNPOSTでまた私のこと言ってるってね」

常連さんの笑いの渦と共に店は賑わいを見せはじめた。
楽しいな会話を耳にして美香の心は和んでいた。

会計を済ませ外に出た美香をママが追いかけてきた。

「騒がしくなっちゃってごめんなさいね
あなたの力になれると思うからいつでも電話してちょうだい
これ私の携帯の番号よ
今日はあるがとう あなたに会えてよかった
ねえ携帯であなたを撮ってもいいかしら」

「ええ」

ママは美香に頭を下げ走り戻っていった。

ママには私が見えた・病が見えた
妊娠のことも言い当てた

美香は名刺の隅に書かれた携帯番号を大切に手帳に挿んでいた。

時計を見ると病院の診察時間が終わる時刻だった。
徒歩では間に合わないとタクシーで病院へと急いだ。

朝とは打って変わり静まり返った待合室。
受付の終了のプレートがゆらゆら揺れていた。

喫茶店で話し込んでしまったから・肩を落とし長椅子に座り込
んだ。

受付に人影が見え声が聞こえてきた。
カーテンが開いて顔を見せたのは私服に着替えた佐知だった。

「佐知さんだわ」

イスから立とうとした瞬間、美香の体は床に崩れ落ちていた。バッグから飛び出したコンパクトの金属音が静まり返った待合室に響いた。

カーテンを閉めた佐知は再びカーテンを開け放し辺りを見渡した。

「人が倒れている」

ナースコールをした佐知は倒れた人の傍に寄り添い先生を待った。

「大丈夫ですか 聞こえますか・私の手を握れますか」

床にうつ伏せに臥した女性は微動だもしなかった。

治療室に運ばれていった患者の散らばった所持品を佐知は拾い集めていた。

倒れた患者の身元や家族の手がかりがわからず途方に暮れていた。患者の大きなバックに手を入れた佐知は分厚い手帳を見つけた。手帳を開くと挿んであった一枚の名刺が蝶のように舞い上がった。

名刺を追いかけて床にしゃがみこんだ目の先に光る銀色の塊があっ

た。

見覚えのあるペンダントのヘッドだけが落ちていた。四方を見渡すとちぎれた鎖も見つかった。

「まさか」

手にしたロケットペンダントの蓋を開けてみた。目に飛び込んできたのは微笑む雅和の写真だった。

「倒れて運ばれたのは……まさか美香さん」

慌てて手帳のアドレスを捲り雅和の名前を探していた。しかしアドレス欄に雅和の名前は見当たらなかった。

手帳を丁寧に捲りなおしていると水色のページが出てきた。そこに雅和の名前と電話番号が書いてあった。

可愛らしい相合傘の下に書かれた美香と雅和・二人の名前。

「間違いない　あの患者は美香さんだわ」

雅和の会社と携帯にも電話をかけたが繋がらなかった。佐知は気持ちを落ち着かせ伝言を残した。

「佐知です 美香さんが倒れました

私の勤務する病院にいます

ご家族と連絡がとれなくて困っています

井川君からの電話待ってます」

診察が終わった受付の同僚はみんな帰宅していた。

倒れた患者が美香と分かった以上放っては置けなかった。

居た堪れず入院病棟に続く廊下を走り急ぐ佐知だった。

院長の姿が見えた。

診察を終えた土曜のこの時間に院長がいるのは珍しいことだった。

いやな予感を追い払うように院長に言葉をかけた。

「患者さんの知人と連絡が取れましたがご家族とはまだ

院長先生、患者さんは大丈夫でしょうか？」

「脳神経の橘先生が立ち会って検査している

僕にまだお呼びがかからないということは心配ない証だろう」

院長の言葉に佐知は胸を撫で下ろしていた。

「さっちゃん、事務所に電話が入ってるみたい

「ここで電話をとつてもいいわよ」

ナース室で佐知は受話器をとつた。

「御待たせしました 私が皆井ですが」

「あつ俺、雅和です」

「井川君なの 連絡を待ってたの」

「美香さんが倒れたって・・・美香さんに何が・・・」

「診察が終わった待合室に倒れていたの」

「・・・」

「美香さんは大丈夫よ」

優秀な先生が立ち会ってくれてるから

井川君、美香さんの家族と連絡取れた？

住所とか何でもいいの教えてくれる」

「それは無理、彼女に身寄りはいないんだ」

「.....」

「俺が唯一身寄りのようなもの

だから俺が家族なんだ 俺じゃだめ？」

「私、わからないから看護師さんに聞いておくわ」

「俺、今からそっちに向かおうと思ってるんだ」

「そうしてもらえると助かります

入院手続きや書類に承諾サインも必要だし」

「俺が行くまで佐知、美香さんをよろしく頼む」

「分かりました 井川君も気をつけて来てね」

「ありがとう じゃ」

美香さんには身寄りがない

雅和が身寄りで家族・二人はすでにそういう関係なんだ
美香さんは幸せ者ね

だめだめ・こんなときに不謹慎だわ
病に苦しんでいる美香さんを幸せなんて

佐知と築けなかった絆を雅和は美香と育てていた。

事務所に戻った佐知は美香のカルテを作成していた。
手帳に書かれた名前で美香の姓を知った。

「木内美香さんか

綺麗な名前、美しく凜と輝くあの人にぴったりの名前だわ」

佐知は自分の家族のつもりで美香をお世話をしようとしていた。
他人とは思えぬ親近感を抱き続けた美香への偽らざる思いだった。

佐知の肩越しに婦長が手を伸ばした。

「皆井さんご苦労様

受付はみんな帰ったのに一人残業させちゃって悪いわね」

「いいえ大丈夫です

運ばれた患者さんのカルテいまお持ちしようと思ってたんですよ」

「じゃ、私が届けるからあなたはもうお帰りなさい」

「患者さんの容態はどうですか？」

「集中治療室に入っているけど」

明日明日どうこうの重篤じゃないから心配ないわ
皆井さん今日はお疲れ様でした 気をつけてお帰りなさい」

「はい、おつかれさまでした」

一人残された事務所で佐知は電話をかけていた。

「佐知です 仕事が終わったので帰ります」

美香さんの容態は安定していますから心配しないで

今日美香さんと会うのは無理よ

どんなに頼んでも会わせて貰えないわ

そのことを伝えておこうと思ったの」

「そうか・・・仕方ないな

俺、しばらく隆一のところ泊めてもらうことにしたよ

新婚夫婦のお邪魔にはなりたくないって辞退したんだけど

真砂子がホテルなんてもったいないってうるさいんだ」

「世話好きの真砂子なら良くしてくれるわ
友達だもの甘えていいのよ
こんな時のひとりぼっちはずらいから」

「・・・・・・・・」

「井川君、仲間は真砂子たちだけじゃないよ
忘れないで・・・私もいるわ
協力するから遠慮は無しで何でも言っつて」

「ありがとう、佐知」

「月曜日、美香さんに会えるといいわね
受付にいるから何かあったら声をかけてね」

「じゃ・・・・・・・・」

電話の向こうに噛み殺している雅和がいた。
雅和の心中が痛いほど伝わってきた。

いまも昔と同じ何も変わってはいない
悲しいけれど私は今も雅和のことが分かる

愛する美香を案じる雅和の気持が痛いほど伝わっていた。

いま雅和が思いを馳せるのは美香さん・もう私じゃない
未練の火柱が再び立ちのぼっていた。

命

週明けの佐知はいつもより30分早く出勤していた。

真つ先に入院病棟に向かい看護師に美香の病状を聞いた。

美香は集中治療室から一般病棟に移されていた。

301号の個室を開けると穏やかな顔で横たわる美香が見えた。

微かに赤みをさした美香の頬を目を細め見つめていた。

「あの顔色なら、もう大丈夫」

朝ご飯もそこに家を出た胸のつかえが薄れていた。

ロッカー室にいつものリップでなく桜色の口紅をさす佐知の姿があった。

「雅和とまた会える」

佐知は思わず顔をしかめた。

「おバカな私・・雅和は倒れた美香さんを心配してここに来るの
佐知、あなたに会いに来るんじゃないのよ」

昔の男に思いが及ぶと女の一部分が色濃く焙り出されて堪らなかつた。

恋慕を断つかのように佐知は塗ったばかりの口紅を手の甲で拭き落とした。

受付の奥で新患のカルテを書いていた佐知の手が止まった。聞き覚えのある声に耳を澄ましていた。

「すみません 受付の皆井さんいますか」

「はいおりますが、どんなご用件でしょうか」

「井川と言ってもらえればわかります
呼んでいただけないでしょうか」

「皆井さん 井川さんが受付にみえてますよ」

受付から身を乗り出した佐知に雅和が姿をみせた。

「忙しいのにごめん
俺どうしても一人で行けなくて
病室・・・一緒に行ってもらえないかな」

「ええ、私でよければ」

「仕事中なのにわるいね」

「これも大事なお仕事よ、気にしないで」

井川君、廊下で待ってて」

ハイミス部長に受付を離れる許可をもらうと雅和とエレベーターを待った。

今朝の美香の様子を告げると雅和の眉間の皺が解れていくのが分かった。

「俺は美香さんの苦しむ姿なんか見たくない

俺はいつだって美香さんの笑顔だけを見ていたいんだ」

「美香さん早く良くなって、退院できるといいわね」

「もし神様に願いを叶えてやると言われたら佐知は何を願う？俺は迷わず美香さんを救ってほしいと土下座して懇願するよ美香さんの存在そのものが俺の生きる力の源だから・・・」

「.....」

返す言葉を失くした佐知の口から零れたのは落胆の悲しき吐息だった。

病室のドアを開けた佐知はしり込みする雅和の背を押した。ベッドに歩み寄った雅和は美香の寝顔に手を翳していた。

無言の対面だったが佐知には二人が会話しているように思えた。

雅和は声なき会話をしている

二人の思いがキャッチボールしている

私が割ってはいる余地など・・・もうないんだわ

あの日、雅和は兄と言い聞かせ終結させたはずの情愛が反逆の狼煙を上げ燻り始めた。

病室をノックする音がして雅和は看護士に呼ばれて出て行った。

眠り姫のような寝顔の傍らで佐知は祈り続けていた。

「早く元気になって雅和に笑顔を見せて

美香さんは雅和の命・・・大切な人

そして私にとっても雅和は・・・今も忘れえぬ大切な人

だから私も雅和の笑顔を見たい

美香さん早く目を覚まして

雅和を喜ばせてあげて・・・お願い」

担当医と向き合う雅和の膝頭は小刻みに揺れていた。

「木内さんには身内がないとお聞きしましたが血縁の方はお一人も？」

「はい、彼女は正真正銘天涯孤独の身です

僕以外、頼る人はいないんです

僕は身内同然なんです

だから彼女のことは包隠さず全部話してください」

「そういわれましても規則が・・・」

「彼女は婚約者で僕たち結婚の約束をしています
だから身内と同じなんです 先生お願いします」

「わかりました

木内さんの意識が回復したらその辺のこともお聞きしておきま
し
よう

それからこちらで判断させていただきます

それまで個人情報はお伝え出来ませんのでご了承ください」

「先生よろしくお願いします」

雅和は美香との結婚を早く現実のものにしなければと思った。

病室に戻るとイスの上に佐知からのメモが残されていた。

／井川君、私仕事に戻ります

美香さんの容態は安定してるそうです

目を覚まして笑顔で話せる日が来ることを祈りましょう／

この日雅和は美香の病室からひと時も離れなかった。

仕事を終えた佐知は美香の病室に寄り道していた。

覗き見た病室に美香の枕元に頭を落とした雅和が見えた。

「安心して眠ってしまったのね」

起こさないように注意を払いドアを閉めた。

帰ろうとした佐知に看護師が声をかけた。

「さっちゃん勤務終わったのね お疲れ様

あっそういえば、さっちゃんは木内さんとは知り合いよね」

「ええ・・・」

「さっちゃんが井川君と言ってた人、木内さんの婚約者なんですってね」

「・・・」

「木内さん妊娠してたのに残念ね 楽しみにしていたでしょうに」

「産めないってことですか」

「詳しいことは言えないけれど木内さんの場合は
担当医なら墮胎して治療に専念するように薦めるでしょうね」

「彼女の病気は重いんですか
意識が戻ればすぐ良くなって退院できますよね」

「いまは何とも言えないわ
でも病気との本当の戦いは木内さんの意識が戻ってからなの
本人の気持ちが悪くは苦しい戦いに勝てないわ
戦いはこれからだからさっちゃん応援してあげてね」

「はい・・・」

「引き止めてごめんなさいね お疲れ様」

「お先に失礼します」

美香の病気が容易でないことを知った佐知の足取りは重かった。

命？

「妊娠・・・産めない

それだけでも身がつまされるといふのに
つらい病気との戦いが美香さんを待っている」

佐知は身をよじり拳でエレベーターの壁をたたき続けた。
病院を出ると佐知の携帯がポケットの中で震えだした。

「もしもし」

「あつ俺、何度もかけたけど通じなくて」

「井川君」

「仕事終わった？」

「ええ今病院を出たばかりよ」

「じゃ今すぐ行くからまってて、一緒に帰ろう」

「ええ・・・」

佐知は急に逃げ帰りたいたい気持ちに駆られた。

美香さんの状況を知った今、雅和と平常心で向き合えるかしら
きつとわたし雅和の顔を静止できない
やっぱり今日は一人で帰るべきだったんだわ

佐知の心情など汲みとれるはずもなく雅和は手を振り駆け寄って
きた。

「ごめん 待たせて

佐知にお礼を言わなきゃと思ってたんだ」

「お礼なんて言わないで 私は自分の仕事をしているだけだもの」

いつもと違うどこか冷めたい口調に雅和は違和感を感じた。

「佐知、病院でなにかあった？」

「何も無いけど、どうして」

「いや何も無いなら、いいんだ」

それにしても病院の仕事って想像以上で驚いたよ
多くの傷ついた人の心と身を支える大変な仕事なんだな
いつも笑顔で患者と向き合う佐知の姿に感動したよ」

「どんな仕事にも大変はつきものよ

病院だけじゃないわ、井川君の仕事だって同じでしょ
仕事が楽しいことばかりだったら苦労しないんでしょうけど
どんな仕事も生半可な気持ちじゃ勤まらないわ

病でやってくる人と接する仕事は気が抜けないの
だから正直疲れるわ

仕事が終わると能面みたいな顔でぼーとしてることもあるの

ごめんなさい おしゃべりが過ぎたみたいね

井川君、今日は疲れたでしょ

狭い病室で座ったままは疲れるからたまに外の空気を吸ったほうがいいわ」

「俺は大丈夫、美香さんに付き添うのは苦じゃないから」

「目を覚ましたら美香さんきつと喜ぶわね」

「俺、美香さんに話したいことがいっぱいあるんだ
次から次とあふれ出る自分の気持ちに驚いている

付き合っていることに甘んじて深く相手を考えることなかったけど

気づかなかった感情が俺の中で今にも破裂しそうなんだ

万が一、美香さんに何か起きたら俺はきつと気がふれてしまう
美香さんが俺を残しどこかへ行ってしまいそうな気がして怖い・
怖くてたまらない」

「万が一なんてそんなこと言っちゃいけないわ」

「ごめん 佐知に弱音吐くのは筋違いだな
情けないな、俺は昔のままだ」

「弱音を吐くのはかまわないわ
私はいつだって井川君の気持ちを受け止めてあげたいと思ってる

でも美香さんに何かあつたらなんて悲観的にならないで
美香さん今、懸命に生きようとしている、戦っているのよ

そんな尊い命に万が一なんて・絶対言ってはだめ
美香さんを悲しませるようなことは言わないって約束して」

「俺、もっと自分に強くならなきゃな
気をつけるよ、ごめん」

「昔、私に言った言葉覚えてる？」

「……………」

「井川君、私に君を守る強い男になれるといいなって言ってくれただから今度こそ本物の強い男になって美香さんを守ってあげて」

「……………」

「責めているんじゃないのよ

私の素直な気持ちよ 井川君と美香さんを応援したいの」

「佐知、ありがとう」

其のとき雅和のお腹が大きく鳴った。

「井川君、お昼食べた？」

「そういえば口にしたのは缶コーヒーだけ」

「それじゃ早くなにかお腹に入れてあげないと」

「一緒にどこかで食事して帰らないか？」

「ごめんなさい 今日には習い事があるから」

「そうか、それじゃ一人で食べて帰るよ」

「だめよ 龍一君と真砂子が待ってるわ」

「新婚の二人を見ると身の置き所なくてどうも落ち着かなくてさ」

「でも今日は帰って真砂子の料理を食べて

お昼時間、真砂子から電話がきたの

美香さんと井川君を心配してかけてきたのよ

井川君のために腕によりかけて料理を作って待ってるわ

今日はスタミナ料理にするって真砂子、張り切ってた

だから今日は寄り道しないでまっすぐ帰って」

「なら、急いで帰らないとまずいな」

「じゃ又あした」

「あっ・・・佐知まって」

「え、なに」

「俺になにか隠してないか」

「と言うか俺になにか言いたいことがあったりする？」

「私が・・・」

「病院にいた佐知とは様子が少し違ってたから」

「俺との会話中、佐知は俺から何度も目をそらした
そんなこと今までなかっただろ」

「何も無いわ 井川君の勘ぐりすぎよ」

「ならいい・・・でも俺に嘘はつかないでくれ」

「たとえ俺が絶望に悲しもうとも佐知だけは真実を伝えてくれ
約束してくれ、佐知」

「ええ、約束するわ」

「でも今は余計なこと考えないで」

「美香さんが良くなることだけを願いましょう」

「佐知が言ったように強い男になって俺は美香さんを守っていく」

「そうよ、それでこそ昔、私が惚れた井川君だわ」

「俺・・・喜んでいいのかな？なんか複雑な気分だな」

「いついつ時はさらっと聞き流してくればいいのよ」

「そうか・・・」

「今日はお疲れ様でした 真砂子によろしくね」

「ああ、じゃまたあした」

佐知は安易に約束したことを悔いていた。

美香さんの病状が判明して、それが最悪のものであったら
真実をありのまま話すなんて無理だわ

佐知にとって雅和は今も大切な男ひと
そして雅和の愛する美香も忘れられない女ひとになろうとしていた。

三角関係

雅和の携帯に病院から嬉しい電話が入っていた。

音楽を聴いていた佐知がメールに気づいたのは漆黒の闇の夜だった。

／美香さんの意識が戻った／

佐知は慌てふためきメールを打った。

／井川君の祈りが届いたのよ
よかった 本当に良かったね／

電話が入ったのはすぐだった。

「夜遅くごめん

俺うれしくて・・・誰かに話したくて

真っ先に思い出したのが佐知、君だった」

「わかるわ、井川君の気持ち

私が飛び上がるほどうれしいんだもの

私より何十倍も嬉しい井川君の気持ちわかるよ」

「一緒に喜んでもらえてうれしいよ ありがとう佐知」

「井川君、わたし嬉しいの

美香さんの回復を私に一番に伝えてくれた

一緒に喜びを分かち合おうと電話をくれた

これからも井川君に協力するからなんでも言ってね」

「慣れない病院で俺はいつも佐知に助けてもらった

美香さんも俺と同じように必ず君の助けが必要になると思う

男の俺に言えないことも君になら言えるかもしれない

だから頼む、美香さんの力になってくれ」

「美香さんが入院した日から何故だか心底支えてあげたいと思ったの

だから私からもお願いします

井川君と一緒に退院する日まで美香さんを見守らせて下さい

お役に立てるかかわからないけど話し相手くらいならできるわ」

「佐知がいてくれたら俺も美香さんも心強いよ」

美香に差した光明に雅和と佐知は喜びで舞い上がっていた。

翌朝見上げた空は美香の回復を祝うかのように青く澄み切っていた。

いつもより早めに病院に着いた雅和は担当看護師の姿を見つけ走り出した。

「おはようございます 木内さんはもう起きてますか」

「ええ、もうお目覚めですよ」

「話しは出来ますか」

「相手の話すことは分るようだけど」

木内さんからは頷くだけで言葉はまだ・・・でも大丈夫ですよ、話せるようになりますから
「ご心配でしょうけど焦らず待ちましょう」

「ありがとうございます」

会話は無理でも声は聞こえている・・・胸躍らせ雅和は病室に入っ
ていった。

「美香さん、おはよう」

大きく見開いた目が美香の驚きを表していた。

「驚いただろう どうして俺がいるんだって」

美香は静かに頷いて見せた。

「美香さんが倒れてからずっと付き添ってたんだ
心配しないでいいよ 仕事は大丈夫だから」

美香の手が口に物を運ぶ仕草を見せた。

「食事？ 食べることも心配ないよ
龍一夫婦のお世話になってるんだ」

美香の顔が綻んで見えた。

「俺がついてるから安心していいよ」

震える美香の手は感謝の合掌を作ろうとしていた。

「まだ思うように体が動かないんだね 無理しないでいいよ
必ず会話が出るようになる いま出ない声も必ず戻る」

「これ看護師さんの言葉だから間違いないよ」

背後に人の気配がした。

「おしゃべりはそのくらいにして下さいね
患者さんが疲れますから」

「すみません 俺、嬉しくてつい夢中になって」

「この日を待っていたあなたの気持ちはわかるけど
木内さんは今日検査の予定が入ってるの
患者さんにとって検査はとても疲れるものなのよ
木内さん、出来るだけ安静にして体を休ませておいてね
あなた付添い人でしょ 付添いが患者を疲れさせてどうするの」

「すみません」

美香は看護師と筆談をしていた。

笑い声を上げていた看護師がメモを雅和に握らせ出て行った。

「飲み物買ってきて来るけど美香さんは？」

顔を横に振った美香を見届け雅和は病室を出た。

メモを見ながら歩き出していた雅和の足が止まった。

／看護師さん、私の大切な人を叱らないで

確かに空気を読めない所あるけど純粹で子供のまま大人になった人なの

私にはこの世で一番大切な人だからお手柔らかにお願いします／

波打つ文字は読みづらかったが気持ち良かった。

雅和の顔はあかあかと火照りだしていた。

佐知の言葉を思い出した。

今度こそ本物の強い男になって美香さんを守ってあげて

「籍を入れて夫として美香さんを支えてゆこう

結婚式は美香さんが元気になってからでいい」

美香が自分の子を宿している事実その命が消えようとしている現実も知らず

雅和は幸せな未来の設計を思い巡らしていた。

検査のため車椅子に乗せられた美香は笑顔で手をふって見せた。

直立不動で厳しい面持ちをした雅和に看護師が声をかけた。

「木内さんは大丈夫ですよ　あなたが緊張してどうするの
疲れるから肩の力抜いて待ってて」

看護師は美香に目配せすると豪快に笑い車椅子を押し出て行った。

あの看護師のおばさん、すごいキャラだな
明らかに俺をいじって楽しんでるって感じ

年配者の目には若輩の俺なんか子供で頼りなく映って見えるんだ
ろくな

気を取り直した雅和は携帯電話を持って外にでた。
毎日欠かさず事務所にかける電話は日課だった。

「てっちゃん、お疲れさまです 仕事は順調？」

「お前の仕事は俺が責任もってやってるから心配するな
ただ・・・昨夕困ったことがおきた

佐伯さんから依頼された土地相続の件だが
うちの担当者がとんでもないミスをしでかした
俺にもチェックの甘さがあったが100パーセントこっちの落ち
度だ」

「それで事態は收拾できそうなの？」

「ああ、なんとかかなりそうだな
言いにくいんだが責任者であるがお前が顔を出さないわけには・
な」

「わかった、事務所の代表としてきちんと謝罪すべきだな
俺いまから事務所に戻るよ 話はそつちで詳しく聞く」

病室に戻ろうとした雅和は偶然佐知と鉢合わせした。

「あつ、井川君」

「いいタイミングで会えてよかったよ
俺いまから静岡に戻るんだ
美香さんのこと君に頼んでもいいかな
仕事が終わったら急いで帰ってくるから
それまで美香さんのことを頼むよ」

「了解しました 心配しないでお仕事してきて」

「じゃ頼んだよ」

病室をあけると美香の姿はなかった。

「検査はいつ終わるのだろう」

見上げた先の時計は電車の時刻に迫っていた。

いまは一刻も早く顧客に詫びをいれることが優先だった。
枕元にメモをおいた雅和は静岡に戻っていった。

三角関係？

美香さんへ

急な仕事で静岡に戻る

仕事が済んだら急いで帰る

寂しいだろうけど我慢して待っていてくれ

美香さんのことは佐知に頼んである

彼女はきつと力になってくれる

じゃ俺は仕事モードに切り替えて男の戦場に行つて来ます 雅和

昼休み佐知は売店で黄色の可愛い小花を見つけた。

陶芸教室ではじめて焼いた小ぶりな花瓶にその花を挿した。

仕事を終えた佐知は事務服のまま花瓶を抱え美香の病室に向かつていた。

トン・トン 開いたドアに美香が顔を向けた。

「すこし、いいですか？」

美香はベッドから白い腕を伸ばし手招きしてみせた。

「持ってきたお花、窓辺に置きますね」

腰を下ろした佐知に美香は顔の前で両手をあわせた。

「井川君が戻るまで私が美香さんのお世話をさせていただきます
といつても仕事があるから仕事前の朝と夕方しかこれないんだけど
なんでもしますから遠慮しないで言ってお下さいね」

美香は筆談のメモを差し出した。

／さちさん、よろしくね

お花、ありがとう 私、黄色い花が大好きだから嬉しいわ
まだ声を出せないなので私は筆談で返しますね／

「声が出ないのはつらいですね

でも自分から声を出そうとしないといつまでも声は出ませんよ
少し声を出す練習してみませんか」

／病気が原因でこうなったのよ

今私がいくら頑張っても声はでないわ／

「そんなことないわ 病気だからなんて言わないで

声を出そうともしないで諦めてしまうなんて美香さんらしくないわ
気持ちが悪いたら病気は退散してくれませんかよ」

／佐知さんの言うことは正論ね

でも今わたしは無気力でアパシーなの／

「無気力症候群のアパシー？」

だったら何かに向けて努力する気力を沸かせればいいわ

声が出せたら言葉も話せる

そしたら井川君と会話が出来る

楽しいおしゃべりがいっぱい出来る

筆談なんかもう必要なくなる

どうですか？少しは声を出す気持ちになってくれました」

／チャレンジしてみようかな／

「じゃ、あーいー何でもいいですから

大きな声を出すつもりになって口をあけてみて」

／ふあー・・・しい／

くるしい息づかいだけが繰り返された。

額にはうっすら汗がにじんでいた。

「美香さん、これくらいにしましょ

美香さんの苦しそうな顔見て私、後悔してます

「医者でもないのに余計なことを言ってしまったってごめんなさい」

佐知が頭を下げたとき美香は呻きに似た声をあげた

「ひいい・・おお・・お」

「いま美香さん、いいのって？」

コクンと頷いた美香は佐知の手に手を重ねた。

「声が・・美香さんの声しっかり聞こえましたよ」

「うう・うう」

「うんって言いました？」

美香は親指と人差し指で丸を作って微笑んでいた。

「わたし今日はこれで失礼します」

「明日仕事の前にまた顔を見に来ますね」

「ああ・あ・おおー」

「ありがとうって言うてくれたのですね

どういたしまして私の方こそ喜んでもらえて嬉しいです

ありがとう美香さん」

さよならの震える手を片手で押さえながら美香は手を振り続けていた。

佐知は重ねた美香の手のぬくもりを忘れられなかった。

三角関係？

出勤してきた佐知をみつけ同僚が駆け寄ってきた。

「さっちゃん、井川さんと会わなかった？」

今、この菓子折り置いていったのよ

木内さんをお世話してもらったお礼だつて」

「その紅茶シフォン、お昼みんなで食べましょう」

「みんな甘いものに目がないから喜ぶね」

佐知の好物を知る雅和からの心遣は嬉しかったが

ことのほか早く帰ってきた雅和に思いは複雑だった。

この日を境に病室へ向かう佐知の足はピタリ止まった。

二人の時間を邪魔したくない気遣いからだった。

美香との語らいが途絶え、お役ごめんになった佐知はどこか寂しげだった。

久しぶりの病室の前で雅和は懐かしさを感じていた。

美香の声が出たことなど知らず声をかけた。

「美香さん、ただいま」

「おお・・・ああ・・・いいいい・・・いいー」

「大丈夫か・・・苦しいのか」

血相変えた雅和に美香は首を横に振りメモを差し出した。

／わたしの声、聞こえたでしょ
わたし今、おかえりって言ったの／

「声が出せるんだね
よかった・・・よかったな美香さん」

／さちさんと声を出す練習をしたの
そしたら声が出た、自分の声が聞こえた
言葉は・・・発音はまだうまくできないけど／

「そうか、佐知が 俺からもお礼をしないとな」

「うううー」

目を白黒させた雅和に顔を崩した美香がメモを渡した。

／うんって言ったつもりなんだけどなあ

さちさんがいたら通訳してもらえるのに残念ね／

「早く俺も分かるようになりたいな

佐知に分かって俺が分らないのはしゃくだからな」

美香が不機嫌そうにメモを出した。

／さちさんには良くしてもらったのよ

肉親のように接してくれたからうれしかった

だからしゃくだなんて言葉使わないで／

「そうだな 佐知は一生懸命美香さんの世話してくれた
感謝しないと罰が当たるね」

「おお・・・おうー」

「そつよ・・・ってか？」

親指を立てて見せた美香とふたり声を上げ笑っていた。

呻り声にも似た言葉だった。が久しぶりの筆談なしの会話が嬉しかった。

雅和は美香の容態の好転に安堵していた。
いつまでも事務所を空けるわけにもいかず検査結果を気にしながら雅和は戻っていった。

程なくして夕食がすんだ美香の病室に雅和がすごいキャラといった看護師がやってきた。

「あら、彼はいないのね」

／静岡に戻りました／

「だから木内さん元気がないのかしら
今日は検査結果が出たことを知らせに来たの
あした橘先生から説明がありますよ」

／わたしの病気、明日わかるんですね／

曇り顔の美香に豪快な笑顔で看護師が答えた。

「憶測や無駄な神経は体に障るわよ
気持ち分かるけど今夜は何か楽しいこと考えましょう
今夜は木内さんの一番大切な彼を思い出すといいわ
そしてぐっすり休んで頂戴、おやすみなさい」

膝を抱えた美香はSIGNPOSTのママを思い出していた。
同時に不吉な思いに駆られ震えだしていた。

「怖い・・・雅和、私こわい・・・」

美香は担当医の部屋に呼ばれていた。
橘医師はレントゲンを手にイスに座った。

「お待たせしました
では検査結果をお知らせします
木内さんの頭、脳に腫瘍が見つかりました」

レントゲンを指さし橘は話を続けた。

「腫瘍はここにあります
手術で切り取ってしまえば普通なら問題ありません
しかし木内さんの場合は難しい手術になります
腫瘍が此処でなければ通常の手術が出来たのですが」

昨夜の不安が現実になった・美香は目を閉じ身を硬直させていた。

「木内さん大丈夫ですか　しっかりしてしてください」

美香は目を見開いて頷いた。

「話はそれますが手術の際、承諾書にサインが必要ですが身内の方がいないと井川さんからお聞きしています
井川さんから身元引受人の申し出がありましたか宜しいですか」

美香は机のメモとペンに手を伸ばし思うように動かぬ手でペンを走らせた。

／彼にすべて託したいと思います
でも一つだけ約束してください
私の生命に係わることは彼には一切告げないと
告知は私にしてください
すべてを受け入れる覚悟は出来ていますから／

承諾した橘はカルテに目を逸らし言葉を続けた。

「木内さんは妊娠しています　勿論ご存知ですよね」
残念ですが今回は諦めてください

治療に専念して手術を成功させましょう
おつらいでしようけれど」

／わたし産みたいです 先生お願いです
授かった命を消したくないんです お願いします／

「手術を成功させなければ命は保障されないのですよ
あなたにもしもの事があればお腹の子も一緒です
妊娠したままの治療はリスクが大きすぎる」

「先生、わたし死ぬんですか」

唐突過ぎる質問にも橘は動じなかった。

「それを避けるために治療をし手術をするのです
死なせない努力を私たち医者は全力で尽くします
ですから木内さんも死ぬことではなく
生きる努力を希望を捨てないでください
私が言おうとしていること分かりますね」

まさしく厳しい宣告だった。

病室に戻った美香は泣いていた。

美香は自分の命と新たな命をどうすべきか真剣に考えていた。

私の命に限りがあるならお腹の子を誕生させ命を繋げたい
過酷な運命を告げられた今、美香は自分を産んでくれた母の気持ち
が身に沁みだ。

「雅和と私の新たな命は消したくない

誰がなんと言おうと私が守ってみせる 命に代えても」

ゆるぐ心

担当医の橘は度重なる説得にも首を振らない美香に頭を痛めていた。

美香が一番に伝えるはずの検査結果を雅和に知らせようとしなかった。

頑として手術を拒み続ける美香だったが言葉も難なく話せるようになっていた。

治療の効果も現れ、体の硬直も神経系の異常も緩和されていた。

代休の佐知はシヨップのゆうちゃん誘いも断り家で寛いでいた。

「さちいー、病院の方がきてるわよ
上にあがってもらおうね」

病院の人？

自宅を訪ねあつ同僚などいない佐知に思い当たる人物は浮かばなかった。

トントン・・・佐知さん、こんにちは

佐知の目に飛び込んできたのは病院にいるはずの美香だった。

「美香さん一人でここに、どうして家がわかったの」

「ごめんなさい 私、病院を黙って飛びだしてきたの
ペンダントが入っていた封筒を見て住所は知っていたから」

「こんな無理をして、体は大丈夫ですか
とにかく病院に連絡しましょう」

みんな美香さんのこと探し回ってますよ
ここに来てることを伝えて安心させましょう
心配しないでいいですよ 私が送っていきますから」

「ありがとう、佐知さん」

佐知さん、私の検査結果がわかったの
雅和に話す前にどうしても佐知さん、あなたと話がしたかったの」

「話を聞いてから美香さんを病院に送ります それでいいですね」

階下に降り佐知は病院に電話をかけていた。

案の定、病院は大騒ぎで婦長自らが電話口にでた。

「皆井さん、お願いしますね」

検査結果の後だから心配してたのよ
木内さんが落ち着いたらでいいですから
あなたが責任もって連れ戻ってくださいね」

良くなかった検査結果は察しがついた。
美香の気持ちがいかにばかりか・佐知は言葉を失っていた。

立ちすくむ佐知の背後に母がやってきた。

「二階に持って行くつもりだったの」

「わたし持って行く ありがとう」

渡されたクッキーと紅茶を持って佐知は部屋に戻った。
美香はうなだれテーブルに伏していた。

「美香さん、疲れたでしょう」

ベッドに横になって体を休めたほうがいいわ
私のベッド、いやじゃなければ使っているのよ」

声もなく美香はベッドに体を横たえた。

「少し体がつらいから寝たままでごめんなさい」

美香は思いつめた顔で話を始めた。

「母は妻子ある父と出会い私を産んだ
母の父・祖父は祖母を道ずれにして自ら命を絶った
祖父は母の不倫に心を痛め悩んでいた
それだけが心中の理由ではないけど
それでも母は生涯その重い十字架を背負って生きた

母は父と別れ女手1つで溢れる愛情で私を育ててくれた
自分の幸せのすべてを私に注いでくれた

見せない苦勞をいっぱいしてきた薄倅の母の人生
これからは私が母を幸せにと思っていた矢先
母はこの世を去った

私はあの時の母と同じなの
愛する人の子をどうしても産みたかった母と同じ

佐知さん、わたし妊娠しているの

医師は誕生していない命より生きている命を優先する
でも命に限りがあると言うのなら私は命を懸けても産みたいの

死ぬのは怖い・・本当はこわいのよ
でも子供の誕生を見たい そしたら怖いけど・・
悔いなく死んでゆける気がする」

「こんな大切な話は私じゃなく井川君に・・
井川君に一番に話さなきゃいけないわ」

「雅和は妊娠のこと知らないの
産んでもいいものか・・・そうこうしている内に言いそびれてしま
った」

誰になんと言われようと産む決心をしたわ

命の保障がなくても残したい・私の生きた証を
私を産んでくれた母と私の生きた道を生まれ来る子に繋げたいの」

「話はこれくらいにしましょう 美香さん苦しそうだわ
少し休んで病院に戻りましょうね 私、病院に付き添いますから」

「佐知さん、わたし父に会いたい
私、父の手に抱かれた記憶がまったくないの」

私わが子を父に抱いてもらいたい
その姿を見て私もこうして父に抱かれたのだと父の愛を感じたい

佐知さん、お願い
父が存命ならば会いたい の 父を探してほしいの」

「井川君、きつと悲しむと思います どうして俺に頼んでくれない
のかって

やっぱり順番が間違っています 井川君に話して下さい
言えないなら井川君には私が話してあげます 絶対そうすべきで
す」

「雅和には言えない」

彼は母と同じ、自分を投げ打つても私を救う人

これ以上彼の重荷になりたくない

分かってくれるでしょ、佐知さんなら」

「今は重荷とか言ってる場合じゃないでしょ」

愛を育んできた二人だからこそ心を通い合わせ助け合える

井川君の力を借りるべきです」

「子供を産めたとしても私はその成長を見届けられない

そんな気がする私にはわかるの

だから生まれた子供を父に託したいの

父ならきつといい養子先を見つけてくれるわ」

「子供の父親でもある井川君の気持ちはどうなるんですか」

「彼は自分が育てるって言うでしょうね」

「なら、それでいいじゃないですか」

美香さんと井川君二人の子供なんですよ」

「でも男の人が一人で子供を育てるなんて無理だわ

それにそんなこと私は望んでいない
雅和には何にも邪魔されず自分の道突き進んでほしい」

「それは美香さんの勝手な言い分です

井川君の気持ちも聞かず自分で決めようとしている

今は一人ではなく二人で乗り越えるときです
二人の愛が試されているのですよ

井川君ときちんと向き合ってください

それから自分と向き合っても遅くはないでしょう
後悔してほしくないんです」

それきり口を閉ざした美香の顔から疲れが見て取れた。
佐知はタクシーに美香を乗せ病院へと急いでいた。

病院に着いたとき美香は朦朧としていた。

ストレッチャーの横には婦長と橋医師も待機して待っていた。

タクシーの支払いを済ませた佐知に婦長が頭を下げた。

「お休みのところ悪かったわね、ご苦労様

井川さんも心配して飛んできて病室ですっと待ってるの
皆井さんと一緒だとわかって安心したみたいね

さつき部屋を覗いたら椅子に座ったまま寝てたわ
皆井さん悪いんだけど木内さんが戻ったと伝えて
それから家に帰ってくれるかしら」

「はい、わかりました」

雅和は美香失踪の連絡を受け慌てて駆けつけていた。

トントン トントン

ドアを開けると雅和は疲れきった顔で眠っていた。
肩に手を置き雅和を揺り起こした。

「井川君、おきて」

「ううっ・・・」

「佐知です 美香さん戻りましたよ」

「・・・ごめん うとうとして

美香さん、美香さんが戻ったって」

「大事をとって橘先生が見てくれています

美香さんは大丈夫です 間もなく戻ってくるわ」

「検査結果が出たことも俺、知らなかったんだ
一番に伝えると約束したのに・」

美香さんがいなくなったのが検査結果の後と聞いて
俺、本当に心配で心配で・佐知、美香さんは重病なのか」

「私、病気の事は本当にわからないの」

「先生に問い質したけど答えてくれなかった

病院を逃げだすなんてただ事じゃないよ

逃げ出さなければならぬ余程の事が起きたんだ」

「井川君、今は黙って寄りそってあげて

無事に戻った 今日ほそれだけでいいんじゃない

井川君も辛いでしょうけど一番つらいのは美香さんだから」

「俺に何か隠してるだろう

美香さんと話したことを教えてくれ

佐知、俺と約束してくれただろう 隠し事はしないって」

「・・・・・・・・」

「頼む・・・嘘はつかないでくれ

昔の俺達みたいに壁を作るのはもう止めにしなにか

兄妹と思っほほしいと言っ張本人の君が

今していること・・・おかしいと思わないか」

「何も言えないの、わかって

でも隠さなければならぬことなんて一つもないわ
だから私じゃなく美香さんに直接聞いて

美香さんは混乱した気持ちを整理したくて私に会いに来たの
落ち着いたらすべてを話してくれるわ　だから待つてあげて」

「わかった　でも俺は・・・美香さんの気持ちが・・・

美香さんが思い悩んでいるならその気持ちを知りたい

俺には知る権利がないのか・そうなのか佐知

君が知っている美香さんの事を教えてくれ

頼む俺にも少しでいい　美香さんの気持ち分けてくれないか」

佐知は雅和が不憫に思えた。

「美香さんは懐かしそうにご両親、家族の話をしてくれたわ

記憶にない父を恋しがっていた

お父さんに会いたい探してほしいと頼まれたの」

「それで約束をしたのか」

「お父さんに会いたいと言った美香さんの気持ちが痛いほど伝わっ

たわ

私は本当の両親を知れて良かったと思ってる

だから美香さんの気持ちが分る

あの時は即答できなかったけど探してあげたいの

井川君の力でお父さんを探して・お願い

お手伝いしますから美香さんとお父さんを会わせてあげましょう

これは誰でもない美香さんの願いよ

井川君が叶えてあげないで誰が叶えるの

美香さんを愛するあなたになら出来るわ」

「.....」

雅和なら美香の希望をきっと叶えてくれると信じていた。

まだ見ぬ父との再会は実現に向け動き始めようとしていたが

美香のもう一つの願い、出産だけは命に関るだけに難しかった。

美香の妊娠は自分が話すことではないと佐知は口にしなかった。

雅和がそれを知る日は遠い先だった。

愛を紡いで

病室に戻ってきた美香は雅和と目を合わせようとしなかった。気まずい雰囲気を感じた佐知が美香に声をかけた。

「井川君は病院からの電話で飛んで来てくれたの心配しなと美香さんを待ってたのよ」

「わかってるわ でも今日は一人にして佐知さん、雅和を連れて出て行って・・・お願い」

「俺がここに来たこと美香さんには迷惑だったのかそばにいるのが迷惑なのか」

「・・・」

黙りこむ美香とその背中をじっと見つめる雅和そんな二人を佐知は哀しい目で見つめていた。

「井川君、そんなことある訳ないじゃない美香さんは疲れているだけなのよだから美香さんの言う通り今日は帰りましょう」

布団を頭から被った美香は顔を見せようとしなかった。
佐知は渋る雅和の腕をつかみながら病室を出た。

「今日的美香さんは俺の知らない別人だった」

「井川君、もし・・・もしもよ

一生を振り返らなければならぬ状況におかれたら
人はどうなるかしら」

「・・・」

長い長い沈黙だった。

「そんなこと考えたくもないよ 俺にはとても耐えられないからな

それって・・・美香さんのこと言ってるのか
彼女の人生、先はない そうなのか佐知」

「・・・」

「やっぱりなにか隠してるだろう

君は病気のこと本当は知っているんだ」

「私は看護師じゃない
だから入院患者のことは分からない
美香さんの人生、いいえ人生先のことなど誰にも分からないわ
知ってることはさつき話したでしょ」

「君は嘘をついている なにかまだ隠しているんだ
どんなにごまかそうとしても俺にはわかる
昔愛した君の心・・・俺にはまだ見える」

目に映る井川は懐かしき恋人雅和と重なりだしていた。

「井川君はもう知ってるでしょうけど・・・
美香さんはお腹にいる赤ちゃんで悩んでいるの」

雅和の反応を見ていた。

「赤ちゃん？俺は聞いてない 妊娠している・・・美香さんが」

「ごめんなさい 井川君、知っていると思ったから
美香さんが話してくれた事はこれでお終い もう隠し事はないわ」

「そんな大事なことをなぜ隠したんだろう」

「今、そんなこと言ってるときじゃないでしょ
授かった命が消されようとしているのよ
命を削るから子供は諦めるように言われてそれで悩んでいるのよ」

「あきらめるとか命を削るとか俺にはなにが何だか・・・」

「美香さんはもう覚悟を決めているわ
どんなことがあっても子供だけは守ろうとしている」

「覚悟・・・」

「詳しいことは知らないの
だから私じゃなく直接美香さんに話しを聞いて
支える側がしっかりしない甘えられないし本心だって話せないわ
しっかりして、井川君は美香さんを守るんですよ」

「・・・」

「明日仕事前に美香さんに会って全部話した事を伝えます
あとは二人で・・・じゃ私はこれで」

「今日はありがとう」

佐知がいる病院で本当によかったよ」

「井川君、元気出して

病気との闘いはこれからの

井川君も一緒に美香さんの病気と戦うの

だから井川君は暗い顔しちゃだめ

美香さんの前では私が好きな笑顔でいて」

深いため息を吐いた雅和は少しだけ笑顔を見せた。

「じゃまたな」

さつき見せた笑顔は消え疲労困ぱいで手を振る姿に心が痛んだ。

今日は雅和のそばに寄り添っていたい佐知だった。

昔ならこんな時は・・・きつと抱きあつて慰めあっていた

だめ、もう昔のことを思い出してはだめ

兄が苦しんでいたらこんなとき妹はどうするかでしょ

雅和を思い歩く佐知の背後に駆けてくる足音が聞こえた。

「井川君、どうしたの」

振り返った佐知を雅和はきつく抱きしめていた。

「井川君・・・」

「少しでいいんだ このままでいてくれ」

波打つ胸元から雅和の苦悩を感じ取れた。

「佐知、ごめん」

突然の出来事は愛のぬくもりを思い出させた。
佐知は無理して明るく振舞おうとしていた。

「遠慮しないでいつでもどうぞ」

こんな体でよければいつでもお貸ししますよ」

無邪気な愛らしい佐知に雅和の顔も綻んでいた。

笑顔が戻った雅和に両手を広げハグをする仕草をしてみせた。
ごく自然に抱き合った二人は笑顔で見つめ合っていた。

「兄妹って今の私たちと似ているのかしら」

私は一人っ子だから兄弟がいる人が羨ましかったわ」

「俺も家ではいつも一人だった

それが当たりだと思つてたから兄妹なんてあんまり考えなかつたな
だけで美香さんが入院してからの俺は誰かの救いを求めずいられ
なかつた

こんなときの一人は本当に身にしみるよ

重い荷物を一人で背負うのは辛いけど振り返ればいつも君に支え
られていた

支えてやれない俺なのにそれでも君は手を伸ばし助けてくれた

・ごめん、今の俺は君に何もしてあげられない

それでも佐知は俺を支えてくれるのか」

「井川君と私は兄妹みたいなもの、そうでしょ

だから困つたときはお互い様よ

今度は私が今日の井川君みたい襲いかかるかも」

「襲いかかるつて狼じゃあるまいし俺は襲つたりしてないぞ」

「井川君が狼なら私は赤ずきんちゃんね」

顔を見合わせた二人には兄妹にも似た繋がりが見え始めた。

その後、雅和と美香は長い時間をかけて話し合っていた。

佐知には二人の会話を知る由もなかつたが雅和は美香の父の消息
を必死で探そうとしていた。

美香は相変わらず手術を拒んでいたが担当医の橘とは憎まれ口を

言いまでになっていた。

雅和は多忙になり日曜日限定の日帰りで見舞っていた。
そんな雅和からきたメールは平日の午後だった。

／SIGNPOSTで待っている

美香さんの父親の件で話したいことがある／

愛を紡いで？

雅和はカウンター席に座っていた。

「今日はおひとり？」

「彼女も来るころなんだけど ママ、コーヒーお願いします」

「はい、いつものストロングコーヒーね」

雅和は写真が貼られたボードを物珍しそうに眺めていた。

「ママ、このボード昔もあったっけ」

「ああこれね 貴方たちが来てた頃からあったわ

あの時は写真もまばらで気に留める人もいなかったけどね
もう貼る場所もなくてどうしようかと思ってるのよ」

「ほんとすごい数だな」

何気に見上げた目の先に見覚えある顔があった。

「ママ、左上に貼られた写真を見せてもらえますか
その黒いジャケットを着た女性です」

「知ってる人？ちよつとまって・・はいどうぞ」

どこか寂しげに微笑む写真の女性は美香だった。
日付から出張のときに撮ったものとわかった。

「この女性はひとりで此処に」

「ええ、でも誰かに聞いたとかでこの店を知っていたわ」

「・・・」

それきり口を閉ざした雅和はカウンターに伏していた。

「いらっしゃいませ」

ママが伏した雅和の背を突いた。

「彼女来たから奥の席に移る？」

席を立った雅和は握った写真をポケットに隠し入れた。
二人はいつもの席に腰をおろした。

「美香さんに会ってきた？」

「俺が来てること知らないから今日は会わないで帰るよ
頼まれた父親の消息やつとわかったよ」

「見つかったの　こんなに早く見つかるなんてすごいわね」

「付き合いのある興信所に協力してもらって見つけ出したんだ
俺一人じゃこうはいかないよ」

「ほんとうにご苦労様でした　それでお父さんは」

「美香さんの父親は生きている
奥さんを数年前に亡くし最近、老人専用のケアマンションに移っ
たんだ

体の具合が良くないらしく入退院の繰り返しらしい
確認の電話をしたときも入院中だと言われた

退院したら電話もらうようお願いしてある
会う段取りまで漕ぎつけるのはまだ先になりそうだな」

「入院しているのでも生きてらしてよかったわね
これで美香さんの願いが叶えられるわ」

「ああ、何とか叶えてやれそうだ」

隣の席にコーヒーを運んできたママが二人の前で足を止めた。

「話の途中ごめんさい
さっきの写真の人は二人のお知り合いのようね」

ママの話がいまひとつ読めない佐知は雅和に目を移した。

「あの写真の女性は俺の婚約者なんです」

「店に入ってきた彼女はとも思いつめた顔をしていたわ
それで何かあったら力になるからと名刺に携帯番号を書いて渡したの
彼女のことをずっと気になっていたのよ どうしているのかしら
彼女」

「彼女は入院しています」

「そう、やっぱり・・・」

人生にはどうにもならないことが一杯あるわ
でも命がけで願えば人生さえも変えられる
そう信じてけっして諦めないことね
あなた達は力を合わせ彼女を未来永劫に背負い続ける運命なのよ
だから」

カラン・・・コロン ドアの開く音が来客を知らせていた。

「お話の邪魔してごめんなさいね」

ママは話の途中でカウンター戻っていった。

「ママは美香さんの運命を知っているような口ぶりだったわね
それに私たちのこともなにか含みを持たせて・・・」

「なんだか薄気味悪いな 俺、鳥肌たってるよ」

雅和の手がポケットの写真を探していた。

「佐知、これがさっきママが言ってた写真なんだ」

雅和は写真を佐知の前に置いた。

「店のボードに貼ってあったんだ」

「ここで撮られた写真なの？」

「出張の時と同じ日付があるから間違いないよ」

「美香さんはママと会話をしたんだわ」

だからママは美香さんのことを気にかけていたのよ」

「どんな会話をしたのか気になるよね」

いや止めておこう　また鳥肌ものになるのはいやだからな」

「そんなこと言っていると出入り禁止にされるわよ」

店を出たあとも会話は途切れることなく続いていた。

「病院を出るとき橘先生が言ってたわ
木内さんを説得するのは手術より難しいって」

「医者は美香さんのような患者は迷惑なんだろうな
でも手術を受けるのは患者だ

いくら医者だって患者の意思を無視して従わせるわけにはいかな
いだろ

俺は美香さんの気持ちを尊重したい」

「美香さんは自分の命に換えても子供を産もうとしている
一方で子供は諦めさせ母体を救おうとする医師がいる
難しい選択だけど、どちらも正しいのかもしれない」

「あれから俺と美香さんは幾度も話し合った

俺は自分の気持ちを訴え続けた

美香さんが今することは身を削って子供を産むことじゃない
自分の病気と戦うことだ 命を永らえる事に懸けてほしいと
でも美香さんの決意は固かった

人の命は長短でない・自分らしく生きてなら命の長短など問題で
ない

彼女はそう言いきった そしてこうも言った

自分の意思を貫き全うしたい そうさせてほしい
これが最後・・・人生の締め括りだから協力してほしいと

納得なんて出来なかったけど、美香さん泣いたんだ

人前で涙を見せない彼女が流した涙はすべてを物語っているような気がした

俺は納得せざる得なかった」

「美香さんの気持ちを汲んで井川君も同意したのね」

「賛成したわけじゃないけど同じ労力を使うなら泣かれるより喜んでもらうことに使いたいと思ったんだ」

「だったら橘先生とのバトルも覚悟しないとね」

「戦闘開始か これからだな大変なのは」

「まだ始まったばかりよ 負けないで」

「俺、最終に乗りたいたいから走っていくよ 佐知またな」

走り行く雅和の背中はやさしく昔より大きく見えた。

見透かされた心

別れ際に雅和が言った言葉を思い出していた。

「たまには病室に顔を出してやってくれないか
美香さん君に会いたがってたよ」

就業後、佐知の足は入院病棟に向かっていた。

「ご機嫌はいかがですか」

「佐知さん ずっと待ってたのよ」

「ごめんなさい お邪魔かなと思って」

「遠慮なんかしないで」

佐知さんと会うと不思議と元気をもらえるの
だからこれからも顔を見せてね」

「そんなふうに言ってもらえて光栄です」

「佐知さん、ですとかますとか使うのやめにしない？

私が年上だつて事は忘れて話してくれると嬉しいんだけどな」

「はいそうします」

「ほら、また」

随分ご無沙汰の対面だつたが二人は打ち解けていた。

「雅和がやつと産んでもいいと言つてくれたの

でも本心はドクター橘と同じ、彼は子供の誕生を望んでいない」

「命を懸けて産むと言われたら愛する人の体を一番に考えるわ」

「それつて子供を諦めるつて事でしょ」

「命を救うためには何かを犠牲にしなければならない時もあるわ

愛する人を守るうとして井川君と子供を守るうとする美香さん

どちらも間違つていないけど今は母体を優先させるべきじゃない
かしら」

「佐知さんも同じなのね」

「井川君は十分苦しんだわ

母子の保障がないから大切な美香さんを選んだの

井川君が子供の誕生を望んでないなんてそんなこと絶対ないわ」

「健康な人はみんな同じ事を言うのね

人生舞台を降りる前にお腹の子だけは何としても誕生させる

愛する人の子を宿す次のチャンスはもう私には廻ってこないのよ

同じ女性だもの私の気持ち佐知さんにはわかるでしょ

私の言う命がけにはお腹の子への気持ちが込められているの

お母さんは身を捧げあなたを守り

語りつくせない愛を持って

あなたをこの世に誕生させる

だからあなたも頑張ってこの世に誕生しなければ駄目

そう、お腹の子にいつも言い聞かせているの

そんな思いを受け止め、元気に生まれてくると私は信じているわ」

「美香さんはつよいですね」

「ねえ佐知さん 雅和から父のこと何か聞いています?」

「仕事が終わってから一生懸命探していることは聞いています」

「心配だわ、体を壊さないといいんだけど」

「井川君なら大丈夫です
体力だけは誰にも負けない頑強な男だもの
必ずお父さんを連れて来てくれますよ」

「佐知さんにひとつだけ聞きたいの　気分を害しないで聞いてね
あなたが今も雅和を愛しているなら正直に話して
佐知さんは彼を、雅和をまだ愛しているんでしょう?」

突然投げられた直球に佐知はたじろいでいた。

「昔のことは忘れました
井川君がいま愛しているのは美香さんあなたなんですよ」

「私は佐知さんの気持ちを聞いているの　答えになっていないわ」

「もう昔のことです　終わった愛を穿り回して何の意味があるの」

「本当におわったのかしら
私には何かが新たに始まったように見えるんだけど」

「そんな冗談、わたし笑えません」

「佐知さんの気持ちは私と同じなのよ
私にとって雅和は大切な人、ずっとずっと一緒に生きたかった
でも私はいつか近い将来消えて雅和の前からいなくなるの」

「もうやめてください」

「雅和にはあなたが必要なの
あなたも雅和のこと必要としているわ
私が言ってること間違っているかしら」

「男と女でなく必要な人というなら間違っています
やっぱり訂正します 美香さんは間違っています
井川君が必要としているのは美香さんです
それを一番知ってるのは美香さん、あなたでしょ
井川君は誰のために苦しんでいるか知っていますでしょう
美香さんを愛し支え頑張ってきた井川君はなんだったの
哀しすぎます 美香さんはもつと自分の愛を信じてください
私と井川君の愛は終わっています もう昔には戻れないんです」

「綺麗ごとを言ってる時間なんて私にはないの
好きか嫌いかわ、愛しているのかいないのか
それを聞いているのよ、答えをまってるの
だから早く聞かせて、佐知さん」

「・・・」

佐知は親の仇を前にしたかように美香を見据えていた。

見透かされた心？

「答えられないのはなぜ？好きだからでしょ
佐知さんのなかで雅和はまだ生き続けている
終わってなんかいない・昔のままなのよ」

「だったら・だったら何なのですか
私の心を引く掻き回してなにが面白いのですか
こんなの美香さんらしくない 今日的美香さん私、嫌いです」

「やっと本音を口にくれたわね ありがとう佐知さん
いじめて困らせるつもりなどなかったのよ
佐知さんとは腹を割って話せる関係になりたい
すべてをさらけ出してほしかったの
私ね、本音でぶつかってくれた友人がいないの
建前の付き合いしかしてこなかったんだもの当然よね
佐知さんとはそんな付き合いはしたくない
そんな関係なんて今、私には必要ないから

つらいこと悲しいことなんでも隠さず話せる人が私には必要なの
窓の外が暗闇に覆われて景色が見えなくなると涙がこぼれて仕方
ないの

明日も目を覚ませるのかな 無事に朝を迎えられるのかな
朝日の中でさえずる鳥たちの声を聞けるかなって
そんなことばかり考えておかしくなりそう

そんな時、思い切り泣ける相手がいってくれたらって
雅和には見せられない涙も受け止めてくれる人がいたらって思った
それが佐知さんだったらいいなって、そう思ったの」

美香の言葉が心に沁みていた。

涙が流れ出るのを佐知は唇をかみこらえていた。

「これから本題に入るからよく聞いてね

佐知さん私はあなたに雅和をお願いしたいの

彼はとっても打たれ弱い男だから誰か支える人がいないと頑張れ
ない

子供みたいでおかしいでしょうけど私に何かあったら彼は自暴自
棄になって

きつと仕事どころでなくなるわ」

「井川君はそんな弱い男じゃないわ」

「いいえ、彼は弱いわ

私がいなくなったら彼は弱い男に戻ってしまう
だから支えがあなたが必要なの」

「私なんかを井川君が受け入れるはずがありません」

「受け入れるとかそんなことはどうでもいいの
雅和を支えられるのは私とあなただけよ

彼の気持ちがどうあれ佐知さんは嘘のない心で雅和と向き合っ
てあげて」

「井川君のことなんか心配しないで下さい

元気な赤ちゃんを産んで井川君と幸せになる事を願ってください」

「私は彼にたくさんのお愛をもらったわ

私達は愛を大切に温め今日まで歩んできたの

この世で彼と出会えたのが運命ならこの世で一番大切な彼との別
れも運命

命ある限りこれからも彼を愛しぬくわ

笑ってさよならしたあとにも私の愛は永遠よ

赤ちゃんに流れる血となって私は生き続けるわ」

佐知は背を向け溢れ出た大粒の涙をぬぐっていた。

気持ちを見透かされ佐知は動揺したが痞えが取れて身心とも軽くな
っていた。

抑圧されてきた気持ちに日が当たり青空に吸い込まれ消えてゆく
気がした。

「私が築けなかった愛を美香さんは井川君と築いていた

それを知った時、葬ったはずの思いが洪水のように溢れてきたの

美香さんには出来て私に出来なかったのは何故って涙がこぼれた息が止まるかと思うくらい胸が苦しくなったわ
愛を独り占めしている美香さんが羨ましくて嫉ましくて仕方なかった」

「私も同じだったわ

佐知さんの話をする雅和を見るたび、耳を塞ぎたくなかったわ
思い出話を口にされるのがとてもいやだった
だって私は貴方たちの思い出には入れないんだもの

二人の愛が復活したらどうしようなんて
ひとり思いつめて眠れない日もあったわ
佐知さんに嫉妬していたなんて笑っちゃうわね」

「女同士だから美香さんの気持ちわかります
嫉妬していたのは私も一緒です
私は無くした愛を忘れられずいつも懐かしんでいた
二度と戻らない愛と分かっているながら一抹の願いに祈っていた
私は未練の塊をずっと背負っていたんです
今はもう遠い昔話・・・笑えますね」

「ふたりで笑って水に流しましょう
新・旧恋人の垣根を越えやっとな同士になれた
これで何でも話せる仲になれるわね、私たち
これからよろしくね佐知さん」

「その前に一つだけいいですか
私が井川君を好きとிட்டたのはね
好きにはピンからキリまであるでしょ
今の好きは兄を慕う妹のような気持ちなの
これは本当よ、信じて」

「今つて言つた？てことは前は違つていたのね」

「ええ、でもそれは一方通行の願望だつた」

「気持ちが一方通行だつたなんて悲しいわ
それはそれはさぞかし御つらかつたでしょうね」

「ものすごい皮肉に聞こえるんだけど
それつてわたしの気のせいかしら」

「ごめんなさい、ご機嫌直して」
さつき佐知さんが言つたように私と雅和は堅い絆で結ばれている
のよ

だから分け入る余地などないつてことしつかり覚えておいてね」

「よくもぬけぬけと仰つてくれますね

美香さん本当はものすごく性格悪いでしょ

根性悪の美香さんに虐められたつて誰かさんに告げ口しちゃおう」

「佐知さん、お願いだからそれだけは許して〜」

二人の楽しげな笑い声が病棟にもれ聞こえていた。

これが最初で最後の笑い声になるとも知らず友情を誓い合っていた。

父の伝言

美香の父をお世話している須藤と名乗る男性から雅和のもとに連絡が入った。

入居しているというケアマンションに雅和は佐知を伴って出向いていた。

住所を手がかりにたどり着いた場所には老人施設とは思えない建造物が建っていた。

空間の間を取りもつアプローチは緑に彩られ丹念に手をかけた花々が咲き誇っていた。

玄関に入るとカウンターに立つ制服姿の男女が深く頭を下げて出迎えてくれた。

豪華ホテルに酷似したマンションを前にふたりは目を丸くしていた。

受付横の扉が開いてスーツ姿の男性が近づいてきた。

「私が先日お電話した須藤です」

「この度はご尽力いただき有難うございました」

「お部屋に案内いたします さあ、どうぞ」

二人は言われるがまま男性の後をついて行った。
青銅に彫られた佐々木悟朗の表札の前で足が止まった。

「佐々木様、お客様をお連れ致しました」

インタホーン越しに声が聞こえた。

「鍵は開けてあるからお通しして」

開け放たれたリビングにガウン姿の男性が見えた。
その人こそ美香が夢にまで見た父親だった。

「佐々木様、私はこれで・・・」

何か御用がありましたらお呼びください」

「須藤君ひとつ頼まれてくれないか」

客人にコーヒーを持ってきてほしいんだが」

「承知いたしました」

係りのものに急いで届けさせましょう では私はこれで」

「呆然と立ちすくむ雅和と佐知に声がかかった。」

「二人とも遠慮しないでこちらにお掛けなさい」

美香の父は痩せ細って痛々しくみえた。

「初めてお会いする人にこんな姿で申し訳ない
病み上がりなもので勘弁してもらいたい」

「こちらこそ無理なお願いを受けていただき恐縮しています」

「話の大筋は須藤君から聞いている
君は娘と懇意にしているようだね」

「結婚の約束をしています」

「結婚・・・そうか、美香はもうそんな年になったのか」

「お父さんを必死で探しました
彼女の願いを叶えるためにはお父さんのお力が必要なんです」

「私が美香と別れたのは彼女がまだ幼い2歳の時だった
それきり消息がつかめず会えなくなった
そんな私に今更、何ができるのかね」

「実は彼女はいま妊娠しています」

「それはめでたい話だ

あの幼なかつた娘が母親になるとは感慨深いな」

「子供が生まれたら是非ともお父さんにも抱いてほしいのです
美香さんはそれを切に願っています」

「美香がそんなことを言ってくれているのか とても嬉しいよ
だが美香の母の許しがなければ、なんとも返事のしようがない」

「美香さんの母親はもう亡くなっています
美香さんの抛り所は俺と隣に座っている彼女だけなんです」

昔愛した美香の母・早苗が脳裏をよぎり佐々木は宙を仰いでいた。

「お父様、大丈夫ですか」

佐知の呼びかけに佐々木は我に返り苦笑していた。

「あつ、申し訳ないつい昔を・・遠い昔のことだが
愛した女性に愛想をつかされたあげく娘と引き離された私は抜け
殻同然だった

生きることに意味をみいだせずこの長い年月を無意味にやり過
してしまつたようだ

愛のない結婚に終止符も打てず愛する女性と交わした約束も果た
せず

妻さえ幸せにしてやれなかつた愚かな男それが私なんだ」

言葉をなくし互いを伺う二人の耳に女性の声が聞こえた。

「佐々木様、珈琲をお持ちしました」

リビングの何処かから聞こえるその声に二人は不思議そうに辺り
を見渡していた。

「いま鍵を開けますから中へどうぞ」

佐々木は手に持った器械を操作して会話をしていた。

女性が珈琲を置き会釈して帰ろうとしたときだった。

「君、お手数かけるがベッドルームの写真をここへ」

「はい、今お持ちいたします」

目の前に置かれた写真立ては稀少価値のアンティークでイギリス製だった。

大事そうにそれを手にした佐々木は目を細めた。

「この写真たては早苗に、早苗は美香の母親です
彼女に買って渡せなかった土産なんです

当時彼女は両親に先立たれ大層ショックを受けていました

そんな彼女のために指輪と一緒に買い求めたのですが・
皮肉なもので渡そうとしたその日私は彼女に別れを告げられました
私はこの写真たてに命よりも大切にしてきた写真を飾っているの
です」

差し出された写真たてを手にした二人もまた佐々木同様、目を細
め笑みを浮かべた。

父の伝言？

写真には幼少のあどけない美香が映っていた。

「とても古い写真のようですが、美香さんですよね」

「娘、美香の面影はありますか？」

「はい、残っていますね、井川君」

「そういえば笑う彼女・最近見ていないな
でも美香さんは今もすてきな笑顔で
笑いますよ」

「そうですね、成長した今も
娘は昔のままの笑顔で笑っているのですね

思えば別れの日、私は写真をポケットに忍ばせていました
美香の母親は妻への気遣いから写真を持ち出すことを許してはく
れなかった

私がこの写真を部屋に飾ったのは妻が亡くなってからです
妻の存命中この写真を手にとることは一度もありませんでした
それが早苗との約束のような気がしてこの写真を封印したのです

妻は子供を産めない体でした

妻が一番悲しむであろう子供が存在を何があっても隠し通してほしいと

早苗は頭を下げ私に言いました

その言葉がずっと頭から離れず妻には知られまいと骨を折ったものです

しかし妻はすべてを知っていました

妻の葬儀が終わり半月たった頃、私は寂しさもあって写真を探しました

写真の下に手紙がありました・妻の筆跡でした

書斎に入ることなどない妻が何かの拍子に目にしてしまったのでしょう

こう記されてありました

この写真の子があなたの子なら隠さず堂々と会うべきだ

わが子の成長をその目で見ずして人生を終えてもいいのか
私もあなたも、もう若くはない

じつとしていても時はただ過ぎ去るだけ
だから動き出さなければ駄目だと・・・

さらに追伸があった

あなたの子ならきつといい子に違いないと

その文字に妻の悲しみを垣間見た気がして私は涙しました

妻の手紙に後押しされ娘を探そうとしていた矢先
私はこんな体に・・・無念でした」

「美香さんを探そうとしていたことを知ったら彼女だって喜びます
お体の調子の良い時に一度美香さんを見舞ってくれませんか
俺が病院にお連れしますから」

「こちらからも是非ともお願いしたい　美香に会わせてくれ
そのときは連絡を差し上げましょう
私をよくぞ探してくれた君達に感謝するよ　本当にありがとう」

「ではご連絡お待ちしています
今日はお話を伺えて有難うございました」

立ち上がった佐々木はガウンから細い腕を覗かせ手を伸ばしてき
た。

佐々木の手には小さな箱が握られていた。

「井川君、君からこれを娘に渡してくれないか
早苗に買い求めた誕生石の指輪が入っている

6月の誕生石は月長石でムーンストーンとも言われる
無色で青い白い光を放つ神秘的な石だ

この石を身に付けると幸運を呼んで身を守ってくれらしい
美香も母親と同じ6月生まれだからきつとご利益があるだろう
元気な子を抱ける日を楽しみにしていると伝えてこの指輪を頼
だよ」

「分かりました 責任をもってお預かりします」

「美香と会うためには・・・私は杖なしで
一人で歩けるようにならないといけないな
もうひと踏ん張り、頑張ってみるか
生きる糧が見つかって少しだが力が漲った様な気がするよ」

別れ際の佐々木の顔には血色が戻り赤みが差していた。

「ねえ、井川君
見送ってくれたお父様の顔が変わっていたの気がついた？」

「ああ、最初とは違って健康そのものに見えたな」

「病は気からって言うけど本当ね」

「これでは連絡を待つだけだな」

「でも美香さんの病気、伝えないでよかったの」

「あんな状態をみたらとてもじゃないけど言えないよ
どうみても自分の体のことで精一杯って感じだったろ
今は余計なこと言わないほうがいい
美香さんが自分の口で話す・・・その方がいいんだ」

「・・・そうね」

「子供が生まれるまで十月十日かかるっていうけど
お父さん、それまで元気でいてくれるといいな
高齢だし体もつらそうだったから心配だよ」

「心配していたらキリがないわ
そんなこと言ったら橘先生が言うように
母子ともに健康でいられるかどうかだって」

「やめやめ、もう止めよう
ネガティブな話は今後いっさいタブーにしよう」

「私ったら縁起でもないことを言っでごめんなさい」

「もう止めようって言ったばかりだろ
さあ、美香さんが待っているから早く帰ろう
お父さんのことを話したら美香さん
さっき見た昔の写真みたいに笑ってくれるかな」

「もちろんよ 今までで一番の笑顔で喜んでくれるわ」

美香の父の伝言を携えた二人は晴れやかな気持ちで東京を後にした。

血は水より濃し

そのころ橘医師は手術を断念し出産を優先させるべくチーム橘を立ち上げていた。

しかしそれは限りなく死に近づく選択でもあり医師として橘の心境は複雑だった。

そんな折に父の所在を告げられた美香は天にも登る思いだった。

「雅和ありがとう、

お父さんが元気でいてくれて、私うれしい」

「お父さんの体調はいまひとつだったけど

美香さんの話になったらみるみる元気になって驚いたよ

お父さんも美香さんを探していたから本当に嬉しかったんだね」

「私のこと忘れていなかったのね」

「お父さんは古い写真を大切に持っていたよ

あどけない顔で笑っている美香さん、とても可愛かったな

娘は今もこんな笑顔で笑っているのですか

そう言って写真の君を見つめるその目は父親そのものだった

美香さんの願いを伝えた俺にお父さんは

是非とも抱かせてほしいと反対に頭を下げてくれた
おだやかで紳士的だった君のお父さん、俺すきだな」

「お母さんが愛した人なら私も好きになれると信じていたから
紳士と聞いてホツとしたわ」

「俺もあの人に子供を抱かせてやりたい

美香さん、俺たちの子供をお父さんに見せて喜んでもらおう

だから美香さんは元気な赤ちゃんを産むだけじゃ駄目なんだ
産んだ後も君が元気でいなければ意味がない

元気な子をお父さんに見てもらうためにはつらい治療も克服しな
いと

大変だろうけど俺と一緒に頑張ろう、負けないで病氣と闘ってい
こう」

「ええ、子供と一緒に元気な姿でお父さんに会わなければ
それまで生きていなければ・・・」

「弱気になったら負けなんだ

俺のそばで美香さんはずっと生き続けるんだ

・・・信じて、何も心配するな

俺と共に生きてゆく、君はそれだけを願えばいい」

「私、お父さんに会って子供を抱いてもらえるまではなんとかして生きていたいと思ってた

でも今はあなたと生まれてくる子供・・・お父さんと生きてたい

母が実現できなかった家庭を私はずっと夢見ていた

愛する家族がいて毎日笑って暮らせる家庭そんな普通の生活を夢見ていたの

だから、生きてたい、死にたくないわ　ねえ雅和、私は本当に死ぬの
どうして私なの　誰が決めたの　ねえ雅和、教えて」

泣かない美香の目に零れんばかりの涙がまた溢れだしていた。

「俺の前で死ぬなんて絶対口にするな

俺を愛しているのなら生きるんだ　それが君の俺への愛の証しになる

強い気持ちで病を追い払ってくれる　希望を捨てず生きるんだ
一人じゃない、俺がそしてお父さん、佐知もいる
生きる望みを失わないで強い気持ちで生きると約束してくれ」

「はじめてなの、こんな気持ち

死は・・・とうに受け入れたはずだったのに
生きていって願うことがこんなに苦しいなんて
死を受け入れるよりつらいのはなぜ

子供を産みたい、お父さんと会いたい・・・その願いがひとつ叶ったら

またひとつ別の願いが湧き上がってくるなんて私、欲張りね」

「欲張ったっていいじゃないか

希望があるから夢があつたからこれまで頑張れたんだろう

人は誰もがつらい人生をも乗り越え生きているんだ

目の前の山を越えるとそこには希望や夢がある

だから頑張れる、俺はそうして生きてきた

美香さんも・同じだよ」

雅和はベッドに腰をかけ美香を強く抱きしめた。

「あつかいわ、雅和の胸

このぬくもり、何もかも忘れさせてくれる

この広い宇宙で雅和と出会えた導きに感謝している
私はなんて幸せ者なのって心から思えるわ

もうなにも恐れない、死に神とだって闘う覚悟よ

雅和の前で死ぬなんて二度と言わないわ

私はもう大丈夫 ごめんなさいね、心配させて」

覚悟を決めた美香の笑顔は女神のようにまぶしかった。

「お父さんから預かってきたものがあるんだ

美香さん、両手をだして」

雅和は鞆から小箱を取り出し美香の手に乗せた。

「開けて中を見てもいい」

小箱を開けるとコバルト色のケースが現れた。

「中にお父さんの思いがいっぱい詰まった指輪が入っている
両親を亡くしたお母さんを元気付けたいと出張先で買い求めた指
輪だと言っていた

美香さんは6月の誕生石ムーンストーンが幸せを呼び身を守って
くれる石だって知ってた

美香さんとお母さんは誕生月が同じだね

お母さんに渡せなかった指輪を君に渡してほしいと言ったお父さ
んの気持ち

美香さんにはわかるだろ」

「母のために買った指輪が私の手元にあるなんてとても不思議だわ」

「誕生月が一緒じゃなければ手にすることはなかったかもしれない
指輪だ」

「この指輪大切に私のお守りにするわ

指輪と一緒にお父さんが私を守ってくれるそんな気がする」

「お父さんは誰よりも美香さんを思っているよ
美香さんをどんなに愛していてもお父さんだけでは絶対に敵わな
いよ

それほど肉親の愛は絶大なんだ

君のお父さんと会ったあと俺は自分の親父を思いだしていた
あんなに憎しみ、嫌っていた親父でも俺の中で親父は今も鮮明に
生き続けていた
他人だったらこうはいかないんだろうけどこれが濃くて深い肉親
の情ってやつなんだろうな」

「血は水よりも濃しって諺があるから血の？がりはそういうものな
のよ、きつと」

不思議な出来事はこれだけではなかった。

美香に関わる人達が織りなす人間模様になたな真実があった。

眠れぬ夜

美香は会社から送られてきた書類に目を通していた。
長期病気休暇について書かれた書類だった。

忘れないように手帳に挿もうとしたそのとき一枚の名刺が何気
目に入った。

SIGNPOSTのその名刺を手にした美香はママを懐かしく思
い出していた。
名刺に書かれた携帯の番号が気になって何度も手にして見つめて
いた。

「ママ・・・私を覚えているかな」

美香は会いたい気持ちを抑えられなくなっていた。

土曜の夜、美香の病室に雅和の姿があった。

「頼みたいことがあるの
明日、行ってきてほしい場所があるんだけど雅和にお願いしても
いいかな」

「いいかって、もう決まりなんだろ 俺がいくって」

「それじゃ、話が早いわね」

明日、SIGNSPOSTに行ってもらいたいの」

「・・・」

「雅和、聞ってるの?」

「美香さんの口からSIGNSPOSTの名前が出てくるとは驚きだな」

「私、出張のときあの店に立ち寄ったの」

そのときママが何かあったら力になるからって声をかけてくれてこの名刺をくれたの

あの時は感じなかったけど今になってママのことが気になって仕方ないの」

「ママは気さくで面倒見がよくてみんなに慕われていたからな」

「雅和はママがああの界隈でちょっとした有名人だって知っていた?」

「有名人・・・俺はそんな話一度も聞いたことないよ」

「ママは占い師で超能力者なのよ」

「やめてくれよ そんなことありえないだろ」

「見えるって言ったの 私のことが見えたって」

「見えるって・・・何が？」

「人の人生が見えるらしいの」

「・・・」

美香の話がまったくの嘘でないことは雅和にも少しだが理解できた。

「私が倒れたあの日、ママには私が見えていたのよ
初めて会った私を見て早急に病院にいきなさい
頭に注意しなさいって言ったわ」

「なんだかゾクツとしてきたよ」

「店を出た私を追ってきてくれたママが忘れられない

おかしいでしょうけど恋しいの

力になるからと優しく言ってくれたあとき

ママには私の何が見えたのかしら・・・

私・・・力をもらいたい

だからママに会いたいの」

「美香さんがそうしたいのなら俺がなんとしてでも連れてくるよ」

「雅和は手紙を届けてくれるだけでいいわ

後はこれを読んだママが決めてくれればいいの」

「わかった

明日、病院に来る前にママに届けるよ」

「いつも頼みごとばかりで、ごめんなさい」

「気にするな

俺、夜のお願いはちょっと苦手、自信ないけど

こづいづことなら得意だから心配しないでいいよ」

「もお、雅和つたら私が超肉食女みたいな言い方してる」

「美香さんはジキルとハイドだからね」

「ほんとに失礼しちゃうわね」

頼み事がなければやり込めたいところだけど今夜はやめておくわ」

「俺、怒った美香さんも大好きなのに残念だなあ」

「もお、口がうまくてお手上げだわ」

「上手くてお手上げなのは口じゃなく俺のキスだろ
忘れたなら・・・試してみる？」

「雅和のキスはいつだって最高よ」

熱い抱擁で唇を重ね雅和が去った後
久しぶりの濃厚なキスに美香の体は熱く反応していた。

「いまの私は・・・雅和と愛し合うことは出来ない
この胸に雅和の鼓動が伝わっていたあの頃に戻りたい」

暗がりの病室に深い溜め息が漏れていた。

それは今宵もまた・・・

一人ぼっちで眠れぬ夜を明かす嘆きの声のようだった。

眠れぬ夜？

雅和はSIGNPOSTに向っていた。

まだ看板の出ていない店に手を伸ばすとドアが開いた。

カラン・カラン

「あら誰かと思えば今日はめずらしく早いお出ましね」

「開店前だけどいいかな」

「ええ、構わないわよ」

いつものお友達夫婦のところに泊まったの？」

「うん、週末こっちにいるときは新婚家庭に居候」

「お腹が空いてたまらず飛び出してきたってとこでしょ」

「その通り、腹がへって倒れそう」

「ママ、モーニングとストロング珈琲ビッグサイズを超高速で」

「急いで作るから待ってね」

モーニングを食べ終えた雅和にグレープフルーツを差し出したママが声をかけた。

「今日はなんだかうかない顔しているわね」

雅和は胸ポケットから取り出した手紙を突き出した。

「なあに、まさかラブレターじゃないでしょうね」

「美香さんから頼まれたんだ」

「彼女が私に？」

「ママの事が恋しいって言うていたからラブレターだよ、きっと」

「まあうれしい」

帰ってからゆっくり読ませていただくわね」

「俺は手紙一つもらってないのに何だかしゃくなんだよね」

「ひょっとして今日の浮かない顔はやきもち妬いてたからなの？
やだ〜かわいいわね」

雅和は火照った顔を隠すようにグレープフルーツを口に運んでいった。

「ねえ、さつきから刺すような視線が気になるんだけど
気のせいかしら 私の顔に何かついていない？」

「えっ別に」

「私のこと何者って怖がっているみたいね
そうでしょ」

「彼女言ってたんだ
ママは占いが出来て・・・
何でも見える不思議なすごい力をもっているって
此処で俺と佐知に言ったママの言葉を思い出して
そしたらあの時と同じ鳥肌がたってきて・・・」

「そうね、普通の人なら気味が悪いでしょうね」

解ってもらえるかわからないけど聞いて

人生は誰のものでもない自分のものだから

他人が口を挟むことじゃないけれど

身近に不幸に向う生き方をしている人がいたらどうする

行動に移すかは別としてそれを正してあげたいと思わない

占いて怖がらせるものじゃなくて

人生の困難を上手く乗り越えられるように導くもの

私が話すことがすべての人に伝わるわけじゃないわ

伝わらないほうが多いかも・残念だけど

でもね、何年も後になって感謝されたりすることあるのよ

そんな時だけよ、自分の特殊な力を素直に喜べるのは「

「占いとか透視とか正直俺は信じないからちょっと引いてしまっなあ

あつ、すみません」

「いいの、大抵の人は引いてしまうでしょうね

人の気持ちまで変えようとは思っていないわ

こればかりは仕方ないけど嫌われちゃったかな？」

「俺にとってママは学生の時と同じ

誰にでも平等で親身になってくれる姉御的存在なんだ

何も変わっていないよ」

「ありがとう」

今までもこういうことがあったから透視は封印していたのよ
でも彼女、美香さんっていったかしら
彼女にはあの時どうしても話さずにいられなかった
どうしてかしらね、今から思えば不思議だわ」

「美香さんも同じこと言ってたな
どうしてだか分らないけどママのことが気になるって」

「出会って宝物探しみたいで面白いなって
お店をしていて思うのよ
彼女と私が遠い昔どこかで繋がっていたとしたら
その魂が呼び合ったのかもしれないわね」

「彼女も何故かそういう人の縁や繋がりを
物凄くというか・異常なほど大切にするんだよね」

「母親の血を濃く受け継いだ彼女には母親の思いが強く宿っているの
彼女が命と同様に大切にしているのは繋がり、絆よ」

「・・・」

「彼女はあなたを心配している
あなたに心配させまいと無理しているわ
もう少し彼女の気持ちに寄り添ってあげて」

「・・・ママ、手紙読んで下さいね」

「ええ、喜んで読ませていただきます」

「じゃ俺、帰ります ママご馳走様」

「あつ、待つて

迷惑でなかったら連絡先を教えてもらえないかしら

又あなたはひいてしまうだろうけど私、胸騒ぎがして仕方ないの
あなたと連絡しなければならぬことが必ず起きるわ」

雅和は差し出されたメモに携帯番号と名前を書いて店を出た。

「何が起きる・・・と言っただ

やばい、また鳥肌が立つてきた」

次に起こる事態に不安を抱き雅和は硬直した体を身震いさせた。

眠れぬ夜？

明かりを消しSIGNPOSTの看板を外すママの目に映る商店街は

日中とは全く別の顔を見せうら悲しいものだった。

「町から人と触れ合う商店がどんどん追いやられていくこのお店もいつか無くなってしまふのかしら」

徒歩で5分もかからない自宅マンションに帰ると真っ先に向うのは浴室。

シャワーを浴び部屋着に着替えるとチーズとワインで一日の疲れを癒すのが日課だった。

今夜はワインもそこそこにブランダに呆然と佇んでいた。

「こんなことってありえないけど本当なら」

美香の手紙を手に尋常でない脈打つ鼓動を沈めようとしていた。

ママの名前は沢村田鶴子。

幼少の頃、両親の離婚で田鶴子は母と家を出た。

養育費は父がきちんと振り込んでくれたおかげで贅沢さえ望まなければ人並みの生活が送れた。

長患いの母の看護で婚期を逃しこの歳まで独身を通してきた。

母を看取ってからというもの暗くて長い一人の夜が苦手になった。寂しさからなのか遠い記憶の兄を思い出し切なくなった。

兄の手がかりはなく月日はあつというまに過ぎたがもしどこかですれ違っていたとしても

お互い見知らぬものとして通り過ぎていただろう

父の姓は確か佐々木、兄の名前は悟朗

成長した兄は後に役人になりトップにまで登りつめたと聞いた

亡くなる前に母から聞いた話しが偶然にも美香の手紙に書かれた事柄と符合していた。

田鶴子は意を決し雅和に電話をかけた。

「SIGNPOSTの沢村田鶴子です

遅くにごめんなさいね もうおやすみだったかしら」

「もしかしてその声はママ

どうかしたんですか？もしかして手紙の件で」

「手紙、読ませていただいたわ

それでね、一つだけ教えてほしいことがあって」

「俺が知っていることならお答えしますよ」

「ありがとう、実は美香さんの父親の事なんだけど
今、どこにいるのかしら」

「奥さんを亡くしてから東京都内にある豪華なケアマンションに住
んでいますよ」

「そう・・・」

「手紙にお父さんのこと書いてあったのですか
それでなにか気がかりなことが・・・
俺でよかったら聞きますから話してください」

「知り合いと同じ名前だったから聞きたくなっただけ
ただそれだけだから心配しないで
夜分ごめんなさいね・・・おやすみなさい」

もしも・・・美香さんの父親が兄ならば
私とお母さんを覚えているかしら
お兄さんにひと目会いたい・・・

田鶴子の思いは美香が涙した父への思いと同じだった。

今宵、眠れぬ田鶴子は美香の手紙を繰り返し読み返していた。

週末病院に向う雅和はSIGNPOSTに方向を変え歩いていた。深夜にかかってきたママからの電話が気になっていた。

「いらつしゃ・・あつ井川君、この間は夜分にごめんなさい
突然で迷惑だったでしょ、本当にごめんなさいね」

「俺は迷惑じゃないけど・・
そんなに申し訳ないって思うなら何かご馳走してもらおうかな」

「いいわよ、お安い御用だわ
何でもいいからどんどん注文して」

「いやだなママ、冗談だよ、冗談
いつもの珈琲お願いします」

「遠慮しないでよ お腹は空いてないの
メニューにあるものなら作ってあげられるから」

「今日はしっかり食べてきたから本当にいいよ
お気持ちだけ頂きます」

「じゃ、この珈琲は私からのお礼ね」

「お言葉に甘えて、ご馳走になります」

「ねえ、ところで井川君は美香さんのお父さんと面識は？」

「はい一度だけ」

美香さんからお父さんを探してほしいと頼まれて
それで探し出して俺と佐知で会いに行きました」

「それでその人・・・どんな印象の人だったのかしら」

「今日は質問攻めだな」

ママは透視できるんだからなにも俺に聞かなくたって・・・」

「茶化さないの」

勿体つけずに質問に答えなさい」

「はいはい、わかりました」

答えにならないかもしれないけど俺、あの人好きだな
あの人の話す言葉すべてがすうーと心に入ってきた

俺の美香さんへの思いは誰にも負けないと自負している

だけど、この人にだけは敵わないなって思ったよ

病身のやせ細ったあの人がセピア色になった美香さんの写真を濡れた目で見つめていた姿がいまも焼きついている

あの人、別れ際に言ったんだ

生きる糧が見つかったからもう少し頑張ってみるかって・・・
その顔は晴れやかだった

美香さんの話をしたあの方は見違えるほど元気になった
孤独なあの人に希望と生きる糧を齎したのは美香さんだった」

「孤独な人か・・・私と一緒にね

人は皆、一人で生まれ一人死に逝くものだから誰もが孤独といえるでしょうね

でも身寄りがいるといたないとは雲泥の差・・・

美香さんのお父さんはやっと眠れぬ夜と決別できた
体も徐々に持ち直して元気になれるといいわね」

「俺も眠れない夜のつらさは沢山経験している

なんとって次の日の仕事を超しんどくてつらいんだよね」

「そうじゃなくて身につまされるつらさの事を言ってるの
それが分らないようじゃまだまだね

井川君って天然なの 面白いのね」

「やっぱり俺は、まだまだですか
風向きが悪くなったところでそろそろ帰ろうかな
ママ、美香さんに伝えることある?」

「手紙のお礼と返事はもう少しまってるねって
それだけ伝えておいて頂戴」

「了解」

ママは何か探り出そうとしている気がする
・・俺の思い過ごしなのかな

雅和は電車に乗らず駆け足で病院へと向った。

眠れぬ夜？

扉を開けると病室の美香は静かな寝息をたてていた。

椅子に腰掛けた足もとにレポート用紙が落ちていた。

雅和は拾い上げ書き込まれた文字を目で追った。

それはSIGNPOSTのママに渡した手紙の下書きだった。

レポート用紙を元の場所に置いた雅和の顔から血の気が引いていった。

「俺は美香さんを支えるどころか苦しめていたのか・・・」

美香の手を握りながらママが言った言葉を思い出していた。

「美香さんは無理しているわ」

雅和は堪らず病室を飛び出していた。

雅和が隆一の家に戻ったのは辺りがオレンジ色に染まる頃だった。

町を彷徨い身も心もぼろぼろで帰宅した雅和は夕食を食べると早々にテーブルを離れた。

「雅和、頂き物のメロンがあるの

食べてから部屋に行つてよ」

「疲れたから横になりたいんだ
真砂子ごめん、俺はいいよ」

「それじゃ、明日の朝みんなで食べようね」

転寝から目覚めた雅和の耳に隣の部屋から龍一と真砂子の楽しげな声と笑い声が聞こえた。

「あいつら本当に幸せなんだな」

ちょうどその時、机の上の携帯がブルブル踊りだした。

「もしもし、井川君今どこにいるの」

「どこだって、いつもの龍一の家だよ」

「美香さん、心配していたわよ
絶対来るって言っていたのに顔を見せないって」

「病院には行ったけど」

美香さんの寝顔見て・・・帰ってきた」

「顔も見せないで帰ったの、どうして？」

「・・・」

「話したくないなら聞かないわ

明日はちゃんと顔を見せてあげてね

美香さんに余計な心配させないで

じゃ、おやすみなさい」

「佐知、電話を切らないでくれ

ひとりで居たくないんだ 頼む・・・佐知」

「井川君、ひとりなの

真砂子たち・・・出かけているの」

「龍一と真砂子なら二人の世界の真っ只中だ

俺の割り入る余地など皆無・・・わかるだろ」

「今日の井川君なんだか苛立っている

なにか聞いてほしいことあるのね

誰でもいいから話し相手がほしかったんでしょ

私、相手になるから話して・・・」

「佐知にはわかるんだな俺の気持ちか・・・」

なら甘えて佐知に気持ちぶつけてもいいかな」

「ええ、聞かせて」

「俺は入院した美香さんの気持ちなどお構いなしで自分の気持ちばかり押し付けたような気がするよかれと口にした言葉が美香さんには苦痛だったそう思うと情けなくて全身の力が抜けていくよ」

「美香さんはいつだって井川君に感謝しているわ」

「そうかな、無理しているんじゃないのかな」

「無理って・・・どづいづこと」

「美香さんは俺が苦しむのを見るのが嫌だから自分の気持ちを押し殺して吐き出せずにいるんだ」

「井川君が苦しむ？」

「だいぶ前だけど美香さんが涙を流して驚くほど取り乱したことがあつて

冷静な美香さんしか見たことがない俺は只うるたえるばかりで彼女を支えるどころか呆然として固まってしまった

そんな俺の姿を見たから美香さんは本音を言えなくなったんだ」

「そんなことないわよ

美香さんが・・・そう言ったの」

「今日、SIGNPOSTのママに書いた手紙の下書きを見てしまったんだ」

「それに美香さんの気持ちが」

「俺に心配させまいとして本心を隠し続けた彼女の気持ちが手紙に書いてあつた

ノ心を偽っている自分はピエロのようだノ

そんなことを美香さんに書かせている自分が悲しくて情けなくなつたんだ」

「それで美香さんと顔も合わさず病院を飛び出した

・・・やりきれないわね」

「・・・佐知に会いたい
今すぐにも飛んで会いに行きたい」

「井川君、しつかりしてよ
逃げないで美香さんと向き合わなきゃだめ」

「ママにも言われたよ
寄り添ってあげなさいって」

「そうよ、それが一番よ
女は好きな人にすべてを話しているかっていったら
ほとんどの人が話せないでいると思う
だから美香さんに限ったことじゃないわ
女はね、つらい時、好きな人に黙って抱きしめてもらうだけで
もうそれだけで癒され、充たされるのよ
だから井川君は黙って美香さんを抱きしめてあげればいいの」

「そういえば最後に美香さんを抱きしめたのはいつだったかな
帰り際キスした先週か」

「はいはい、ごちそうさまです」

「あっ、ごめん」

「とにかく余計なことは追求しないで
手紙の件も知らないふりして何もなかったことにするの
美香さんが物思いにふけったり落ち込んで元気がなかったら
しっかりと抱きしめてあげてね
頑張ろうって気持ちにきつとなれる、間違いないから」

「佐知、ありがとう
また借りを作ってしまったな」

「そうね、いっぱい貯まったわね
なにかお返しのおねだりしようかしら」

「佐知の要望ならなんでも聞くよ」

「何でもって言うのは
訂正しておいた方がいいんじゃない？」

「どうして」

「だって・・・私がもしもよ
昔のように私の所に戻って来てその大きな胸で
抱きしめてっっておねだりしたら聞いてくれるの」

「……………」

「井川君マジに受け止めちゃった？」

「いやだ〜冗談よ、冗談」

「そんな冗談・・・心臓に悪いよ」

「おねだりは色恋なしでお受けします」

「わかりました」

「じゃ、私のために時間を作って美味しいもの食べに連れて行って」

「それならOKです」

「楽しみにしているわ」

「眠くなってきたからもう電話切るわね」

「井川君、お休みなさい」

「サンキューー 佐知」

「電話を切った佐知はカーテンを開き空を見上げた。

「雅和と出会った日と同じ夜空が目の前に広がっていた。」

「さっきのおねだりは冗談なんかじゃない
・・会いたいなんて言うから」

あの夏の日と同じ心音がドクドクと高鳴り遠い昔が甦っていた。
佐知は自分の体を思わず両手で抱きしめた。

「愛する美香さんでいっぱいなくせして飛んで会いに行きたいなんて
心惑わす言葉なんて聞きたくない、心無い言葉なんか紙くずと一緒に
今夜、眠れないの雅和のせい、雅和のバカ」

再会

SIGNPOSTのママ・田鶴子は、美香の父に会うため準備を進めていた。

佐々木の娘・美香の使いの者と名乗り面会を申し込んでいた。

／突然で申し訳ございませんが

本日より2日間休業させていただきます／

数日後SIGNPOSTには臨時休業の張り紙が貼ってあった。

東京駅に降り立った田鶴子は

不慣れな電車には乗らずタクシー乗り場へと向った。

メモした住所を無言で運転手に差し出すとタクシーは田鶴子を目的地までなんなく運んでくれた。

約束の時間にはまだ時間があつたが

ホテルと見間違つような建物にしずしず入っていった。

受付で佐々木悟朗の娘の使いと伝えると

受付嬢はすんなり部屋まで案内してくれた。

「佐々木様、お約束のお客様をお連れ致しました

お通ししてもよろしいでしょうか」

カチャ・・・と鍵の開錠された音がした。

受付譲は田鶴子を部屋に入るよう促しその場を離れた。

リビングにガウン姿の男性が見えた。

田鶴子の自宅がすっぽり収まるリビングに驚きを隠せなかった。

男性に少年だった兄の面影はなく田鶴子は恐る恐る歩み寄った。

527

「はじめてお目にかかります沢村と申します。

突然なお時間をとって頂きありがとうございます」

「失礼ですが娘とあなたは歳が親子ほど離れている

美香とはどんな関係で」

「美香さんと井川君は私のお客様で

あっ、申し遅れましたが私は小さな喫茶店を営んでいます

それで親しくさせて頂いています」

「さようですか

それでは本題に入りましょう

あなたが言付かった娘の伝言を聞きましょうか」

「実は私は美香さんの使いの者ではありません

そう言わなければ会っては頂けないと思いましたが、
嘘をつきました すみません」

「何ゆえ・・・嘘までついて」

「佐々木様に私の話を聞いていただいて

どうしても確認したいことがあるのです

お願いします どうか私の話を聞いてください」

「偶然の出会いなどこの世にはないと誰かが言っていたな

あなたと出合った事も必然と受け止め話しを伺いましょう」

「ありがとうございます」

私がこれから話すことが間違っていたらお許しください

佐々木様のお父様は佐々木剛という名前では・・

母の名は静子、違いますか？」

「君は私の素性を調べたのか」

「あなたには妹がいたはずで

覚えていらっしやいますか」

「ああ、たしかに妹はいる

いや、いたと言ったほうが正しいだろう」

「佐々木様のお母様はまだ幼い妹を連れて家を出た

あなたは妹と離れ離れになった」

「・・・君はいつたい 何か魂胆でも」

「魂胆なんて・・・なにもありません

私の話をもう少しだけ聞いてください　お願いします

物心ついた私はずっと母と二人の生活でした

母は父と別れ、私は父を知らず育ちました

私が中学生になった頃でした

年の離れた悟朗という兄の存在を知ったのは・・・

母から兄の自慢話ばかり聞かされました

どこから聞いてくるのか不思議でしたが

悟朗兄さんはお役所に勤める立派な大人に成長したと

それは嬉しそうに話していました」

「待ってくれ・・・

君はもしかして・・・田鶴子なのか」

「はい、佐々木田鶴子です

現在は母の姓、沢村田鶴子です」

「君が田鶴子・・・

母が家を出て行った時のことは今も覚えている

涙をためた母は最後の日、妹をこの手に抱かせてくれた

悟朗、お母さんと田鶴子ちゃんを忘れないで
お母さんも田鶴子も悟朗を忘れないからね

そう言い残して母は去っていった
あの時の母に背負われていた妹が・・・君」

「間違いなかった　あなたが悟朗兄さんなんですね

まさかお兄さんの子供が美香さんだったなんて

私は美香さんと出会えてなかったら
お兄さんとの切れた絆を結べぬまま人生を終えていたわ」

「美香がまたひとつ私に贈り物を運んでくれた
再会など諦めていた妹・田鶴子、君に会わせてくれた」

「今、お兄さんはおひとりと聞きましたが
母が亡くなってから私もずっとひとりで生きてきました

母の介護、お店の切り盛りをしているうちに
婚期も逃してしまっって・・・」

「随分、苦勞したようだな
困ったことがあったらこれからは私が助けるから
遠慮しないで甘えてほしい」

「お兄さん、心配しないでください
母がマンションとお店を残してくれましたし
目玉が飛出るような警沢を望まなければ
一人で食べてゆくには十分過ぎる生活をしていますから」

「そうか、なら安心した

ところで入院している美香の様子だが
何か聞いているなら教えてくれないか」

「お聞きになつていると思いますが
美香さんは懸命に病氣と戦っていますよ」

「美香は病氣なのか・・・わかるように説明してくれ」

「お兄さんは何も聞いていないのですか？」

「井川君からは美香の体の事は聞いていない
妊娠のことは聞いたがそれ以外は…」

「美香さんは脳に腫瘍が見つかって・・・
その腫瘍のある場所が問題で、難しい病症です」

「美香が脳腫瘍・・・」

「お兄さん、これ美香さんが私に書いてくれた手紙です
どうぞ手に取ってください」

「私が読んでもいいのか？」

「ええ、読んでもらいたくて持ってきました
ですから、どうぞ」

差し出された手紙を受け取った悟朗は胸に下げた眼鏡を手にした。

再会？

娘・美香の手紙を読んでいた悟朗が突然、眼鏡をはずした。

「お兄さん、どうかしましたか」

「いや、何だか今日は疲れているようだ
文字が歪んで見える・・・
悪いが田鶴子、声を出して読んでくれないか」

「わかりました 読みますね」

突然のお手紙に驚いているでしょうね。
私は一度お店に伺った木内美香と申します。

ママに病院に行きなさいと忠告して頂いた者といえは
思い出してもらえるでしょうか。

あの日、私は偶然にも病院勤務の知人を訪ねようとしていました。
そして訪ねていった病院で倒れ入院、今も療養中です。

先日、手帳を見ていたらママから頂いた名刺を見つけ

初めて会った私の体を心配してくれたママへ
お礼を伝えなければと思ったのです。

ママの言ったとおり、私の体は病魔に蝕まれていました。
忠告、ありがとうございます。

私はいま病気よりも心の葛藤に苦しんでいます。
ママならきつとわかってくれる・・・
そう思ったら急に懐かしくなってママが恋しくなりました。

私は母子家庭で育ちました。

母は亡くなり1人で暮らしています。
でも幸いなことに愛する人にめぐり合い私は幸せです。

最近、ふたつの嬉しいことが起こりました。
一つは諦めるように言われたお腹の子を産んでもいいと
ドクターからお許しが出たこと

もう一つはその赤ちゃんをまだ見ぬ父に抱いてほしいという願いが
叶いそうだということです。

私は不倫の子で父の顔を知らず育ちました。

母に聞かされた話しでは父は省庁に勤める佐々木悟朗という人。

子供を宿した私の父への思いは膨らむばかりでした。

そんな私のために彼が必死で父を探し出してくれたのです。

彼が見た父の印象はとても好印象だったようです。

私は元気な赤ちゃんを早く父に抱かせてあげたいと胸躍らせまし
た。

奥さんを亡くした父は病身の身で1人ケアマンションに住んでいました。

出来れば父と愛する人と生まれ来る子供と共に暮らしたい・

でも残念ながら私は子供の成長を見届けられないでしょう。
長くは生きられないと思っています。

命よりも子供を産むことに賭けた私に彼は断固反対し続けました。
命を賭けて産む私の気持ちは彼に伝わりませんでした。

私が助かることは「お腹の子供の死を意味するのです。

私の死を受け入れられない彼が

子供の死をどのように受け入れられるのか

私の命をおもんばかりに

子供の命を同じように考えてくれたのだろうか

彼と私の間にはお腹の子の思いに大きな隔たりがありました。

子供を産むことに理解出来ないと言っていた彼が同意したのは
私を取り乱して泣きじゃくる姿をもう見たくないから・・・
彼は私たちの赤ちゃんの誕生を心から喜んではいないのです。

死を口にすると彼の顔は見る見る悲しみ色に染まります。

本当は子供より私の命を優先させたい彼のジレンマが伝わってきます。
ます。

そんな彼を見るのが嫌で・・・つらくて

いつのまにか私は口を噤んで感情を隠し続けてしまったのです。

死を現実のものとして受け止め、その死と向き合う恐れ、不安、

絶望、苦しみ

その悲しみのたけを私はどこにぶつけねばいいのでしょうか

手で口を覆い泣きむせんでいる私を知っているのは闇夜の星だけ

「田鶴子・・・少し休憩しよう」

「手紙はもう少しで終わりますから読んでしまいましょう」

「いや、美香の気持ちが胸を突き刺し・・・たまらんだ
落ちて着いてからまた読んで聞かせてくれ」

「わかりました

ちょうど持ってきた美味しい紅茶がありますから

お土産に買ってきた焼き菓子でティータイムにしましょうか」

オーディオのリモコンを押した悟朗は眼を閉じた。

ジャズのピアノの音色が時計の秒針と相まって切なく耳に響いて
いた。

再会？

閉じた瞼を開けた佐々木はテーブルの手紙を手にとると田鶴子に手渡した。

「続きを読みますね」

一番信頼し愛する彼の前で心を偽るのがつらくてもう限界・・・体よりも心が先に負けてしまいそう

弱気じゃ病気に勝てないと勇気付ける彼の気持ちかわからないわけじゃない、十分理解し感謝しています。

でも強い人はみんな弱音を吐かないの弱音を吐くのは、私が弱いからですか

泣きわめき感情を爆発させたくても我慢すれば強くなれるのですか

私は強くない、だから弱音だって吐くし感情も抑えられない

それを否定されたら私は頑張れないもうこれ以上頑張れない・・・

怒ったり、泣いたり、困らせたり

そんな自分を擁護できるのは心許せる彼じゃなければ嘘

彼であってほしいと思っっているのに・・・

彼の前で私は精一杯の笑顔をつくってしまっ

まるで道化師ピエロのように悲しみさえも笑顔に変え

笑っている・・・

ママごめんさい

一度会っただけなのにこんな手紙を送るなんておかしいですよ

でも今、一番の理解者はママのような気がして

だからこそありのままを曝け出せた・・・

なんだかすっかり心が軽くなって

嫌いだった病室の空気さえ美味しく感じられます。

お父さんに会いたかったようにママにも会いたい。

どうしてなのか自分でも不思議です。

「ご迷惑でなければまたお便りさせて下さい。

木内美香

「これで全部、おしまいです」

「ありがとう、美香がいまどうあれ
美香のことがわかってよかった」

「そう言って頂くと手紙をお持ちしたかいが
でも・・・かえって心労をおかけしてしまったのでは」

「そんな心配はしなくてもいい
美香に会うのは体力をつけてからと思っていたが
そんな流暢に構えてはいられない」

「お兄さんさえよければ、近いうちに会いに行きませんか
私が付き添います　お店を休んでお迎えにきます」

「そうだな、一刻も早く会いに行こう
悪いが迎えに来てもらえるか、田鶴子」

「ええ、任せてください」

「田鶴子にとって美香は姪にあたるのか
あれほど美香が君に親近感をもつのも頷けるな」

「私も初めて会った時、美香さんには何か・・・えにしのようなものを感じました」

「人生は生まれ死にゆく繰り返しだ
人類が皆・・・きつとどこかで繋がっていたのだろう
と考えれば・・・
人と人がいがみ合い、憎み合い、戦うなどあってはならない」

「そうですね

唯一、人は慈悲の心を持つ生き物ですもの
争いのない愛に満ちた世界にしないと
子供たちに健全な未来はつなげないわ

戦争の語り部はもうみんな高齢で今は戦争を知らない人が大半です
でも私たちはけつして悲惨な戦争を忘れてはいけない
戦争そしてその時代を生きた先人達を忘れてはいけないのよ
生涯伝えていくことが平和に繋がると信じているわ

戦争で奪われた多くの命の代償が現在の平和なら
この幸せを未来永劫にしなければ尊い命が報われないでしょ」

「先人のほるか想像をこえ日本は豊かになった
しかし豊かさは人の心を蝕んでも来た

ここにきて人々は本当の豊かさ・大切なものに気づき始めている
気づきこそが大切な一歩・そこからまた生まれればいい」

「話しが・・ずい分反れてしまいましたね

私とお兄さんも今日から始めの一歩を踏み出すのですね」

「もう踏み出しているよ」

「これからはお兄さんと姪の美香ちゃんと一緒に

私は独りじゃない・・なんだか夢を見ているみたい」

「頑張ってきたご褒美、天からの贈り物だろう

人生まっすぐ生きてさえいれば報われる時が必ずくる

遅ればせながらやってきた感謝してもし尽くせない贈り物だ」

「今まで流してきた涙は無駄ではなかったのですね」

「無駄なものなどこの世にはひとつもないんだよ
今はわからなくてもいつかその意味に気づかされる
長く生きているとそれが分かってくる」

「離れ離れだった長い年月にも意味があった
その意味に気づく日がくる・・・必ず
そうですね、お兄さん」

切れた絆を取り戻し孤独から開放された安堵感が
二人の穏やかな顔に浮かび上がって見えた。

素顔をみせて

手紙を見てしまった雅和とそれを知らない美香
二人はいつもとなにも変わらぬ週末を過ごしていた。

いや、変わったことが一つあった。

佐知と会話した翌日、病室を訪れた雅和は
顔を見るやいなや、胸に美香を抱きしめた。

突然のことに硬直させた美香だったが身も心も蕩けてゆく思いだ
った。

孤独・恐れ・嘆き・

今までの不穏な思いが徐々に葬られていくようだった。

心の曇りは去り一瞬にして美香の心に青空が戻ってきた。

月初めの週末、雅和はイタリアンの店を予約していた。

予約席に案内され雅和は待ち合わせの相手を待っていた。

この店はSIGNPOST同様、二人で利用した懐かしい場所だ
った。

土壁の店内はほんのりとした温かみのある明かりでライトアップ
され

大小のさまざまな部屋が点在していた。

テーブル席だけの昔を思い出し店内を見渡していた。

「井川君、待たせてごめんなさいね」

店員に案内され遣って来たワンピース姿の佐知は昔を彷彿させた。

「井川君、いがわくん」

昔を思わせる佐知の容貌に雅和は目を離せなかった。
まるで過去から舞い戻った恋人を見ているようだった。

「あつ、ごめん」

佐知のワンピース姿、久しぶりだから見とれちゃって
似合うよ、ものすごく似合ってる」

「そんなに見つめないで、」

恥ずかしくて井川君の顔が見られない」

「そういう佐知が俺は可愛くてたまらなかつたんだよな」

佐知は揺れ動く気持ちをぐっと抑えていた。

「久しぶりのご招待だからおめかししてきたの
井川君に誉めていただけで光栄だわ」

「今夜は遠慮しないで食べてくれ」

「値段を気にしながら食べたあの頃が懐かしいわ
初めてこのお店に来た時のこと覚えている？
俺がご馳走すると言ってメニュー表を見た途端
今日は割り勘にしてくれ、頼むって」

「勘弁してよ、今の俺はあの時とは違うよ
割り勘なんていわないから今日は俺に任せてください」

「ではお言葉に甘えて
トロサーモンいくら添え、生ハムとアスパラガスのマリネ
牛ヒレ肉のきのこ添え、ピッツアマルゲリータ、飲み物は杏露酒で
デザートにバニラアイスのワッフル添えをお願いします」

「メニューも見ないでそんなによく並べたてられるな」

「覚えていないの・・・ぜんぶ昔二人で食べたメニューよ」

「この店で食べたものまで覚えているのか
女って重箱の隅を突くように何でも思い出にするんだな」

「女は食べるの大好きだから覚えているのよ
井川君、早く注文しましょう」

「よし、俺はまずはビールだな
それから佐知の食べたいものをメニューから探して・・・」

部屋に備え付けのインターホオンでオーダーを済ますと
二人の話は美香の話題になった。

「あれから美香さんの様子は？」

「佐知に美香さんをただ黙って抱きしめろって言われて
俺、美香さんをすっかりこの胸に抱いたよ
そしたら美香さん、何か吹っ切れたように人が変わった
俺を見る目が優しくなった気がする」

「なら、もう大丈夫だわ」

「佐知にはいつも心配かけてばかりで悪いな」

「どういたしまして、」

「こうしてご馳走してもらえるなら私は大歓迎よ」

「いつも君は・・・俺に優しいんだな」

「井川君にじゃなくて誰にでも、の間違いでしょ」

「佐知はみんなに優しい、これでいいのかな」

「それなら花まるつけてあげる」

「佐知との食事は楽しいな 昔と同じだ」

店を出た二人は街路灯に照らされ肩を並べ歩いていた。

「今日はご馳走様でした」

久しぶりのイタリアン、美味しかった」

美味しいもの食べたあとって幸せな気分になるから不思議
御伽噺のお姫様になったみたい」

「なら今日の君は白雪姫、シンデレラ」

夢見る夢子さんの復活だな」

「いやだわ、夢見る夢子さんは

初めて会ったとき私が言った言葉ね」

「……………」

「井川君、どうかした」

「あの日もこんな夜だったよね

俺と君が出会ったあの夜と同じ今夜もきれいな星空だな」

「……………」

「君は別れてなお俺を支えてくれる

俺はそんな佐知がすきだよ、今も俺は……………」

「やめて、あっ、あのね井川君、

深い意味はないのはわかっているのよ

でも軽々しく好きなんて口にはいけなと思うの」

「なにか気にさわった」

「電話で話したあの時も井川君、言ったわ好きだ・会いたいわって」

「ああ言った でもそれが？」

「友達同士でも口にする言葉だけど私は井川君の昔の彼女一度は愛し合った仲なのよ だからわかるでしょ」

「・・・」

「私はもう井川君の恋人じゃない
井川君がいま愛しているのは美香さん
だから簡単に好きとか会いたいなんて言っ
てほしくないの」

「深く考えないで・・・ごめん」

「井川君と別れてから誰ともお付き合いしてないから私、まだ昔を引きずっているのかもしれないだから好きとか会いたいなんて子供でも口にする言葉に過敏に反応して切なくなってしまうんだわ」

「俺は君の気持ちに答えられないと言いながら・・・すまない」

「井川君に素顔を見せたのはきつと今夜のお酒のせいね
私の方こそごめんなさい」

さっきの言葉は聞かなかった事にして、お願い
そうでない私、井川君とは顔を合わせられない」

「こんなことで気ますぐなるのは止めよう」

これまでのように俺と美香さんの側にいてくれ」

「邪魔だつて言われても離れたりはしないから心配しないで」

「安心した だったらまた食事に誘ってもいいんだね」

「次回は遠慮しないでご馳走になります」

「今日は遠慮したつていいのか
結構の量飲んで食べただろう」

「まだまだお腹に入るわよ
締めにはラーメン食べて帰ろうか」

「止めてくれよ 急に胸がムカついてきた・気持ち悪う」

「大丈夫、本当に気持ちが悪いの？」

急いで帰りましょう 食べすぎなら一晩寝れば治まるわ」

思わず雅和の手を取り佐知は走り出した。

乱れた呼吸が眠った心を揺り起こしていた。

男と女の感情など胸の奥底に封じ込め消し去ったはずなのにまだ愛は残っていた。

そして佐知はその愛の火種を必死に守ろうとさえしていた。

まだ愛してる・・アイ・シ・テル・・あ・い・し・て・る
今もってまだ燻ぶり続ける思いに佐知は胸を焦がしていた。

素顔をみせて？

SIGNPOSTのママ・田鶴子は

いくらまでも連絡のない兄・悟朗を案じていた。

今朝の田鶴子は早朝から妙な胸騒ぎを覚えていた。

兄の世話係り・須藤からお店に電話が入ったのはその日の夕刻だった。

須藤からの電話は兄の急変を知らせるものだった。

「私、須藤と申します

沢村田鶴子さんですね」

「須藤さん、いつも兄がお世話になっております

先だつては失礼致しました」

「・・・今朝、佐々木様が倒れられて病院に搬送されました」

「兄が、それで兄の様態は」

「主治医の見立てでは心筋梗塞ではと・・・

でもご心配いりません 今は落ち着いていらっしやいます
取り急ぎお伝えしなければと思いお電話致しました」

「ありがとうございます 私、明朝の電車でそちらに伺います
入院先をこの番号のファックスに流していただけますか」

「田鶴子さんに来ていただけたら佐々木様も心強いでしょう
電話を切りましたら地図と住所をお送りします
では失礼致します」

お客が途切れると田鶴子は慌しく店を閉め自宅に走り戻った。
時計を見上げた田鶴子は肩を落とした。

「最終はだめか・・・やっぱり今日は無理ね」

子機をとり田鶴子は雅和の番号に指をかけた。

「井川君、沢村田鶴子です」

「ママ、お久しぶり〜」

「井川君、あにが、アッ、ちがう・・・
あの・実はね・・・」

あっごめんなさいね、ちょっと喉の具合がおかしくて」

「ママ、大丈夫」

「ええ、ありがとう もう平気よ」

今日電話したのはね、美香さんのお父さんのことなの

井川君、美香さんのお父さんが入院したこと耳にしている？」

「お父さんが入院したって、それ本当なんですか

元気に笑っていたお父さんがまさか」

「その様子じゃ、知らなかったのね」

「でも入院の事どうしてママが？ いったいどこで誰から」

「・・・ごめんなさい」

誰か来たみたいなの、電話切るわね」

来客なんて嘘だ・・・雅和は一方的に電話を切ったママの嘘を見破っていた。

今夜のママ、明らかにおかしい

あに・・・って言いかけてママは言葉に詰まった

あ・に・・・・って何なんだ？

確かにママは口に仕掛けた言葉を打ち消した

翌朝、解せぬまま眠りについた雅和の手にはポストンバッグが握られていた。

事務所の手塚に休暇届けの許可をもらい雅和は電車に飛び乗っていた。

ケアマンシヨンロビーの一角に上京した雅和の姿があった。
背筋を伸ばしソファーに腰をかけた須藤は今日も変わらずダンディだった。

「佐々木様が倒れたのは昨日の早朝でした
緊急ブザーが鳴り急いで部屋に駆けつけると
佐々木様はベッドに伏して苦しんでいました
それで慌てて救急車を呼び
主治医の大学病院に運んでもらった次第です」

「それでいまは？」

「今朝、お顔を見てきましたがいとお顔をされていました
看護師も落ちついてるので心配ないと言ってくれましたから
ご安心ください」

「ところで須藤さんは今回のことを誰かに話しましたか」

「はい、親族の方に伝えましたがなにか」

「親族・・確か身内はもう誰もいないと聞いていますが」

「佐々木様に親族がおいでになるのを知ったのはごく最近です
いつだったか美香さんの使いの者と名乗る女性から再三の電話が
あつて

佐々木様はその方とお会いになりました

その女性が帰られるとき佐々木様は珍しく車椅子でロビーに
降りてこられその時に紹介されたのが妹の沢村田鶴子さん
私が入院の連絡をさし上げた人です」

「・・・・・・・・」

SIGNPOSTのママ・沢村田鶴子が妹・
雅和に意識が遠のく驚きが走った。

「井川さんは佐々木様の入院を誰からお聞きになったのですか」

「昨日、沢村さんから電話をもらいました」

「やはりそうでしたか

佐々木様の妹さんなら叔母さんでもあるわけですから
お嬢さん、美香さんにも伝わると思っていました」

「須藤さん、病院を教えてください」

美香さんのお父さんとSIGNPOSTのママが兄妹

ママは美香さんの伯母で美香さんはママの姪

二人は伯母と姪の関係・・・混乱した頭を掻きながら雅和は走り出していた。

一足先に上京した田鶴子は眠る兄の傍らで回復を祈り続けた。

トン、トン・・・トントン・・・

途切れないノック音に田鶴子は力なくドアに歩み寄って行った。

「井川君」

「ママも・・・」

「・・・」

「病院に来る前に須藤さんに会ってきました」

美香さんのお父さんとママは」

「待つて、場所を変えましょう」

談話室に腰をかけた二人はしばらく無言のままだった。

「須藤さんから聞いて知っているでしょうけど」

私と佐々木は兄と妹・・隠すつもりはなかったのよ

兄と再会した日、私と兄は美香さんを見舞う約束を交わしたわ

美香さんにはそのときに話そうと思っていた矢先の知らせでしよ
気がつけば一睡もせず始発に飛び乗っていた」

561

「美香さんにはお父さんの入院を知らせていません

伝えるのはまずお父さんに会ってからそう思って

俺も居ても立ってもいられず電車で飛び乗っていました」

「井川君ありがとう、兄に成り代わりお礼を言わせて」

「それで、お父さんは」

「告げられた病名は心筋梗塞だったわ

手術をしなければいけないみたいなの

手術といつても今は切らずに腕から管を入れて治療するから
術後の回復は早いらしいわ

でも主治医には他に気になる箇所があるみたいで
手術の前に詳しい検査をしましょうって
何だか私にはそっちの方が気になって落ち着かないの」

「結果が出るまで心配ですね

お父さんが入院したこと俺、やっぱり

美香さんには黙っていようと思います

俺、どこまで隠し続けられるかわからないけど
嘘や隠し事はいやだけどその方がいいと・・・」

「決めたのなら最後まで通さないとね、井川君」

「そう言われると・・・気が重いなあ」

「それだから井川君は美香さんを不安がらせるのね

確かに嘘や偽りはいけない悪いことだと教えられたわ

でも世の中にはその嘘や偽りが善に形を変え許される時があると
思いたいの」

「うそ偽りと善を結びつけるのはどうかな」

「世の中のすべての人にそれを当てはめてはいけないわ
嘘、偽りが善となり許されるのは生死の狭間で懸命に命と向き合
っている人

そして側で共に戦っている人だけに与えられるもの

それなら許されるような気がするでしょ

美香さんにつく井川君の嘘・偽りは与えられてしかるべき許され
ること

愛する人を守りたいなら口を噤んで・・・突き通しなさい、それも
愛の形よ

井川君は美香さんから目を逸らすことなく
いつなんどきも堂々と胸を張ってらっしゃい」

「・・・はい」

泊まる覚悟での上京だったがママに帰宅を強く促され雅和は病院
を後にした。

素顔をみせて？

何も知らない美香は大きく膨らんだお腹を撫で母親の顔を見せていた。

すでに安定期に入っていたが爆弾を抱える美香の体は常に危険と隣り合わせで

予断の許さない状態は変わらなかった。

「最近はずっとから移動するのも一苦労なのよね」

「ゆっくりでいいから無理するな」

「つらかったら俺が抱っこして移動してやるから」

「それじゃ私が赤ちゃんだわ」

「美香さんの唯一の欠点は甘えないで我慢しすぎるよ」と

「看護師さんにも言われたわ」

病院にいるときはありがとっなんて頭を下げなくていい大きな顔して私たちに甘えなさいって」

「そういえば・・・ありがとうは美香さんの口癖だよな」

「えっ、そう？」

なら亡くなった母親と一緒にだわ 親子だから似てきちゃうのかな
最近、鏡の中の自分が母と重なって見えるときがあるもの」

「お母さんを俺は知らないけど美香さんに似ているなら
気丈で凜とした美人だったんだろっな」

「ありがとう」

誉めてもらってお母さんもきつと喜んでるわ
ねえ雅和、最近何か心境の変化でもあった？」

「俺、変わった？」

「大人びたっていうか、とても頼もしくなったような・・・私が変わな
のかしら」

「私が変わって、それはないだろう」

頼もしくなったような・じゃなく、なっただって言うてほしいな」

「そうね、ごめんなさい」

頼もしくなってますます惚れ直したわ

雅和はどんどん私を追い越して成長している」

「なんだよそれ 以前の俺ってそんなに頼りなかった？」

「昔の事は聞かないの」

大切なのは今、過去は振り返らない
そうじゃないと前には進めないのよ」

「過ぎたことに囚われちゃいけないな」

俺と美香さんに大切なのは現在と未来なんだから」

雅和は気づいていた。

揺らぎない気持ちで素顔のまま美香と接する自分に。

愛する美香を守ろうとする嘘・偽りはすでに善と化していた。

ママと同じことを言った佐知の言葉を思い出した。

「美香さんのためにつく嘘は愛・苦しくてもそれを隠し続けるのも
愛」

雅和は美香への愛を自答していた。

絆を深める和やかな二人とは対照的に橘チームは何やら深刻な顔を突き合わせていた。

「このままじゃ、危険すぎます」

「早期に子供を取り上げましょう」

「手の施しようがないなら、子供だけでも」

美香の腫瘍の中に出血が見つかり事態は緊急を要していた。

さよならの予感

同期で勤務に就いた看護師から美香の病状を耳にした佐知は青白い顔で受付に立っていた。

「そこのお嬢さん、顔色悪いけど大丈夫ですか」

「やだわ、驚かさないでよ

誰かと思ったら井川君じゃないの」

「そんなに驚くか」

「だって今日は金曜日よ

居るはずのない人が立ってるんだもの驚くわ」

「岐阜に出張だったんだ

仕事が予定より早く終わったから事務所には戻らず週末までこっちに居ることにしたんだ」

「美香さんも驚くわよ

早く病室に行って顔を見せてあげて」

「ああ、そうするよ」

あつ、忘れるとこだった これ又みんなで食べてくれ
岐阜名物の栗きんとん、美味しいらしいよ」

「ありがとう 喜んで頂くわ」

笑顔で手を振り病室に向う雅和に佐知の思いは複雑だった。

「雅和が美香さんの危険な病状を知ったら」

眉間に皺を作る険しい顔の雅和を想像するだけで寒気が走った。

佐知の顔から笑顔は消え引きつるその顔は今にも泣き出しそうだった。

患者を呼ぶ声も気のせいか今日は震えて聞こえた。

仕事を終えた佐知はあのホットケーキを食べれば気持ち晴れる
そんな気がしてSIGNPOSTに寄り道を決めていた。

SIGNPOSTに張られた休業の文字に肩を落とした佐知は
おもむろに電話をかけはじめた。

「井川君、いま話せる？」

「平気だよ 仕事、終わったのか」

「うん・・・」

「どうした何かあったのか、
顔色悪かったから心配してたんだ」

「体は何ともないんだけど
いま私ね、SIGNPOSTの前にいるの」

「佐知が1人でSIGNPOSTに行くなんて
やっぱり病院でなんかあったんだろ」

「なんにもないってば・・・
そんなことよりお店が閉まっているの
しばらく休業いたしますって張り紙がしてあって・・・
ママは月一の定休日以外今まで休んだ事なかったでしょ
だから気になって」

「まだ閉まっただままなのか」

「井川君は知っていたの」

「ああ・・・それより今からどこかで会わないか
憂さ晴らしの相手なら俺はもってこいだろ」

「ご免なさい 今日には疲れたからこのまま帰るわ
井川君のその気持ちだけで十分癒されたわ」

「暗くなってきたから気をつける、遠回りでも大通りを歩くんだ
いつもの近道は今日は絶対にするんじゃないぞ、ひとりには危険だ」

「ありがとう、大通りを帰るから心配しないで」

電話を切った雅和は1人帰る佐知を心配しながら
「容態は落ちついていてから2、3日したら一旦戻るつもりよ」
そう言っていたママが未だ帰らない事に不安を募らせていた。

あれから田鶴子は兄の傍につき添い続けていた。

毎日顔を見せる須藤の強い勧めもあつて田鶴子はホテルを出て
兄のケアマンションから病院に通う日々を送っていた。

その後の検査結果に異状は見つからず
佐々木は起きて会話が出来るまでになっていた。

「田鶴子、もう心配いらさないから帰りなさい」

「今週いっぱい、居させてください
こうしてお兄さんと過ごせる時間をもらったんですもの
もう少しだけ、いいでしょお兄さん」

「いい歳をしてまるで子供のようだな」

田鶴子を見つめる佐々木のその顔は兄の顔だった。

「なあ田鶴子、頼みがある」

「なんですか」

「田鶴子、君にすべてを託そうと思っている
万が一、僕に何が起きても須藤君に聞けば困らないようにしてあ
る」

「止めてください、こんな時に不謹慎だわ」

「君が帰ってからではいつ又話せるかわからない
美香のこと・・・
美香を悲しませることだけは避けたいが
今となつては美香との再会さえ果たせるかどうか」

「お兄さんがそんなことを言ってどうするの
美香ちゃんにとつては最初で最後のお願いな
父親なら子供の願いをなんとしても叶えるべきでしょ」

「美香の願いを叶えようと、どんなにもがいた所で
私に残された時間が・・せめて少しだけでも若かつたらな
何れにしろ、美香の希望の火を消してはならないのはわかっている
だから田鶴子、君に・・
私の妹だからこそ信じてすべてを託すこの気持ちをくんでくれ」

黙りこむ田鶴子の手を握り、佐々木は頭を下げ続けた。
そしてこれが元気な兄・悟朗と交わした最後の会話だった。

再び発作を起こした佐々木はそのまま帰らぬ人となった。

思い起こせばあの日の兄は珍しく饒舌だった。
昔話を嫌いあまり口にしなかつた兄だったがあの日は遠い昔を懐
かしんで笑っていた。

黄泉の国に召される人には走馬灯のように昔が甦るとい
うが
佐々木にもそれが見えていたのだろうか

故人の希望通りマンションの小ホールで葬儀は執り行われ茶毘に
付された。

佐々木が心許したスタッフと住人数名の寂しい葬儀だったが、涙する参列者の誰もが遺影の前では涙をこらえ微笑を返していた。

佐々木の人柄を知るものだけのそれは温かい葬儀だった。

田鶴子は思い悩んだ末、とうとう佐々木の死を雅和に告げなかった。

入院ならまだしも、死となれば・

まして愛する人の父親の死・それを冷静に受け止められるわけがない

まだ若すぎる・彼には重たすぎる

兄の死は私が美香さんに来て告げなければ

田鶴子を見送る須藤の胸に佐々木のお骨が抱かれていた。

「田鶴子さんにはすべて承諾いただきありがとうございます
これで佐々木様も御安心なされたでしょう」

佐々木の預金の半分に近い金額はさまざまな団体に寄付された。

「須藤さん、お世話になりました」

失礼かと思いますがこれをマンションの維持にお役立てください
そして一部を兄のために使って頂けないでしょうか」

「佐々木様のためとは」

「この敷地のどこかに桜の木を植えてほしいのです

兄はここが大好きでした

そしてここにいる人が大好きでした

須藤さんもその大好きなひとりでした

兄にとって此処は最後の楽園だったに違いありません

だから此処に兄が存在した証になにか残せないかと・・・

ごめんなさい、無理を承知でお話しています

極寒の冬を忍ぶ人は春の訪れを今か今かと待ち焦がれ

桜の開花に凍えた身も心は嘘のように溶かされてゆく

兄は私にとってそんな桜の木でした

人は悲しい過去を削除しないとうまく生きてゆけません

だから悲しみはいつしか薄れ忘れ去られてゆく

ここに植える桜の木は兄のいた証

春が来て桜花を目にしたとき凍りついた人々の心にもきつと春が

訪れる

そんな思いをこめて桜の木を植樹してほしいのです」

「ありがとうございます

ご希望に沿うよう、尽力させていただきます」

丁重に断る田鶴子を半ば強引に車に乗せた須藤は駅のホームまで見送ってくれた。

お骨は須藤が責任を持って檀家の寺に納める手筈になっていた。
深く頭を下げたまま顔を上げなかった須藤の姿が悲しみを誘った。

さよならの予感？

自宅の戻った田鶴子は窓を開け放し母の写真の隣に兄の写真を並べた。

付き添っていた時に看護師をお願いして撮ってもらった写真だった。

兄と妹が肩を寄せ仲良く微笑んでいた。

涙に暮れながらも田鶴子にはやらなければならないことがあった。今は亡き母の言葉を思い出していた。

「田鶴子、私たち親子はお店とお客様に支えられて生きてこられただから客におかけする迷惑は最小限にしないとだめ

私の介護は二の次でいいからお店をしつかり守って頂戴

私が死んだ後は、葬儀がすんだらすぐお店を開けなさいね
そしていつもどおり笑うのよ、あなたの笑顔は不思議と心を和ませしてくれる

お母さんはあなたのその笑顔にどれほど助けられたことか
だから田鶴子、どんなに悲しかろうともお店に立ちなさい
独りになっても笑ってお店に出るって約束してくれるわね」

田鶴子は明朝からお店を再会することに決めた。

それとは別にやらなければならないことがもう一つあった。
兄の死を病床の美香にどう告げたらよいのか田鶴子は思案してい

た。

翌日カウンターに立ち笑顔を振りまく田鶴子の姿があった。

「ママ、ずいぶん長いご無沙汰だったなあ」

「ご迷惑お掛けしましたが、又よろしくお願いします」

「こんなに休んだのって、はじめてじゃない？」

ママにはいい骨休めになったかもしれないけど

私たちは止まり木を無くした鳥みたいだったわ」

「本当にごめんなさいね」

お詫びに今日の珈琲一杯目は無料にさせていただきますわ」

「おおー太っ腹だね」

「そのかわりみんな最低二杯は飲んでから帰ってよ」

「相変わらずママは商売上手だねえ」

「ねえママ、さっきから気になってるんだけど
後ろの棚に飾ってある写真の人だ〜れ？
まさかママのいい人じゃないでしょうね」

「こんなおばさんに、いい人なんていやだわ」

「だって写真のママと男性、ものすごく幸せそうなんだもの」

「一緒の男性は私の兄 亡くなったお兄さんよ」

「ママが着ている服に見覚えあるから最近撮った写真ね
もしかしてママが休んでいたのは」

「詮索は止めにしましょう」

「ここで人の陰口や噂話しはご法度よ
私がそれを一番に嫌うことを忘れたのかしら」

「そうでした・・・この話は終わり〜」

「危なかったな、下手したらお前も出入り禁止になってたぞ
だからいつも言っているだろ、人の話に首突っ込むなって」

「それとあなたの話は別でしょ
あなたを詮索するのは妻の役目なんだから許されるのよ」

「ハイハイ、夫婦喧嘩の続きは家に帰ったからにして
さあ、珈琲のおかわりをどうぞ

二杯目はただにはならないってみんな覚えてる？
しっかりお代を頂戴しますから忘れないですよ」

「ママにはかなわないわ」

久しぶりに湧き上がる常連客の笑い声と笑顔に田鶴子は癒されて
いた。

談笑に花咲かせるお客を背にして写真の兄を見つめていた。
写真の兄もお客と一緒に楽しんでいるようにみえた。

お兄さん、私は幸せ者ね

今日来ている人たちはみんな開店当時からのお客様よ
みんなに愛されて私と母は生き延びてこられた

お兄さん、安心して、私ならもう大丈夫

私はもうひとりじゃないってわかったから

「ママ〜、ピラフ作ってそれと珈琲もう一杯」

「俺にも珈琲のおかわりを」

「久美ちゃん、ゲンちゃん、珈琲、二杯目
ありがとうございます」

振りかえった田鶴子の笑顔に隠した悲しみはもうなかった。

数日たったある日の午後、お店に雅和から電話が入った。

「俺、しばらくそっちに行けそうになくて・・・
それで美香さんのことお願いしたくて電話しました
ママ、俺の代わりに美香さんを宜しくお願いします」

「かまわないけど、理由をきかせて頂戴」

忍び寄るただならぬ気配を田鶴子はすでに察していた。
兄の死もこれから降りかかる火の粉も序曲にしか過ぎないとわか
っていた。

「明日、母が入院するんです 検診で腫瘍が見つかった」

「それは一大事じゃないの
美香さんのことも心配でしょうけど今はお母さんを一番に考えて」

「俺、美香さんのこと一番に思っているけど
母さんには俺しか・頼れるのは俺しかない だから」

「わかった それ以上にも言わないで
美香さんのことなら心配しなくていいわ
井川君はお母さんの力になっておあげなさい」

「こんな時いつも佐知に頼んでいたけど
今回はママにお願いするのが筋のような気がして」

「私が美香さんの伯母だから、そうなのね、ありがとう
ところで私が戻ったこと誰から？」

「佐知から聞きました
しばらく病院に行けないって伝えた時に
同僚がお店の明かりが付いていたって教えてくれたそうです」

「そう佐知さんから、よかつ・・・」

雅和が須藤に連絡を取ることを恐れていた田鶴子は
思わず「よかつた」といいかけ口を押さえた。

「美香さんのお父さんはまだ入院中ですか」

「ええ、大事をとってしばらくは病院の生活になりそうなのよ」

田鶴子は佐々木の死を知られまいと淀むことなく嘘をついた。

「早く退院できるといいですね」

「美香さんは私が責任もってお世話しますから」

井川君はしつかりお母さんに付き添ってあげて」

「はい、じゃママ宜しくお願いします」

あつそれから、美香さんには長期出張でしばらく会えない事に
してもらっていいですか」

「ええ、上手く伝えておくから任せて」

お母さん、お大事にね」

さよならの予感？

田鶴子は早めの店じまいをしていた。

身支度をすませ商店街を歩き出した田鶴子は花屋の前で足を止めた。

店先の小さな花かごを手にしていた。

その黄色と白紫の小花は思わず頬擦りしたくなるほどだった。

トントン・ノックしたドアから顔を覗かせた田鶴子に美香は声をあげた。

「ママ会いに来てくれたの　うれしい〜」

「入院しているって聞いて心配していたけど
とっても元気そうで安心したわ」

「目の前にママがいるなんて夢見たい、うれしいわ」

「美香さんに喜んでもらえて私も嬉しいわ」

「どうぞ椅子に御掛けになってください」

「これね、気に入ってもらえると嬉しいんだけど
とても可愛かったから美香さんにも思っ
て」

「まあ、可愛い花か」

私、黄色い花が大好きなんです ママ、ありがとう」

「偶然ね、私の母親も黄色い花が好きだったのよ」

田鶴子は自分の言葉に驚いていた。

そういえば母は籠に入つた花を買ってきてはお店に飾っていた
それも買ってくるのはいつも決まって黄色い花ばかりだった

母の好きだった花、黄色い花が好きだと言つた美香

美香と母は祖母と孫・・・

同じものが好きだとしても不思議はないと田鶴子は思った。

「美香さん、井川君から言付かっ
てきたんだけど
急な出張でしばらくこ
つちに来られないらしいの
代わりにと
いは何だけど美香さんのお世話を
させてほしいの
だめかしら・・・」

「だめだなんてとんでもありません

ママがまた会いに来てくれるなら大歓迎です」

「よかったあ、なら時間の許す限り美香さんに会いに来られるわ」

「そうしてほしいけど、無理しないで下さい
ママには大切なお店があるのですから」

「無理なんかしないから心配しないで
私、手紙の返事もまだだったでしょ
だから会ってお礼をとずっと思っていたのよ」

「私、手紙を出したら不思議と気持ちが落ちつきました
どうしようもなくなったらまた手紙を書こうって思っていました」

「美香さんはいま気持ち穏やかに過ごしているみたいね
二通目の手紙が来ないことを祈っているわ」

「そんなこといわないで下さい
今度は楽しい手紙にします だから又読んでください」

「それなら楽しみにして待ちましょう」

「ねえママ、見てください このお腹すいでしょ」

「まあ大きく膨らんで・・・」

「ちょっとだけ触らせてもらってもいいかしら」

「ええ、どうぞ触ってください」

田鶴子は兄が待ちわびていた孫がこのお腹にいるのだと目頭を熱くしていた。

「ママ、どうかしましたか」

「ううん、私は今もって独身でしょ」

「本当なら美香さんのような子供がいて孫がいてもおかしくないんだなって」

「そんな人生もあったのかもって・・・思ってしまったの」

「後悔しているのですか」

「後悔・・・」

「いいえ、これまでの自分の人生ひとつも後悔なんかしていないわ
選択した人生を生きてきたら独身だった・だけのことよ」

「どの道を選ぼうと自分で決めた人生に悔いなんかあってはいけな

いわ

選んだ道ならば後悔のない生き方をしなければ嘘でしょ」

「ごめんなさい、失礼なこと聞いてしまって」

「いいのよ、美香さんとは垣根を取っ払って話しがしたいわ」

「ママはやっぱり私が思っていた通りの人ね」

「美香さんにとって私はどんな人なのかしら」

「それは次回まで取って置きます」

そしたらまた会いに来てくれるでしょ

ママ、来てくれるわよね、約束して」

我が子を見る眼差しにも似た瞳に映る美香は蠟人形のように美しくかった。

「ママは雅和から父の事・・・何か聞いていませんか？」

「井川君からは何も聞いていないわ」

「最近、父のことがとても気になって仕方ないんです」

「気になるって・なにかあったの」

「夢を見ました 会ったこともない父の夢でした」

枕元に立った父は私の側にひざまずいて私の顔を撫でてくれました
父の手は柔らかくて温かでした

私は嬉しくて聞いてほしかったことを夢中で話し続けていました
「体にさわるからそのくらいにして少し休みなさい、側についていてあげるから」

そういつて父は眠りに付くまで手を握ってくれました

目を開けたとき父はもう居ませんでした
私にはあれが夢だったなんてどうしても思えないのです

お父さんの顔、声を鮮明に覚えています
面長でアーモンドの形をした黒い瞳、鼻筋の伸びた顔立ち
かほそかったけれどテノールにも似た声も忘れられません
今も目と耳に焼き付いてこの辺が痛くてたまらないんです」

胸元を押えた美香は今にも泣き出しそうだった。

「お父さんと夢で会えたというのに悲しそうに見えるのは気のせい

かしら」

「あの日、私は父を呼び続けました
目を覚ますまで側にいるって約束してくれた父を
お父さん、どこ？どこなのって必死に捜していました

もう父はいない・消えたんだと思い知らされた私は
子供みたいにわんわん泣きました
泣いて泣いて・・涙のタンクが底をつくまで泣きました
どこかに行ってしまった父はもうこの世にいない・そんな気がする
」

田鶴子は心の中で語りかけていた。
お兄さん、美香ちゃんのお迎えはもう少し待って
せめて、井川君のお母様の手術が無事に終わるまで

「美香さん、私はね、生き別れた父親とは一度も会えなかった
悲しいことに私の父は夢にさえ出てはくれなかったわ
でも美香さんはお父さんに会えたのよ
夢だとしても私はお父さんと会えた美香さんが羨ましいわ
お父様に感謝しないといけないわ」

「そうですね・・私、今夜お父さんの居る東京に向って手を合わせ
ます」

「そつなさい、どんなに離れていようと思いは伝わるものよ」

伯母であることを打明けられずに帰ってきた田鶴子は
兄の死はこのまま胸に封じ込めておこうとしていた。

美香から生命の息吹を感じとれなかった田鶴子は召される日の近いことを感じ取っていた。

それは遠い将来でなくもう目の前に迫りきていた。

「美香ちゃんの死を回避することなど誰にも出来ないけれどこのまま黙って指をくわえて待つてなどいられないわ
いつたい私に、いまこの私になにが出来るところう・・・」

母と兄の写真の前に立ち田鶴子は手を合わせ続けていた。

君をわすれない

「橋先生に至急病棟まで戻るよう伝えてくれた
さつきから何度も連絡してドクターを待っているのよ
いないのならないと言って貰わないと困るわ
入院病棟からの連絡は時間との戦いな
もういいわ、こちらで捜しますから」

静寂なナースステーションはいつぺんしていた。
緊急を要する内線のやり取りはけんか腰にも聞こえ緊張が走った。

今日の橋は外来担当で患者を診ていたが又悪い癖がでて
気になる病症患者のMRに同行して席を外していた。

同期の看護師が受付に走ってきた。

「さつちゃん、橋先生見なかった」

「そんなに息を切って、緊急なの」

「さつちゃん、驚かないで聞いて
木内さん、意識が混濁して危険な状態よ
もし先生を見かけたらお願いね」

佐知は蒼白な顔で自分の持ち場を離れ病棟に走り出していた。

わずかな隙間から見えたベッドに美香の姿はなく佐知は力なくドアを開けた。

病室には先客のSIGNPOSTのママ・田鶴子がいた。

「ママがどうしてここに」

「病院から連絡をもらって飛んできたの

万が一自分になにかあったら井川君でなく私に連絡してほしいと美香さんが看護師に頼んでいたらしいのよ」

「美香さんに会えましたか」

「私が着いたとき、美香さんは運ばれた後だったわ
看護師にここで待つように言われて」

「井川君は知っているのですか」

「まだ伝えていないわ」

「じゃ私、急いで連絡してきます」

「佐知さん知らせるのは待って、もう少し待って」

「こんな重篤な状態を黙っているなんて私には出来ません」

「佐知さん、井川君のお母様いま入院しているの

今日はそのお母様の手術の日なのよ

「昨晚は井川君眠れなかったみたいで私の電話を切ろうとしなかったわ」

「……………」

「佐知さんの気持ちはわかるわ 私だって同じよ

でも美香さんの気持ちを汲んであげましょう

「美香さんには井川君は出張ということにしているのだから美香さんは連絡先を私にしたのよ」

「出張は嘘だったのですか

美香さんを心配させないための嘘……」

「美香さんには、もう……すべてが見えているのかもしれないわね」

「なにが・・・見えるのですか」

「神に召される人はすべてを承知で騙されたふりをしているのかも
しれない

嘘も偽りも愛の形と受け止め「ありがとう」と騙されたふりをす
る」

「美香さんもそうだと・・・すべて承知の上だったと」

「私が見舞った時、別れ際に美香さんがこう言ったのよ

／神様は平等に幸せを下さるって本当なのかしら

振り返ると私は沢山その幸せをもらった

貰い過ぎじゃないかなと思うほど心は豊かに充たされ幸せだった
だから私の命が尽きるのも平等に値する神の思し召しと今は思え
る／

私、美香さんの手を握ることしか出来ず病室を出たわ

あの時、この胸に美香さんをきつく抱きしめていたら・・・

なぜ抱きしめてあげなかったのかと自分を責めたわ

・・・湿っぽくなって、ごめんなさい

今は美香さんの意識が戻ることを信じて祈りましょうね」

佐知は険しい顔で天を仰いでいた。

目を開けて・・・美香さん
美香さんの笑顔は雅和の生きる源なのよ

このまま雅和と会わずに・そんなこと私、絶対ゆるさないからね
それでも私たちを置いて逝くなら笑顔でお別れしてからにして
美香さんまだ逝かないで　お願い、私たちのところに早く戻って
きて

佐知は美香と交わした先週の会話を思い出していた。

「佐知さん、私の生い立ちは見れば幸せには思えないのでし
ようね

母は世間の荒波に胸を張って立ち向かう人になれと全霊で愛を注
いでくれた

大人になって私は母の愛をありがたいと心から思えた

人は愛に包まれて強くなるのだと知った

母の愛は優しい愛ばかりじゃなかった　時には痛みを伴う愛も飛
んできた

そのお蔭で世間の冷酷さにも卑屈にならずに生きてこられた
私が幸せを感じるのよ・・・佐知さんにわかる？」

「美香さんが幸せを感じるのよは雅和といるとき、それで決まりでし
よ」

「勿論そうだけど・・・」

人の優しさにふれた時、その優しさに私は喜びと幸せを感じた
私は他のどんな人より人の優しさが嬉しくて心に染みる

佐知さんの優しさにふれて私はまた幸せを感じることができた
ありがとうなんてありきたりの言葉じゃ足りないと思っ
ている
この溢れ出る感謝をありがとうじゃない言葉で伝えたいわ

ねえ佐知さん・・・

人の優しさに気づかない人は目の前にある幸せも感じられないし
どんな幸せも幸せの形を成さないから見えないと思うのよ

雅和はあなたの優しさを本当の意味での優しさをまだ知らない
佐知さん、思えば思われる・・・必ず報われるときが来る
雅和のこと・・・あの時の私との約束を忘れないで

私ね、最近やたら母のことを思い出すの
大過なく過ごす人生が一番ねって母はしみじみ言っていたわ
何もなくても心豊かに天の恵みをありがたいと思える人生が一番
だと

生まれ変わるならそんな人生もいいかな
私今世で少し欲張
りすぎたから」

あの時の言葉がいま遺言のように聞こえ悲しかった。

美香のどこか憂いに満ちた寂しげな笑顔を思い出し佐知は頬を濡
らしていた。

手術室に運ばれた美香の意識はまだ混濁していた。

「木内さん、わかりますか

これからお腹の子を取り出す手術をしますからね

木内さんが待ち望んだ赤ちゃんと、もうすぐ会えますよ」

橘医師は美香に優しく語りかけ産科担当の医師を待っていた。

「先生、破裂した腫瘍の出血は止まったようですね」

「帝王切開が済み次第、頭を・・・」

「オペですか？先生それは」

「たとえ成功率1%でも患者の命を救うのが俺達の使命だ

木内さんのような患者は初めてだった 子供に会わせてやりたい」

まもなく手術室が開き一台の保育器が運び出されていった。

赤いランプの付いた手術室で美香の開頭手術が始まっていた。

不可能といわれる手術に橘は挑んでいた。

打つ手のすべもなく手術を終えることもある覚悟の手術だった。

病室から佐知は姿を消し残された田鶴子は体を震わせ祈り続けていた。

手術の承諾書にサインをした田鶴子の胸中は穏やかではなかった。この手術が美香の命を救うための手術でないことはわかっていた。燃える命の残り火が絶えることのないようにと願わずにいられなかった。

君をわすれない？

受付の事務所前でハイミス部長が手ぐすね引いて佐知を待っていた。

「しまったぁ・・・」

佐知は頭を下げ部長に擦り寄った。

「本当に申し訳ございません」

「あなたを見ていると仕事を舐めているとしか思えないわ
受付の仕事を甘く見ているんじゃないの」

「いいえ、そんなことはありません」

「断りもなく長時間受け付けを離れるなんて非常識でしょ
立場上、前代未聞の出来事に目をつぶるわけにはいかないわ」

叱責中も美香を案じる佐知の目には涙があふれ出していた。

「皆井さん、理由を聞かせ・・・なにも泣かなくなっちゃって

・・・もついいわ、早く持ち場に戻って仕事をしなさい」

「すみませんでした 失礼します」

「最近の子はこれだから・・・」
捨て台詞を残し部長は怪訝そうな顔で去って行った。

「さっちゃん、大丈夫？」

部長今日は朝からご機嫌斜めなの 気にしない、気にしない」

「そつよ、仕事で挽回しよう」

「さっちゃん、こんど抜け出す時は協力するから言ってね」

「私、もう抜け出したりしませんよ」

「やっと笑ったね さあ仕事、仕事」

同僚、先輩の気遣いがうれしかった。
人の優しさが心に染みるといった美香の気持ちに触れた気がした。

術後の美香は集中治療室で眠り続けていた。
自宅に戻った佐知の気持ちは晴れなかった。

眠れぬ佐知は時計ばかり見つめていた。針は11時をさしていた。携帯が鳴っていた。起き上がる気力はなかった。

止まった携帯はまた鳴り出し、その繰り返しに佐知は根負けした。

「はい」

「佐々木さんが美香さんのお父さんが・・・俺、信じられないよ」

「井川君、落ち着いて話して」

「佐々木さんが亡くなったんだ」

「そんな・・・うそでしょ」

「須藤さんに聞いたから間違いない」

佐々木さんの入院はSIGPOSTのママから聞いて知っていた
それでどうしているか心配でさっき電話をかけたら「

「ママが佐々木さんの入院を知っていたってどういこと」

「ママは美香さんの叔母さんだ」

美香さんのお父さんとは兄と妹、兄妹なんだ」

「そんなことって・・・そんな偶然が・・・」

「ママに佐々木さんの入院を美香さんには知らせるなって言われて
だから俺、美香さんにずっと隠してきた
でもそれは正しかったのか、俺にはわからなくなった」

「ママは良かれと思って隠すことを選んでくれたのよ、きっと」

「ああ、隠すことそれも愛だっって言われた
でも人の気持ちなんか簡単にわかるわけないよ
ママがどんな力を持っていようと美香さんにしかわからない気持ち
ちはある」

俺はそれを考えず無視したんだ」

「・・・・・・・・」

「俺、東京に行って須藤さんに会ってくる」

「だめ・・・だめよ 東京なんか行っちゃだめ
今すぐ美香さんに会いに来て、お願い・・・お願いだから・・・」

「どうした、佐知、泣いているのか
美香さんの身に・・・なにかあった・・・そうなのか佐知」

「井川君に連絡しようとしたらSIGNPOSTのママから止められたの

お母さんが入院しているからもう少し待ってほしいって
私、出張が口実だったことを知って電話を躊躇して・・・
井川君、ごめんなさい」

「それで佐知、美香さんは」

「・・・美香さんは今日、頭の手術を」

「手術、美香さんが拒み続けた手術をなぜ」

「突然だったの、美香さんの容態が急変して」

「・・・」

「緊急手術のあとも、危険な状態は続いているの
赤ちゃんも保育器の中で懸命に生きようとしている
美香さんが命をかけて守ってきた井川君の子供よ」

「生まれたのか、そうかよかった
佐知、話してくれてありがとう 俺、今からそっちに行く」

「入院しているお母さんは？手術を終えたばかりで心配でしょ」

「ああ・・・でも手術は成功した

母さんの世話は事務所の泉さんに頼むつもりだ

泉さんは父が事務所を立ち上げた時からのスタッフなんだ

二人はお互い歳が近いし気も合うらしく仲良しなんだ」

「それなら安心ね

私、井川君に黙っているのが苦しくて、今日も眠れなくて悶々と
していた

だから電話をもらって、こうして話せて本当に良かったと思っ
ている

ママとの約束は守れなかったけど・・・私、井川君との約束は守り
たかった

どんな時でも真実を話す・・・あの時の約束だけは破りたくなかつ
た」

「ありがとう佐知・・・

じゃ、これから車飛ばしていくよ」

「夜道の運転、気をつけてね」

佐知は眠れなかったのが嘘のように深い眠りについた。
これでもかと襲い来る悲しみの訪れも知らずいつときの眠りに落ちていた。

濃紺の中にうつすらと赤い光が見え出した早朝、佐知は机に向っていた。

出勤前、早めに家を出た佐知はSIGNPOSTに寄っていた。
開店前の郵便受けに手紙を落とし病院へと急いだ。

店を開けた田鶴子は新聞を取ろうと郵便受けを覗いていた。
正方形の白い封書を田鶴子は不思議そうに手にとった。

なにかしら・・・カウンターに腰をかけ封をあけた。

それは佐知からの手紙だった。

ノママお早うございます

差出人のない手紙に驚かれましたでしょうか？ごめんなさい
昨夕、美香さんのお父さんが亡くなったことを知りました
井川君も私も、まさかと信じられませんでした
私は須藤さんに会って話を聞いてくると言い出した井川君に
美香さんのことを話してしまいました ごめんなさい

美香さんとママの関係も聞きました 叔母と姪・・・
身内だとわかったママにお願いがあります
すべてを美香さんに話してほしいのです

ママが言うように美香さんにすべてが見えているとしても
真実をこのまま隠し続けてもいいのでしょうか
それを美香さんが望んでいるとはどうしても思えないのです

最期るとき私は真実のなかで命をとじたい
人はそう願うのではないのでしょうか

偽りや嘘も愛になる・・・ママ言いましたね

今私にはそれが生きている側の身勝手に傲慢な言い分にも聞こえ・

理解できず苦しんでいます

尽きようとしている命火と向き合う人がそれを望むでしょうか
私には胸張り生きてきた美香さんが喜んでくれるとは思えないの
です

奥底にある計り知れない気持ちはその人が語らなければ誰にもわ
からない

それを勝手な解釈や間違った思い入れで片付けてしまっているの
でしょうか

嘘や偽りのなかに愛などあるはずがない

どんな理由をこじつけようとあってはならない

真実のなかにこそ愛は生まれるのだと私は思いたい

嘘、偽りで固められ、悲しみも苦痛もない人生と

傷つき泣いても愛に満ちた真実の人生、

美香さんがどちらの人生を望み選ぶか・・・ママにわかりますか
私にはわかりません

何を伝えようとしているのか、分からなくなってきました
自分でも理解不能な手紙を送る失礼をお許しください
ママ、約束をやぶってごめんなさい 今日井川君、病院にきます

佐知ノ

接客中も田鶴子は手紙の内容が頭から離れなかった。

「久美子さん、お店お願いしてもいいかな」

「今日もお見舞いに」

「ええ・・・」

「昨日は万里子で今日は久美ちゃんか
ママ、久美ちゃんで大丈夫なのかい」

「失礼ねえ、わたし昔はフレンチのシェフだったのよ
見くびらないでよね」

「おー、それならランチが楽しみだな
スペシャルメニューでも作ってもらおうとするか」

「丸く収まったようね それじゃ、久美ちゃんヨロシクね」

田鶴子はボードから美香の写真を外すと急いで自宅に戻っていった。

君をわすれない？

自宅に戻った田鶴子は兄と母の写真をバッグに入れるとすぐさま家を飛び出していた。

向った先は商店街にある昭和の匂いを残した馴染みの写真店。

「こんにちは、玄ちゃんいないの　玄ちゃん、お客様ですよ」

「おお誰かと思ったらママか」

「ママか・は、ないでしょ　今日はお客よ」

「ママがくるときはいつも今すぐやってくれた、今日も・・・だろ」

「玄ちゃん、今日は緊急よ、だからいつも以上に早く仕上げてください、この通りです」

「仕方ないな、長い付き合いだもんな、やっとくよ
2時間位したらまた来てくれ」

「宜しく願います」

「ママ、今回の仕事も珈琲の無料券付きかい？」

「勿論よ、玄ちゃんがお店に来た時にお渡しします」

「それじゃ、2時間といわず1時間で仕上げてやるよ」

「それでこそ玄ちゃんだわ、宜しくお願いしますね」

駅前の書店や雑貨店を廻りながら時間をつぶした田鶴子は
出来上がった写真を手に病院に向った。

美香は個室に移されていたが意識はまだなかった。

田鶴子は美香に許しを請うつもりだった。

意識のない美香に伝わらないのはわかっていたが語らずに居られ
なかつた。

美香ちゃん、陰のない光だけの人生を送る人なんて居ないわよね
わたし自分の人生に又一つその陰を落してしまつたわ

私は井川君に真実を隠し通すのも愛だと・・嘘をつかせた

井川君の心を苦しめ同時に美香ちゃんを悲しませるとも知らず・・

嘘や偽りをお許しになられるのは神のみなのに私は神を冒涇した

も同じ

美香ちゃん、ごめんなさい 井川君は悪くないわ
真実を伝えなかったのは私のせい、許して美香ちゃん

あなたが夢で見たお父さんはもうこの世にはいないわ
もういない気がすると言った美香ちゃんの予感は当たっていた

私は美香ちゃんの叔母さん、お父さんの妹よ

あなたを見舞ったあの時に話すべきだったわね、後悔しているわ
美香ちゃん、許してね、叔母さんをゆるして・・・

田鶴子が手を合わせ許しを請うたそのとき

「うつ、うつ・・・」

「美香ちゃん、わかる SIGNPOSTのママよ
あなたの叔母さんよ、わかる」

ガラツ・・・乱れた呼吸で入ってきたのは雅和だった。

「井川君、あなたを待っていたのよ」

「美香さんの意識は」

「いいえ、まだ でも今、美香さんの声が・・・
うめきのような声だったけど確かに聞こえたの」

「う、うう・・・」

「ほら・・・聞こえたでしょ」

「美香さん、俺だ、俺がわかるか
しっかりしろ、目を覚ましてくれ」

「あ・あ・あ・うう」

「そうだ、まさかず・・・俺がわかるのか
俺が側についているから大丈夫だ
いま美香さんと俺の赤ちゃんを遠くからだけ見てきたよ
元気に生まれてきてくれてよかった 美香さんありがとう」

「井川君、美香ちゃんの目をみて」

美香の目から一筋の涙が零れおちていた。

「美香ちゃん、井川君の言葉がわかるの、聞こえているの」

「君は命がけで赤ちゃんを守った よく頑張ったな、美香さん
今度は俺が命に変えても君達を守る、だから目を覚ましてくれ」

美香の顔が少しだけ綻んだように見えた。

「井川君、わたし今日、真実を話すために来たのよ
どうしても伝えなければならぬと思ったわ
それは佐知さんの願いでもあるの」

「佐知の・・・」

「今朝、ポストに手紙が入っていた 佐知さんからだったわ
叔母である私の口から真実を美香ちゃんに告げてほしいと書いて
あった」

「・・・・・・・・」

「美香ちゃんに話し聞かせていたとき、あなたが此処にきた
だから話の続きをさせて・・・」

私は幼い頃に兄・あなたのお父さんと離れ離れになった
音信がないまま月日だけが流れもう会えないと諦めていたわ

あなたがお店に来てくれなかったら私は兄と再会できなかった
幻だった兄と再会し姪のあなたと出会えた偶然に私は震えた

兄は美香ちゃんに会えるのをそれは楽しみにしていた

乳飲み子のあなたを満足に抱くことも見ることもできなかった兄はあなたの赤ちゃんをこの手に抱ける喜びを嬉しそうに語っていた

その兄・美香ちゃんのお父さんはもうこの世にいない

夢でお父さんに会えたといったあの時、兄はすでに死去していた兄は美香ちゃんと会う約束を守ろうとして夢に出たのだと思っただわ許してね、元気なお父さんに会わせてあげられなくてご免なさい

美香ちゃん、写真を持ってきたのよ

枕元に置いておくから目を覚ましたら見てちょうだい

美香ちゃんとお父さん、おばあちゃん、おばの私、家族の写真・

「

田鶴子は背をむけ言葉に詰まらせた。

雅和は枕もとの写真を思わず手にしていた。

血のつながった家族が笑顔で美香を囲んでいた。みんな幸せそうに見えた。

「ママ、これをいつ・

いいよ、すごくいい写真だ・美香さん、見てごらん

お父さんがいる、おばさん、おばあちゃんも・皆、美香さんの家族だ」

「……」

「美香さん、聞こえたのか」

「う、うっ・・・」

「うん・って言った・・・ママの話も美香さんに伝わっているよ」

「そうだと、うれしいわ」

美香ちゃん、おばさんよ、わかる」

「うっうっ・・・」

「ほら、返事をしている」

美香さん頑張れ、赤ちゃんとも会いたいだろう」

会って自分の手で抱くまで負けるな、生きるんだ」

美香の目からまた涙が流れ出した。それは先程とは違う悲しい涙に見えた。

「・・・その涙の意味を教えてください」

生きると約束してくれ、返事を返してくれ」

美香の声はぴたりと止んでしまった。

「返事を・頷いてくれるだけでもいい
俺は君ともっと話がしたいんだ・美香さん、聞こえているんだ
ろ」

「井川君、少し休ませてあげましょう
十分伝わっている・そう信じ無事を祈りましょう」

生きてほしいと言った雅和の言葉に美香は返答しなかった。
頷くことも声を発することもなかった。

雅和は病室を飛び出し受付の佐知を遠くから眺めていた。

「さっちゃん見て、あれ井川さんじゃない」

柱にもたれて立っている雅和はどこか悲しげに見えた。
また受付を飛び出しそうになった佐知に同僚が助け舟をだした。

「さっちゃん、少しだけなら上手くやるから行って来ていいよ」

「ありがとう、じゃちょっとだけお願いね」

君をわすれない？

佐知と雅和は屋上のベンチに並んで座っていた。

黙りこんだ雅和の横で佐知は俯いたまま寄り添っていた。

「佐知、美香さんはもう自分の定めを知っているのだろうか」

「……………」

「美香さんがもし……子供は……俺はこれから不安で……佐知、俺……不安でたまらないよ」

「井川君は美香さんと二人で子供を育てたいんですよ
だったら、そのことだけを考えて」

先の事を今は考えないで、余計な事を考えるから不安になるんだわ
現実から目を逸らしちゃだめ、つらくても今をしっかり見つめな
いとだめ

美香さんの死を回避できるのなら私だって何だってするわ
でもそんなこと出来っこないでしょ

私に出来ることは美香さんの命と向き合う、悲しいけれどそれし
か……

美香さんが生きている今を見つめることしか出来ないの」

「親父の時と同じ、俺は病室を飛び出してきた
美香さんから逃げるなんて俺は本当に大馬鹿野郎だ
佐知、ありがとう 俺、病室の戻るよ」

「井川君がいなくなって心配しているよ
早く行って、美香さんが待っているわ」

病棟に戻った雅和の目に慌しい看護師の姿が見えた。
もしやと病室に入ると橘医師の姿があった。
橘は懸命に美香の蘇生処置を施していた。

「ママ・・・これは・・・」

「看護師が血相変えて入ってきて・・・
ナース室に繋がっている美香さんの心音が止まったって・・・」

「しっかりしろ 俺の声が聞こえるか」

モニターが微かな揺れを映し出し美香の心臓は動きを見せた。

しかし橘医師の口から出た言葉に雅和は絶句した。

「残念ですが明朝まで持ち堪えることは出来ません」

田鶴子は橋の目に光るものを見逃さなかった。

立ち去る橋医師の背に田鶴子は深々と頭を下げていた。

「美香さん、頑張るって俺と約束しただろう」

静岡に帰って、親子三人で美香さんが望んでいた家庭をつくるんだ
美香さん、死ぬんじゃない 戻って来い」

「これ以上、美香ちゃんを苦しめないで

安らかにお父さんのところに逝かせてあげて

井川君がしつかりしないと安心して旅立てないわよ

美香ちゃんの死を受け入れ．．送ってあげましょう」

「俺、そんな気持ちになれないよ

ママの言っていることはわかる、でも．．納得できないんだ

美香さんの死を受け入れるなんて俺には．．無理．．」

「．．．．．あつ．井川君、美香ちゃん目からまた．．

井川君の気持ちが伝わっているんだわ」

「ママ、俺は間違っているのか．．」

「井川君は美香ちゃんときちんとお別れしなさい

ありがとうってこれまでの思いを伝えてあげなさい」

田鶴子は静かに病室を出ていった。

二人だけの病室で雅和は美香の手を握りしめ話しかけた。

「美香さんはこんな俺が心配でたまらないよね、ごめんでも俺は君の死を受け入れられない・・・したくないんだ

だけど、これが避けられない現実で君が天に君が召されるのなら俺は君に感謝を伝えなければならぬ

これが夢であつたらと悔しいけれどつらいのは君のほうなんだよねだから君を引き止めて苦しめるのはもう止める

美香さんありがとう 生涯、君をわすれないよ

俺は君をわすれない、けっして忘れはしない

俺は誓う、俺達の愛は永遠に続く、これからもずっと

子供は俺が守り育てる だから安心してくれ

美香さんはお父さんとお母さんの側でゆつくり休んでくれ

俺もいつかそつちにゆく、そのとき俺は必ず君を捜してまた会うそれまでのお別れだ 又あえるよな、美香さん」

苦しげな表情の美香の顔が嘘のように解れ和らいでいた。

「聞こえたのか・・・そうなんだね」

君をわすれない？（後書き）

美香の命が尽き、雅和と美香の子供は・・・最愛の人を亡くした雅和の悲しみは癒えず佐知は女同士の美香との約束に悩む日々。美香亡き後、佐知に訪れる新たな出会いと葛藤、雅和への思いは・・・二人の愛は・・・

いよいよ最終章ですが、しばしの時間を。

揺るぎない愛

美香が亡くなって早いもので一年の月日が流れていた。

今なお死を受け入れられない雅和だったが時だけは何も変わらず過ぎ去っていた。

忘れ形見の愛娘は生前の美香の希望で明日香と名づけられた。

明日香はある事情で雅和と離れ田鶴子のもとで暮らしていた。

田鶴子が明日香を引き取り育てている理由はこうだ。

美香を亡くした雅和はすぐ明日香を抱き静岡に戻っていった。

明日香の誕生を喜んだ雅和の母は快く明日香の育児を引き受けてくれた。

退院後まだ万全でない体の母だったが明日香への可愛がりは尋常でなかった。

その愛情は旗からすれば異常と映って見えただろう。
しかしその濃密な愛情の陰には母の命が深く関係していた。

完治したと聞いていた母のがんはすでに方々に転移していた。

母は雅和にだけは知られまいと明るく振舞っていた。

母は事務所の手塚と泉には余命告知して葬儀の手配まで済ませていた。

再発したがんは日増しに母の体を蝕み体力を奪っていった。

明日香を抱くことも出来なくなった母はとうとう入院となった。

母は最後の力を振り絞り絞り息絶え絶えに言葉を残した。

「明日香と一緒に育ててあげられなくてごめんなさい
お母さんはあなたにずっと守られ助けられてきた。今まで本当に
ありがとう」

もしお父さんに会えたら明日香の誕生を話して聞かせるわ
そして美香さんに会えたら感謝を伝えなければ・
明日香を産んでくれてありがとうって

雅和、大変でしょうけれど明日香を・・雅和、あなたなら大丈夫」
何かを言い続けていた母の言葉はもう聞き取れなかった。
安らかな顔で母は父と美香のいる天へ召されていった。

次々と襲い来る人生の荒波に雅和は溺れそうになっていた。

「俺がなにをしたっていうんだ・・なぜだ、俺だけがなぜこんな目
にあうんだ」

大切なものを俺から根こそぎ奪い去っていくつもりなのか」

明日香を抱き雅和は途方にくれる日々を送っていた。

雅和からの電話で近況を聞かされた佐知は田鶴子の店に出向いて
いた。

「知らなかったわ、井川君のお母様が亡くなったなんて

美香さんの悲しみも癒えないのにお母様まで・・つらいでしょう
ね」

「お母さんがいなくなって明日香ちゃんを育てるのは大変でしょっ

て聞いたら
一人でも頑張つて育ててみせるよなんて強がってたけど・・・心配だわ」

「頑張つて育てるといつても乳飲み子を男一人で育てるには限界があるわ」

「いま井川君は毎朝、明日香ちゃんを連れて事務所に行つています明日香ちゃんの世話は事務所の泉さんをお願いしているそうですがでも自宅に帰ったら誰もいないから大変なんだって言つてましたこのままじゃだめだから保育園のこと教えてほしいって頻繁に電話がくるんです

昨日の井川君はとても疲れているようでした

「明日香が火がついたように泣きじゃくると俺も泣きたくなる

正直、明日香の夜鳴きがひどくて眠れなくて仕事どころじゃないんだ」

そういつたきり黙り込んで・・・私心配なんです、井川君と明日香ちゃんが」

「明日香ちゃんを預ければ安心して仕事ができるでしょうけれど自宅で明日香ちゃんの世話をする井川君の負担は変わらないわ保育園は熱がある子供は預かってもらえないと聞くし・・・色々大変ね」

「それで・・・ママに提案があるんです 聞いてくれますか」

「ええ何かしら」

「ママが明日香ちゃんのお世話をしてくれたら

井川君は安心して仕事が出来ます

ね・いい考えでしょ、ママ」

「佐知さんは簡単にいうけど子供を育てるって大変なのよ

それに私は・・・子育ての経験もないのよ」

「私の母は施設から私を引き取り育ててくれました

母は血のつながらない私に愛情を一杯くれた

だから貰われっ子の私は不幸だなんて一度も思わないで育ったわ

ママは美香さんの伯母さんだもの母と同じように明日香ちゃんを

育てられます

お願いします、少しの間でいいですから明日香ちゃんを育てて下

さい

井川君と明日香ちゃんを助けてください」

「そうね、でも佐知さん、すこし考えさせてちょうだい」

即答を避けた田鶴子だったがすでに心の中では提案を承諾していた。

明日香の世話を買って来た田鶴子からの申し入れに雅和はためら

いを見せた。

田鶴子に明日香を託すことは美香との約束に反する気がしていた。

俺は子供を守ると美香に誓った・・・明日香を人の手に委ねるなんて出来ない。

「ママ、お気遣いありがとうございます 俺、ものすごくうれしいです

でも少し時間をください いま明日香にとってなにが一番なのか俺にとっても・・・

それをしっかり考えて返事します」

「わかったわ いい返事を待っているわね」

週が変わり数日たっても雅和からの返答はなかった。

「もしもし、井川君

明日香ちゃんは今も寝ているのかしら、今時間大丈夫」

「はい」

「井川君、あなたはよくやっているわ でも限界にきている
会社の人にも仕事にもこれ以上支障が及ぶことにあなたは頭を抱えている

本音はそうでしょ、ねえ考えてみて・・・

美香さんは仕事と子育てに苦しんでいるあなたをどう見ているの

かしら

喜んでいると思う？そう思っているなら間違っているわ
額に汗して仕事に励むあなたの姿が一番好きだと美香ちゃんが話
してくれた

お父さんの仕事を継いだあなたの希望に輝き仕事をする姿が好き
だ・・・

私にとっても兄が見ることが出来なかった明日香ちゃんは孫と同
じよ

いまの明日香ちゃんを男手で育てるのは大変すぎるわ
せめて離乳時が過ぎるまで兄にかわり私に明日香ちゃんの世話を
させて

お願い、一緒に明日香ちゃんを育てさせて」

その日をさかいに雅和はまた静岡と名古屋の往復生活が始まった。
生前の美香を思い出す週末の移動にまだまだ涙することもあった。

薄れるどころかますます募る美香への慕情を断ち切れなかった。
母も明日香もない自宅に戻り雅和はベッドに横たわった。

「お母さんを亡くした君はずっと一人でいつもこんな思いをしてい
たのか

美香さん、やっぱり君は強かったんだな 俺はだめだ

一人はつらい俺にはつらすぎるよ」

明日香を手放してからいつそう孤独が身に沁みていた。
悲しみに暮れる日々は変わらなかつたが仕事をしているときだけは
昔と変わらぬ本来の自分でいられた。

明日香を手離れた後悔の念が払拭される唯一の時間だった。

病院から持ち帰った美香のポストンバッグをクロゼットから取り出していた。

美香の匂いが染み付いた手帳を手にするのが習慣になっていた。

手帳を開くのは今日が初めてだった。

ビニールポケットに入った雅和と書かれた白い紙が目にとまった。

中には四角に折られた用紙が2枚入っていた。

薄い一枚目は雅和が記名捺印して渡した婚姻届の用紙だった。

「元気に退院したら雅和の前で記名捺印するから待っていてね」

そう言って笑っていた美香を思い出し思わず用紙を握りつぶした。

「強引にでも記入させてこの用紙をもらっておけば・・・」

今ごろ何を言おうが悔やんでも美香さんはもう戻ってはこない」

もう一枚の雅和と書かれた紙を開くと懐かしい美香の書体が並んでいた。

目に映る文字がどんどん霞んで見えなくなっていた。

雅和は美香の声が聞こえてきそうな気がした。

「雅和、お元気ですか」

この手紙をいつか手にしてくれることを祈り手帳に挿みませ

私は自分の人生を十分楽しんで生きてたつもりよ

だから私の死を悲しんでいつまでも引きずるのだけは止めてね

人生は移りゆく四季、季節に似ていると思わない
凍てつく季節の後にうららかな季節がくるように
暗闇を耐え忍んだのち必ず報われる日が訪れ光さすように
人生のさまざまな光陰に一喜一憂しながら人は生かされている

いつだったか横たわる私の耳元でそつと囁く声が聞こえたの

「そうね、この世の光陰は人生の糧になっている
始まりが光なら終わりは陰、でも人の終わりは光
だから恐がらないでいいのよ」

あの声は母の声だったのだと最近わかったわ
母はお迎えが近いことを私に伝えに来ていたのね

死を待つものつて幸せの後に思わぬ落とし穴に嵌まったような複雑
な心境なのよ

でもね、それが私の人生と開き直つたら体も心も軽くなったの
人生は生きることが・それが何より一番大切なんだと思つたわ
負けないで生き抜くことに意味があるんだつて

私は授かったこの尊い命を最後の最後まで生き抜くわ
だから悲しまないで、よく頑張つた・偉かつたなつて私を送つて

雅和と明日香には人の命に限りがあることを忘れないでほしい
そしてその命を最後まで大切に生きてほしい

私はどんなにつらく悲しくても、世間に打たれ倒れようとも
歯を食いしばり起き上がれば必ず光がさすと信じて生きてきた
そしてその光の世界に私は旅立とうとしている 闇のない光だけ
の世界へ

だから私のことはもう何も心配しないで

いままで本当にありがとう

子供の事は大丈夫、お腹に居る時に沢山言い聞かせてあるからお腹の子は多くの人に守られ助けられながら成長していくわ
周りの人みんなが雅和と私たちの子供の力になってくれる

雅和、何度も言うけど佐知さんとの縁は大切にしてくね

あなたは気づいていない本当の心が見えてないけど必ずわかる時
が来る

その時は佐知さんの愛をしつかり繋ぎとめて二度と離さないで

雅和には未来だけを見つめて生きていつてほしいの

だからそんな願いをこめて子供の名前を明日香に決めた

雅和には相談もしないで一人で決めてしまったから怒ってる？
でも私の最後のわがままだから許してくれたのよね ありがとう

私の愛を残したかったから美香の香の字をつけたの

明日に向って私が応援していることを忘れずに生きてほしい

明日香にも気に入ってもらえたらうれしいな

明日香は私たちの愛の宝です 雅和パパに明日香をお願いしまし
たよ

雅和と明日香を天空から愛し続けます 笑顔の父娘を見守って
います

頑張れパパ 頑張れ明日香

私は雅和に出会えて本当に幸せだった 沢山の愛をありがとう」

田鶴子への手紙に嫉妬した時の子供ねと言って苦笑した美香の顔が浮かんだ。

最初で最後の美香からの手紙を顔にあて雅和は号泣した。

揺るぎない愛？

雅和への思いは以前変わらぬ佐知だったが自分からかける電話は控えていた。

かかってくる電話で聞かされる雅和の美香への思いは聞くに忍びなかった。

ここ1年、そんな佐知にある人物との再会があった。

「さっちゃん、院長夫人がすぐ来るようになって」

「夫人の呼び出しっけいつも院長出張の同行よね」

「あの院長夫人に気に入られても喜べないよねえ」

「うん・・・」

「佐知さん、院長夫人が待ってらっしゃるのよ
仕事は私が引き継ぐから早く行ってきなさい」

「はい、行ってきます」

先輩、このカルテ計算もお願いしていいですか」

「みんなで手分けしてすませておくから心配しないで」

「では皆井佐知、心置きなく恐怖の呼び出しに行つてきまゝす」

「もお佐知さんたら・・・部長に聞こえたら大変よ」

「院長も恐れる婦人の呼び出しかゝ さっちゃんに同情しちゃうなあ」

いつのまに入ってきたのかハイミス部長が立っていた。

「仕事もしないで何の騒ぎなの それに同情つてなにかしら」

「部長、院長夫人に呼ばれているので失礼します」

佐知が場を離れるとそれに続くように部長の側からみんな散らばっていった。

残された部長はいつものように眉をしかめ無言で出て行った。みんなで親指をたて口うるさい部長の退席を喜んでいた。

佐知は急いで駆けていた。

病院の庭を抜けると芝生の敷地に三階建ての建物が見えた。

1階、2階は従業員の住まいになっていて3階が院長の住まい。自宅は別にあるのだが従業員住宅建設の時に自分の住まいも作ってしまった。

従業員の住宅で寝泊りする姿に誰もが患者第一の院長らしいと目を細めていた。

帰宅しない院長を心配して追ってきた夫人もいつしか住人となって久しかった。

住む人を失ったお屋敷は古くからの住み込みの夫婦が管理していた。

「こんにちは、皆井です」

「はい、待っていたのよ 早く入ってちょうだい」

リビングのバルコニーに面したソファーに若い男性の後姿が見えた。

人の気配にその男性は立ち上がり佐知に笑顔を見せた。

「秀行さん・・・」

「二人とも立っていないでお掛けなさい」

「さあ、佐知さんもここに座ってちょうだい」

院長夫人の貴子が上機嫌で珈琲を運んできた。

「さつき秀行を見た佐知さんの驚きようは普通じゃなかったわ
秀行も久しぶりだから驚いたでしょう」

「そうだね、佐知さんはすっかり大人の女性って雰囲気で驚いたよ」

「大人の女性だなんて言われたのは初めてです
恥ずかしいけど私はいまも部長に叱られてばかりなの」

「あゝあ、あの部長のことなら気にしないほうがいいよ
あの人は人を誉めることが出来ない可哀相な人だから」

「秀行さんおやめなさい
職員の批評はあなたが口にすることじゃないわ」

母にに窘められた秀行は頭を掻きながら笑って見せた。

「あのお・・・それで私を呼ばれたのは」

「あっそうよね、ごめんなさい
実はね、秀行がこの病院に帰ってくることになったのよ
向こうの病院の意向もあるから勤務は早くても来月以降になると

思っわ

それで秀行のお世話をあなたにお願いしたくて来てもらったの

「お世話ですか」

「おかしいだろ、大の大人がまして自分の病院に帰ってくるのに
佐知さんいま母が言ったことは聞き流してくれていいよ」

「あなたは少し黙っていて

ねえ佐知さん、しばらく受付の仕事はいったんお休みして
秀行をサポートしてほしいの

これは院長からのお願いと思って快く受け取れると嬉しいわ」

「母さんと違って父さんはそんな無理強いを頼む人じゃないよ
あんまり病院の事や僕のことには口を出さないでほしいな
父さんは優しい人だから何も言わないけどこれからは僕が言わせ
て貰う」

「まあ頼もしいこと、随分お偉くなったのね

でもこの病院に戻ったらあなたは新人と同じなの
今回はあなたがなんと言おうが従ってもらいます

秀行専用の部屋に佐知さんの机も用意させますからね
佐知さん、秀行の事をお願いしますね」

「母は世の中、自分の意のままになると勘違いしている節がある
此処までくるともう性格は直らないだろうしお手上げだ
すまないけど佐知さん、僕のサポートを宜しくたのみます」

「はい、承知しました」

奥様、私はこの事を部長にどう報告したらいいのでしょうか」

「佐知さんは心配しないで、部長には私からもう伝えてあるの」

「ねっ、僕が言ったとおりだろ」

母は思ったことは何かが何でもやってしまう怖い人、そうだろ」

「はい、あっ・すみません」

「佐知さんも秀行と一緒にになって随分だわね」

「私はそんな、本当にそんなつもりは」

顔を赤らめた佐知を見つめる秀行の目が優しくかった。

「佐知さんは今も昔のままだね」

大人びて綺麗になっただけど可愛いところは昔のまま嬉しいよ」

「ところで・・・」

佐知さんはだれかお付き合っている人がいるのかしら」

「母さん、もう佐知さんを開放してあげようよ
佐知さん仕事中に母が呼び出して悪かったね
来月から僕のサポートをお願いします」

「こちらこそ、宜しくお願いします」

院長宅を出た佐知は秀行との再会に昔を懐かしく思い出していた。

佐知が勤務についた時、医大をでた秀行は院長の弟の病院に勤務していた。

年に数回しか帰らない秀行が帰宅すると佐知は夫人に呼ばれ顔を合わせた。

佐知は一年にたった数回の秀行との対面をいつも心待ちにしていた。

年上の秀行は物知りでそれでいて偉ぶったところがなく好青年だった。

しかしあの頃の佐知にはBFがいて秀行に特別な感情は沸かなかつた。

今あらたな愛が佐知の頭上に羽を羽ばたかせ舞い降りてきた。

その愛は凄まじい鉄砲水になり過去の愛を追いやるうとしていた。切なく苦しい愛のいばら道が佐知を待ちつけていた。愛する男と女が織り成す更なる苦悩の扉が静かに開きはじめた。

この時までの佐知は雅和への揺らぎない愛を信じて疑わなかった。

「佐知さん、私はあなたに雅和をお願いしたいの
雅和を支えられるのは私とあなただけよ

彼はとつても打たれ弱い男だから誰か支える人がいないと頑張れない

彼の気持ちがどうあれ佐知さんは嘘のない心で雅和と向き合ってあげて

雅和にはあなたが必要なの　あなたも雅和のこと必要としているわ」

佐知は美香の言葉を思い出しては叶わぬ思いに心を乱していた。

佐知が受付事務所に戻るとなにやら空気が違っていた。

秀行が戻ってくる事が病院中に知れ渡っていた。

「先輩、有難うございました

騒がしいようですが何かあったのですか」

「部長の報告を聞いてからみんなこの調子なのよ」

「サツちゃん呼び出して秀行さんのことだったんだね

「秀行さんの側で仕事が出来るとなんて羨ましいな
サツちゃんはいいなあ〜」

「私が羨ましいって、どうして?」

「知ってのとおり、秀行さんは女子職員みんなの憧れの君よ
その秀行さんが来るとなればみんな色めきたっても不思議じゃな
いわ」

「おかしいわ、色めき立つなんて言いかた」

「おかしくないよ、サツちゃんだって本当は嬉しいでしょ」

「秀行さんは院長の息子よ」

私が秀行さんと仕事をするのは頼まれたから仕方なく受けただけ
本心は秘書なんてしたくない、みんなと仕事をしていきたいのよ
院長夫人じきじきに頼まれたら断れないわ・・・わかるでしょ」

「うん、わかる 院長夫人は私も苦手なもの

どこかカリスマ的な迫力があってあの人にNOは言えないよね」

「でしょ・・・もう私の前で羨ましいなんて言わないでね

それに私は忘れられない人をずっと今も思い続けている

だから今は誰にもときめかないの」

「それじゃ、ライバルが減ったってことだね　なんだか燃えてきたよ

よ　・・なんかみんなして私のこと馬鹿にしてる？先輩笑いすぎですよ」

「そうね、ごめんなさい　さあ雑談は止めて仕事を続けましょう
佐知さんは新しい仕事に慣れるまで大変でしょうけれど
みんなで応援しますから頑張ってくださいね」

「ありがとうございます
みんなと仕事できないのは寂しいけど頑張ります
皆さんも私のこと忘れないで待っていてくださいね」

佐知はみんなの拍手と頑張れの声がうれしかった。

視線の先に歩いてくる部長が見えた。

佐知に気づいた部長のきらきら光る目が怖かった。

去ってゆく部長の後姿を追っていた。

「部長待ってください　少しいいですか」

「急いでいるんだけど、なにかしら」

「もうお聞きとありますがしばらく受付の仕事を離れます
来月から秀行さんの仕事に就くことになりました
部長、復帰した時はまたご指導くださいね」

「・・・何故かしらね、みんな貴方の味方、貴方には敵がない
貴方は本当に幸せな人・・・
悔しいけれど貴方は私にないものすべてを持っているわ
皆井さん、秀行先生のサポート頑張りなさい
もう受付にあなたの場所はないと思っと思ってしっかりやりなさい」

「はい、頑張ります」

部長の柔らかなまなざしを見るのは初めてだった。

一瞬みせた微笑はどこか悲しげで憂いに満ちていた。

まじかで見えた部長のあまりの美しさに思わず息を呑んだ。

眉間にしわを寄せた仕事モードの部長は此処にいなかった。

あまりに別人のような部長に驚きを隠せなかった。

いつも恐れていた部長との距離が縮まり親近感を覚えた。

佐知は今日の部長に美香と同じ匂いを感じていた。

週末の今日は雅和が明日香に会いに来る日だった。

佐知は雅和の帰りが待ち遠しくてならなかった。

遠距離恋愛の彼を待つ恋人のように胸を躍らせていた。

いつか私のこの思いが届きますように・・・
雅和と会える日はいつも嬉しさと切なさと一緒に押し寄せていた。

揺るぎない愛？

商店街のあちこちからシャッターの開く音が響きわたった。

明日香を胸に括り付け店に向かう田鶴子に八百正のおかみが声をかけた。

「ママ、今日は遅いんじゃない？」

「明日香が泣き止まなくて大変だったの」

「いつもは機嫌がいいのにどうしたのかね 雨でも降らなきゃいいけど」

「ほんとね、こっちまで泣きなくなっちゃっわ」

「娘たちの子育てを思い出すと私も同じだったわ
泣くことしか出来ない子供と一緒に親も成長させてもらった
今思えば子育ては一番充実したいいい時だったわ」

「そう思える日がいつか訪れるのかしら」

「ママは愛情かけて明日香ちゃんを育てている たいしたもんよ

もつと自信を持って頑張りなさい」

「おかみさん、ありがとう　じゃまた

あつ又忘れるとこだったわ　いつものグレープフルーツとバナナ
下さい」

八百正の袋を下げた田鶴子を見つけ魚勝のおかみが飛び出してき
た。

「おはよう　どうしたんだい、目の下に大きなクマ作って
それじゃ、せつかくの美人が台無しだよ」

「夜鳴きで眠れないのに朝からずっと愚図ってもつお手上げ」

「ママに子育ては無理だって皆言ってたけどよくやってるわ
今じゃみんながママを応援している

仕事しながらの子育ては半端じゃ出来ないけど無理しちゃだめだよ
あんたはもう若くないんだから無理は禁物、体が一番なんだから
さ」

「ごもつともです　気をつけます

でも明日香が来てから規則正しい生活になって体調が良くなった
気がするの

今日はクマがあるけど私、少し若返ったと思わない？」

魚勝の旦那が話しに割り込んできた。

「ど〜れ、う〜ん・・何も変わっちゃいないなあ」

「魚勝の親父さんは正直者で有名だけでもう少し口が上手いと
商売もうなぎ上りなのにおしいわね」

「ママもそう思うでしょ」

本当にうちの亭主は馬鹿がつくほどの正直で困っちゃうのよ
もつすこし要領よくやってくれないとねえ」

「親父さん、逃げちゃったわね」

「うちの人はあの通りのんきで、てんで話にならないの
不景気で売り上げは下がる一方なのに」

「安くても今は買い控える人が多いからどこも大変よね
仕事帰りにまた夫婦でお店に来てちょうだい
魚勝さ〜ん、珈琲の無料券置いていくからね〜」

「ママ、ママ、いつもわるいね〜」

「あんだ、どこに雲隠れしていたんだい
こんな時だけは調子がよくて・・少しは男気を見せてよね」

「ママの前でそんなに俺をいじめるなよ
俺の男気は小出しにはしないんだ
いざというときお前のためだけに取ってあるんだ」

「あんたは私の前だとうまく舌が転がるんだねえ
お客の前でもこうだといいいのに、ねえママ」

女房の尻に敷かれた親父さんはそれを楽しんでいるかのように見えた。

「実のところ親父さんが女房をうまく操縦しているのかもしれない
そう田鶴子は思った。

「二人は息があっというコンビね」

「ママの好物マグロの赤みのいいのが入ったら女房に持っていかせるよ」

「嬉しいわ、楽しみにしているわ」

田鶴子の店の前に数人の常連の客が立っていた。

「まあどうしたの・・・早いわね」

「いつもなら開いてるのに閉まっているから休みかと思ったよ」

「今日は明日香に手を焼いて遅くなってしまったの。ごめんなさいね」

「それだけじゃないだろう、八百正の袋を提げているってことはまたそこら中で話し込んでいたんだらう？」

「よまれましたか・・・すみません」

店は改装されてキッチンの後に明日香の部屋ができていた。食品の倉庫室とロッカーの壁をはらい和室を新たに作った。キティちゃんの布団で眠る明日香は一日の大半をこの部屋で過ごした。

「ママ、明日香ちゃんを見てやるよ」

「いつも悪いわね それじゃ甘えてお願いします」

愚図る明日香を常連の客に預け田鶴子は急いで仕込みをはじめた。

注文の珈琲を差し出すと客の腕の中で明日香は静かな寝息を立てていた。

「ありがとう、本当に助かったわ」

明日香を部屋に寝かせてカウンターに戻ると電話が鳴った。

「井川です。今日そちらに行きますのでよろしくお願いします
明日香はまだ寝ていますか」

「ええ今寝たところよ
明日香ちゃん今日はご機嫌斜めで大変なの
パパに会ってご機嫌が直るといいんだけど」

「すみません・・・ママには感謝しています
週末は俺が明日香を見ますからママはゆっくり体を休めてくださ
い」

「私のことは大丈夫だけど・・・
正直いつて明日香ちゃんの世話は本当に大変でお母さんを亡くし
一人で明日香ちゃんを育てていた井川君はすごいと思ったわ
今だって休日に疲れた体をおして会いに来るのはきついでしょうに

体がつらい時は無理しなくていいのよ
健康が一番大切なことは井川君が一番わかっているはずよ」

「ママ、心配しないで下さい
無理して体を壊すことは絶対しませんから」

「それじゃ気をつけて来てね
あっ・そういえば佐知さんも夕方お店に来るって言っていたわ」

「なら俺が行くまで待ってもらおうよ、伝えてくれますか」

「ええ、わかったわ
佐知さんと会うなら私のマンションがいいんじゃないの
明日香ちゃんを連れ帰ってマンションでお話しなさいよ
そのほつがお店より落ち着いて話せるわ」

「有難うございます」

週末は住居のマンションを雅和と明日香のために開放した。
店の和室にはまだ真新しい布団が置かれてあった。
雅和がくる週末田鶴子は明日香の匂いのするこの部屋で夜を明かした。

雅和と明日香を二人きりにするのは酷だったが

田鶴子が側にいて手をかけることは父と子の弊害になると思った。

苦勞し手をかけ愛を注ぐからこそ絆は結ばれる

その愛に包まれ育ってきた感謝を知っているから絆が生まれる

毎日会えない親子の絆を少しずつ紡いでいってほしいと田鶴子は願っていた。

SIGNPOSTにやってきた佐知はあまりの客の多さに驚いた。

田鶴子は佐知には気づかず狭いカウンターの中を右往左往していた。

カウンターの前で佐知は大きな声で話しかけた。

「何かお手伝いしましょうか」

「あゝ佐知さん、いいところに来てくれた

明日香の様子を見てきてくれると助かるわ

さっきまで大泣きしていたんだけどご覧の通りでんでこ舞いでしょ
今は泣き止んでるけど心配で」

「はい、私に任せてください」

「本当に助かるわ 宜しくね」

田鶴子が明日香を引取りお店に連れてきた当初から

仕事帰りの佐知は毎日SIGNPOSTに顔を出した。

店に来るなり真っ先に明日香の部屋に駆け込んで明日香を可愛がった。

そんな佐知の姿に田鶴子は目を細めた。

明日香の世話をして帰って行く佐知にいつも手を合わせ感謝した。佐知はいつしか田鶴子の強い助っ人になっていた。

つい今しがた団体で入ってきた学生らはお腹を空かしていたらしく次から次へとオーダーがはいり田鶴子は息をつく間もなかった。久しぶりに満席のお店に嬉しい悲鳴を上げていた。

もくもくと注文をこなし最後のエビチャーハンセットを運び終え

た田鶴子は

額の汗を拭くと今度はお冷を持って席を回って歩いた。

一息ついた田鶴子は厨房に立ちまた料理を作り始めた。

その料理を漆の重箱に詰めこむと絞りの風呂敷で包んだ。

さらにもち手のある紙袋に入れて運びやすいようにしていた。

食後の珈琲を学生に限なく運び、空になった器を洗いおえた田鶴子は

和室の戸に手をかけた。

明日香の笑い声が聞こえてきた。

昨晩から今朝にかけての明日香が嘘のようだった。

田鶴子は嬉しくなった。

「佐知お姉さんと一緒だと明日香はいつもご機嫌ね〜」

「オムツを替えたらご機嫌が戻ってお利口にしてみましたよ」

「佐知さんにはいつも助けられて、本当にありがとうございます」

「お店のほうは大丈夫ですか」

「ええ、なんとか急場を凌げたわ

食事はすんだけど誰も腰をあげようとしないの
もしかすると閉店までこの状態かもね

そうだ、忘れるところだったわ 朝、井川君から電話がきてね
佐知さんに店で待っていてほしいって言付かったの

でもお店はこの通りで話だってままならないわ・・・そうだ
佐知さん、マンションで明日香と一緒に井川君を待ってくれる」

「私、ママのマンションに・・・いいんですか」

「井川君にもマンションの方がいいんじゃないのって言うてあるの」

「わかりました 明日香ちゃんと井川君を待ちます」

「そうしてちょうだい 井川君が着たらそっちに行かせるから」

明日香を連れ、帰る支度をしていた佐知に田鶴子が紙袋を差し出した。

「夕飯に思ってお弁当作ったから井川君と食べて」

「すみません 喜んでいただきます」

「それから冷蔵庫に煮物とか色々作って入れてあるの
ごはんは冷凍をチンして二人で食べてちょうだい」

「ありがとうございます」

「ねえ佐知さん・・・」

井川君はいつまで過去にしがみ付いているつもりなのかしらねえ彼の閉ざした心をほぐしてあげられるのは佐知さんあなたあなたなら彼を新たな希望に導き未来に進ませることが出来る井川君はあなたにだけは本心を語るみたいだし」

「私と井川君は兄妹みたいなもので・・・
お互いに隠し事はしない約束なんです」

「男と女の友情・・・？ それも素敵な関係ね
でも佐知さんは本当にそれでいいの」

「.....」

「もうこの辺で正直になってもいいんじゃない
偽らざる自分の気持ちから目を背け逃げちゃいけないわ
死んだ美香ちゃんだってそれを望んでいるはずだわ」

「.....」

「美香ちゃんはあなたとある約束をしたと私に話してくれた
内容までは知らないけど一人の男を愛する二人の女が交わした約
束でしょ」

「そんな約束を忘れるわけはないわよね それとも忘れてしまいた
いのかな」

「すみません ママ、珈琲のおかわりをお願いします」

「はい 今行きますからお待ちください」

「ごめんなさい、話の続きは又今度にしましょう」

「佐知さん、明日香をお願いしますね」

マンションに向って歩きだした佐知の足取りは重かった。

雅和に会えると高揚した気持ちは一気に冷めていた。

胸に抱いた明日香のぬくもりがそんな佐知を優しく包んでくれた。

いつこうに日の差さない愛は蕾のまま花開くことを忘れていた。

「私と雅和は同じ・・・」

美香さんを忘れられず苦しんでいる雅和は私の姿そのもの

雅和に美香さんを忘れてほしいと願うことは

私から雅和を消してしまう事と同じ、そんなこと私には絶対無理

雅和の愛を取り戻したいと願うことは私の身勝手なのかも・・・」

佐知は愛の矛盾を感じていた。

揺るぎない愛？

マンションに着いた佐知は和室に置かれたベビーベッドに明日香を降ろした。

明日香はベッドに吊るされたおもちゃに手を伸ばして遊んでいた。

「明日香ちゃん、お利口にしているね」

佐知はママから渡されたお弁当の重箱をテーブルに置いた。

「ふたを開けたいけど・・・雅和が来るまで我慢・がまん」

テーブルに並べた二人分の取り皿とお箸をみつめていた。

「なんだか今日は夫を待つ妻の気分ね」

夢に見た生活が今ここにあると思わず顔を赤らめた。

佐知は熱くなった顔を全開した冷蔵庫に突っ込んだ。

「あゝ冷たくて気持ちいい」

冷蔵庫の中にはタッパーが山のように入っていた。

中身がわかるように紙が貼ってあった。きんぴら、ホウレン草の胡麻和え

迷った末、里芋といかの煮物とわかめと胡瓜の酢の物を小鉢に盛りつけた。

「これで今晚の料理は完了」

料理を少しつまみ食いしながら雅和の帰りを待っていた。

ピンポン・ピンポン

佐知は玄関に駆け出していった。

ドアを開けると大きなバッグを持った雅和が立っていた。

「お帰りなさい」

「ママから佐知がマンションにいるって聞いて驚いたよ
明日香の世話いつも悪いな、感謝しているよ」

「私は好きでお節介やいているの、だから気にしないで
早く明日香ちゃんの顔を見てあげて」

「そつだな、明日香は？」

「ベッドでおとなしく遊んでいるわ」

「明日香、パパが帰ってきたぞ」

雅和はベッドの明日香を天高く抱き上げた。

キヤア・キヤアと声をあげた明日香を抱く雅和は父親の顔を見せた。

何度も頬ずりして明日香をベッドに寝かせた。

台所に立つ佐知に雅和が声をかけた。

「夕飯の支度までさせてほんと申し訳ないな」

「残念だけど、私は並べただけ

井川君、疲れたでしょ お疲れ様でした」

佐知はグラスにビールを注いだ。

「ありがとう 佐知も一緒に飲もう」

「うん」

「じゃ、一緒に乾杯だ

俺の大切な明日香そして佐知に乾杯」

喉を鳴らし美味しそうに飲み干した雅和の顔に見惚れていた。

「俺の顔なんか・・・へん？」

「なんでもない　ねえママが作ってくれたお弁当開けてもいい？
待ちくたびれておなかペコペコなの」

重箱のふたを開けると厚焼き玉子、アスパラのベーコン巻き、鳥
肉ガーリック焼き

ポテトサラダ、揚げシユウマイが彩りよく詰められていた。

「わぁ、おいしそう」

「おお〜　ほんと旨そうだな」

「ママは料理が好きなのね
冷蔵庫にも沢山の料理が入っていて驚いたわ」

「ママは俺のためにいろんなものを作ってくれるんだ
何から何まで甘えっぱなしでママには頭があげられないよ
両親を亡くした俺にママは肉親のように気遣ってくれる
明日香のことも私の大切な孫だといってくれた」

「ママがいつだったか忘れたけどこう言ったの
明日香ちゃんは涙を笑顔にしてくれる神様からの宝物だって」

「俺にとつても美香さんが残してくれた大切な宝だ」

「・・・ねえ明日香ちゃんの泣き声聞こえない
ほら、やっぱり明日香ちゃんが泣いてるわ」

「オムツかミルクのどっちかだな」

「さっきオムツは交換したしミルクも飲んだから違うと思う
私、心配だから見てくるわ」

「オムツを替えてミルクも飲んだなら行かなくていいよ

俺も最初の頃は明日香の泣き声に過敏になっておるおろしていた

そんな時ママが言ったんだ

「ご機嫌な時にたっぷり愛情を注いであげていれば

少しくらい泣かせておいて構わない 子供だからと甘く見ちゃだ
めだって

泣くと抱いてあやしてくれんことを学んだ子供は泣くことを良し
とする

泣こうが叫ぼうが誰もきてくれない事を学べば要求以外の無駄泣
きはしないって

だからすこし放って置いていいよ それに泣き声でわかるんだ
あの泣き声は人恋しくて泣いている声だからすぐに泣き止むよ」

「お店の和室に張ってあった言葉の意味がわかったわ」

「泣いている明日香に断りなく手出し無用の張り紙の事？
あれは常連さんとママのルールなんだ」

「そうだったんだ あれ明日香ちゃんもう泣きやんだみたい
井川君の言うとおりね、すごいわ」

「すごくなかないよ 佐知も結婚して親になれば同じさ」

「私ね、明日香ちゃんといると優しい気持ちになれるの
嫌なことがあったときも明日香ちゃんに会って元気をもらえる
明日香ちゃんはSIGNPOSTの女神なの」

「佐知、俺はこの生活をこのまま続けてもいいのか迷っているんだ
母のいない明日香をママの側に置いておくことに異論はないけど
父親である俺がいつまでもこのまま甘えていてはだめだろうって
最近そればかり考えている でも最良の策なんて見つからない

事務所のてっちゃん言うんだ

いい人を見つけて結婚しろそれが一番の解決策だって
冗談にもほどがあるって・・・切れかかったよ

俺は生涯ひとりで生きてゆくと誓ったんだ

美香さん一人を生涯愛し続けて生きてゆくと

明日香が母親の愛を知らずに成長するのはかわいそうだけど
いつかこの俺の気持ちも明日香にも届くと信じたい

俺はこれから明日香を手元において育てようと思っている
生まれてまだ1年の明日香はまだ手がかる
でも一番大変な子育ての時期に俺は明日香を手放しママに助けて
もらった

今度は俺が頑張つて育てていく、それが父親である俺の務めなん
だ」

「父親の井川君が決めたことなら誰にも何もいえないわ
でも寂しがるでしょうねママ それに私も」

「ママと佐知には感謝している
どうしようもない時はまた力を貸りるかもしれない
明日香がここを去っても二度と会えないわけじゃない
受けた恩を忘れず明日香を連れていつかまた会いに来るよ」

「悲しくなるからいつか又なんていわないで
今までのようにまた来るって約束して、必ず会いに来るって」

「大げさだな恋人同士ならともかく、二度と会えないわけじゃない
んだからさ」

「いやよ、私は絶対にいや」

「いやって何がいやなんだ？」

「明日香ちゃんがいなくなることも井川君と会えないことも全部急にそんなこと言われても私は納得できない
そんなこと考えもしなかったし思ってもいなかったからだから・・・私はいや」

「まったく女は子供より扱いにくいんだな
佐知聞いてくれ、今の話はすぐどうこうってことじゃない
ママにもきちんと相談して決めようと思ってる
笑顔で送り出してもらいたいから何度でも君を説得する
時間がある限り話そう、それでいいだろう」

「いくら話したって私は認めないから」

「もう話はやめにして食事にしてよう」

「雅和は美香さんを愛した
私を愛した愛より深い愛で美香さんを愛した
美香さんがいない今も美香さんへの愛を貫こうとしている」

そんな雅和は私と同じなの

私は今も別れた人を忘れられずその人への愛を胸に生きている
苦しかった・・・今だって苦しい

この思い今の貴方にならわかってもらえと思った

雅和は亡くなった美香さんを思うときどんな気持ちになった？
一人で泣いた夜も数え切れなかったはず

私は別れてからずっとそうだった　いまの貴方のように「

「・・・やめてくれないか

過去の愛を語ってそこから何が始まる」

「雅和は昔の愛の日々を私を一度も思い出さなかったの
私と雅和の愛の記憶は消し去られてしまったの
愛の欠片さえも残ってはいないの」

「俺は君と昔の愛を語るつもりはない

佐知、君は再会した俺達が築いた新たな関係を台無しにしたいのか
俺は君と築いたこの関係を絆をだめにしたくないんだ
わかってくれ佐知、　気持ちはわかる
君が言うようにいま君の気持ちが痛いほどわかる
でも今の俺は前にも言ったように君の思いに答えてやれない」

溢れ出る涙を隠そうともせず佐知は雅和を見つめ続けた。
そのとき佐知の気持ちを察したかのように明日香が泣き出した。
その声に我に帰った佐知は涙をぬぐい頭を下げた。

「ごめんなさい、私・・・」

明日香の泣き声がやんでまた静寂な時間が戻った。

「私はまた貴方を困らせた・・・ごめんなさい」

帰ろうとした佐知の腕を雅和は掴んでいた。

「ちょっと待てよ、俺は君を帰さない

このまま帰るなんて俺は許さないからな」

「腕が痛いわ」

「俺達、昔もこんなことあったよな」

「.....」

「あの時と同じだな、俺がこの手を放したらすべてがここで終わる
いまある絆が切れたら俺達はもう会うことはないだろう
それでもいいなら手を放すから好きにすればいい」

雅和の手は放れたが佐知はその場から動けなかった。

「わかってくれたんだね」

「ごめんなさい 貴方の答えは以前と同じってわかっていたのよ
それでも今日は自分の気持ちを伝えずにいられなかった
雅和の気持ちは変わらないってわかってるのに抑えられなかつたの」

「俺の気持ちが変わらないなんて誰が言い切れる
おれ自身、今はこうでもこの先どうなるかなんてわからないんだ
今もなお美香さんを忘れられないでいる俺に愛を語る資格はないんだ」

誰だつて愛する人を幸せにしたいと思うんだ
それが出来ないとわかっていながら愛を受け入れたらそれは親父と同じだ

母親の涙をみて育った俺は親父の二の舞にはなりたくない
愛する人を母さんのようにしたくないんだ・わかるだろ

俺たちの絆がこれからどうなるかはわからない
でも絆がある限り俺は佐知と繋がっていられる、繋がっていたいんだ

時が経てば人の気持ちだつていつか変わっていく
いやでも変わらなければならぬそんな時がきつと来る、悲しいけど」

「そんな日が本当に来るの、いつ
生涯美香さんを愛すると誓った貴方にそんな日が来るとは思えな
いわ」

「何度も言うけど先のことなんか誰にもわからないんだ
俺の気持ちがかれからも変わらないと君は云い切れるのか
また向き合える日がくるかもしれない

佐知、おれは君が必要なんだ

昔恋人だった俺達は別れた今もこうして繋がっている

こんなこと普通じゃ考えられないことだろ

俺は美香さんと約束したんだ 佐知との絆を大切にすって

世の中には色々な愛が散らばっている 俺と佐知の絆も愛なんだ
愛がどんな形に姿を変えようが愛に変わりはない、そう思わない
か」

「その愛って何なの」

「それは俺にもまだわからない

龍一と真砂子の結婚式で再会した夜のこと覚えてる？

二人でホテルのベッドで話したこと」

「あの日ベッドの上で私達は朝まで語り合ったのよね

洋服を着たままで・・・思い出すとおかしいわね」

「握り合った手だけは朝まで離さなかったな

あのとき俺達の愛は男と女を超越した愛に変わったんだ」

「亡くなった和由兄さんが導いてくれた再会

私の兄で雅和の兄でもある和由兄さんが私たちを繋いでくれた

あの夜私達に何も起こらなかった、それも和由兄さんの仕業

愛が終わっていることを再確認させるためホテルで会わせたのね」

「佐知、俺達は今も愛で繋がっているよ

その愛は残念ながら佐知が願う愛とはちがうけどね」

「なら私は・・・愛されているの」

「ああ姿を変えた新たな愛が俺と君をしっかりと繋いでいる」

「雅和、わたし今度こそ自分の気持ちにけりをつけられそうなのがする

口で言うほど簡単にはいかないかもしれないけれどそれでも

今ここにある絆を大切にしたいならそうすべきなのよね

いまがそのときなのかもしれないわ」

「二人でいつか笑いながら昔の愛を語れたらいいな」

「もしこの先、もしものことなんだけど笑わないで聞いてね
好きな人ができたらお互い隠しっことは無しにしましょうね」

「俺は構わないけどそれって本心で言ってる？ 大丈夫なのか
俺に恋人が出来たからって今日みたいに泣かないでくれよ」

「・・・やっぱり撤回させて

しばらくはお互いこのまま一人でいましょう」

「げんきんなやつだな、まったく」

「なんだか急におなか空いちゃった
お弁当、食べてから帰ってもいい？」

「ああ一緒に食べよう 遅いから帰りは車で送るよ」

「だめよ、雅和さつきビール飲んだでしょ
今日はタクシーで帰るから心配しないで
早くママの作ったお弁当たべましょう、いただきます」

「今日の佐知、俺のこと昔のように雅和って呼んでくれたね
これからは井川君なんて言うな、雅和でいいよ」

「雅和・まさかず・雅和、やっぱり言い慣れた雅和の方が呼びやす
いわ

まさかず・雅和って呼んでもいいのね」

「俺の名前、意味なく連呼するなよ 恥ずかしいだろ」

「あゝ雅和赤くなってるう」

「.....」

「はやく食べないと全部たべちゃいますよ」

「敵わないなあ、さっき泣いてた同じ人間とは思えないよ」

美味しそうに箸を運ぶ佐知を見つめながら内心雅和は複雑だった。
美香を生涯愛し続けると誓った自分が口にした言葉を思い出して
いた。

「時間が経てば人の気持ちだっていつか変わっていく
いやでも変わらなければならぬそんな時がきつと来る」

その言葉が近い未来現実のものになろうとしていた。

楽しい夕げを過ごし食器の片づけをすませた佐知は明日香の寝顔をみている。

「今日は明日香ちゃんのパパを独り占めしてごめんね

あつ笑った、どんな夢見てるのかな明日香ちゃん

雅和今日は本当にごめんなさい 両親が心配するからもう帰るね」

「気をつけて帰るんだぞ 俺も一緒にタクシーを拾ってやるうか」

「本当にひとりで大丈夫、雅和は明日香ちゃんのそばにいて」

「これ俺からの気持ちだと思って受け取って
タクシー代の足しくらいしか入ってないけど」

「だめよ、お金は受け取れない」

「受け取れよ、早く・・・強情なやつだな

受けとらないなら明日香の世話は今後無用だ、それでもいいんだ
な」

「人の弱みにつけこむなんてほんと意地悪ね」

「ご免ごめん これは俺からの感謝だから受けとってくれよ」

「わかったわ、雅和の気持ち頂いて帰ります」

泣いたり笑ったり悲喜こもこもの一日だった。

佐知の胸のうちにあつた苦しい愛は涙と一緒に流されていた。

「今も愛で繋がっていると雅和は言ってくれた

同じ時間を共有して歩んでいけるなら過去愛に執着するのはよそ

ここから始めればいいんだわ

いつか二人の気持ちが一つになって愛を語れる日が来るきっと来る」

気持ちのけりをつけると言ったものの佐知の思いは変わらなかった。

しかし雅和と過ごした愛の日々を思い返すことはなくなっていた。

重いコートを剥いで草花が芽吹く草原に舞い降りた気分だった。

穏やかな心に佐知は何かが変わってゆくような気がしていた。

移りゆく季節

病院は朝からテンションの高い女性スタッフの熱気で盛り上がっていた。

開業前のスピーカーから院長の声が流れてきた。

「おはようございます もう皆さんご存知でしょうが
本日より息子・秀行がこの病院のスタッフの仲間入りをします
本人より一言あいさつがあるので聞いてやってください」

「みなさん、おはようございます
今日から皆さんと働かせていただくことになりました
命と真摯に向き合う医師の使命に燃えています
皆さん今日からどうか宜しく願います
気持ばかりですがケーキの差し入れを用意しました
休憩のときに食べてください」

スピーカーを見上げる女性陣の目は潤んできらきらして見えた。

「さっちゃんはいいなあ〜」

「そっいえばサッチちゃんの顔まだ見てないね」

「さっちゃんならさっき秀行さんの部屋に入っていくの見たけど」

「今日から秀行さんの秘書だもん、うらやましいな」

「サツちゃんがない受付ってなんだかへんじゃない」

「うん、さみしいよ」

「さあ皆さん仕事、仕事、佐知さんの分も頑張ってちょうだいね
ほら口を閉じて体を動かして 待合室は患者さんでいっぱいよ」

「はい、先輩」

佐知は机の前で流れてくる秀和の挨拶を聞いていた。
初めての秘書の仕事に寝付けなかったのか朝からあくびが止まら
なかった。

「おはよう佐知さん、朝から豪快なあくびで迎えてくれるなんて嬉
しいな」

「おはようございます、すみません」

「ジョークだから別に謝らなくていいよ 佐知さん今日から宜しく」

差し出された秀行の手に佐知も手を伸ばした。

「こちらこそ、宜しくお願いします」

「僕は今から診察だから佐知さんには机にある資料の整理と

書棚の横に積んである本の付箋が張ってあるページをコピーして閉じてもらいたいんだ

緊急の用件は脳神経科のほうにまわしてくれたらいい

時間があまったら本を読んだり自由時間という事をお願いします」

「ドクターが今言われた仕事、今日一日では終わらないと思います」

「そうだね、僕も一日じゃ無理だ

今週中に終わらせてくれればいいよ それなら出来る？」

「はい、頑張ります」

「それから僕をドクターと呼ぶのはどうかなあ 名前で呼んでくれていいよ」

「はい、わかりました」

「佐知さん、昨日はよく眠れなかったようだね」

「初日からあくびなんて失礼ですよね 本当にごめんなさい」

「佐知さんの可愛いあくび顔をみられて僕は嬉しかったよ」

「またジョークですか」

「いや、これは僕の本心だ 本当に可愛いと思った」

「からかわないで下さい もう秀行さんは診察にいつて下さい
患者さん待っていますよ この病院は時間厳守なんですから早く
行ってください」

「はいはい、わかりました では後はよろしく」

秀行は恥ずかしさに顔を伏せた佐知を思わず抱きしめたいと思っ
た。

「佐知さんとなら僕は変わるかも知れない」

長い間、封印してきた愛の扉が開こうとしていた。

秀行は白衣を手に投げキッスを送りながら部屋を飛び出していった。

「秀行さんってあんなに軽い男だったかしら？」

それでも可愛いといわれれば悪い気はしなかった。

初恋のような淡い感情が沸きあがっていた。

毎日顔を合わせて仕事をする二人には信頼関係が生まれていた。

当初のどこかぎこちないやり取りも今では兄と妹のように話が弾み二人の時間を楽しんでいるように見えた。

「ああまた〜それ私のですよ」

「あっ・・・またやっちゃったな」

「よく見てくださいよ〜 ボトルに名前が書いてあるでしょ」

「皆井・・・確かにこれは君の私物だな」

「冷蔵庫は共有でも中身は別々なんですよ

勝手に飲むのは止めてくださいっていつもお願いしているのに

その悪い癖、早く何とかしてください」

「ドリンク一本でそんなに怒るかなあ」

「ドリンク一つじゃないわ

冷蔵庫に置いてあったチョコも食べましたよね
楽しみにとっておいたチョコなのに蓋を開けたら空っぽ」

「普段は甘いものは苦手なのに術後はつまみたくなるから不思議だな
あのチョコおいしかったよ どこで買ったの」

「おいしかったって、あれはゴディバのチョコなの
高級品だから給料日にしか買えない大切なチョコだったのに」

「ごめん、今後冷蔵庫の飲食は君にお伺い立ててからにするよ
給料が入ったら同じチョコをプレゼントするからそれで許してく
れよ」

「秀行さん、買ってくれるの？」

まだ口にしたことないチョコが一杯あるの それもいい？」

「君がほしいチョコはみんな買えばいい
ただし僕をその店に連れて行ってくれればの話だけだね」

「インターネットでも注文が出来るのよ
時間があったら一緒に開きましょう」

「オンラインのお取り寄せか」

病院外での時間を作りたいと思っていた秀行は肩をおとした。

秀行が勤務してまもなく4ヶ月が過ぎようとしていた。

「お疲れ様でした」

「お疲れ、佐知さん今日はなにか用事ある？」

「いいえ、今日はこのまま家にかえります」

「それなら君の時間を僕に少しくれないか」

「……」

「君にお礼がしたいんだ

佐知さんのお蔭でスムーズに仕事ができた
今日はそのお礼といっては何だけど食事をご馳走したい
僕の気持ち受けてもらえないだろうか」

「お礼なんてとんでもありません

秀行さんをサポートするのは私の仕事です
それでお給料もちゃんと頂いています」

「それならお礼の食事じゃなくて僕とデートってことでどうかな」

「秀行さんとデートなんてもつと困ります

病院中の女性みんなを敵にまわしてしまいます」

「……」

「秀行さんはみんなの憧れなんです

病院の女性スタッフはみんな貴方のファンなの
だから私が今の仕事に決まっるときも大変だった」

「女の園はコワイらしいからね

佐知さんが虐められているのなら問題だな」

「私のことなら心配いりません

あからさまに虐めたりする人はこの病院にはいませんから」

「それを聞いて安心したよ

僕のせいで君に何かあつては申し訳ないからね

一緒に仕事をさせてもらっているのも何かの縁

佐知さんになにかあつたら僕は盾になつて君を守るよ」

「心強いお言葉ありがとうございます

本心なら感謝申し上げます」

「またジョークだと思ってるんだね

今日僕は真面目に話したつもりだけだな」

「心に響かない言葉を信じるわけにはいかないわ」

「嫌われてしまったかな、まいったなあ」

「嫌うなんて、その逆です

秀行さんは昔から優しくて頭が良くて背が高くってハンサムで

偉ぶったところがなくて手の届かない遠い人だと思っていました
でも一緒に仕事をするようになって波長が合つて近しさを感じま
した」

「それじゃ今日のデート受けてくれるね」

「デートじゃなく仕事の延長ならお受けします」

「わかった　じゃ僕は車を出して病院の正門で待ってるから」

秀行は医学書を読みながら佐知を待っていた。

病院から少し離れた場所にもう一台車が停まっていた。

その車は雅和の車とよく似ていた。

二台の車の男二人は女性が現われるのを待っていた。

病院の裏手から女性が駆けてくるのが見えた。

その女性が誰であるかは二人の男性にはすぐわかった。

雅和がいつものようにクラクションを鳴らそうとしたそのとき

佐知は前方に停まっていた車の前で足を止めた。

車から降りてきた男性は助手席のドアを開けていた。

男性に促され佐知は助手席に乗り込んだ。

佐知を乗せた車はUターンして雅和の目の前を走り去っていった。車から飛び出した雅和は佐知が去っていった車道に立ちすくんでいた。

「佐知が男と・・・」

雅和は意外な展開に茫然となった。

「心にけりをつけて俺から巢立っていったってことだな」

雅和は良かったと思いつつも心に冷たい隙間風を感じた。

「もう甘えてはいけないな」

この日を境に雅和は明日香との生活を真剣に考えはじめた。

佐知は次第に秀行に傾倒していった。

度重なる秀行との時間に雅和を思い出すことも減っていた。

それでも明日香に会いにSIGNPOSTに行く事だけは忘れなかった。

明日香を抱き上げ胸にするととき佐知はいつも美香を思い出した。美香が残した言葉を必死で追い払っていた、忘れてしまいたかった。

雅和を思い続けた日々さえ今は幻想のようだった。

佐知は愛の岐路に立っていた。

「秀行さんと会うたび私は変わっていく

変えようとした訳じゃないのに忘れようとした訳でもないのに

雅和がどんどん追いやられていく　これでいいの？

わからない・・・でも誰かに駄目って言われても

もう秀行さんへの気持ちを止められなくなっている」

一人の男性、秀行の出現は長い年月悩み苦しめられた過去の愛を葬むり

未来に続く光の道をくつきりと浮かび上がらせていた。

週末SIGNPOSTにはいつものように佐知と雅和の姿があった。

「久しぶり、相変わらず元気そうだな」

「雅和から電話がこないから心配してたのよ、忙しかった？」

「俺は深夜に誰かと電話するほど忙しくないよ
誰かさんの携帯電話はいつも話し中で忙しそうだな」

「.....」

「繋がらないから俺は電話をかけるのをやめた」

「だからメールに.....ごめんなさい」

佐知は青ざめていた。

帰宅後の秀行との電話は深夜に及ぶこともあった。

他愛もないお喋りに時間を忘れ二人の世界に夢中になっていた。

「前にも言ったと思うけど俺、明日香と静岡に」

「あつ電話が鳴ってる ごめんね」

席を外し戻ってきた佐知は雅和に深く頭を下げた。

「ごめんなさい、急用が出来たの
来週は時間をとってちゃんと話を聞くから許して」

「わかった 急いでいるなら送っていくよ」

「いいの、本当にいいから此処にいて」

「デートの誘いでもきたか？」

「デートならいいんだけど残念でした ママごちそう様でした」
手を振り急ぎ足で出て行く後姿を目で追っていた。

妙に慌てた口ぶりの佐知にあの日の男を思い出していた。
あの夜から雅和はしばらく電話をかけるのをためらった。

その後は電話をかけるものの繋がらない事が多くなっていた。
佐知の携帯電話はお決まりのように話中だった。

「こんなこと今までなかったな

俺がかかる電話が繋がらないなんて一度も

佐知の声が聞けない、それだけなのに・・・

電話に出ない佐知に苛立つのは俺の驕り思い上がりだな」

雅和は新たな感情が湧き上がってきた。

愛情の裏返し憎しみにも似たその寂しさは初めて味わうものだった。

雅和は飲みかけのカップを手にカウンター席に移った。

田鶴子は淹れたての珈琲を雅和の前に置いた。

「どうぞ、サービスよ」

「あの様子はいつもとは違う、どう考えたっておかしいだろ」

呟いた雅和のひとり言に田鶴子が返した。

「たぶん彼女は恋をしているわ」

「恋・・・唐突な発言だな」

「人をおかしくさせるのは恋のなせる業のひとつよ」

「だからって恋と決めつけるのはどうかな

ママは佐知からなにか聞いてそれで・・・」

「佐知さんのことが心配になった」

「俺は心配なんかしていないよ

この前会ったとき佐知が言ったんだ

お互いに恋人が出来たら隠しっこは無しよって

彼氏が出来たら話してくれたりいいのにあいつ水くさいな」

「話せないのはその恋が佐知さんの一方通行でまだ相手の気持ちがわからないからじゃないかしら」

「・・・」

「佐知さんがもし恋をしているとして井川君はそれを喜んであげられる？」

出来ないのならもう一度、自分の気持ちに向き合ってみるからね
今ならまだ間に合うわ」

「ママの目に何が見えようと佐知と俺は昔の関係には戻れないよ
今の俺は美香さん以外の女性に心惹かれることはないし
これからも美香さんを愛しつづけ生涯忘れないと誓ったんだ」

「井川君は美香さんを忘れないではなく忘れたくないのよ
あの日から時間が止まり前に進めないその訳を貴方はわかってい
るはずよ

「今ある記憶がいつかは薄れ忘れ去られる事を恐れているからでし
よ」

「確かに記憶はいつしか薄れてしまうのかもしれない
だからといって佐知とまた復活愛なんてありえない
そんな都合のいい話は無茶苦茶すぎるよ

「ママ、俺は彼女の再三の思いを蹴った男なんだ
昔に戻りたいと懇願する佐知の思いに答えられなかった
涙する彼女に手を差し伸べることも優しい言葉をかけることも出
来なかった

「あんな悲しげな彼女の顔はもう見たくない

「親父が願ったように佐知には幸せを掴んでほしいとずっと思って
いた
俺の亡霊からやっと解放された彼女を祝福したい今心からそう思
っている」

「井川君がいま話したことは佐知さんの気持ちと符号しているわ

佐知さんは貴方の笑顔を見るのが一番の喜びだった
くすぶり続ける愛を隠して佐知さんは貴方を支えていた
そうまでした彼女の思いをくんでやってほしいの
美香さん同様、佐知さんを忘れてはいけないわ
失ってからその大きさに気づくのは愚か者のすることよ
これだけは覚えておいてちょうだいね」

「ママの忠告いつもありがたいと思っています
これまでのご恩を忘れずこれから明日香と生きてゆきます
明日香を育てていただいてありがとうございます」

「そうね、もうすぐお別れ、淋しくなるわね
つらい別れだけど生きてさえいればいつだって会える
もう会えないわけじゃないものね」

「また会いにきます 明日香をつれてここに帰ってきます
成長した明日香を見せに必ず・・・約束します」

「ありがとう、井川君
どんなに悲しくても井川君と明日香ちゃんの門出に涙はご法度ね
最後の日はお互い飛びつきりの笑顔でお別れしましょう」

「ママ、お世話になりました
月末の金曜、引き取りに来ますので宜しく願います」

遠くの親戚より近くの他人の言葉通りここは故郷になっていた。
込みあがる熱いものが雅和の体中を駆け巡っていた。
涙をこらえ微笑む田鶴子の姿が今は亡き母と重なっていた。

移りゆく季節？

雅和は帰っていった佐知を気にかけてながら繋がらない電話に手を伸ばしていた。

「もしもし」

「佐知、つながってくれてよかったよ

さっき話せなかったことを伝えておこうと思って電話したんだ」

「途中で帰ってごめんなさい」

「そんなこと気にすることないよ

俺、今月中に明日香を引き取ることにしたんだ」

「そうなの・・・明日香ちゃんの事、一人で本当に大丈夫？」

「預かってもらう保育園は決まったし明日香を世話してくれる人も確保した」

「お手伝いさんに来てもらうの」

「ああ事務所の泉さんをお願いしたんだ」

「事務所の人・・・」

「泉さんは若くして旦那さんと死に別れてからずっと一人なんだ
生きていくために親父の事務所で働きずっと今日まで頑張ってく
れた

泉さんは母さんにとっても大切な友人の一人だった

生前母さんは泉さんのことを家族の一人だと言っていた

うまくいかない家庭や夫婦のことを母さんは泉さんにだけ話して
いた

折れそうな母の心を陰で支えてくれたのは泉さんだったと亡くな
る前に聞かされた

「万が一明日香ちゃんのことですら困るようなことがあったら泉さんに
相談しなさい

私だと思つて泉さんの力を借りなさい」

母さんの言葉を思い出した俺は泉さんに頭を下げた

泉さんは快く俺の申し出を受けてくれた

「私のようなものに頭を下げてくださつてありがとうございます
人様のお役に立てるならこんな嬉しいことはありません」そう言
つて泉さんは涙を流した

再婚もせず一人で生きた泉さんも、もう若くはない

仲の良かった母さんもいなくなつて寂しさは余計身に沁みていた
はずだ

お世話できる人が出来て嬉しいと言ってくれた泉さんとならうま
くやっっていける

家族と同じように暮らしていけると思うんだ

母さんが一番喜んでくれている気がするよ

独りきりで生きていた泉さんを誰よりも心配していたのは母さん
だったから」

「泉さんが一緒なら心強いわ

泉さんにとってそれが幸せに繋がってくれるといいわね」

「そうだな、みんなが幸せになれるといいな」

「ところでママは今回のこと何も言わず了解してくれたの」

「自分で決めたことならどんなにつらくても頑張れって

それと泉さんがいてくれるなら安心だって

それからこうも言われた

「人に甘えなさい、人が一人で生きるなんて容易なことじゃないわ

私は周りの人たくさんの人に甘え支えられ生きてこられたの

待っているだけじゃ誰も支えてくれないのよ

時にプライドを捨てて頭を下げお願いしなければならぬわ

誰もわかってくれない、気づいてくれないなんて独りよがりはだめ

歩み寄って甘えなさい、自分から手を差し出しなさい

佐知さんにも今までのように甘えて力を借りてもいいのよ

もう甘えられないなんて思わないことね

持ちつ持たれつ・・・それが人と人の繋がりだもの」

そのとき何が何でも一人でやると気負いすぎていた自分に気づいた人に甘えてもいいんだと思った俺は泉さんに頭を下げていた正直、それまでの俺は明日香との生活が不安でたまらなかつた一人で育てるんだと自分を鞭打ち、ぐらつく気持を封じ込めていた自分をがんじがらめにしていたのはおれ自身だったことに気がついた

今は体中の余分な力が抜けたせいかな不安はない
明日香をしっかりと守っていく

これから二人で、じゃないな、泉さんにも助けってもらって頑張るよ

「.....」

「佐知はまだ納得いかないようだな」

「そうじゃない 明日香ちゃんと会えなくなるんだなって思ってた私、仕事が終わると毎日のように明日香ちゃんに会いに行ってたでしょ

嫌なことがあったとき明日香ちゃんの顔を見て抱きしめると元気になれた

明日も頑張ろうって思えたわ

元気をくれた明日香ちゃんがいなくなるのが悲しいの」

「これつきり会えないわけじゃないんだし又会え」

「ごめんなさい、電話が・・・

終わったら折り返し電話するから待ってて」

「いいよ、また電話するよ　じゃおやすみ」

また話の途中でごめんなさいか

ママがいった佐知の恋話は満更でないかもな

雅和は佐知の恋の相手が誰なのか知りたくなった。

佐知にかかってきた電話は秀行からだった。

秀行との楽しい語らいは明日香と雅和の旅立ちを忘れさせていた。

受付に雅和に似たの男性の姿があった。

「すみませんが皆井さんと呼んでもらえますか」

「あら誰かと思ったら井川さんじゃないの、お久しぶりね」

「あのせつは色々お世話になりました」

「明日香ちゃんは元気に育ってる？」

「はい、元気です」

「元気なら安心ね 佐知さんは移動で秘書のお仕事に移ったのよ
私が案内しますから付いてきて」

声をかけたのは美香の病室であった豪快に笑う看護師だった。

「いま受付に井川さんがサツちゃんに会いたいって来たの
たまたま居合わせた婦長が井川君をそっちに案内して向かっている
わ」

「わかったわ、ありがとう」

雅和が私に会いに・・・

ドアをノックする音がして佐知はドアを開けた。

雅和は一人ドアの前に立っていた。

「仕事中最悪と思ったんだけど、黙って静岡に帰るわけに行かない
から」

「静岡に帰るって今日だったの、そんなこと聞いてないわ」

「君には何度も話そうとした

明日香との生活を決めてから俺は君に電話をかけ続けた
相談に乗ってほしいことがいっぱいあったけど電話はいつも繋が
らなかった

お互い仕事をしているから夜しか話せないだろ

会って話をしていても、かかってくる電話で俺の話は遮られた
こんなこと今までなかったから正直いって俺は戸惑っている」

「ごめんなさい」

「謝らなくていいよ

色々お世話になってありがとう また会おうな」

「ええ、明日香ちゃんを連れて会いにきてね
待っているから約束して」

佐知は雅和の手をとり小指を絡めた。

二人は見つめあったまま微動だにしなかった。

「おっと、これは失礼・・・」

突然入ってきた秀行は思わず目を伏せ部屋を出ようとしていた。

「秀行さん待って 紹介します」

私の友人の井川君、静岡に帰るから挨拶に来てくれたの」

「はじめまして、井川です 工作中すみません」

発つ前にどうしてもお世話になったお礼を伝えたくて」

「そうですか、僕はここの医師の西條です」

佐知さんには僕のサポートをしてもらっています」

席をはずしますから遠慮なさらずゆっくり話していって下さい」

「もうすみましたからこれで失礼します」

先生、佐知のことこれからも宜しくお願いします」

「僕は彼女に叱られてばかりで・・・お恥ずかしい限りです」

「雅和、安全運転で気をつけて帰ってね」

また連絡して、ちゃんと電話に出るから必ず連絡して」

「幸せになってくれよ これは俺と親父からの願いだ」

じゃ俺、行くよ 笑顔でこれからも頑張れ、応援してるからな」

雅和を追いたかったが秀行を前にして佐知は躊躇していた。

「彼とは話の途中だったんじゃないのか

ちゃんとお別れしたほうがいい、今なら急げばまだ追いつけるよ」

「そうさせてください」

佐知は部屋を飛び出していった。昔の感情が背を押し佐知を走らせていた。

病院の外に出た佐知の目に映ったのは小さく遠のいてゆく雅和の車だった。

「まさかず・・・」

泣きたい気持ちを堪えながら佐知は病院へ走り戻った。

佐知は大きな深呼吸をして無理やり口角を上げ秀行のいる部屋に入った。

「お帰り、早かったね 彼と会えた？」

「ありがとうございます」

作り笑いの佐知に秀行は大体の察しがついた。

「^{シニョーラ} Signora今夜、僕とイタリアンなんてどう？」

「.....」

「また振られたか」

「秀行さんはいつも美味しいお店に連れて行ってくれる
いつも高級な高そうなお店ばかり・私は嬉しいのよ
でも私には場違いのように思えてなんだか落ちつかないの
高価な料理を口に出るのは何かのご褒美や記念日の楽しみだっ
たから」

秀行さんはファミレスに行ったことある、ああいう場所は嫌い？」

「ファミレスか、学生の時はよく行っていたから懐かしいな」

「だったら私をファミレスに連れて行ってくれる」

「よし、わかった 今日君の言う通りにしよう」

今夜は高級なお店の静かな個室で食事をする気分にはなれなかつた。

佐知は雅和と財布を覗きみながらデートした事を思い出していた。お金はなかったが仲良く分け合って食べていたあの頃が懐かしかった。

二人でいられることが嬉しくて雅和だけを欲しかったあの頃を思い出した。

雅和と明日香に去られた今夜は人肌のぬくもりが恋しかった。

食事を済ませた二人は高台に車を止めて夜景を見つめていた。

「此処は静かで落ちつくな」

「ファミレスはやっぱり合わなかった？」

「佐知さんは僕を買いかぶっているよ」

僕は普通に牛丼も立ち食いそばもたべる」

「.....」

「今日の佐知さんはいつもと様子が違う」

食事中もぼんやりしていた。もしかして彼のこと？」

「彼は私の大切な友人でお互い何でも包み隠さず話せる人なのなのに、突然やって来て今日静岡に帰るって行ってしまった」

でもそれは彼が悪いんじゃないの、私のせい私が悪いから」

「彼と君ふたりの事は僕にはわからないけど

佐知さんは彼のことが頭から離れないんだね

だからあえて賑やかな場所に身を置いて彼を忘れようとした」

「私の我が儘に付き合ってもらったのにごめんなさい」

「今日の佐知さんは去っていった彼のことばかり考えている

彼は君が言う友人というよりまるで恋人だ」

「恋人じゃないわ、本当に友人よ

彼には明日香ちゃんというとっても可愛い子供がいるの

不思議な縁で結ばれた彼の奥さんは・・・今も私の大切な友人」

「いろんな事情が見え隠れして複雑そうだな」

「・・・」

「無理するなよ 気持ちに逆らおうとするから苦しくなる

僕がそうだったように、というか今も進行形だけどね」

「秀行さんも・・・」

「僕は学生時代の恋愛を今も引きずっている
愛する人に裏切られその人を最も信頼していた人に奪われた
それから僕は人を愛することも信じることも出来なくなった」

「学生時代の彼女を忘れられないのね」

「忘れたくても忘れられない、そんな自分が情けないよ
捨ててしまいたい、捨てなければとずっと思っているのに
もついい加減、終わりにして彼女の幸せを心から祝福してやりたい
そうしなければ僕は一生彼女から逃れられないだろう
誰かに吐き出したら少しはすっきりするのかな」

「聞きたい・・・私にその話をしてください」

「僕の話はきれいごとじゃないからきつと君を不快にさせる
そんな話を君に聞いてもらえるわけがない」

「どうしても聞きたいの 私も心に傷手を負った同士だから
秀行さんが吐き出す過去の愛のすべてを受け止めてあげたい
昔、私が誰かにそうしてほしかったように」

「僕は今も未練、嫉妬、憎しみ渦巻く愛から立ち直れないでいる
僕と彼女は・・・」

秀行は重い口を開き封印した思いを話し始めた。

移りゆく季節？

「僕と彼女は医大で出会い付き合いが始まった互いに医師を父に持つ僕と彼女はよく似ていた。惹かれあう僕達はごく自然に友達から恋人関係になっていた。高校まで僕には親友と呼べる友人が一人もいなかった。というよりみんながライバルだったからあえて作るうとしなかった。」

医大に入ってすぐ親友と呼べる友人が出来た。初めて心許せる友人が出来て僕は嬉しくてたまらなかった。生涯の友と確信した彼に僕は絶大なる信頼を置いた。彼女と親友と過ごせた大学生活は厳しくつらいことが多かったけど人生最高の思い出になると思っていた。あの日までは・・・」

「3人になにかあったのね」

「卒業して間もなく彼女が結婚したことを知った風の便りで耳にした相手の名前に僕は驚きを隠せなかった」

「まさか、お相手は秀行さんの親友？」

「信じられなかったよ」

僕は二人の関係など全く知らず、疑いもしなかったからね彼女と親友は俺の前ではそんな素振りは何ひとつ見せなかった長い間、騙し裏切り続けた二人を僕は許せなかった

親友と愛し合うようになった彼女はその後も変わらず僕に抱かれていた

心変わりした彼女が親友に抱かれていることを知っていたら・・僕は彼女に指一本触れはしなかったのに

騙されているとも知らず僕は真剣に彼女だけを愛していた

そんな思いを切々と語る僕を見て親友はどんな思いだったのか

神はときに残酷なことをする、何かの天罰かと空を仰いだよ

二人への憎しみ・彼女を奪われた嫉妬に僕は冷静さを失っていたのちに送られてきた結婚の招待状も破り捨てていた

無理してでも二人を祝福していればよかったのかな

「祝福していたら何かが変わっていたと思う」

「ああ、今ならそう思えるよ

燻ぶり続ける負の感情に苦しむこともなかったと思う

月日がすべてを忘れさせてくれたはずだ」

「結婚式に出席しなかったことを後悔しているの？

行ったとしても見るのがつらくて飛び出してしまうと思うわ」

「確かにそうかもしれないな

花嫁姿の彼女の隣に居るのが僕でなく親友っていうのはさすがにねでも祝電だけでも送るべきだったと、それだけは後悔している

佐知さんに話しを聞いてもらえてよかったよ

親友を愛した彼女と彼女を好きになった親友の二人の傷は

きつと僕よりも大きかったんじゃないのか、なぜかそんな気がし

ている

なにも知らない僕の前で笑顔を見せた二人は実は見えない所で苦しんでいた

そう考えると二人は十分苦しんだ、だからもう許されていいと思えてくる」

「それが本来の秀行さんだと思います

どうすべきかの答えを自分で出している

二人を許して心から祝福してあげようとしている

もう遅いなんて思わないで勇気を出してください

秀行さんに祝福してもらえたら二人は今よりもっと幸せになれます

二人が背負う秀行さんという錘をはずしてあげてください」

「人が関る揉め事は厄介だけど自分の苦しみや感情は相手も同じ

そう考えればなんでもないことなのかも」

「そこにたどり着けばみんな平和に暮らせるわね

痛みを知る人は他者の痛みを分かちやれると聞いたことがあるの

秀行さんは院長先生のようにいい医者様になれると思います」

「ありがとう、うれしいよ

佐知さん、いま付き合っている人はいないの」

「私は秀行さんと同じ、彼と別れてからは誰とも・

彼を忘れられなくてほかの人を愛せませんでした」

「佐知さんと僕は同じじゃないよ」

僕は彼女を忘れられなくて誰も愛せなかったわけじゃない
裏切られたことの恨み辛みで人間不信になったからで・

勿論彼女の事を引きずってはいるけどそれは君の感情とは少し違う
親友と恋に落ちた彼女は自分の背信行為に苛まれ続けたと思う
それを隠しながら僕と関係が続けた彼女はあまりにも愚かで悲し
過ぎる

それが償いだと心で泣きながら僕に抱かれていたのかと思うとた
まらないよ

もっと早く僕が気づいていればこんなことにならずにすんだ」

「そんなに彼女を慮るのはまだ愛しているから」

「そうかもしれないな、別れたといつても彼女は僕が愛した女^{ひと}
酸いも甘いも知り尽くした男と女だからこそ忘れられないことも
ある」

「なんだか難しくて私にはよくわからないわ」

「さあ、今度は佐知さんの番だよ」

「エッ、私・・・」

「ここからは君の時間だ さあ話して」

「私、秀行さんに話すことなんか何も無いわ」

「あるだろう、さっき言っただろう」

昔、私がそうして欲しかったように、って
だから今度は僕が受け止めてあげるよ」

「ありがとう、でも話せないわ」

「なぜ」

「.....」

思いを寄せる秀行に今此処で昔の愛を語る気持ちにはなれなかった

「今も愛しているんだね」

彼の話をしたら思い出がきえそうな気がして怖いんだろ？」

「コワイとかそういうのじゃないの」

彼との愛は葬っても彼は今も私と生きている、彼は過去の人じゃないわ

これから死ぬまで彼は私の中で生き続けると思う」

「そうか、二人の愛がどんなものだったのかは置いて
君が彼を深く愛していたことだけはわかった
佐知さんはこれから誰も愛さず生きてゆくつもりなのか」

「一人で生きられるほど私は強くないわ
最近になって自分の変化に気づいたの
彼への気持ちが少しずつ変化しているの
彼に会うと私はいつも過ぎ去った愛の日々を思い返していたわ
昔に帰って愛をやり直したいって願っていたの
そんな気持ちをぶつけると彼は申し訳なさそうにいつも顔を歪めたわ
答はNO、彼の心も答えも分かっているのに・・・悲しい性ね」

「彼への気持がどんな風が変わったのか、聞きたいな」

「期待した答えがもらえず涙した私に彼が言ったの
愛は絆に形を変えたけど、それも愛に変わりはない
俺たちはまだ繋がっている、愛で繋がっているって

彼の言葉は魔法の呪文のように私の心を揺さぶり起こしたわ
しがみついて離せなかった過去愛から私は手を離していた
過去の愛の思い出はいらない、もう必要ないってわかったの
大切なのは彼との絆、それを未来へ繋げることなんだって
私を取り戻したかったのは昔の愛じゃなく彼
私の人生に彼は欠かせない必要な人、へんな誤解はしないでね

男と女じゃない愛で繋がる関係、私たちはそういう宿命なの」

「宿命か・・彼の奥さんはそんな君たちを理解しているのかな
昔の恋人が自分の夫と何らかの繋がりを持つのは
けっしていい気持はしないはずだよ」

「奥さんを交えた私たちの関係を話したらきつと夜が明けてしまう
別れた彼と私を繋いでくれたのは誰でもない彼の奥さんなの
こんな私たちの関係は理解できないでしょうね」

「結婚した男が別れた恋人と絆という名の愛で繋がっている、妻公
認で

出来た奥さんを持った彼は幸せ者だな 仮想世界のようだな」

「そんな言い方しないで

彼の奥さんは、彼女はもうこの世にはいない

私は彼女のことが大好きでいまも大切な友人よ

昔恋人同士だった私と彼の再会を後押ししてくれたのは彼女
私たちの絆を誰よりも喜んでくれたのも彼女だったわ」

「ごめん、謝るよ

佐知さんが誰かを愛せるようになるのはまだまだまだ先だな」

「秀行さんは？」

「僕はいま気になる人がいる

その人とならまた愛を育んでいけるそんな気がしている」

「秀行さんが好きになった人ならきつと素敵な人なのでしょうね
こんな風に誘ってはもらえなくなるのね、少し淋しいな」

「僕は佐知さんに淋しい思いなんかさせないよ」

「……………」

「僕は佐知さんの笑顔が大好きだ

その笑顔を独り占めしたいくらい大好きだ

君の笑顔を永久に見られたらどんなに幸せだろうと思う」

「待ってください、私は……………」

「佐知さんに出会い僕はすぐにこの人だっと思った」

「……………」

「迷惑かな」

「ごめんなさい、あまりに突然で信じられなくて
でも本心は嬉しくて御伽噺のお姫様のような気分なの」

「君の笑顔が戻ってうれしいよ
断られでもしたら病院で合わす顔がないと内心ビクビクしていた」

「ビクビクは私のほうよ、病院に知れたら今度こそ私危ないかも」

「大丈夫、僕が体を張って佐知さんを守ってやるよ」

雅和の言葉と重なる秀行の口から出た言葉が胸に響いた。

火照る顔に当たる夜風が心地よかった。その風に乗って声が聞こえたような気がした。

遠い昔、雅和が言った言葉が聞こえた。

君を守る強い男になれるといいな・・・

移りゆく季節 ?

突然、流れ出た涙を佐知は止められなかった。
秀行は指のひらでその涙をそっと押さえた。

佐知は堪えきれず秀行の胸に顔を埋めた。
震える佐知の体を秀行は強く抱きしめていた。

「どづしたの、佐知さん」

「悲しくて泣いてるんじゃないのよ
秀行さんの言葉が嬉しくて・・・とても嬉しかったから」

「僕達はきつと上手くやれる」

佐知は秀行の首に両手をまわし抱きついていた。

「秀行さん、もっと強く抱きしめて」

あつい抱擁と口づけの嵐に火が付いた二人は互いを求めあった。
愛の女神に導かれるようにシティーホテルの一室で体を重ねていた。

過去の愛と決別した新たな愛のはじまりだった。

愛する人の温もりは苦の塊を少しずつ溶かしていった。

もう二度と離しはしない・・離したくない
生まれたままの姿で抱き合い互いの瞳を見つめていた。

小麦色の引き締まった秀行の体に佐知は柔肌を密着させていた。

秀行の体に残る彼女の残り香は消えていた。

佐知も同じだった。好きだったあの大きな背中が遠ざかっていた。

互いの体にあたたかな愛がしっかりと刻まれようとしていた。

その愛に佐知は身を振るわせ続けた。

荒々しい雅和のそれとは別のソフトで抑揚のきいた指使いに酔いしれた。

純な佐知が見せるもう一つの顔をこの日秀行は知った。

可憐な容姿からは想像もつかない豊満な胸はたじろぐほどだった。
大人びた妖艶な色香を見せあえぐ佐知はたまらなく魅力的だった。

「君を悲しませはしないよ、二人で幸せになろう」

耳元に熱き吐息とともに聞こえたその言葉に体はさらに熱くなっていった。

耳元のキスは首筋からに全身に及んだ。

秀行の唇が足先を這うところ、すでに佐知は女の喜びに達していた。

身も心も充たされ体中の力が抜けてく感触と共に睡魔が襲ってきた。

愛の途中に佐知は不覚にも眠りについてしまっていた。

秀行の愛撫はゆり籠となり深い眠りへと誘っていた。

動きを止めた佐知の枕元に戻った秀行は思わず苦笑した。

「こんな時に眠るかな・・・まあいいか」

静かな寢息を立て眠る佐知の首筋に自分の左腕をおいた。

腕枕された佐知は寢返りを打ち秀行の体に擦り寄ってきた。

豊満な胸の谷間に欲情する体を必死で抑えていた。

「こうしているだけでいい、そばに君がいる、それだけでいい」

寝顔を見つめる秀行は目を閉じようとしなかった。

秀行は佐知が眠りから覚めるのを優しく抱きながら待っていた。

移りゆく季節？

「ううん」

「白雪姫のお目覚めを待っていたよ」

「・・・私・・・まさか」

「あまり気持よさげに寝ていたから起こすのが可哀相でも腕はそろそろ限界にきているかな」

「ずっと腕枕を？」

「ああ、ずっと寝顔を見ていた」

「はずかしいわ」

「佐知さんは初日にあくびで僕を迎えてくれた
そして今日は愛の最中に眠りに落ちた
忘れたくても忘れられない思い出が又増えて嬉しいよ」

「本当にごめんなさい

私、夢の中でも秀行さんとデートしていたの

綿菓子雲に乗って秀行さんが口に挟んだ小さな綿菓子を私が食べてキスしてた

二人で空を飛んだのよ、気持ちよかったな」

「そうか、よかったな

あまり遅くなるとご両親が心配する 送るから急ごう」

「いやだ、もうこんな時間

秀行さんの仕事に障るといけないわね、帰りましょう」

佐知は秀行の車が見えなくなっても自宅に入ろうとしなかった。

自宅に帰ると佐知は両親の部屋の前で足を止めた。

「お母さん、もう寝た？」

「佐知なの、お帰り、

もう遅いから戸締りと火の始末だけはちゃんとして休みなさい」

「うん、おやすみなさい」

シャワーを済ませ自室に戻った佐知は鏡の前で髪を乾かしていた。鏡の向こうにホテルで見たぼんやりした夢の映像が浮かんできた。

「あれは美香さんだったんだ
でもなぜ美香さんは明日香ちゃんと一緒に」

翌日、病院に着いた佐知は眠い目を擦りながら秀行の部屋に向つていた。

その後ろを秀行がぴったりついていくことも知らず

「ああ〜どんな顔で秀行さんと会えばいいのかな」

つぶやく佐知の肩に秀行の手が伸びた。

「おはよう、佐知さん」

「お、おはようございます」

「佐知さんにはその笑顔が一番似合う
いつもと同じ何も変わらない、それでいい・・・そうだろう」

「……」

「仕事が山積みだ さあ急ごう」

「はい」

先を急ぐ二人の後姿は昨日とは違っていた。
距離を縮めた二人は体を寄せ合うように歩いていた。

昼休み、佐知はロッカー室でバッグから財布を取り出していた。
携帯電話のバイブ音が聞こえた。手にした時その音はピタリと止
まった。

着信をみた佐知は思わず驚きの声をあげた。

「これは・・・間違い電話」

同じ見知らぬ番号の着信が十数件入っていた。
携帯電話をバッグにしまおうとしたその時だった。

「また同じ番号だわ」

おそるおそる電話を耳に当てた。

「もしもし」

「皆井さん、皆井佐知さんですよね」

「はい」

「良かった、やっと繋がった」

「失礼ですが貴方は」

「あつ申遅れました」

私は井川パートナーズの手塚といいます」

「井川パートナーズ・・・」

いやな胸騒ぎに佐知の顔は青ざめ体は震えだしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5706o/>

WAKARE

2011年10月28日11時08分発行